
魔法少女リリカルなのは～転生者はバッドエンドを嫌う～

ベルワン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 転生者はバッドエンドを嫌う

【Nコード】

N4016N

【作者名】

ベルワン

【あらすじ】

いきなり死んでしまった1人の男…

テンプレ通りの転生…かと思いきや、それはただの転生ではなかった!?

今、1人の転生者の世界の命運を賭けた原作ブレイクが始まる…

自身初めての小説なので、暖かい目で見守ってください!

感想はいつでも待っています！

ただいま50万アクセス記念作品編です！

プロローグ（前書き）

何だかんだでプロローグ、始まります…

プロローグ

「…思ってたより冷えるな」

今の時間はかなり夜もふけたころ…

そんな頃にオレは、小腹が空いたのでコンビニへと夜道を歩いて
いる…

「今月発売でいいラノベって何かあったっけ？ 先月は金の消費
が激しかったからな…もう少し考えて使った方が…」

そんなことを考えながら角を曲がると突然目の前が眩しく光る

「えっ!?!」

そして次の瞬間にはオレは意識をなくしていた…

・ ・ ・ ・ ・

「…ん…ん？ ここは、どこだ？」

気がついてみるとそこはさっきまでいたはずのオレの住んでた町
じゃなく…辺り一面真っ白な世界だった…

「…知らないで…ダメだ、さすがにネタに走ってる場合じゃな
いな…。けど、本当にここはど「あつ、いた!」「はい?」「

悩んでいると後ろから女の声が聞こえてきた

とりあえず振り向いてみると…

「すいませんでしたあ!」

同時だったのが、丁度見かけ幼女(?) な子が綺麗に土下座を決
めてた

…あれ? これってもしかして…マズい?

第一話 チートってどの辺からチートなんだろう？（前書き）

長かったり短かったりです…

では、第一話始まります

第一話 チートってどの辺からチートなんだろ？

えっと、どうも！

この意味不明な状況を説明するついでに自己紹介しちやおつか？

オレの名前は 有沢 直樹 (ありさわ なおき)、16歳だ

学校ではオタクやら何やら言われてたけど、ちょっといろんなアニメや漫画を知ってるだけじゃねえか！アニメバカにすんなよ！

…っと、ここでキレてどうする…落ち着けオレ…

とまあそんな感じのオレは夜中にコンビニに行ったはず…

なのに今は…何もない真っ白な世界にいて、目の前では…

？「……………」

女の子が土下座している

直「…………あの〜」

？「はいっ！何でしょうか！出来ることはだいたいするんで命だけはお〜(涙)」

直「いやいや、オレは化け物かって…」

？「す、すいません…」

直「…ところで、いろいろと聞いていいか？」

？「は、はい！どうぞ…あっ！申し遅れました。私、アリアス
といます！リア、って呼んでください！」

直「じゃあ、リア。ここはどこなんだ？」

と言つてもだいたい分かってしまう

何もない世界にポツンといるオレとリア

やっぱりここは…

リ「ここは…死後の世界です」

ですよ〜（涙） 直「やっぱりか…、オレは死
んだんだな」

リ「すいません…」

直「謝るってことは…お前が何か関係してるんだな？」

リ「はい、実は…」

・
・
・
・
・

直「…つまり話を纏めると、リアは神様で、リアがオレの一生を記した紙を要らない紙と一緒にシュレッダーにかけてしまった、と」

リ「本っ当にすみません！」

リアは何度も頭を下げる

直「別にいいって！リアのミスで今日死ぬってのがオレの運命だった、ってことにしておけばいいんだよ！」

そう言ってオレはリアの頭を撫でる

リ「あう……／＼、でもやっぱり責任感じちゃうので直樹さんを私の権限で送れる世界に転生させたいと思います！」

リアは少し顔を赤らめながら答える

風邪か？

リ「さて、どこがいいですか？」

そう言ってリアは一枚の紙を見せてきた

直「どねどね……」

1 別の地球の戦国乱世

2 ゲーム『バイオハザード』の世界

・ ・ ・

……明らかに死にそうなところばっか……

特に2番目は何なんだ！？もう一度殺す気か？

そのあともどンドン見ていくと……

直「……えっ！？」

リ「ど、どうしました！？」

直「……こっつて本当に行けるのか？」

・ ・ ・

74 魔法少女リリカルなのはの世界

・ ・

リ「えっ？もちろんですよ！私のお気に入りの世界の一つですよ」

直「そうなのか…ん？」

よく見ると何か書いてる…

74・魔法少女リリカルなのはの世界

注意！ 但し、この世界に行けるのは『原作の知識』がある人のみです

直「…リア、これは何なんだ？」

リ「ああ！それはですね、私なのはの世界に連れて行く場合は、原作ブレイクが必須条件なんです。なので、知識がないと…」

直「なるほど…」

確かに、原作を完璧に理解しとかないとあの世界で原作ブレイクは難しいよな？

リ「けどですね？直樹さんは知ってますよね？」

直「ん？まあ、生きてたとき一番見てたアニメだからな」

リ「なので大丈夫です！では、この世界でいいですか？」

直「ああ！原作ブレイク、望むところだ！」

リ「分かりました！では転生する前に、直樹さんが望む能力を授けたいと思います。考えてください！」

望む能力、つまりはチートになっていいですよ、ってことだよな？

…けどな、最初っからチートってのもつまらないなあ…よし！

直「決まったぞ」

リ「そうですか！では、どうぞ！」

直「おう！まず身体能力なんだけど、魔力は限りなくEXに近いぐらいで頼む」

リ「はいはい、そのぐらい楽勝です！」

直「次に体力とか反射神経とかなんだけど、最初は人並みで、鍛え方しだいでどんどん強くなるようにしてくれ」

リ「？ どうしてですか？それだったら最初から最強にしておけば…」

直「それじゃさ、つまんないじゃん」

リ「そうですか。はい、それも大丈夫です！他には？」

直「あと稀少技能 レアスキル としてうえきの法則の神器、それに金色のガツシュウ！に出てくる術全部使わしてくれ。但し両方ともオレの意思で威力調節可能で」

リ「いいですよ、うえきの法則と金色のガツシュウ！。私も大好きです」

直「それにガツシュウ繋がりで答えを出す者 アンサートーカーの力を清磨みたいなオンオフ切り替えれる形でくれ」

リ「オツケーです！」

直「それに召喚術としてモンスターハンターのモンスターを呼び出せるようにしてくれ」

リ「はいはい！オツケーです！」

直「あと、ドラえもんの四次元ポケットとひみつ道具も欲しいんだけど」

リ「なるほど…予想外でしたが確かに必要かも知れませんね。オツケーです！」

「こんなもんでいいだろ…」

直「じゃ、これで終わりで」

リ「はいはい……えっ!？」

直「ど、どうした!？」

何かマズイことでも言ったか？

リ「どうせならもっとチートにしましょーよー！」

直「いやいや、十分チートだろ」

リ「！ そうだ！私との通信用に持って行ってもらおうと思ってたこの腕輪があります」

そう言ってリアは白い腕輪を取り出す

リ「これに直樹さんの願い事を7つまで叶える能力を持たせましょー！」

直「それはいくらなんでもチートすぎないか！？」

リ「気にしたら負けです！この腕輪は転生したあと自然な形で直樹さんのもとに届きます！あと願い事で『願い事の回数を無限に』とかは無しなんで」

直「…はあ、分かったよ。そんじゃ、そろそろ送ってくれ」

リ「了解」

リアはそう言って呪文を唱え出す

いよいよ転生か…なのはたちとの関わりかたも重要だよな…

リ「……………よし！それでは送りますねー！」

オレの周りに魔方陣が広がる

リ「では、頑張ってくださいー!!」

その瞬間、オレの目の前が真っ暗になった…

「オギヤアー!!」

直「(えっ?)」

第一話 チートってどの辺からチートなんだろう？（後書き）

何か本当にどの辺からチートなのか分かりません…

出来れば感想などで教えてください！

第二話は明日（27日）には投稿したいです！

第二話 母の友…それは…

どうも、有沢 直樹です

すっかりオレを死なせてしまった神、アリアスにリリカルなのは
の世界に転生してもらってから早3年…

え？ 原作ブレイク？

そんなの出来る訳ないじゃん…

だってオレ…今3才ですよ？

まさか1から人生やり直すとは…？

しかも、余計にイラつくことがある

オレのこの世界での父親がいきなり浮気相手と出ていってしまっ
た…

正直、父親のことは何とも思ってたなかった

家やオレのことを母さんに全部押し付けて、自分は毎日遊び呆け
る最低なヤツ

そんなヤツが家を出ていった…

母さんが必死に貯めてた金を全部持ち逃げして…

途方に暮れていたオレと母さんだったが、ここから都合主義な

展開が始まることをオレは知らなかった…

数日後、クソ親父が交通事故を起こして死んだというニュースがテレビで流れた

母さんは少し悲しそうだったが、オレは全力で喜んだ

すると、今度は電話がかかってきた。母さんの話では、母さんの高校の元同級生だった人かららしい

曰く、ニュースを見てかけてきたらしくオレたちの現状を聞いて一緒に住まないかと言ってきてくれたらしい

そんなこんなで今、オレと母さんは今、その人の家に向かっている

今日からそこで住まわしてもらえるらしい

どんなところだろ？

？」「さあ直くん、着いたわよ」

母さんがオレに声をかける

あ！言い忘れてたけど有沢ってのは母さんの旧姓

母さんの名前は有沢ありさわ 玲子れいこ

けど今はそんなことより目の前の建物に目を奪われている

……………翠屋？

……………（*）

直「ええええええっ！」

取り敢えず叫んでみた

玲「ど、どうしたの直くん！？」

母さんは慌て出す

直「だ、だってここみど…ゴホン…おみせやさんだよ！？」

あつぶね「…」翠屋だよ「って言いそうになった…」

玲「ああ！そういうことね！ここはね、お母さんのお友達が旦那さんと一緒にやってるお店なのよ」

直「そ、そうなんだ…？」

このままでいくと…とか悩んでいると…

玲「さあ、行くわよ！…」

とか言っただれの手を引いて翠屋に入っていく

ハハッ…もう分かったよ…母さんの元同級生って…

玲「おっ邪魔しま〜す！」

?「あつ！すいませ〜ん、今日は臨時休業で…!?!? 玲ちゃん
」!

玲「あつ！桃ちゃ〜ん！」

やっぱりね〜！思った通りだよ！3児の母に有らざる美貌の持ち
主、高町 桃子さんだ〜！

桃「よかった〜、玲ちゃんちゃんと迷わず来れたんだね」

玲「失礼だな〜！まるで人が迷いやすいみたいに言って」

桃「だって玲ちゃん、地元じゃ有名な迷子の達人だったよね」

玲「う〜〜…」

………よし！取り敢えずほつとかけられないように声をかけよう！
直「おかあさん、このひとは？」

玲「あつ、そうだね。直くんには紹介しなきゃだね。この人はね、
お母さんの1番の友達の高町 桃子さんだよ」

桃「君が直樹くんか…はじめまして、高町 桃子です」

直「は、はじめまして。ありさわ なおきです！」

くそっ、3才児の体ってしゃべりにくい…

桃「しっかりしてるわね、玲ちゃんとは大違い」

玲「うるさい…！」

…何か…これから先騒がしくなるのが目に見えてるんだけど…

第二話 母の友…それは…（後書き）

次回、よつやくあの子とよつやく対面！

いつになったら無印始めれるんだろう…

第三話 新しい家族（前書き）

話が長くない…どうしよう

とりあえず第三話、始めます

第三話 新しい家族

SIDE:なのは

きょうはにちようび！

いえにはおとうさんもおにいちゃんもおねえちゃんもいるの！

けど、おかあさんはいまみどりやにいつてるの

「楽しみにしてなさい」「っていつてたけどなんだろう…?」

とりあえず、あそんでおう

1時間後…

?「は〜、…のは〜」

ん〜?いつのまにかねちゃってたの…

?「なのは〜」

あっ、おかあさんの声！

な「は〜い!」

桃「なのは、ちょっとリビングまで来て」

な「わかったの」

わたしはリビングまでいそぐ

リビングにつくとおとうさんにおかあさん、おにいちゃんとおねえちゃんがいて、それにしらないおねえさんに……おとこのこがいたの…

S I D E : なのは O U T

S I D E : 直樹

高町家についたオレたちは、桃子さんにリビングに通された

すると、ほんの2、3分で高町家の人が集まってくる

?「あれ?なのは?」

女の子がしゃべる

たぶん美由希さんだろう

?「さつき2階で遊んでたの見たけど?」

ってことはその隣にいて今しゃべったのは恭也さんか…

なんてことを考えていると…

な「おかあさん！どうしたの〜？」

ドタドタと響く足音と共に1人の女の子が入ってきた

直「（あれがなのはか…）」

桃「さあて、これで全員揃ったし、自己紹介しましょうか！」

桃子さん、なんかテンション高いな…

士「じゃあまず僕からかな？私は高町 士郎だ。よろしく頼むよ、直樹くん」

直「はい！」

取り敢えず元気に返事しておこう

桃「私はさつきしたから…」

恭「なら次は俺がするよ。高町 恭也だ。よろしくな、直樹」

直「はい！きょうやおにいちゃん！」

恭「お兄ちゃんか、ま、いいだろう…」

美「次は私だね。高町 美由希です。よろしくね？直樹くん」

直「はい！みゆきおねえちゃん」

美「くう〜、かつわいい！ねえねえ直樹くん！抱きしめてもい

い？」

直「えっ！？ええつと……」

恭「おい美由希、直樹が困ってるだろ」

おもしろい家族だなあ………ん？何でみんなオレのこと知ってるんだ？

直「ねえおかあさん、なんでみんなぼくのことしってるの？」

玲「！ ああ。それはね、ここにくる前に土郎さんたちには直くんのこと教えておいたのよ」

直「へえ〜」

？「ふえ！？ おかあさん！わたし、きいてないの！」

桃「ああ。なのははね、玲ちゃんのこと知らないから、同じときに自己紹介でいいかなって思ったんだ」

な「そうなんだ〜」

玲「じゃあ私が挨拶しましょうか。はじめましてなのはちゃん、有沢 玲子です。直くんのお母さんなんだ」

な「よ、よろしくおねがいします、たかまち なのはです」

玲「よろしくね？さっ、最後は直くんよ」

直「うん、ありさわ なおきです。よろしくおねがいます。それとなのはちゃん、よろしくね(ニコッ)(」

このぐらい愛想よくしておけば仲良くはなれるかな？

な「ふえ！？／＼よ、よろしくなの、なおきくん／＼」

ん？なのは顔がどんどん真っ赤に…風邪か？

桃・玲「「あらあら」「

美「ふふっ、3才でなのはに春が…」

何だ？みんなの反応が…

な「(なおきくん、とつてもかっこいいの／＼)(」

そして、そのまま自己紹介は終わった

なのははオレたちがここで暮らすことになり驚いてたけど…

その日の夜

晩御飯が終わってオレはオレと母さんの部屋に戻ろうとしていた

その時…

士「直樹くん、少しいいかな？」

直「しろつさん？」

士「直樹くんに渡したいものがあるんだ」

そう言つて士郎さんは1つの箱を取り出した

直「なんですか？これは…」

士「これはね、僕のおじいさんから貰ったものでね。高町家の次男に渡すように、つて言われたんだ。だから直樹くん」

直「でもぼくしろつさんのごともじゃ…」

士「この家に住む以上直樹くんも僕の息子のよつなものだよ。受け取ってもらえないか？」

息子といつてくれたとき、涙が出そうになつた

オレの父親もこんな人だったらよかつたのに…

直「わかりました！よろこんでこれをもらいます！」

オレは士郎さんから箱を受け取る

士「ありがとう。それにしても直樹くん。君は本当に3才なのかい？まるで見た目は子供頭脳は大人、みたいな感じだね」

直「ア、アハハハ、ソナナワケナイジャナイデスカ…」

士「そうかい？…まあいいか。それじゃ直樹くん、また明日」

士郎さんは自分の部屋の方に行った

取り敢えずオレも部屋に戻ることにした

直「ふう〜、あぶね〜。それにしても、これなんだろう？」

母さんは桃子さんと台所にいる

なので部屋であけてみることにした

直「たかまちけにつたわるってことはけんかんけいか?...よつと」

ふたをとると...

直「あれ?これって...」

第三話 新しい家族（後書き）

次回は直樹の能力の説明回になると思います

第四話 能力確認ついでに暴れてみるか

SIDE：直樹

直「あれ？これって…」

そこにあっただのは…

直「リアのうでわじゃん」

あの転生するとき、願いを叶えられるようにした通信用の腕輪を渡す
って言われてたっけ…

けどさ…

直「しぜんなかたち、でわたすっていったよな？これでいい
のか？」

？『もちろんです』

……………ん？

直「いまなんかこえがきこえたような」

？『こつちです』

声のした方を見してみる

あるのは…オレの二の腕…オレの右手…腕輪…床…

？『さあ、どれでしょう！』

1、直樹の二の腕

2、直樹の右手

3、腕輪

4、床

直「うーん、そうだな…って、なんでクイズになってんだよ！？」

？『ノリです』

直「ノリ!?!」

まあ、説明するまでもなく腕輪です。腕輪がしゃべりました…

直「で、おまえはなんなんだ？」

？『答えたいんですが、私たちだけのときはそのしゃべり方を止めてもらえませんか？』

直「ん？そうか…じゃあ取り敢えずもう一回聞くけど、お前は？」

？『はい、私はあなたの言っていた通りリア様の腕輪、そして、あなたのインテリジェントデバイスです』

直「デバイス？」

？『はい。あなたを転生させた後リア様が気づいたのですが、あなたは転生のとき、デバイスを頼むのを忘れましたよね？』

直「え？そんなバカな………あ！」

？『思い出しましたか？』

そう言えば頼むの完璧忘れてたなあ…

？『なので、急遽私がデバイスになることになりました』

直「なるほど…ところで、お前の名前は？」

？『私はまだ何も設定されてないので名前もありません。なので、マスターとなるあなたがつけてくれませんか？』

直「うーん…、名前ねえ…。………！ それじゃベタだけど「勇氣」って意味を込めて、正式名称“ブレイバリー”、愛称は“バリ”でどうだ？」

直「ブレイバリー…、素敵な名前、ありがとうございます！」

直「あっ、そう言えば……。なあバリー、お前四次元ポケットがどこにあるか知らないか？」

ブ『それでしたら私が入っていた箱の中に』

そう言われ、箱をよく見てみると腕輪がおいてあった布の下に外せる板があった

直「よっと……」

外してみると下に四次元ポケットが入っていた

直「これで行けるな……」

ブ『マスター？』

直「ブレイバリー、これから能力の確認に行きたいんだけど」

ブ『今からですか？さすがに遅いので家族の方にきづかれるのでは？』

そう聞いてくると思ったよ……けど！

直「これがあるから心配ない」

そう言ってオレは四次元ポケットを持ち上げる

ブ『そうですか？なら行きましようか』

直「よし、んじゃまずは…」

四次元ポケットの中を漁り……あつた！

直「テキオー灯！」

これで！ ピカーッ！

直「さらに…どこでもドア！」

ポケットから桃色のドアが出てくる

直「おお、これが夢にまで見たどこでもドア…（涙）」

ヤバイ…感動して涙が出てきた

ブ『マスター？』

直「！　っと、悪い悪い。さあ、行くか！」

オレはバリーを手首にはめ、ドアを開ける

行き先は…

ブ『砂漠…ですか』

直「ここだといろいろ便利だからな」

ここはかの有名なサハラ砂漠のド真ん中

ここなら人もあんまり来ないし、結界を張っても管理局には気付かれにくいだろう

それにしてもテキオー灯ってスゲーな！真っ昼間の砂漠にいても全然平気なんて…

直「さて、まず何からするか…」

ブ『マスター、まずは私と正式に契約しましょう』

直「そっか、何すればいいんだ？」

なのはみたいに呪文を唱えるのか？

ブ『契約すると言っても名前を付けてもらった時点でほぼ契約完了なので、あとはセットアップするだけです』

直「そうなのか？……んじゃ早速…ブレイバリー、セットアップ」

ブ『スタンバイレディ』

オレの体が光に包まれる

そして光が収まると…

ここからは主人公、有沢 直樹の能力確認も同時に表示していきま

~~~~~

直「こ、このバリアジャケットは…」

ブ『マスターの記憶の中にあつた「鎧」の中から私が独断と偏見で選んだジャケットです』

だからってさ、これはもう9割がたモンハンのミラルーツだよね…？ 男のガンナーの方の…

唯一違つと言えば頭の顔にかぶさる部分が目元までで鼻から先は丸見えつてことぐらいか

でも3才児のミラルーツってどうなんだよ…

もう気にしても無駄か……。次行こう

~~~~~

名前：有沢 直樹

デバイス：左手につけた白い腕輪 コアである青い宝石がつい

ている

バリアジャケット：モンハンのミラールツZ（男・ガンナー）が
布で出来ているようなもの

このとき、ブレイバリーは剣になって腰の左側に収まっている

~~~~~

直「バリーって剣になるんだな」

ブ『はい。ですが剣術などは一切サポートできない上、カードリ  
ツジシステムも搭載しているので扱いが難しいかと…』

直「まあそこは気合いと努力でカバーだな」

~~~~~

デバイス名：ブレイバリー

性別：女

愛称：バリー

形状：剣型デバイス

待機モードは腕輪

剣から形を変化することも可能


~~~~~

直「そんなじゃ次は……」

オレは四次元ポケットを漁り…

直「よし、これで」

近くに落ちていた小石を2つ拾い、上に放り投げる

そして…

直「ビツクライト！」

ヒュ〜…ズドン！！ズドン！！

小石が直径5メートルくらいの岩になって落ちてくる

直「続いて…」

オレは右手を前に出し…

直「ザケル！」

ガアアアン！

岩の1つが碎ける

直「よし、ガツシュの術も出るな…次は…」

左手を前に突きだし、

直「五ツ星神器、百鬼夜行<sup>ヒゼツク</sup>！」

もう1つの岩の中心を百鬼夜行が貫き、真っ二つに割れる

直「スゲーな、これ」

ブ「まったくです」

オレは次の能力を試そうとした……ん？

直「バリー、モンハンのモンスターってどうやって出せばいいんだ？」

ブ「ああ、それでしたらまずどちらかの手に魔力を込めます」

直「ほうほう」

取り敢えず言われた通りやってみる

ブ「その手を前に出すと魔方陣が出ますので、あとは「サモン・クリーチャー」という言霊の後に召喚するモンスターの名前を繋げてください」

直「オツケー」

言われた通り手を出すと魔方陣がでる

オレは1度深呼吸をし、叫ぶ

直「サモン・クリーチャー！リオレウス！」

言い終わると魔方阵が大きく広がり、中からリオレウスが出てくる

リオ「ガアアアアア！」

直「これでいいのか？」

ブ『もちろんです！初めてでここまですごいです！』

直「そうかな？」

~~~~~

直樹の特殊能力

・ガツシユの術全部

・一〇十ツ星神器

・モンスターハンターのモンスターの召喚

・答えを出す者 アンサートーカー

所持品

・四次元ポケットとひみつ道具

~~~~~

そのあとも1時間ぐらい術の練習をした

直「…ハア…ハア…」

ブ『マスター、いくつかわかったことがあります』

直「何だ？」

ブ『まずマスターの使っていた術や神器ですが気づいているかと思いますが、使用には魔力が必要です。そしてその魔力ですが、ランクで言うと今のマスターはA Aランクです』

直「ん？オレ、リアにはほE Xぐらいの魔力、って頼んだんだけどな」

ミスったか？

ブ『おそらく、マスターが無意識に魔力を制限しているんだと思われる。まだ体の出来上がってない今ではE Xの魔力は危険ですから』

直「なるほど」

・術や神器使用には魔力が必要

直「んじゃそろそろ帰るか」

ブ『マスター、日本ではもう深夜ですが大丈夫ですか？』

直「もちろん！まず…これ」

そう言いながらオレは四次元ポケットからどこでもドアを取り出す

直「でもって…これ！」

オレはポケットからダイヤルを出す

ブ『マスター、それは？』

直「これはな、時間調節ダイヤル、って言ってな。どこでもドアと組み合わせるとどこでもドアで時間移動ができるんだ」

ダイヤルをドアのノブに取り付けダイヤルを回し、開ける

開けた先は、高町家のオレと母さんの部屋

直「……ほら」

オレはバリーに時計を見せてやる

時間はオレたちがここを出て行って5分程度しかたっていない

ブ『……すごいですね』

直「まあな」

直「さてと…取り敢えずこれからもよろしくな、バリー」

ブ『こちらこそ、マスター』



第四話 能力確認ついでに暴れてみるか（後書き）

かぎかつこの使い方

人のセリフ：「」

デバイスの音声：『』

通信：「」

念波・心の中で思ったこと：（）

こんな感じでいききたいと思います！

第五話 そして… 介入の時は迫る（前書き）

いきなりですが時間を飛ばして、ここから無印を始めたと思います！

では、第五話始まります



## 第五話 そして…介入の時は迫る

SIDE：直樹

新暦65年 4月26日 午前5時過ぎ

オレは庭に出ていた

直「…いよいよ今日だな」

ブ「はい。マスターの説明してくれた「原作」通りなら…今日の夜、なのはさんは力を手に入れます。それにここ数時間に魔力反応がありました。おそらく…」

直「ユーノか」

空を見上げるとつつすらと明るくなってきた

直「…バリー、最初のほうは極力手を出さない。いいよな？」

ブ「マスターがそう望むのでしたら私は構いません」

直「サンキュー…」

ついに、長く続くことになる介入の日々が始まる

バリーを手にしたときからかなり鍛えたはずだ

必ず、ハッピーエンドにしてやる！

SIDE：直樹      OUT

SIDE：なのは

私、高町    なのはは今、聖祥大付属小学校の3年生

家族や友達に囲まれて毎日がとっても楽しいの！

今は学校のお昼休みになったところ

これからお弁当なの！

？「なのはは、屋上行くわよ」

な「うん、今行くよアリサちゃん！」

声をかけてきたのは私の親友の1人、アリサ「バニングスちゃん

？「なのはちゃん、そんなに急がなくても大丈夫だから」

な「大丈夫だよ、すずかちゃん！もう準備完了！」    次に声をかけてくれたのはもう1人の親友の月村    すずかちゃん

私たちはあと1人加わった4人でいつもお昼を食べるんだけど…

な「あれ？直樹くんは？」

その4人目である有沢 直樹くんが周りを見渡してもいませんでした

ア「ああ、あいつなら「こないだみたいにベンチに座れないのはイヤだろ？」とか言っつて先にいったわよ」

な「そうなの？それじゃ早く行かなきゃ！」

私たちは急いで屋上に向かう

屋上に繋がるドアを開けると風が吹き込んでくる

屋上には結構人がいてベンチもほとんど埋まっていた

その内の1つに目的の人を見つけた

な「あつ、いた！ 直樹くん！」

呼び掛けるとその人は寝転んでいた体を起こして、手を振りながら答えた

直「おう。なのは、アリサ、すずか、遅かったな。待ちくたびれたぞ」

この人は有沢 直樹くん

6年前から高町家に一緒に住んでいる男の子

そして私の……初恋の人なの！

S I D E : 直樹

な「将来かあ……、アリサちゃんたちはもう結構決まってるんだよね？」

さっきの授業のことをずっと考えてたんだな……

ア「あたしはお父さんもお母さんも会社経営だから、勉強して跡を継がなきゃ、つてぐらいだけど？」

す「私は機械系が好きだから、工学系の専門職がいいな……って思ってるけど？」

さすが、2人ともしっかりした目標があるな……

なのはは原作通り悩み中か……

な「そっか……。ねえ、直樹くんは？」

ア「あっ、あたしも気になる！」

す「私も！」

直「そうだな〜…、詳しくは言えないけど、どうしてもやらなくちゃならないこと、ならあるな」

な・ア・す「「「やらなくちゃいけないこと？」」「」

3人とも首をかしげる

まあ無理もないか…

ア「なにそれ？よくわかんないわよ」

直「そのうち教えられる時が来たら教えるって」

ア「ハア…、あんたを問い詰めても無駄ってことはよくわかってるからもういいわ…」

な・す「「ア、アハハ…？」」

なのはたちは苦笑い…

何だよ、アリサの奴前にアリサの質問をのらりくらりかわしたく  
とまだ根に持ってたか…

な「「……………ハア…」

こっちはこっちで悩みっぱなしだしさ〜…

…しょうがない、ちょっと元気づけるか

直「なのは、焦らなくてもいいんじゃないか？」

な「ふえ？」

直樹「今のところなのははっきりした将来の夢がない。だから悩んでるんだろ？」

なのは小さくうなずく

直「でもさ、将来の夢ってのはいつ決まるか、どんなものになるのかも人それぞれだ。だから、ゆっくり考えてもいいんじゃないか？」

な「…いいのかな？」

直「もちろんだ。精一杯悩んで、それから答えをだせばいいんだ。わかったか？」

な「うん！」

直「よし、偉いぞ！」

オレはなのはの頭を撫でてやる

な「…はうう／＼／＼／＼…」

ん？なのはの顔がどんどん赤くなっていく…風邪か？

ブ『（フラグ強化ですね、マスター）』

直「（わざわざ念波でなに言ってるんだ）」

ア「…ねえすずか、なんであの2人ってああなの？」

す「ごめんね、私もわかんないよ」

時間だけがいたずらに過ぎていった…

第五話　そして…介入の時は迫る（後書き）

主人公、有沢　直樹のステータスをここで補強しておきます

名前：有沢　直樹

年齢：9才

性別：男

容姿：金色のガツシュ！！の高嶺　清麿を子供化させたような姿

相違点は、清麿が髪の色が黒なのに対して直樹の髪の色は明るい  
オレンジ

髪は短くしており、天然のクセで上に向かって立っている

身体能力：6年の特訓のおかげでかなり上がっている

魔力：SS（但し、普段は管理局に見つからないように自分でリ  
ミッターをかけ、F-以下になるようにしている）



まだまだ変えていくと思います

**第六話 魔法少女誕生！（前書き）**

まだまだ頑張っていきますよ！

では、第六話始まります

## 第六話 魔法少女誕生！

SIDE：直樹

あれから学校も終わり、今は放課後

オレはなのはたちと一緒に帰っている

ア「けど今日の体育、あれは何よ、直樹！」

直「何って…カーブ、だろ？」

ア「なんでドッジボールのボールであそこまで曲がるのよ！？納得できないわ！」

オレに当てられてキレてるのか？

でも本気でスピンかけたら90°くらい曲がるだろ？

す「アリサちゃん、もう止めなよ。また今度頑張る？」

ア「うう〜、次は勝つわよ！」

直「おもしれえ！振り返ちだ！」

ちよっとノリにのってみました〜

な「にやはは…」

ア「ふう〜…あつ、そういえばここ通り抜けたら塾に早くつくわよ。ちよつと道が悪いけど…」

直「んじゃ、オレはこのまま翠屋行くからここで別れるわ」

ア「そう？じゃあ直樹、また明日」

す「直樹くん、またね」

直「おう、お前らも勉強頑張れよ？あとなのは。遅くなったらみんな心配するから早く帰ってこいよ？」

な「うん！わかってるの」

そしてオレはなのはたちと別れ、歩き出す

その数分後…

…ガチャリ…ゴオオ…

1人の少女の運命の歯車が噛み合わさり…静かに回りだした…

なのはたちと別れてからしばらくして、オレは翠屋についた

一応営業時間なので裏口から入った

そのまま厨房に行くよ…

桃「あら？直樹くん、お帰りなさい」

直「ただいま、桃子さん。手伝いにきました」

桃「助かるわ。それじゃ、いつも通りお皿洗い頼めるかしら？」

直「任せてください！」

どうして現在9才であるオレが翠屋で手伝いをしてるかっていうと、やっぱり感謝の意味が大きい

居候のオレをなのはたちと同じ私立である聖祥大付属小学校に通わせてくれている

その上、母さんにも仕事をくれている

母さんは今、翠屋で主にカウンターでの接客をしている

なので、小1の頃から1週間に3回ほどオレも手伝いにくる

2時間後

桃「直樹くん、そろそろ終わるみたいだから終わっていいわよ」

直「あっ、は〜い。もう少しで全部片付きます」

桃「ご苦労様」

直「いえいえ」

そして、翠屋の営業時間が終わりオレは土郎さんと桃子さん、それに母さんと一緒に高町家に帰っている

直「（！　そういえば…なあバリー）」

ブ「（何ですか？）」

直「（ユーノはどうなってる？）」

ブ「（少し待ってください……………わかりました。やはりマスターの言っていた通り、ユーノさんは今動物病院にいます）」

どうやら無事に原作通りに進んでいるみたいだな

そんなことを考えているうちに、オレたちは高町家についた

S I D E : : 直樹      O U T

S I D E : : なのは

私は塾から帰って、晩ごはんの時にみんなにあのフェレットさんのことを言ってみた

お父さんたちやお兄ちゃんたちはみんな賛成みたい

中でも…

直「フェレットか…、オレはいいと思いますよ？」

お父さんに話をふられた直樹くんも賛成してくれたの

今日はこの幸せ気分のまま寝よっかな

？「（誰か…ボクの声が聞こえますか！）」

な「ふえ！？」

夢の中と夕方の声と同じ声！？

？「（お願いです！…この声が聞こえた人、どうか助けてください！）」

…困ってるんだよね…。とりあえず、行ってみよう！

私はパジャマから普段着に着替えて、家から飛び出していった…

S I D E : : なのは O U T

S I D E : : 直樹

直「……………よし、そろそろ行くかバリー……」

ブ『了解です』

なのはが出ていってから約10分後、オレもなのはを追いかける  
ために出ていこうとしていた

けど……

士「直樹、どこにいくつもりだ？」

直「士郎さん!？」

門の横には士郎さんがいた……

マズイ……このままだと……また地獄の特訓されちまう……？

実を言うと、士郎さんにはオレの基礎体力向上や剣術の稽古をみ  
てもらっている

始めはオレ1人でやってたけど、4才の時に士郎さんに見つかっ  
てしまいめちやくちや怒られた……

特訓していたことに対してではなく、いずれ体を壊してしまうや



り方でやってたからだ

それ以来、オレは土郎さんに稽古をつけてもらうことになった

かなりキツイのばっかだったけど…（涙）

土「…直樹、……なのは追いかけるのかい？」

直「！？ 土郎さん、気づいて！？」

土「まあね。夜遊びなら止めたけど…あれはそんなものをしていく目じゃなかったからね」

直「さすがですね…」

土「というわけで直樹、僕から頼むよ。なのはにこっそりついて行ってくれないか？」

直「…もちろんです！」

土「では、行ってきなさい」

そう言って土郎さんは門を開けた

直「はい…」

オレはそのまま走っていく…

しばらく走っているよ…

ブウウン…

ブ『マスター、結界が張られました』

直「ってことは…」

ゴオオオオ…

その時、夜空に向かって桃色の光の柱が上がった

直「……………?」

ブ『……………』

直「なあ、バリー…」

ブ『何ですか？マスター』

直「なのはって今までは普通の魔法を知らない女の子だったよな？」

ブ『はい』

直「じゃあ…あれって天然？」

ブ『ええ、天然も天然。マスターの養殖とは大違いです』

直「ふう〜ん……………って、誰が養殖だ!？」

ブ「冗談です。……魔力解析が終了しました。なのはさんの今の魔力はAAAランクです」

AAA!？なのはって最初はもう少し低くなかったっけ？

な「ふえええええっ!？」

おっと、考えてるヒマないか

直「取り敢えず、急ぐか!」

オレはなのはたちのところを目指して急ぐ

……屋根の上をピョンピョン飛んで行きながら……

## 第六話 魔法少女誕生！（後書き）

第七話はサッカーのところでここまで書くのが、なんて思っています

どうも、ベルワンです！

さっき調べてみたら、10000PVまであと少しでした！

自分の駄文がここまで読んでもらったのも、付き合ってくださいっ  
た読者の皆様のおかげ。そして、「リリカルなのは」の名前のおかげ  
です！

厚かましいですが、感想待っています！

第七話 これが超次元サッカーだ！…なんちゃって（前書き）

いきなりサッカーのところまで飛びます

理由は簡単です

なのは初めての事件、それに神社での子犬の事件

両方書いては見たんですが…ほとんど原作通りになってしまったので削除しました

では、第七話始まります

第七話 これが超次元サッカーだ！…なんちゃって

S I D E : 直樹

その後、なのはたちのところに行くと丁度ジュエルシードを封印している最中だった

生で見るとなかなか迫力があるんだなあ…

それから原作通りユーノは高町家で暮らすことになり、なのはも魔法少女として過ごし始めた

でも…なのはって本当に素人さんですか？

あのプロテクションとかかなりのレベルだよな？

とか思っているうちにどんどん原作は進み、今は…

土「直樹、もうすぐ行くからなのはを起こして来てくれ」

直「あっ、ちょっと待ってください。もう朝飯食べ終わるんで」

今日は土郎さんがコーチ兼オーナーを務めるサッカーチーム、翠屋FCの試合日

オレはなのはとアリサ、すずかと一緒に応援に行くことになってるんだけど…

直「なのはあ！朝だぞ！さっさと起きろ！」

ドンドン…！

一応相手は女の子

なのでドアの外から呼び掛ける

な「う〜ん…あともう少し〜…むにゃむにゃ」

直「早くしろ！土郎さん、もう行くって言ってたぞ！」

な「だったら直樹くんがここまで起こしに来て〜なの…！」

……………ホウ…起こしていいと…

ガチャ…キィ…

直「さてと…おっ、ユーノおはよう」

ユ「キュ…！」

直「…ユーノ、悪いけどオレの肩に乗ってくれないか？（黒笑）」

ユ「（ビクッ）キ、キュ…？」

ユーノは急いでピヨピヨと跳び跳ねてなのはベッドの上からオレの肩へと移る

直「…さて…」

オレは掛け布団に手を掛け、そして…

直「ジエイヤアツ!!」

な「!? ふええええっ!? / / /」

思いつきり剥ぎ取ってやった

S I D E : 直樹      O U T

S I D E : なのは

な「…うゝゝ / / /」

直「唸っても謝らないぞ。お前が起こしてくれって言ったんだからな」

な「でも…」

何だか納得できないの…



直「でもは無しだ。それよりも時間だ。もう試合始まってんだぞ！行くぞ？」

な「ええ！？ま、待ってなの！」

出ていってしまった直樹くんを追いかけ、急いで家から飛び出す

な「もう、直樹くん待ってよう！（涙）」

試合会場に着いてみるともう後半が始まっていた

ア「なのは！直樹！遅いわよ！」

な「ごめんごめん……」

直「……で、試合はどうなってんだ？」

す「えっと……今は0対0だよ。キーパーの人が頑張ってるから点が入ってないけど、こっちは……」

ア「全然シュートを打ててないのよ！」

それじゃ……このまま引き分けなのかな？

その時……

ドサッ……　　プドゥーッ……

な・ア・す「「「!?!?!?!?!」」」

いきなり…フォワードの人が倒れて試合が止まった

いったいどうしたの!?!?

S I D E : なのは      O U T

S I D E : 直樹

なのはたちが話している間、オレはベンチの方に来ていた

けど…

直「控え選手が誰もいない!?!?!?!?!」

士「ああ、そのせいか無理してプレイしてる子が何人かいるんだ」

…それでこの状況か…

その時…

ドサッ…      プジャー…!

直「士」「!?!?!」

ヤバい！動きがおかしかったやつが倒れた！

オレは士郎さんと協力してフォワードの人をベンチまで運ぶ

大したことはないけど、この試合に復帰は無理だな

直「士郎さん…、どうするんですか？」

士「……………しょうがないな…、選手登録ナンバー12の選手を使  
うか」

直「12？士郎さん、11人しかいないんじゃないんですか  
？」

そういつオレに士郎さんは1枚の紙を見せてきた

直「？ 翠屋FCの今日の選手登録表？」

見ていくと…

直「……………は？」

~~~~~

・

・

12、有沢 直樹

直「何スかこれ？」

士「見た通りだよ。いやあ、念のために登録しといて良かったよ」

直「……ハア……、着替えてきます」

どうせ後半はあと少し

それなら少し本気出すか……

S I D E : 直 樹 O U T

S I D E : なのは

フォワードの人が下がってからまた人が入って試合は再開したの……けど……

ア「何で直樹が出てるのよ!？」

なぜか、直樹くんが試合に出ちゃってます

その上……

す「直樹くん、すごく上手だね!」

ア「悔しいけど本当に上手いわね」
直樹くん、とっても上手なの！

あっ！今もまた1人抜いた！

そのままゴール前へ

時間もあと少し！

な「直樹くん！頑張ってる！」

私も精一杯応援した

そしたら…

直「オリヤアアツ！」

な「ふええっ！」

ア「うそお！」

す「すっごくいい！」

何なの今の！

直樹くんが上にボールを上げたと思ったたら直樹くんはグルグル回りながらジャンプしてそのままシュート！

………ってナニコレ!?

ジャンプだけで3メートルくらい跳んでたし

あっ、お父さんに鍛えられてるから普通なのかな？

でも…シュートした時の直樹くん…カッコよかったなあ／＼／

レ『(マスター、今の直樹さんのシュートシーンの映像を録っておきました)』

な「(ふえ!?!そんなことできたの?レイジングハート)」

レ『(もちろんです。マスターのためならこのぐらい)』

な「(ありがとう、レイジングハート!…これからもチャンスがあれば録ってくれない?)」

レ『(マスターの望みなら喜んで)』

な「(ありがとう!)」

…これからいろいろ楽しみなの…フッフ…

SIDE:なのは OUT

SIDE：直樹

直「オリアアア！」

バシユウン！ ピッピッピー！

直「おっし！」

今打ったシュートがゴールに入り、同時に試合終了になった

けどな〜…今打ったシュート、魔法使えばすぐくなるのに…

イナズマイレブンの「ファイアトルネード」も炎が出てなきや〜
グルグル回って空中シュート」ぐらいにしか見えないよな…

……よし決めた！いつか誰かに魔法使ってイナズマイレブンのシ
ュート打ち込んでやる！

チームの人たちに誉められながらベンチまで戻るとアリサたちも
いて声をかけてくれた

な「……フフフ……」

なぜかなのはは不気味に笑ってたが…

それからオレたちを含め、翠屋FCは翠屋で食事することになった

今日はあのキーパーがジュエルシードを発動させるんだっけ？

まあ、なのはだけでいけるだろ…

それから数時間後…オレのその予想は外れることになる…

第七話　これが超次元サッカーだ！…なんちゃって（後書き）

知ってる人は解ったと思いますが試合で直樹が打ったシュート

あれはファイアトルネードです

但し炎は出てません

まあシン・ポルク辺りを使えば余裕で出来たでしょうけど…みんなへの言い訳を考えると使えなかった、ってことで…

次話はあのジュエルシードの事件のみなので短く収まると思いますが！

良い点、悪い点の指摘

感想も待ってます！

では！　ベルワンでした！

第八話 小さな相違点（前書き）

さっき確認したところ、P Vが18282となっていました！

読んで下さった方々、ありがとうございます

では、第八話始まります

第八話 小さな相違点

SIDE:なのは

試合が終わってからお父さんの提案で翠屋FCの皆さん、それに私たちは翠屋で食事することになったの
翠屋FCの皆さんはお店の中で食事、私たちは外のテーブルでテ
ィータイムすること…

ア「しっかし、ユーノって本当にフェレットなの？」

す「そうだよ。動物病院の先生もちょっと変わってるって言う
てたし…」

な「(ドキッ)ま、まあ少し変わったフェレットさん、てことで
…？ ほらユーノくん、お手！」

ユ「キ…キュー！」

ユーノくんは私に合わせるために急いでお手をする

ア・す「「おお〜！(わあ〜！)」「

アリスちゃんとすずかちゃんは感心してユーノくんを撫で回す

撫でる…撫でる…撫でる…撫でる…撫でる…撫でる…撫でる…

ユ「キユ〜!?」

な「(ユーノくん…ご、ごめんね…?)」

ユ「(大丈夫だよ…?)」

それから少しして、翠屋FCの皆さんが中から出てきたの

士「みんな！今日はコンディションの悪かった人もいたが何とか勝てた。けどな、次もこう上手くいくとは限らない。だからこそ、今度は万全のコンディションで試合をしてまた勝ちにいこう！」

FC一同「はい！」

士「よし、それじゃ今日は解散！」

FC一同「ありがとございました！」

……何だかあの‘教える立場’っていいなあ…

私にもああいう仕事、できるかな…

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

この時の思いが後の戦技教導官への道に繋がっていることは今の
なには知る由もなかった

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

マ」………よし…」

ん？あそこで立ち止まっているのってマネージャーさん？

何してるのかな？…！？

な「えっ！？」

ア「？　なのは、どうしたの？」

な「う、ううん…何にもないよ…」

気のせいだよね？きつと…

私は勘違いだと思っことにした…

マネージャーさんの手の内に輝いた青いものは、違っって…

S I D E ……なのは O U T

S I D E ……直樹

まったく………、なのはは原作通りここではスルーか…

にしても……今回のジュエルシードを持つてるのって原作ではキー

パーの人だったよな…

歴史が変わり始めている？

オレはまだ介入は大してしてないはずだ…

……ダメだ、わかんねえ…

悪い方に傾かなきゃいいけど…

士「なのは、直樹。僕は一旦家に帰るけど2人はどうする？」

な「あつ、私はアリサちゃんたちがお稽古みたいだから一緒に帰るよ」

直「オレも特に用はないから帰ります」

士「それじゃ準備するから少し待っててくれ」

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : なのは

キイイイイイン！！

な「!?!」

家に着いてから部屋にいるときいきなり気配を感じる

この気配は…

な「(ユーノくんっ!)」

ユ「(うん! ジュエルシードだ!)」

私はユーノくんを抱えて急いで家から出ていく

な「お父さん! ちょっと出かけてきます!」

士「そうか? 遅くなるなよ」

な「は〜い!」

とりあえず、早く行かないと!

S I D E : : な の は O U T

S I D E : : 直 樹

キイイイイイン!

直「始まったか…」

ブ「マスター、ジュエルシードの効果範囲が爆発的に広がっていき
ます！なのはさんだけでは…」

直「……………時は来た、ってか？」

ブ「ふざけてる場合じゃないですよ、マスター」

直「ハハツ、悪い悪い。……………行くか」

ブ「はい」

オレは玄関まで行き、扉に手を掛けた

その時…

士「行くのかい？直樹」

直「士郎さん…」

後ろにいつの間にか士郎さんが立っていた

士「気をつけていくんだぞ？」

直「……………士郎さんは、何を知ってるんですか？」

士「何のことかわからないな。それよりも…急いでたんじゃない
のかい？」

直「…行つてきます」

オレは扉を開け、走って出ていく

士郎さんは魔法に関して何も関係ないはず…

けど…それは違う気がする

…とりあえず、今はジュエルシールドだ！

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : 士郎

士「直樹、すまないな…。今は話せないんだ…けどその内に…」

気がつくくと、僕は走っていく直樹の後ろ姿を見ながら呟いていた

士「…さてと、風呂でも入るか」

S I D E : 士郎 O U T

S I D E : なのは

街の大部分を見渡せるビルの上に来て見たけど…

ユ「こ、これは!？」

な「す、すごいのか…?」

見渡す限り…

樹!樹!樹!樹!樹!

ユ「こんなに広範囲に…。でも、ここまでになる思いって…」

…!?! マネージャーさん? やっぱり…あれはジュエルシールド
だったの?

ユ「とにかくジュエルシールドを探さないと!…でもこの範囲から
どうやって…」

私が見逃したせい…なら、その分私が頑張らないと!

な「ユーノくん、私が探すよ…」

ユ「えっ、でも…」

な「大丈夫だよ。…行けるよね?レイジングハート」

レ『オーライ』

な「よし、行くよ。…探して、災厄の根元を！」

レ『エリアサーチ』

………！

な「見つけたっ！」

ユ「本当に!?!」

な「うん、あそこの1番大きな樹の上の方！」

見つけたことは見つけたけど…どうやって封印しよう?

遠距離で封印しようと思えば出来るかもしれないけど…

ジュエルシードのある樹の前に広がる樹の壁がそれをさせてくれない…

どうしたらいいの!?! このままじゃ街が…

私が途方に暮れていた時…

?「(高町) なのは…聞こえるか?」

その声は聞こえてきたの…

S I D E : : なのは O U T

S I D E : : 直樹

現場についた時、辺りは凄いことになっていた

直「うっひゃあ…、原作より酷くなってるし…」

何でだ？ ジュエルシードの発動者がキーパーからマネージャー
に変わったただけなのに…

…あれか？ ‘恋する乙女は強いのよ！’ 理論か？

…いや、もう考えるのは止めよ

直「バリー、なのはは今何してる？」

ブ『はい、恐らくですが、あのジュエルシードの周りを囲んでい
る壁が障害になり、封印できずにいるのではないかと』

直「ってことはだ。オレがやるべきことは…」

ブ『あの壁の排除、ですね』

直「よし、バリー。なのはに念波を送るから変声よろしく！」

ブ『わかりました！』

直「（…高町 なのは…聞こえるか？）」

な「（ふえ！？ だ、誰なの？）」

おっ！ちゃんと返事してくれたな

直「（まあ、通りすがりの助っ人、つてことで）」

な「（はあ…助っ人さんですか。…助っ人さんは何でそんな声変えてるのまるわかりの声なんですか？）」

直「（いずれわかるさ。それよりもだ……今からオレの召喚竜があの壁を潰す。それに合わせてお前はアレを封印。いいな？）」

な「（で、でも」（い・い・な・？）「……わかりました）」

直「（よし、こっちは今からすぐやる。お前も準備しとけ）」

な「（は、はい…）」

さて、それじゃやりますか

直「サモン・クリーチャー！グラビモス！！」

オレの前に白色の魔方陣が出る。通常のオレの魔力光はオレンジだけど、この召喚の魔方陣の色は白になる

ちなみに召喚はバリーをセットアップせずに使える

白色の魔方陣から灰色の外殻を持つ巨竜、グラビモスが出てくる

直「グラビモス！出てきてすぐ悪いけどあの樹の壁を焼きつくせ
！」

グ「ガオオオオオ！」

グラビモスは1度雄叫びをあげると、自身の口に多量の熱を溜め、
体勢を整える

そして…

直「撃てえ！！」

その合図から1秒経たずにグラビモスの口から「熱線」が放たれる

熱線は壁に当たり、横薙ぎに壁を焼き切っていく

そして…

ズウウウウウン…

鈍い音と共に樹の壁は封印の砲撃が通過するには十分過ぎるほど

大きく崩れ落ちる

そこから間髪入れずに桃色の砲撃が通りすぎ、ジュエルシールドを封印する

直「これで一件落着だな。グラビモス、戻っていいぞ」

グラビモスは頷くと白色の粒子になって消えた

直「さあて、なのはに見つかる前に退散するか。さすがにOH
ANA SHIはいやだもんな」

SIDE：直樹 OUT

SIDE：なのは

私が甘く見てたから今回は大事になっちゃった…

…覚悟が必要なんだ…

もうユ一ノくんのお手伝いじゃなく、自分の意思で集めるんだ！

…それはそうと、あの助っ人さん、誰なのかな？

… 今度会ったらゆっくりと O H A N A S H I … じゃなかった
… お話したいの …

S I D E : … なのは O U T

S I D E : … ?

? 「あれがこの世界の “イレギュラー” か…。あれは力の一部み
てえだが、思ったより弱そうだな。…今までつまんねえ任務ばっか
だったからな……楽しんでませてくださいよ？ヒハハハハッ！」

S I D E : … ? O U T

第八話 小さな相違点（後書き）

次は猫天国での出来事です！

第九話 猫…天国？（前書き）

なんか頭の中では話は出来てるのに打ち込むのがなかなか早く打
てない

難しい問題だ……

第九話 猫…天国？

SIDE：なのは

今日はお兄ちゃん、直樹くんと一緒にすずかちゃんの家にお呼ばれされてるの！

私と直樹くんはすずかちゃんに、お兄ちゃんはすずかちゃんのお姉さんの忍さんに招待されたの

お昼ごはんを食べ終えて私は部屋で準備して今は直樹くんの部屋の前にいるんだ…

ドンドン！

な「直樹くん！早く行こうよ！」

直「やだ！なのはだけで行って来てくれ！」

な「もう何言ってるの？すずかちゃんたち待ってるんだから早く行こうよ」

直「まだ逝きたくない！」

…直樹くん…？、たぶんだけど今字が違ってたと思うよ？

直樹くんがここまで逝きたがら…ゴホンゴホン…行きたがらない
のには当然理由があるの

別にすずかちゃんやアリサちゃんが嫌いって訳じゃないよ？

ただね？ すずかちゃんの家にいる…「アレら」がちよっと…？

でもいつまでもこうしてられないし…しょうがないか…

な「それじゃ直樹くん、お兄ちゃんも待ってるから私は行くけど
あとから必ず来てよ？」

直「…ハア…、わかったよ。逝けばいいんだろ？逝けば…」

だから字が違っつて…？

とりあえずそこはスルーして私はリビングに急いだ

S I D E : : なのは O U T

S I D E : : 直樹

ブ『マスター、なのはさん行ってしまいましたよ』

直「わかつてる」

ブ『今朝の明け方に未確認の魔力を持つ魔導師、及びその使い魔らしき生物の反応をキャッチしました。おそらくマスターのおっしやっていたフェイトさんが来たのでは？』

直「そうだな、時期的にも原作とピッタリ合う。だとしたらたぶんすずかの家で会うことになるだろうな…」

ブ『だったら尚更…直「なあバリー」…どうしました？』

直「何で行きたくないか聞いてくれるか？ あの時はずかさんの家は家に置いていったから知らないと思うんだ」

ブ『何かあったんですか？すずかさんの家で』

直「……………あれは…」

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : なのは

す「そっか…、まあしょうがないよね、アリサちゃん」

ア「まああれは…なんとというか…ドンマイ、って言うしかないわ

よね…?」

すずかちゃんの家について2人に直樹くんのことを話したけどやっぱり2人も気の毒に思っていた

ア「しっかし…あれは何なのかしら…体質?」

す「どうなんだろう?あれから家にくるたびにああなってるけど…」

な「…うん、何でだろうね…」

直樹くんの身に起こった(本人曰く)悲劇…それは今から約2年前、私たちが小学校1年生の時に起こったの…

~~~~~

S I D E : 直樹(過去)

今日はすずかと友達になってから初めてすずかの家に行くことになっっている

な「直樹くん、早く行こうなの!」

直「待って…、そんなに急がなくても大丈夫だって。それにすずかの家に行くのにすずかたちおいて来てるぞ」

な「ふえ?」

なのははここでようやく後ろを振り向く

後ろには50メートルぐらい離されて走ってくるアリサとすずかが見えた

な「!?!? あう…やっちゃった…」

その後、追いついたアリサになのはが頭を叩かれたのは言うまでもない

な「すっごくいい!」

直「たしかにすごいデカイな…」

着いてみればすずかの家は敷地だけでなく、そこに建つお屋敷もデカかった

原作で見ではいたけど、かなりでかい…

す「さあ、入って入って」

すずかに言われ、オレたちは門からお屋敷への道を歩く

……あお……にゃ……

ん？なんか聞こえる？  
気になってオレは振り向いてみる

.....！

（ ＊ ）エエツ！？

直「すずかさんすずかさん」

す「どうしたの？直樹くん（何でさん付け？）」

直「すずかさんの家には何か動物はいますか！？」

す「何で丁寧語？ま、いつか…ネコがたくさんいるけど？」

直「アレ？」

その声に反応して3人は後ろを見る

オレが指差す先には…

ニヤアニヤアニヤアニヤアニヤアニヤアニヤアニヤアニヤアニヤア  
ニヤアニヤアニヤアニヤアニヤアニヤアニヤアニヤアニヤアニヤア  
ニヤアニヤアニヤアニヤアニヤアニヤアニヤアニヤアニヤアニヤア  
ニヤアニヤアニヤアニヤアニヤア

・

・



な・ア・す「っ！？」 えええええっ！？」

そこにはおびただしい数のネコがまるで壁のように群れながらついてくる景色だった…

な「すごいたくさんいるね…？ みんなすかちゃんの家のネコさん？」

す「そうだけど…こんなに集合するのはごはんの時ぐらいなのに…」

直「なあ、アイツらずっとオレの方見てないか？」

ア「はい？そんなことあるわけ…」

振り向いたアリサの目に映ったのは先程よりこっちに近づき、全員がオレを凝視しているところだった

ア「……ありそうね…？」

直「だろ？」

しかし、コイツら何なんだ？とどんどんオレに近づいてくるし…

何かネコが好きそうなもの持ってきたっけ？ いや、何も無いよ

な…

…うん…わかんない…

ア「直樹！何してるのよ、早く来なさいよ！」

気づくとアリサたちはもう先に行っていて、オレ1人が残っていた

直「やべ…いま行<sup>モフッ</sup>k…モフッ？」

歩こうと足を動かそうとすると、何か柔らかいものに当たる

下を見ると…

ニヤア〜

1匹の子ネコがいた

な「直樹くん、どうしたの？」

直「…いや、何にもない。すぐに…!?!？」

「すぐに行く」「…そう言って足にまとわりついている子ネコをどかすつもりで下を見た

ニヤア〜      ニヤア〜

直「増えてる…だと!?!？」

呆然と下を見ている間にも3匹、4匹…とどんどん増えていき、  
だんだん足からネコに埋もれていく

直「う、嘘だろ!？」

動かそうにも子ネコのキラキラした目に見つめられると、蹴りと  
ばすなど無理だ

そうしているうちに小学校1年生であるオレの体はネコに覆われ、  
外から見れば「ネコ団子」と言う言葉が相応しい姿になってしまっ  
た…

な「な、直樹くん!？」

ア「えっ?えっ?どうなっちゃってんの!？」

す「みんな!直樹くんから離れなさい!」

オレがネコ団子から解放されたのはそれから30分後のことだった  
それ以来、すずかの家に行く度にオレはネコ団子になっている…

SIDE:直樹(過去) OUT

~~~~~

ア「ネコたちも直樹が好きだからやってる訳だから余計に何もできないのよね」

す「直樹くん、やっぱり来れないのかな？」

な「大丈夫だよ！直樹くんっていつも行きたくないとか言ってるけど最後には必ず来てるでしょ？」

す「…うん、そうだね！」

…ふう…良かった、すずかちゃん笑ってくれた

もう、直樹くん 早く来てほしいの

みんな待ってるんだから…

ニヤアゝ

…まあ、…ネコさんたちもね…？

S I D E : な の は O U T

S I D E : 直 樹

直「……ていう訳だ。わかったか？」

ブ『はい……でも……えっと……』

直「わかってる……この話を初めて聞いたヤツがとる反応はそれが普通だ」

ブ『すいません……』

直「オレもさ、別にネコが嫌いなわけじゃないんだ。……でもさ、行きたび行きたび毎回襲われるとき、疲れるんだよ……（涙）」

ブ『マスター……』

直「……それでもさ、行くんだよ。すずかは大切な友達だからな……よし、行くか！」

ブ『大丈夫ですか？』

直「ああ、もう踏ん切りはついた。それに……上手くやれば今日はなのはにとつても、フェイトにとつても大事なターニングポイントになる。しっかりやらなきゃな……」

ブ『マスター、そこまで力む必要はありませんよ。マスターなら自然にやれば上手くいきます』

直「……ありがとだな、バリー。……そんじゃ、行きますか！」

ブ『はい……』

S
I
D
E
:
直
樹

O
U
T

第十話 ターニングポイント（前書き）

なんか書いてる途中からどんどんグダグダになってしまった…

それに無駄に長いし…

とりあえず第十話、始まります

第十話 ターニングポイント

SIDE：直樹

ターニングポイント

それは、人生における重要な転換期

その出来事により人生が大きく変わることの意味する…

直「（…だからそれを逃すわけにはいかないんだけど…）」

運「先程、この先の交差点におきまして交通事故が発生し、現在警察が現場検証を行っているためバスの運行を一時ストップしております。お客様には大変ご迷惑をお掛け致しますが、何卒ご了承願います」

さつきからオレの乗ってるバスの運転手はずっとこのフレーズを

繰り返している

今バスが止められている道は比較的交通量の多い道だったため、バスが止められた後すぐに後ろに後続の車の列ができていた

なので、バスは他の道へ行くことも出来ずに立ち往生を食らっている

直「(マズいって…？ このままじゃターニングポイント云々よ
リフェイトに会うことなく今日のイベント終わっちゃうじゃん！？
なのはと恭也さんが出ていってからもう結構時間がたってる。
もういつ始まってもおかしくない…、かといって飛んで行くと目
立つし…どうすれば…)」

子供「ママ、ボクのローリースケートで行った方が早いよ？」

母親「もう、そんなこと言わないで。もう少し待ちましょ？」

子供「はい」

……………！！！！

ローリースケート！

それだ！

直「すいませ〜ん！急ぐんでここで降ります！」

バスが止まっていた大通りから少し脇にそれた場所でオレは準備にかかると

まずは四次元ポケットから……あつた！

直「透明マント〜！」

効果は読んで字のごとく

被れば透明になる優れ物

ただし、強風などに弱いため過信は危険

直「（前に1度、空中で剥がれたことあつたからなあ……）」

それ以来これを使うのは地上で、と決めていた

でもって、さっきの子供のおかげで思い出した地上での高速移動方法

しばらく使ってなかったからすっかり忘れてた……？

直「では……六ツ星神器、電光石火 ライカ！」

発動させるとすぐに、オレの足に「少し大きめのローラースケート」というような形をしたものが装着される

直「よっしゃー！さっさと行きますか！」

オレは電光石火 ライカ に魔力を込め、加速する

そのスピードはすぐに時速90キロメートルまで上がる

直「やっぱり速えなああー！」

すずかの家まであと5、6分つて距離まで来た時…

キイイイイイン！！

直「！この感じ…！」

ブ『マスター、すずかさんの家の敷地内でジュエルシードの発動を確認しました。また同時に結界魔法も発動しています』

直「チツ…始まったか…急がなきゃ！」

オレは電光石火 ライカ のスピードをさらに上げた

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : なのは

な「……………」?

ユ「……………」?

……………えっと……………どうも、高町 なのはです

すずかちゃんの家遊びに来てた時にちょうどジュエルシードが発動しちゃって、ユーノくんと一緒に駆けつけたのですが…

ネコ「ニャ〜!」

な「…大きいね、ユーノくん」

ユ「たぶん、あのネコの「大きくなりたい」っていう願いが正しく叶えられたんだと思う」

な「そ、そうなんだ…？　なんか少し調子狂っちゃうな…」

ユ「でも、このまま放っておいたら危険なのは確かだよ！」

な「そうだよな。すずかちゃんだつてあんな大きなネコさんは飼えないだろうし…よし、それじゃ「ギャン！」ふえっ!？」

早く封印するためセットアップしようとした時、音が鳴ってネコさんに何かがぶつかった

な「な、何なの!？」

レ『マスター、後ろです!』

レイジングハートに言われて振り向くと、少し離れた木の上に黒い服を着た女の子が立っていたの…

S I D E : な の は O U T

S I D E : フェイト

いつも通りだと思ってた

母さんに頼まれてロストログアを集める

管理局の魔導師と会っても倒せばいい

そう思って動いてきた

けど…今、私の目の前にいる魔導師は…

「フ」(管理局の魔導師じゃなさそう…。それに…私と同年ぐらい…)」

…何でだろう…、さっきから戦って感じる…この子は何かが違う…そんな気がする…

けど、躊躇ってなんかいられない

早くロストログアを集めて母さんを喜ばせるんだ！

バ『デバイスモード』

そのためにも、これで終わらせる！

バ『フォトンランサー、ゲットセット』

向こうも遠距離攻撃魔法の準備をしたみたい

けど…甘い！

ニヤ〜

ネコに気を取られてスキが出来た

同時に私はフォトンランサーのチャージに入る

フ「……………ごめんね」

バ『ファイア』

放ったフォトンランサーは真っ直ぐ魔導師の女の子目掛けて飛ぶ

気づいたみたいだけど、もう遅い

ドオオオオオオン！！！！

フォトンランサーが命中して辺りが眩しく光る

確認はできないけどたぶん当たった

そう思ってロストロギアを発動させているネコの方にいこうとした

？「ふう〜、何とか間に合ったな」

！？　今まで聞いたことのない声が煙のむこうから聞こえてきた

煙がだんだん晴れていくと一瞬丸い何かが見えた気がしたけど、

すぐに消えてしまった

そして煙が晴れた場所ないたのは…

フ「……………??」

なぜか、知らないキャラクターのお面をつけた男の子だった…

S I D E : フェイト O U T

S I D E : 直樹

さて、すずかの家に着いたはいいけど…

直「どうしようか…」

ブ「マスター、どうかしましたか?」

直「いやさ、このまま行くとして確実に2人にオレ見られちゃうだろ? そしたら格好どうしようかになって…」

ブ「私服ではなのはさんにわかってしまうし、かといってバリアジャケットは少し仰々しい、ということですね」

直「まさにその通り」

ミラールツZはさすがに派手すぎて今使うようなモンじゃないかな
らな……

ブ『ならば、デザインを変えますか？』

直「…え？バリアジャケットって1度登録したらそのまんまなん
じゃ……」

ブ『私の場合、マスターのイメージを読み取って動いてますので、
基本はミラールツZですがそこから少しなら変えることもできます』

なるほど…ミラールツZのアレンジした形ならオツケーってこと
だな

ブ『イメージが決まったらそれを思い浮かべながらいつも通りセ
ットアップしてください』

直「……………よし、行くぞ？ バリー、セットアップ！」

光に包まれて見えてきたバリアジャケットは確かにオレが思った
形に変わっていた

下半身は元から履いていた黒の半ズボンで足からふくらはぎまで
をミラールツZの足パーツが覆っている

上半身は銀色のアンダーシャツに黒色のベスト、手には銀色のグ
ローブをつけている

腰にはミラールツZの時と同じように剣になったバリーがついて
いる

直「こんなもんだろ」

ブ『マスター、顔を隠していませんが』

直「大丈夫大丈夫。顔には…」

オレはそう言いながら四次元ポケットにてを突っ込む

直「……………！ あった！これをつけるから」

取り出したのは…

ブ『お面…ですか？』

お面、それも「忍者ハットリくん」のお面

顔隠すならこれでしょ！友 党作って世界大統領になったあの人も被ってたし

それから急いで庭を抜けて行くと大きくなったネコなのは、フ
エイトを見つける

もうお互いディバインバスターとフォトンランサーの発射体勢に
なってる！

くそっ！急がなきゃ！

あと少しで着くというときにフェイトがフォトンランサーを放った
チツ、これを止めなきゃターニングポイントにならないんだよ！

直「マ・セシルド！」

オレがかざした手の先に盾の術、マ・セシルドが現れフォトンランサーを受け止めた

直「ふう〜、何とか間に合ったな」

な「だ、誰ですか？」

直「（少し声低めにして喋っておくか）…ゴホン、敢えて名乗るならこないだ助っ人した者だ」

な「！ あの時の助っ人さん！？ また助っ人しに来たんですか？」

なのはに答える前にフェイトの方を確認すると、警戒してバルディッシュを構えながらこつちを見ている

あの距離なら充分いけるな…

直「…：悪いが、今日は助っ人は出来ない」

ユ「…：まさか、あなたはあの子の仲間？」

直「…いや、オレは…中立さ！」

オレが言い終わると同時に辺りの地面が碁盤の目の形に光る

な・フ「「!?!」」

直「七ツ星神器、旅人 ガリバー x2!」

発動させるとなのはとフェイトが立っていた正方形から0.5秒で箱が出来上がり、2人を閉じ込める

直「よし、今のうちに…バリー、封印するぞ!」

ブ「了解です」

オレは巨大ネコの隣に立つ

どうやらフォトンランサーで気絶してるみたいだ

直「（良かった）、もし起きてたらネコ団子、なんて笑ってられる状況じゃなくなるからな…」

オレはバリーを鞘から抜いてネコの前の地面に突き立て、そのまま魔力を込める

すると、ネコを囲むように地面に光の輪が浮かぶ

直「ハッ!」

サークルが出来たところでさらに魔力を込める

すると、サークルから中心のネコに向かって光が流れていき、だんだんとネコを包んでいく

やがてネコの体からジュエルシードが浮かんでくる

直「ジュエルシードシリアル14、封印！」

ジュエルシードは光に包まれネコはどんどん小さくなっていく

ブ「封印成功です。回収します」

ジュエルシードはそのままバリーのコアに吸い込まれていった

直「よし終わり！んじゃ、旅人 ガリバー 解除」

2人を閉じ込めていた旅人 ガリバー が無くなり、2人が出てくる

な「ふう、やっと出れた。あれ？ネコさんは？」

ユ「あの人がジュエルシードを封印したみたいだね」

あれ？ユーノの声が聞こえてこなかったと思ったらなのはと一緒に入ってたのか…

カチャ…

直「ん？」

何か音が聞こえて振り返ってみると、バルディッシュをこちらに

向けたフェイトがいた

フ「ジュエルシードを渡して」

直「イヤだ、と言ったら？」

フ「……………力づくにでも渡してもらおう」

直「…なら、ゲームをしよう。今から10分の間にオレに一撃でも食らわせたならジュエルシードは君にあげよう。但し、オレが10分逃げ切った場合、1つ君に言うことを聞いてもらう…さあどうする？」

フ「…やります」

直「じゃあ、ゲームスタートだ」

フ「バルディッシュ！」

バ「サイズモード、セットアップ。…ソニックムーブ」

バルディッシュをサイズモードにし構えた瞬間、間髪入れずにソニックムーブで高速移動に入った

直「（9才でこの速さは称賛に値するな…けど）」

ガキインー！！

フ「！？」

直「オレにはこの程度の速さでは通用しない」

真後ろから切りかかってきたフェイトのバルディッシュを振り向きもせずにバリーで受け止める

直「…こっちの番だ」

フ「！バルディッシュ！」

バ「ソニックムーブ」

逃げたってそうはいかない…答えを出す者 アンサートーカー
発動！

直「…そこだ！一ツ星神器、鉄 クロガネ！」

魔力を抑えて発動させたため、少し小さくなったドッジボール大の鉄 クロガネ が飛んでいく

その先には…

フ「えっ！？ キヤアアッ！」

ソニックムーブで移動したフェイトがちょうど通り、鉄 クロガネ はフェイトの足元をめぐりバランスを崩させる

直「まだまだ！鉄！鉄！鉄！」

そのままオレはフェイトに動くスキを与えず、鉄を当てていく

そして…

直「あと1分だぞ〜」

フ「ハア…ハア…」

フェイトはもう立つ体力も無いくらいにへばっている

それにしても…いくらフェイトのためとはいえ、今のオレ完全に悪役じゃん！

フェイトファンに殺されちゃうって？

その時…

な「デイバイ〜ンバスター！！」

直「！ 何っ!?!」

…と言つのは口だけで予想通りなのはが攻撃を仕掛けてきてくれた

直「マ・セシルド！」

向かってくるデイバインバスターをマ・セシルドで受け止め相殺する

直「…何のマネだ？ 高町 なのは」

な「いくらなんでもそれはやり過ぎなの！弱いものいじめにしか見えない！それ以上やるなら今からは私も戦います！」

フ「……………」

直「心配しなくても…『マスター、10分経ちました』…もう時間切れだ。サイフォジオ!」

オレは見た目は剣である回復魔法のサイフォジオを出し、フェイトに刺す

な「!! 何してるんですか!?!」

直「よく見る」

な「えっ?!?!? ケガが直っていく!」

サイフォジオが消えたあとすぐにフェイトはふらつきながら立ち上がる

直「さて、約束通り1つ言うことを聞いてもらおうか」

フ「…何をすればいいの?」

直「簡単なことだ…そこにいるのはとお互いに自己紹介してくれ」

な・フ「?!?!?」

フ「そんなことでいいの?」

直「ああ、それに君も気になってたんじゃないか? なのはのこ」と

フ「……………」

な「…それじゃあ、私からしようか？ 私は高町なのは。こっちはレイジングハートなの」

フ「…フェイト…フェイト…テストロッサ。こっちは相棒のバル
ディッシュ」

な「そうなんだ、よろしくね？ フェイトちゃん」

フ「……………」

フェイトは無言のままなのはに背を向けて歩いていく

そして…

フ「次は必ずジュエルシードをもらいます」

そう言ってフェイトは空に飛んでいった

直「それじゃオレも目的は果たしたしそろそろ…」
な「待ってほしいの…助っ人さん、少し私と“お話”しませんか？」

直「……………？」

マズイマズイマズイ… O H A N A S H Iはイヤだって…？

しょうがない…」は…

直「あぁーっ！…あんなところにジュエルシードがっ！」

な「えっ！どいどいっ？」

今だ！

直「どこでもドア！」

出すと同時に扉をくぐって何とか逃げ出すことに成功した

直「よし、取り敢えずやりたかったことは出来たし、すずかたちのところに行くか」

オレはバリアジャケットを解除して、すずかの家の門をくぐった

・
・
・

それから数分後、すずかたちの前にネコ団子が出来ていたことは言うまでもなかった…

SIDE：直樹

OUT

SIDE:なのは

また助っ人さんとお話できなかったの…

な「ユ一ノくん、助っ人さんってどんな人なんだろ？」

ユ「どんな人かはわからないけど、あの人はボクやなのは、それにあのフェイトって子より何倍も強いってことはわかるよ」

な「そっか…」

次に会った時こそ、絶対お話するの！

…そろそろすずかちゃんたちのところに着くかな？

森を抜けて、すずかちゃんたちの方を見てみると…

すずかちゃんとアリサちゃんと…ネコ団子？

な「あっ！直樹くん来たんだ、急がないと！」

取り敢えず、今は助っ人さんよりも直樹くんが先なの！

S I D E : : なのは O U T

S I D E : : ?

? 「ヒハハハッ! やつぱりフェイトのヤツに監視カメラを一機
ついていかせて正解だったな。おかげでまたイレギュラーの情報が
集まった: “あの方” も喜ぶだろうよ。: もっと楽しませてくれよ
? イレギュラー:」

S I D E : : ? O U T

第十話 ターニングポイント（後書き）

次回は温泉での話を書きます！！

第十一話 海鳴温泉 前編（前書き）

今回はこの小説初の前後編！

理由は……やってみたかったからです！

前後編に憧れてたんです！

……ふう……

それでは、第十一話が始まります！

感想も待ってます！

第十一話 海鳴温泉 前編

S I D E : 直樹

5月の朝は時々寒かったりする

今日なんかまさにそれだろう…

そんな朝、それもまだ太陽も昇り始めたころオレは木刀を持って
高町家の道場にいた

ただし、1人でじゃない

オレの前方数歩先には…同じく木刀を持った土郎さんがいた

土「さて直樹：そろそろ一度今まで教えたことの総復習をしたい
と思うんだ。何をすればいいか：わかっているな？」

直「もちろんです。…土郎さんとの真剣勝負、ですよね？」

実は今まで土郎さんとは1度も勝負をしたことが無い

土郎さんには剣術における体の使い方や剣の型を教えてもらった
だけで、実際の実戦形式の稽古は恭也さんとやっていた

なんでも、「僕と直樹が闘うのはまだ早い。もう少し基礎が完成してからだ」、「らしい

そして今、土郎さんは「今までの総復習」って言った

つまり、「基礎の完成度」をみるってことになる

土「わかっているならいい。それじゃあそろそろ始めようか？制限時間は5分、その間に僕に今まで学んだことの纏めを見せてくれ。今日はみんな温泉に行くんだからあまり無茶はするなよ」

直「わかってますよ……………いきます!!」

オレは木刀を脇構えの構えに構えて、土郎さんへ向かって一気に近づく

そしてそのまま土郎さん目掛け斬り上げる

直「ハアアアアッ!!」

.....

ア「…で、アンタは土郎さんにボコボコにやられてその状態ってわけね」

直「……………そこまでボコボコにはやられてねえよ」

ここは、海鳴温泉に向かっている高町家+ が乗る車の中

ちなみに+ ってのは原作通りにアリサとすずか、それにオレとオレの母さんだ

乗るときに明らかに定員オーバーだと思ったが、土郎さんに桃子さん、母さんの「バレなきや大丈夫」の一言に何も言えなくなつた

座り方は運転席に土郎さん、助手席に桃子さん、2列目に美由希さんと母さん、ピクニックバスケットの中にユーノ、そして3列目にオレとなのは、アリサにすずかとなつていて当然の如く3列目はかなり狭い

冒頭の話に戻すと、アリサが言った「そんな状態」っていうのは、今朝の勝負の際に出来たケガに湿布や絆創膏を貼っていることを指している

ア「そんなにケガしててボコボコじゃなかった、なんて言われても説得力ないわよ！」

直「ケガは大したことないんだよ。この湿布とかはなのが大げさに貼つたやつだからな」

ア「そんなこと言っちゃって。認めちゃいなさいよ」

す「もう〜アリサちゃん！別にどっちだっていいじゃない！なのはちゃんもそう思うよね？」

な「……………」

す「なのはちゃん？」

すずかが呼びかけるがなのはから返事は帰って来ない

ちなみにオレたちの座っている順番は進行方向右からオレ、なのは、すずか、アリサになっている

それにしてもなのはの奴、ユーノの念波で話してるのか？

……………それにしても、なんか顔がうつすらニヤけてるように見えるのは気のせいか？

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : なのは

今日は全国的に連休、ゴールデンウィークなの！

だから、私たち高町家、それに月村家にアリサちゃんただけけど
バニングス家、直樹くんと玲子さんの有沢家のなんと4家族は今温
泉に向かっているの！

けどそんなことより今は…… / / /

ギユウウウウ

あつ、また / / / 車の後部座席にいくら子供とはいえ、小学
3年生が4人も座れば当然ギユウギユウになるの

そして私の隣には直樹くん……

だから……

ギユウウウウ

はう / / / また密着しちゃった……

肩や腕が当たってるだけだけど、それだけでもすごくドキドキす
るの / / /

顔に出てないかな……

SIDE : なのは OUT

SIDE：直樹

ここ、海鳴温泉は原作でも少し話していたが本当に高町家から1時間ほどの距離だった

まあ、よっぽど変に変わらない限りフェイトたちが本格的に動くのは夜だからな…

今はとりあえず遊んでおくか

・ ・ ・ ・ ・

ところ変わってここは温泉の男湯女湯に別れる入り口

士郎さんと桃子さんは後から入るらしく、どこかに行っている

恭也さんとすずかのお姉さんであり恭也さんの恋人でもある忍さん、月村家のメイドのノエルさんとフアリンさんに美由希さん、そしてオレの母さんはもうそれぞれ男湯女湯に入っていた

つまり、ここにはオレを含めた子供4人がまだいた

何故か？ それは…「キュ〜〜〜〜！！」…まあそういうことだ…

な「ユーノくん、一緒に入るうよ〜」

ユ「キユキユ！（ボクは男湯に入るからいいよ〜！）」

ユーノがなのはの手から逃げようとジタバタしている

直「（…このままじゃいつまでたっても風呂に入れなないじゃん…。しょうがないから助け船でも出すか…） なのは、ユーノも一応オスなんだしオレが男湯に連れていくぞ？」

な「ええ〜っ！」

直「いいだろ？こっちはオレと恭也さんだけで少ないんだからさ。んじゃまた後でな」

無理矢理話を切り上げオレは男湯の暖簾をくぐった

脱衣場には恭也さんはいなかった

直「（もう先に入ったのか……そうだ！）」

とりあえずユーノを弄ってみようと思ったオレ

直「なあ、ユーノ。こっちに来て良かったな」

ユ「キユ！」

直「でもさ、危なかったよな〜。例えば、ユーノが実はアニメみたいに真の姿は人間です、みたいなやつだとするだろ？」

ユ「キュ!? (ドキッ)」

直「そしたらどうだよ。フェレットの姿だから裸なのはたちに抱えられて、そのまま混浴…。もし後で人間だったことがバレたりしたら変態扱いされてたよな。まっ、あくまでもオレの妄想だからな。そんなわけないか。なっ、ユーノ！」

ユ「キ、キュ… (ドキドキドキドキ)」

さて、服も脱ぎ終わったしユーノも弄り終わったし、入りますか！

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : 士郎

僕は今、桃子と旅館の庭園にある池のほとりを歩いていた。池に流れ込む水のせせらぎ、時折聞こえてくる鳥の鳴き声、そよ風にざわめく木々…。まさに、平和を感じれる一時だ

桃「……………平和ね」

！まさか桃子も同じことを考えていたのか…

士「そうだな…」

桃「…もう、あれから8年もたつのよね」

士「あの頃はいろいろと迷惑をかけちゃったな」

桃「いいのよ　あなたがちゃんと元気に生きていて、恭也や美由希、なのは、それに直樹さんと玲ちゃん。私はみんながいるだけで今とっても幸せなんだから……それより…」

士「直樹のことだろ？」

桃「ええ…しつこいかもしれないけどもう1度聞かせて…本当に直樹くんじゃないとダメなの？」

士「…直樹は“あの人”に選ばれてしまった。僕たちが出ることは、直樹に協力することしかない…悔しいことにね…」

それを聞き、桃子は俯く

やはり予想通りか…

けど悲しんではいられない

“アイツら”はもう活動を始めているはずだ…

何としても直樹を間に合わせないといけないんだ！

S
I
D
E
:
士
郎

O
U
T

第十一話 海鳴温泉 前編（後書き）

後編は近日中に投稿したいと思います！

第十二話 海鳴温泉 後編（前書き）

今回、オリジナル技が登場します

けど、あまり出てくるわけじゃないんですが…

とりあえず、第十一話後編、始まります！

第十二話 海鳴温泉 後編

SIDE：直樹

直「ふう〜…なかなかいい温泉だったな、ユーノ」

ユ「キュッ！」

温泉から上がったオレは、ユーノと一緒に入り口近くの待合室にいた

直「…にしても…女の風呂は長い、ってこういう時に改めて実感するな〜」

オレが出てからもうすぐ30分たつ

オレが入ってた時間を足すとなのはたちはもう50分も入っている

入りすぎだろ…？

なんて思っていると、ようやくなのはたちが出てくる

3人とも髪が濡れているからか、髪をくくってない

な「直樹くん、ごめ〜ん！ 待たせちゃったよね？」

直「気にするなって。それよりさっさと移動しようぜ……っと、どこに行くのか決めてるのか？」

す「一応この旅館を探検してみようか、ってことにしてるんだ」

ア「ていうことだからさっさと行きましょ！」

直「はいよ…あっ！なのは、ほれユーノ」

オレはユーノを右手の手のひらに乗せてなのはに差し出す

な「ありがとう、直樹くん！ユーノくん、おいで？」

ユ「キュツ！」

ユーノはなのはの腕を伝ってなのはの肩に上がる

ア「じゃあ行くわよ！」

・
・
・
・
・

それからいろんなところを回り、次に卓球コーナーを見に行くことになり、オレたちは庭を一望出来る通路を歩いていた

直「（…って、ここは…）」

？「ハア〜イ！オチビちゃんたち！」

思い出した時にはもう遅く、ここでまた原作と会合することになった

そう、フェイトの使い魔であるアルフとの出会いだ

アルフはなのは見つけると近づいてきて話しかける

アル「キミかね？ウチの子にアレしちゃってくれているのは…大して賢そうでもないけどねえ〜」

な「え、えっ…と」

まあ、そりゃ答えようとしても困るよな…

アリ「ちょっと！この子、あなたのこと知らないって言ってますけど？」

アリサが睨み付けながら言い放つ

なのはずかはその後ろで、どうしようか戸惑っていた

オレ？ オレはさらにその後ろでボウ〜と眺めていた

しばらくの間、沈黙が続いたが…

アル「ア〜ハツハツハツ！」

いきなりそれは破られた

アル「いやゝ悪かったねえゝ…知り合いの子に似ててさあ。それじゃあねえゝ」

アルはそのままこっちに向かって歩いて来たが、なのはの横を通り過ぎる時に…

アル「…今はただの様子見だけだね、子供がこれ以上手を出さんじゃないよ？…あんまりしつこいとガブツ！つといくからね！」

な・ユ「「!?!?」「」

なのはは驚いてアルフを振り向く

…けど、いきなりガブツ！つといくなんて言われてもなあゝ…

アルフはそのまま向こうに去っていく

まあこれで原作通り夜になのはとフェイトは会うな…

アリ「直樹ゝ！早く行くわよゝ」

直「ゴメンゴメン…すぐに行く」

とりあえず、夜までは遊んでおくか…

SIDE…直樹 OUT

SIDE：士郎

今の時刻はだいたい夕方の5時頃

西日が射し込む宿泊部屋の椅子に僕は1人腰かけていた

他のみんなは夕御飯前に卓球をしにいく、と言って出ていった

士「（…こうして夕日を見ていると、“あの時”のことばかり思い出してしまっな…）」

もしあそこでああしていれば…

後悔の念がいつまでもつきまとう

士「迷っても…もう遅いんだけどな…」

その時、部屋のふすまが開き恭也が入ってきた

士「どうしたんだ、恭也。卓球に行ってたんじゃない…」

恭「直樹とすずかちゃんの勝負がいつまでたっても続いててね、父さんに聞きたかったこともあったし戻って来たんだ」

士「聞きたいこと？」

恭「今朝の父さんと直樹の勝負、どうなったのかまだ聞いてなかったからさ…」

…：そついえば朝はあれから泊まりの用意やら何やらで恭也に伝えるヒマがなかったな…

士「そつだな…結果から言えば僕の勝ちだ。…けど、想像以上の収穫もあった」

恭「何があつたんだ？父さん」

士「…あれは…」

・
・
・
・
・

さかのぼること、約半日

S I D E : 直樹 (過去)

オレは士郎さんから3メートル離れた場所に膝をついていた

クソッ、まだこんなにレベルの差があるなんて…

士「どうした直樹…まだ1分半残っているけど、ギブアップか？」

直「っ！ そんなわけ…ない！」

オレは右足を立て、左足は膝をついたまま、木刀を刀でいう鞘をさしているはずの腰の左側で帯刀の状態で構える

直「（こんな型、習ってないけど…これでいくしかない！）ハアアアアアッ！！」

オレは今出せる最速で土郎さんに突っ込んでいく

S I D E : 直樹（過去） O U T

S I D E : 土郎（過去）

まあ、9才でここまで出来れば上出来か…

何度かいい攻撃もあつたし、もう少し鍛えれば…

直「ハアアアアッ！」

土「！？（まだ動けるのか？ いやそれより…その構えは！）」

直「ラアアアッ！」

高速で振るわれる直樹の木刀

避けている時間は無く、僕も木刀で受け止めようと構える

しかし、木刀は僕の木刀の手前の空を切り、直樹はそのまま糸が切れた人形のようにバタリと倒れる

士「直樹っ！」

焦って近づいてみると…

直「…すう…すう…」

ね、寝てるのか…疲れたんだな

…それにしても、今は…

S I D E…士郎（過去）

O U T

• • • • •

恭「…父さん、オレの思い違いかもしれないけど話に出てきた直

樹の技つて……“空牙”なのか？」

士「そう、直樹は知らずに使ったんだ…御神流剣術居合い、“空牙”をな」

恭「空牙は本来、御神流剣術を少なくとも10年は学ばないと使えるはずのない技だよな…やっぱり形だけで何も切れなかったんだろ？」

士「それなら、ここまで驚かないさ。…直樹の空牙は、僕の木刀を根元から切り落とした…鮮やかな切り口だね」

恭「それってつまり…偶然とはいえ、コントロールされた完全な空牙を直樹は使ったってことか…」

士「そのとおり……この旅行のあとの直樹の修行は全部僕がみることにするよ。…このまま修行を続ければ、僕を余裕で越える最強の剣士が誕生しそうだからな」

……それに、そろそろヤツらも本格的に動き始めるはずだからな…

S I D E : 士 郎 O U T

S I D E : 直 樹

さて、今は大分夜もふけてきた頃……オレの勘が正しければそろそろ……

キイイイイン！！

… 案外当たるもんなんだな… 勘って…

…ん？ なのはとユーノも出ていったみたいだな…

そんじゃオレも、ゆっくり歩いていくか

・ ・ ・

ブ『マスター、ジュエルシードの封印を確認しました。魔力反応から、封印したのはフェイトさんだと思われます』

直『始まったか…んじゃバリー、バリアジャケットセカンドフォームセットアップ』

ブ『了解。スタンバイレディ、セットアップ』

オレは新しく登録した、すずかの家で使ったバリアジャケットを纏い、同じお面をつける

直『…しっかし、こないだも思ったけど…原作ブレイクって思っ

てたよりかなり難しいんだな」

ブ『人間は計算通りには動きませんからね……っ！ マスター、
なのはさんとフェイトさんが戦闘を開始したようです』

直「マジで！？ 少し急がないとな……走るか」

オレは森の中を走り抜けていく

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : なのは

………敗けた………

ジュエルシードの反応のあった場所にいくと、先にこないだの女の子、フェイトちゃんと昼間の女の子の人がいた

女の子はアルフさんって言って、フェイトちゃんの“使い魔”って
いうものみたい

アルフさんが大きな狼に変身したかと思うと、こっちに向かって
飛びかかってきたの

それをユーノくんが結界で受け止めて、2人は魔法でどこかに行っちゃったの…

フ「…なのは、だったよね？ お互いの目的が同じなら、やることは1つ…」

な「…話し合いで何とかなるってこと、ないかな？」

フ「話し合っても、多分無駄。…だから懸けて、お互いのジュエルシールドを1つずつ！」

そう言つとフェイトちゃんはものすごい速いスピード私の後ろに回り込み、斬りかかってきた

そのまま、私とフェイトちゃんの戦いは始まったの…

砲撃魔法では勝つた…

けど、簡単に避けられて…

結果は……敗けた…

ジュエルシールドは1つ取られ、フェイトちゃんはそのまま帰るつとした

な「待って、フェイトちゃん！」

フェイトちゃんは歩くのを止めて、振り返ってくれた

な「本当に…本当に、話し合いは出来ないのかな！」

フ「…きつとあなたは私の理由を聞いても理解出来ない…。話し合うだけじゃ、何も解決しないから」

な「そ、そんなこと…」

?「そんなこと簡単に決めつけたらダメだろ？」

な・フ「「!?!?!」」

こ、この声は…!!

声のした方を振り向くと、そこには思った通り助っ人さんが立っていたの…

S I D E : なのは O U T

S I D E : 直樹

オレの見えている範囲ではなのはとフェイトがいる

遠くではまだユーノとアルフが戦ってるみたいだな…

な「助っ人さん、どうしてここに!？」

直「いやあ、たまたま近くにいたらジュエルシードが発動したからな…様子見に来たってわけ。あと、そろそろその助っ人さん、って呼び方止めてくれ」

な「じゃあどう呼べば？」

直「うくん…んじゃ、ナイト、で頼むわ」

な「ナイトさん、ですね」

まあ呼び方は置いといて…今はフェイトだな

今にも飛びかかって来そうだし…？

直「久しぶりだな」フェイト。元気だったか?…今日はさ、フェイトに言いたいことがあってさ」

フ「……………何？」

直「こないだはゴメン！」

フェイト「!？」

驚いてるみたいだな…まあ無理もないか…

直「こないだはやり過ぎた。すぐに許してもらえとは思ってないけど、とりあえず謝らせてくれ！」

フ「……もういいよ。別にそこまで気にはしてなかったから……」

直「でもな、何かしないと悪いしなあ……」

フ「だから、何もしくなくていいって言って「ゲウウウウ」っ！
！／／／／／」

…今の音って、フェイトからだよね？

直「もしかして、腹減ってるのか？」

フ「っ！／／／／／」

な「（ボソツ）…ナイトさん、女の子にそれは禁句だよ……」

直「ん？　なのは、何か言ったか？」

な「ううん、何でもない」

直「そっか？　でさ、フェイト……」

フ「き、今日は失礼します！／／／　アルフ、帰るよ！」

直「えっ！？　お、おい！」

フェイトはソニックムーブでも使ったんじゃないかというぐらい
のスピードで帰っていく

少し離れたところからアルフ（人型）が急いで追いかけていくの
が見える

直「うん、もう少し話したかったんだけど…」

ブ『仕方ありません。マスターのせいですから』

ま、いつか…またすぐに会えるだろうし

そんじゃ、オレもそろそろ…

な「あっ！ナイトさん、今日こそお話ししてもらおうの！」

直「だが断る！」

オレは前と同じようにどこでもドアを使い、O H A N A S
H I から逃走する

直「もしかして…これってお約束なのか？」

ブ『当然です』

直「納得できねえ！」

悲しい叫びが辺りにこだました…

S
I
D
E
·
直樹

O
U
T

第十三話 意地の張り合いには「用心を」(前書き)

何かもつグダグダですね…？

とりあえず第十三話、始まります

感想、待ってます！

第十三話 意地の張り合いには「用心を

S I D E : 直樹

生徒「起立！礼！」

「」「」ありがとうございます！」「」

ふう〜、これで3時間目も終わりっつと！

ゴールデンウィーク終わってから最初のイベントは街でのジューエルシード発動の事件だし、まあゆっくり小学校生活楽しんでたらしのうち始まるだろ

…なんか忘れてる気がするけど…

ア「いい加減にきなさいよ！！」

…ああ、そういえばこんなイベントあったっけ…

ア「こないだから何話しても上の空でポーツとして」

な「ごめんね、アリサちゃん…」

ア「ごめんじゃない！あたしたちと話してんのがそんなに退屈な

ら1人でのいくらでもブーツとしてなさいよ！行くよ、さすが！」

アリサはプンスカ怒りながら教室を出ていく

す「アリサちゃん……。もう、アリサちゃん言い過ぎだよ……。少し話してくるね？」

な「うん……。今は私が悪かったから……」

す「そんなことないと思うけど……。とりあえず行ってくるね」

そう言っつてすずかも教室を出ていく

な「……………はあ……」

あれから結局なのはとアリサは1度も喋らずに放課後になってしまった

アリサとすずかはお稽古に行くため、別ルートで帰るらしい

直「んじゃ、なのは。オレも翠屋に行くけど一緒に帰るか？」

な「ううん……。今日は1人で帰るから直樹くんは早くお手伝いに行っただげて？」

直「そっか……。じゃあ先に帰るな？」

な「うん、また後でね」

・
・
・
・
・

直「こんにちは〜」

忍「あつ、直樹くんこんにちは」

直「忍さん！来てたんですね」

翠屋に着き、厨房に入るとすでに忍さんと恭也さんが皿洗いをしていた

恭「直樹、今日は忍が手伝ってくれるらしいから帰ってもいいぞ」

直「なるほど…恭也さんは忍さんと2人イチャイチャラブラブしながら皿洗いしたいんですね」

恭「直樹っ！／／／」

忍「そんな…ラブラブなんて…はう／／／…あつ、そういえば直樹くん」

直「はい？」

忍「さつき恭也にも聞いたんだけど…最近のなのはちゃん、何か悩んでるみたいなの…。直樹くんはどう思う？」

直「そうですね…なのはは前から悩みごとや迷いがあるときはいつもあんな感じなんです。だから、心配ないと思いますよ」

忍「フフツ…恭也と同じ意見みたいね。何だか本当の兄弟みたい」

直「そうですね？…それじゃ恭也さん、先に帰っておきます」

恭「ああ。また後で」

オレは翠屋を後にして家に帰る

直「ジュエルシード発動は夜…少し家で休んでおくか」

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : フェイト

フ「だいたいこのあたりだと思うんだけど、大まかな位置しかわからないんだ」

ア「確かにこれだけゴミゴミしていると探すのも一苦労だねえ」

このままじゃ時間がかかり過ぎちゃう…しょうがないか…

フ「ちよつと乱暴だけど、周辺に魔力流を撃ち込んで強制発動させるよ」

ア「あつ、待った！それアタシがやる！」

フ「大丈夫？結構疲れるよ？」

ア「このアタシをいつたい誰の使い魔だと？」

フ「フフツ…じゃあお願い」

ア「はいよ！」

アルフの周りに魔方陣が現れ、そのままアルフは空へ魔力を撃ち込む

魔力は雷になって街へ降り注ぐ

そして…

ゴオオオオ…

フ「見つけた！」

ア「けど、アッチも近くにいるみたいだねえ」

フ「えっ？」

私が街を見るとちょうど結界が広がっているところだった

フ「（なのはが近くに？ だったらもたもたしてられない！）早くかたづけよう。バルディッシュ！」

バ「シーリングフォームセットアップ」

急いで封印しないと！

バルディッシュに魔力をチャージしてジュエルシードへ向け狙いをつける

フ「（！ 桃色の魔力光…なのはも封印しようとしてる！）くっ…ジュエルシードシリアル19、封印！」

同時にバルディッシュから魔力が解き放れ、ジュエルシードへ向かう

魔力の着弾もほぼ同時！……よし！封印完了！

フ「アルフ、行くよ！」

ア「了解！」

SIDE：フェイト OUT

S I D E : : なのは

封印が終わったジュエルシードを回収しようと思つくと、上からアルフさん、そしてフェイトちゃんが来た

フ「悪いけど、そのジュエルシードも私がもらうよ？なのは……」

な「そういう訳にはいかないの！今度こそ私がジュエルシードをもらうの！」

フ「……ずいぶんと意地っ張りなんだね」

な「私に言わせればフェイトちゃんは相当強情だと思つけど？」

フ「強情？（ムカッ）」

な「意地っ張り？（ムカッ）」

ゴトゴトゴトオ……………

「「なら、そっちの方がよっぽど強情（意地っ張り）だって証明してあげる……！ レイジングハート（バルディッシュ）……！」」

レ『フライヤーフィン』

バ『サイズフォーム』

私が飛び上がったあとからフェイトちゃんがすぐに追いかけてくる

バ『ソニックムーブ』

前と同じように移動魔法で後ろを取られた…けど！

な「それはもう通用しないよ！」

レ『フラッシュムーブ』

レイジングハートとユーノくん一緒に作ったこの高速移動魔法

これで対抗できる！

私はフェイトちゃんの後ろに回り、レイジングハートを構える

レ『ディバインシューター』

バ『ディフェンサー』

けど、撃った射撃魔法もフェイトちゃんの防御魔法に防がれる

フ「攻撃が単調だよ、なのは」

な「フェイトちゃんも後ろからの攻撃ばかりのワンパターンだ

ね

な・フ「（ムカツ）」

その時、視界の端にジュエルシードが入る

フ「なら、先にあのジュエルシードを取った方が勝ち、でどつ？」

な「いいよ…それじゃ」

私の言葉と同時に地面近くに浮かぶジュエルシード目掛け私とフ
エイトちゃんは加速する

スタートは同時…… 加速度もほぼ互角……だから……

……ガシイイン!

到着も同時……

私が伸ばしたレイジングハートとバルディッシュがジュエルシードを挟み込みながらぶつかる

ビキビキビキビキ……

レイジングハートとバルディッシュにヒビがたくさん入る

そして……

ドオオオオオンッ!!

な「キャアアアッ!」

フ「うっ…くっ!」

後に小規模の次元震と記録される「それ」は起こった

S I D E : な の は O U T

S I D E : フ エ イ ト

フ「大丈夫?戻って」

バ「イエッサー」

私はバルディッシュを待機状態に戻し、地面に着地する

なのはは反対側に飛ばされたみたいだ…

少し先にはジュエルシードが浮かんでいて、その輝きが強くなっ

ていく

「フ」(まさか、暴走しようとしてる!?! どうやって止めねば...)

」

その時...

直「テオザケル!!」

聞き慣れたあの人の声が聞こえた...

S I D E : フェイト O U T

S I D E : 直樹

今回は少し見学しようと思っていた

理由はここまでの介入で原作とどれくらい変わってしまったのか
確かめるためだ...

しかし...

「「なら、そっちの方がよっぽど強情(意地っ張り)だって証明
してあげる!!! レイジングハート(バルディッシュ)!!!」」

変わりすぎだろ…？

早くに顔馴染みにさせたせいかな？

2人ともだいぶ好戦的だなあ……………つて！？

ドオオオオオンッ！！

結果は変わらないのか…

直「バリー、あれはどうすれば収まる？」

ブ「そうですね…おそらくあの魔力の奔流が止まった後、もう1度暴走しようとするはずですよ。その時にマスターが大きな魔力をぶつけて相殺すればいいかと」

直「なるほど…力には力、つてか」

オレはジュエルシードのある場所へ急ぐ

ブ「マスター、もうすぐ撃ち込むのに理想的な時間ですよ」

直「大丈夫だって。もう肉眼で確認してるから」

ビルの上を走ってきた勢いそのままオレはジュエルシードの真上に飛び下りる

直「よし、いくぞ……………テオザケル！！」

かざした右手から巨大な雷の術、テオザケルが放たれ暴走しようとしていたジュエルシードに命中させる

直「バリー！あとどれくらい当てればいい？」

ブ「あと3秒…2…1…0！もう止めて大丈夫です！」

テオザケルを止めると、再び安定した状態になったジュエルシードが浮かんでいた

直「ハツ星神器、波花 ナミハナ！」

オレは近くにあつた電信柱に自在に曲げれる鞭の神器、波花 ナミハナ を巻きつけ落下の勢いを殺す

直「よっと…」

その後波花 ナミハナ を消し、無事に地面に着地する

さすがに何もせずに地面にドシンって降りたら痛いしな…

すると、降りたのがジュエルシードの近くだったからかフェイトを始めなのは、ユーノ、アルフが集まってくる

ア「フェイト！大丈夫かい！？」

フ「大丈夫だよ、アルフ。それより…」

フェイトはアルフと一緒にこちらを見つめる

な「ナイトさん…」

なのはとユーノもこっちを見る

すると…

フ・な「ナイト(さん)、そのジュエルシードをこっちに渡してほしい(んだ)(の)…えっ?」

2人同時に言うなよ…?

このまま逃げたら…いや、めんどくさいことにしかならないな…

なら…

直「バリー、頼む」

ブ『わかりました。プットアウト』

オレの合図でバリーから前に手に入れたジュエルシードが出てくる

直「これでジュエルシードが2つ…1人1つずつだ。2つ取ろうとした方はオレが制裁を加えると思っておけ」

な「…わかったの」

フ「わかった」

そうやってなのはとフェイトは1つずつジュエルシードを取る

レイジングハートとバルディッシュは傷ついているからか2人もポケットに入れた

原作なら、これで終わりのはずだった…

けど…この世界では終わりじゃなかった…

アッ！！ フェイト！危ない！」

突然、アルフがフェイトを抱えて横に跳ぶ

次の瞬間フェイトがいた場所に魔力弾が着弾する

直・な・ユ・フ「！！！！？」

ブ「マスター！今攻撃のきた方角に複数の熱源を感知、今も増えています！」

何なんだこの展開！？

ブ「熱源、速度を上げ接近中！まもなく目視できる距離に到達！」

バリーがそう言うってから数秒後、「ソレら」はやって来た…

直「何だ、あれは…」

その姿は…まさにロボットだった

直「（て言うかあんな形のロボット、スター オーズのドロイドにいなかったっけ？）」

そんな感じのロボットがこっち目掛け2足歩行で、尚且つ大軍で迫ってくる

その数、目測で約100体

フ「アルフ、あれってやっぱり…」

ア「ああ、アイツのアレだよ…。でも何でフェイトを攻撃したんだ!？」

直「？ フェイト、あれが何なのか知ってるのか？」

フ「あれは…ドール」

直「ドール？」

何だソレ？ 原作で聞いたことないぞ…

ア「そうさ…機巧人形 ドール って言ってるね…フェイトが本当に住んでる家に今居候してるヤツの召喚機なんだ」

直「…フェイトを攻撃したんだ…、味方ってことはないだろ。…

よし、なのは、フェイト、ユーノ、アルフ…お前らは下がってる。
コイツらはオレ1人でやる」

「「「「「!?」」」」」

な「危ないですよ！私も…」

直「その状態のデバイスで、か？」

レイジングハートとバルディッシュ、両方ともさつき受けたダメージを回復しているため使うのは無理だ

フ「心配すんなって！すぐに片付くから…」

そう言っただけはロボットの方向を向き、右手にバリーを持つ

直「いくぞバリー…モード2だ」

ブ「了解。モード2、スサノオ…ローディング…」
すると、バリーはオレンジ色の魔力光に包まれ徐々に形を変えていく

そして…

ブ「…コンプリート」

光が収まり、バリーは刀身が80センチ程の1振りの日本刀に姿を変えた

間髪入れず、オレは機巧人形 ドール へ突っ込んでいく

直「ハアアアアッ！」

間合いに捕らえた瞬間に斬り裂く

斬！斬！斬！斬！斬！

斬り上げ、斬り下げ、横一閃、突き……

とにかく斬りまくる

そして…

な「す…すごい」

ア「ウ、ウソだろ？機巧人形 ドール 100体を1分で全滅だ
なんて…」

フ「…アルフ、帰るよ」

ア「あのナイトとかっていうヤツには何も言わなくていいのかい
？」

フ「明日は母さんのところに報告に行かないといけないから…そろそろ帰らないと。……なのは」

な「な、何？フェイトちゃん」

フ「ナイトにありがとう、って伝えといてくれないかな？」

な「…うん！ちゃんと伝えておくよ」

フ「…ありがとう」

フェイトとアルフはそのまま帰っていく

直「あれ？フェイトとアルフは？」

な「あつ、ナイトさん。フェイトちゃんたちは用事があるみたいで先に帰りました。ありがとう、って言っていましたよ…私からも言わせてください、さっきはありがとうございました！」

直「気にするなつて。それより、もうだいぶ遅いからな…家の人
が心配してるんじゃないか？」

な「にゃ！？そ、それは困るかな？じゃあナイトさん、さようなら！」

なのはとユーノも走って帰っていく

直「んじゃ、オレたちも帰るか」

ブ『はい』

……にしても、今日出てきた機巧人形 ドール

それにアルフの言っていたフェイトの本当の家、時の庭園に居候
しているというヤツ

明らかに原作とズレが生じている

どづいづいとだー!?

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : ?

オレは今、部屋で寝ているのに飽き、散歩しているところだ

しかし、ココはムダに広すぎんだよな…

? 「ちょっといいかしら?」

すると、後ろから今住んでる場所の主でもあるアイツが声をかけた
てきた

? 「何か用か?」

? 「…さつき偵察用のカメラの映像を見たわ。あなたの機巧人形
ドール が映っていたんだけど?」

? 「ああ、あれか! ヒマだったんでな…遊びで送り込んだんだよ。
まあ見事に全滅だが…」

？「私が言いたいのは勝手に送り込んだことじゃない。映像を見てたら、機巧人形 ドール がフェイトを攻撃していたわ。どういうことなの！」

おつおつ、殺気を出しちゃって…

？「ちょっとカツを入れてやるうと思ってな」

？「もしま当たってたらどうするの！？」

？「別にいいだろ？忘れたのか？アイツは“人形”だ…アンタの可愛い可愛い娘を真似た、“人形”だ！そうだろ？プレシア…テスタロッサ！」

プー！？　そ、そうよ…私の娘はアリシアだけ。フ、フェイトは…人形よ」

？「わかってればいいんだよ…んじやな」

まったく…本当にめんどくせえ“任務”だな…

S I D E : ? O U T

S I D E : プレシア

…そうよ、私の娘はアリシアだけ…フェイトは…

フ『お母さん！これ、キレイに描けたよ！わたしとお母さんとア
ルフ！』

プ「…っ…フェイト…ゴメンね…」

私の目からはいつの間にか、涙が溢れていた…

SIDEプレシア OUT

第十三話 意地の張り合いにはご用心を（後書き）

更新した時は「次はいよいよ“彼”の登場です！」って書いてたんですが、訂正します

次は、大魔導師さんと直樹の話し合いです！

勝手に変えてすみません！

第十四話 母の想い（前書き）

今回は少し短めです

そして、意味の取りにくいところがいくつか…？

とりあえず第十四話、始まります！

感想待ってます！

第十四話 母の想い

SIDE：フェイト

フ「お土産はこれでよし、と…」

あの事件から一夜明けて、私とアルフは母さんがいる時の庭園へ
いくため今住んでいるマンションの屋上にいた

ちなみにお土産はケーキだ

ア「甘いお菓子か…こんなものあの人は喜ぶのかねえ」

フ「わかんないけど、こっぴうのは気持ちだから」

ア「ふう〜ん」

フ「次元転移…次元座標、876C 4419 3312 D6

99 3583 A1460 779 F3125…開け、誘いの

扉…時の庭園、テスタロツサの主の元へ」

転移魔法の術式が完成して私たちは転送され始める

今いくよ…母さん…

~~~~~

しかし、フェイトたちより先に時の庭園へ1人来ていたヤツがいた

~~~~~

S I D E : フェイト O U T

S I D E : 直樹

な『フェイトちゃんたちは用事があるみたいで先に帰りました』

用事…用事…何かフェイト関連のイベントってあったっけ？

……………ああっ！！

時の庭園に行くんだった！

そっだよそっだよ…ここも大事な原作ブレイクに必要なイベント
じゃん！

危つくスルーするところだった…

直「バリー、お前って転移魔法って使えたっけ？」

ブ『すいません、マスター。残念ながら…』

直「まあしょうがないか…。なら…」

そう言ってオレは四次元ポケットから毎度お馴染みのどこでもドアを出す

直「答えを出す者 アンサートーカー の能力で移動範囲を次元世界にまで広げたコレの試運転も兼ねてこれでいくか」

…っとその前に…

直「コピーロボット！」

ボタンを押した人そっくりに変身するひみつ道具、コピーロボットを取り出す

直「ポチっとな」

コピーロボットはみるみる大きくなり、オレそっくりになる

直「ていう訳で午前中学校よろしく！」

「直」おっ、任された！」

んじゃ、いざ時の庭園へ！

オレはどこでもドアのドアをくぐった

・
・
・

・

直「…着いたはいいけど…ここだよ？」

何か寝室みたいな雰囲気だけど…

ブ『とりあえずこの部屋から出てみましょう』

直「そうだな、フェイトが会う前にプレシアさんに会っておきた
…ん？何だこれ？」

部屋の中央にあった机の上に1冊の本が乗っていた

直「タイトルは…“思い出”？」

オレは好奇心に負け、ページを開いてしまう

直「…これは…！？ ちょっと待てよ？おかしくないか!？」

そこに載っていたのは…

・

直「ここはどうだ!」

ブ『…違いますね』

オレは今、プレシアさんがいるであろう大広間を探してさまよう

ている最中…

さっき開けた扉は12部屋目だ…

クソツ…時間がかかる…早くしないとフェイトが来ちゃう

ブ『あの〜マスター？ 答えを出す者 アンサートーカー の力を
を使えばすぐにわかるんじゃない？』

…………… (*)

なんとということでしょう〜

・
・
・

直「…ここだ」

オレはとりあえず開けようと押してみる

しかし、鍵がかかっているのか扉は開かない

しょうがない…

直「とおりぬけフープ！」

…であっという間に通り返けつと！

プ「な、何なの？ あなた！」

直「あっ…え〜っと、はじめましてプレシアさん」

プ「どうして私の名前を？」

直「…とりあえず戦闘の意思はありません。あなたと話がしたいんです…アルハザート、そして…アリシアちゃんのことを」

プ「!? あなた、いったい何者なの？」

プレシアさんは相当驚いている

まあ、無理ないか…

直「簡単に言います。…今やろうとしているジュエルシードを用いたアルハザートへの転移、そしてそこでのアリシアちゃんを蘇生させる計画。高い確率で失敗します」

プ「なっ!? 何を言って「話はまだ終わってません」……………」

直「そしてもう1つ。僕の力を使えばジュエルシードなど必要とせずアリシアちゃんを蘇生させることが出来ます。ただし、この方法には条件がつきますが…」

プ「条件？」

直「…あなたの意思です、プレシアさん。…あなたがフェイトのことをどう思っているか」

プ「!?？」

直「蘇生自体は今すぐにも出来ず。けどその前に聞かせてください。プレシアさん、あなたにとってフェイトは大切な娘なんですか？それとも…アリシアちゃんのコピーでしかない人形なんですか？」

プ「…フ、フェイトは……」

直「あなたの答えは…決まっているはずだ」

オレは四次元ポケットからさっきの部屋で見つけた本を出す

プ「どうしてそれを！」

直「これはお返しします。中は…悪いと思っただんですが見ました…
…答えには十分だと思えるものがありました」

プ「……………」

プ『マスター、魔力反応です。おそらくフェイトさんたちの転移魔法かと』

直「わかった…。僕は海鳴市にいます。答えが決まったなら知らせてください」

そう言って、オレはどこでもドアを出し時の庭園を後にする

SIDE：プレシア

フェイトは娘？人形？

少し前なら簡単に答えたのに…

フ「…母さん？」

プ「！ フェイト、来たのね。それで…ジュエルシードは集まったかしら？」

フ「それが…まだ3つしか…」

プ「……………」

少し前の私ならきつと即答してるわね

フェイトは…

プ「よく頑張ったわ。これからも頑張りなさい」

フ「！ はい！ あっ、母さん、これお土産のケーキです。それじゃまた行ってきますー！」

フェイトは笑顔でそう言い、広間を出ていく

久しぶりに見たあの子の笑顔

そう、やっぱり私は誰に何を言われようかと…

S I D E : プ レ シ ア O U T

第十四話 母の想い（後書き）

次回こそあの“彼”が登場します！

第十五話 我が腕に彼奴を倒す覚えあり（前書き）

タイトルはあまり気にしないでください

僕の好きな漫画のセリフなんで…

…にしても…まさかの2日連続の投稿

自分でもビックリです！

ただ、少し荒い仕上がりになっている気がします

とりあえず第十五話、始まります

第十五話 我が腕に彼奴を倒す覚えあり

SIDE：直樹

時の庭園から戻ったオレは、すぐに学校へ向かった

次のジュエルシードはあの樹のヤツ

今じゃもう当てにならないけど、原作なら発動は夕方

それまでは暇になるから学校に来たんだが…

な「……………」

ア「……………」

す「うう……………」

なのはとアリサは1日たってもあまり態度は改善されてない

すずかは間に挟まれてかなり気まずそうだ…？

正直、近くにいるオレもこの雰囲気には圧されそうだ

…早く夕方にならないかな…（涙）

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : なのは

学校も無事終わり、お稽古に行くアリサちゃんたちと別れて、私と直樹くんはバスに乗って帰ってるところなの

バスがバス停に着いて私たちはバスから降りる

直「なのは、オレちょっと用事があるから先に帰っておいてくれないか？」

な「うう、一緒に帰れないのか…ちょっと残念」

直「悪いな。帰りに何かおいしいお菓子でも買ってかえるからさ」

そう言って、直樹くんは私の頭を撫でる

…はう…／＼、これズルいの…

直樹くんはその後別方向に走っていった

な「…しょうがないか…私も早くかえ」（なのは！）「ふえ！？」

いきなり念波が聞こえてきて、見てみると向こうのほうからユーノくんがこっちに走ってきていたの

それに、ユーノくんの首には…

な「レイジングハート！直ったんだね？良かった」

レ「はい、もう大丈夫です」

もうすっかり良いみたいだね

な「また、一緒に頑張ってくれる？」

レ「もちろんです、マイマスター」

な「…ありがとう、レイジングハート」

本当にいい子だよ、レイジングハートは…

な「ユーノくん、今日はこのままジュエルシード探しに行こうか？」

ユ「いったん帰らなくて大丈夫？」

な「うん、平気だよ。今日はなんだか調子がいいんだ！」

それに、今日は頑張って探せば見つかりそうなんだよね…

・
・

・ ・ ・

それからだいたい1時間後

キイイイイン！！

な「！ ユーノくん！」

ユ「うん、発動した！すぐ近くみたいだ！」

な「急がないと！」

私はユーノくんを肩に乗せて走り出す

発動場所はすぐ近くにあった公園の中みたい

私たちが着いたときには、ジュエルシードはもう樹の中に入って樹は姿を変えようとしていたの…

ユ「なのは、ボクが先に行って結界を張るからなのははセットアップしてから来て！」

そう言ってユーノくんは駆けていく

私も早くしないと！

な「行くよ、レイジングハート！」

レ「スタンバイレディ セットアップ」

セットアップが終わってユーノくんを追いつくともう樹はお化けみたいな格好になっていたの…

レイジングハートを構えて攻撃しようとする、後ろから魔力弾が樹に向かって飛んでいった

けど、魔力弾は樹が張ったバリアに防がれたの…

な「（今の魔力弾は…やっぱり）」

振り向いてみると、後ろには思った通りの人がいた

な「フェイトちゃん！」

S I D E : : な の は O U T

S I D E : : フェイト

ジュエルシードの発動を確認して来てみると一足先になのはが来

ていた

私は牽制のためにフォトンランサーを撃ってみた

けど、それは当たるまえにバリアに止められる

ア「うお、生意気にバリアまで張るのかい」

フ「今までのより強いね」

すると樹が動き出して周りの地面から根が出てきてそれらが暴れだす

なのはは飛行魔法で空に上がったみたいだ

私も負けてられない！

フ「アークセイバー！行くよ、バルディッシュ」

バ「アークセイバー」

構えたバルディッシュから鎌状に魔力刃が出る

フ「ハアアッ！」

その魔力刃をバルディッシュを振ってfrisbeeのように飛ばして攻撃する

魔力刃は根を斬り裂きながら進んで行くけど、本体に届く前にバリアに受け止められる

フ「（これでもダメ…なら次は…）」

そう考えている時だった

ア「フェイト！危ない！」

アルフの叫び声と同時に私の周りを影が覆う

振り向くと…大きな根が迫っていた

フ「（…ダメだ…。避けれない…）」

痛みを覚悟して目をつむった

な「レイジングハート、お願い！」

レ「『デイベインバスター』」

その声に目をあけると、根を桃色の砲撃が吹き飛ばしていた

フ「…何で？」

私は空に浮かんでいるなのはを振り返った

なのははもう1度魔力を溜めている

もう1発撃つみたいだ…

なら、私も！

な「撃ち抜いて！ダイバイン！」

レ「バスター」

フ「撃ち抜け轟雷！」

バ「サンダースマツシャー」

直後、2発の砲撃が樹にぶつかる

バリアで受け止めようとしていたけど、耐えきれずにジュエルシードが中から出てくる

レ「シーリングモード セットアップ」

バ「シーリングフォーム セットアップ」

な「ジュエルシード、シリアル7！」

フ「封印！」

そして、まぶしい光とともにジュエルシードの封印が終わった

SIDE:フェイト OUT

SIDE:なのは

ジュエルシードを封印し終わってフェイトちゃんが空に上がってきた

フ「ジュエルシードには、衝撃を与えたらいけないみたいだ」

な「うん、昨夜みたいなことになったら私のレイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも可哀想だもんね」

でも、だからといってまた戦うのは疲れそうだけどね…

フ「……………どうして？」

な「えっ？」

フ「…どうして、さっき助けてくれたの？」

な「…私ね、甘ったれてるって言われるかも知れないけど…フェイトちゃんとは、ジュエルシードを取り合う敵同士の前に…友達でいたいな、って思ったんだ」

フ「!？」

な「…友達に、なりたいんだ…。ダメかな、フェイトちゃん」

フ「っ！」

やっぱりいきなりこんなこと言ったら驚くよね……

でも、答えは聞きたいな……

フ「……………私は……………」

な「えっ？」

フ「…なのは、私は……………ううん、私“も”…なのはと……………とも「ストップだ!!」「っ!?!」

ふえっ!?!? な、何?

いきなり知らない男の子が私たちの前に現れたの!

…というか……………この人のせいでフェイトちゃんの答えが聞けなかったの……………

あのタイミングで割り込むなんて……………相当なKYなの……………

S I D E : : なのは O U T

SIDE：直樹

ジュエルシードが発動してから、いつも通りにバリアジャケットとお面を付け、発動場所に急ぐ

着いてみると、もうなのはとフェイトがすでに戦っていた

しかし…あの樹、現実で見るとかなりキモい…

なんて思っているうちに、話は進んでいく

…なのはがフェイトを助けるなんて場面あったっけ？

また原作と変わってるな…

ジュエルシードの封印も終わり、これから戦うのかと思いきや…

な「…友達に、なりたいんだ…。ダメかな、フェイトちゃん」

ええっ！っ！！　なのはとフェイトの友達フラグは竜巻の時じゃないのか！？

やっぱり、早いうちから2人を知り合わせた影響なのか？

しかし、オレは知らなかった…

このあとすぐにああなるとは…

フ「…なのは、私は……ううん、私“も”…なのはと…とも「ストップだ!!」「っ!?!」

…えええ〜っ!?!?

ク「ここでの戦闘行動は危険すぎる!」

…えええ〜っ!?!?

ク「時空管理局執務官、クロノ」ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか?」

…えええ〜っ!?!?

ナニあれ!?! クロノ、ダメだろ! 原作以上のKYっ振りだよ!

あそこで口を挟めるなんて…

ア「フェイト! 撤退するよ!」

…っと…、ぼやいているうちに進んでるし…

えっと…原作ならこのあとフェイトがああジュエルシードを取る
うとして……

バンバンッ!

!! ……原作通りクロノがフェイトに攻撃、か…

KYな上に女の子に平気で攻撃か……少し、頭冷やさないと…

直「バリー、スフィア生成」

ブ『了解』

オレの前にオレンジ色のスフィアが浮かぶ

さあて、前に決めていたイナズマイレブンの必殺技使用：今やるか

直「シンポルク！」

オレは幻術系なら最強クラスと言ってもいい術、シンポルクを唱え準備が完了する

直「ほっ！」

オレは軽くジャンプし、右足でスフィアに回転を加える

直「吹き荒れる！」

スフィアには徐々に冷気が集まっていき、スフィアは氷の結晶に覆われる

直「行くぞ！ハアアアアアッ！」

少し間合いを取り、ジャンプ。空中で左回りに2回転回り、最後に右足でシュート！

これが、イナズマイレブンで氷のストライカーと呼ばれた吹雪士郎の必殺技…

直「エターナルブリザード!!」

蹴りだしたスフィアはそのままKYクロノへ向かい…

ク「!? 何なんだ、アレは? クツ…ウワアアツ!」

ジャストミート! そのままクロノは冷気で凍りつく

な「ふえええええっ!」

ア「な、何なんだい!?!」

…とりあえず、なのはたちに説明して、フェイトたちには逃げて
もらっか…

S I D E : 直 樹 O U T

第十五話 我が腕に彼奴を倒す覚えあり（後書き）

次回は、アースラ！

第十六話 時空管理局（前書き）

今回はリンディさんたちのお話

では第十六話、始めます

感想、待ってます！

第十六話 時空管理局

SIDE：直樹

ア「…なあナイト、これってアンタがやったのかい？」

人型に戻ったアルフが氷像になったKY執務官を指差し聞いてくる

直「ああ、オレの技の1つでな…正確に言えば幻術の1種になる」

な「そうなんですか！？ でも…冷たっ！…触れるし冷たいですよ？」

直「そのくらいすごい幻術、って思ってくれたらいいよ…っつと、終わったみたいだな」

振り向くと、ケガを直すためにフェイトにかけていたサイフォジオがちよつと消えたところだった

直「どうだ？フェイト。だいたいのケガは治ったと思うんだが…」

フ「うん。治ったみたい…ありがとう」

直「そうか…さて、今からのことなんだがそろそろコレを解除しないと本当に死んじゃうんだよ。だから解除したいんだけど…」

そう言いながらオレはフェイトとアルフをチラッと見る

ア「…！ ああ、そういうことだね」

フ「どっいっこと？」

ア「つまりね、コレを解除するってことはコイツ、つまり管理局員が出てくるってことになる。だからナイトは、フェイトとアタシはさっさと逃げろ、って言うてるんだよ。そうだろう？」

直「そのとおりだ。今はこれを持って早く行け」

オレは手で隠しながらバルディッシュのコアにさっきのジュエルシードを当て、回収させる

フ「！？ いいの？」

直「気にするな。それよりも早く、な」

フ「…うん。行こう、アルフ」

ア「はいよ！」

フェイトとアルフは少し飛んでいき、転移魔法で消えた

直「…勝手に決めて悪かったな、なのは」

な「いいです。私もフェイトちゃんには捕まって欲しくありません」

直「ありがとな」

それからオレはクロノを凍らせている氷を取り払う

…と言っても、氷はシンポルクの幻だから術を止めるだけで消える

ク「……………っ！…いつたい何が？…黒い魔導師がいない!？」

直「目が覚めたか？」

ク「!？ キミも魔導師なのか？ならさっきの魔法は…」

直「ん？ オレがやったが…何か問題でも？」

ク「当然だ！キミがやったことは公務執行妨害に値する！つまり犯罪なんだぞ！わかって「黙れ」…なっ!？」

直「あれが犯罪だと言うならこちらも言わせてもらう。事情も聞こうとせずいきなり女の子に攻撃するってのは犯罪じゃないのか？それともう1つ、そもそもオレは時空管理局なんていうものを全く知らない」

ク「バカな!？魔導師なら時空管理局を知らないはずがない!」

な「私、知らなかったの」

ク「……………」

直「とりあえずだ、お前じゃ話にならない。もう少し冷静に話せる人はいないのか？」

その時…

？「それなら私が話しましょうか？」

ク「！ かあ…艦長!？」

な「ふえっ!?!? なにこれ!?!？」

空中に通信モニターが開き、女の人が喋りかけてきた

直「（ようやく出てきたか…一応名前聞いとかないとおかしいよな…） アンタは？」

リ「時空管理局提督、それに次元空間航行艦船「アースラ」の艦長でもある、リンディ＝ハラウンと言います。」

直「……ナイトです」

リ「ナイトくん、ね。まあ、偽名だとは思っけど…とりあえずいろいろと聞きたいことがあるから、クロノと一緒にこちらに来てもらえないかしら?その女の子たちも一緒に」

直「…なのは、どうする?。」

な「私は別に構わないよ。ユーノくんは?。」

ユ「ボクも構わないよ」

直「そういう訳だ。さっさと連れて行け」

ク「…ハア…、わかった。すぐに準備する」

・ ・ ・ ・ ・

な「ふええ〜、広い！これが船の中なの？」

ク「そう、次元航行船アースラの艦内だ」

あの公園から転移したオレたちは今、アースラの中を歩いている

アニメでも思ったけど…この船通路暗いよ…

ク「ああ、いつまでもその格好は窮屈だろう。バリアジャケットとデバイスは解除してくれて構わないよ」

な「そっか、そうですね。それじゃ…」

直「オレは遠慮しておく。アンタたちを信用できないんでな」

ク「好きにすればいいさ」

なのははバリアジャケットを解除し終わったみたいだ

…ってことは、あのシーンがついに…

ク「キミも元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

キターーーーーー!!!

ユ「そう言えばそうですね。ずっとこの姿でいたから忘れてました」

そう言うと、ユーノの周りに魔方陣が広がりユーノは光に包まれる

そして…

ユ「ふう、なのはにこの姿見せるのは久しぶりになるのかな？」

ユーノがフェレットから人へと変わった

すると、なのははみるみるうちに震えていく

……………チャージ中？

な「ふえええええっ!？」

ユ「な、なのははどうしたの!?!この姿見るの初めてじゃないよね?」

な「ユーノくん、最初からフェレットだったよぉ!」

ユ「えっ?……………うん…」

……………ポクポクポクポクポク…………… っ休さん!

ユ「あつ！そう言えばそうだったね」

な「だよねだよね！」

ク「…そろそろ行きたいんだがいいか？艦長が待っているんだ」

それからしばらく進み、クロノを先頭に1つのドアをくぐる

ク「艦長、来てもらいました」

リ「お疲れ様、クロノ。さあ、3人ともどうぞ楽にして？」

出た…この無理矢理和風にした部屋…生で見るとやっぱり変だ

・ ・ ・

リ「なるほど、ジュエルシードを発掘したのはあなたなんです
ね」

ユ「それで、ボクが回収しよう」と

リ「立派だわ」

ク「だけど、同時に無謀でもある！」

ユ「ノは激しく否定され落ち込む」

そして話は進み…

リ「これよりロストロギア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

ク「キミたちは今回のことを忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

な「で、でも……」

ク「次元干渉に関わる事件だ。民間人な介入してもらうレベルの話じゃない」

な「でも……！」

リ「まあ急に言われても気持ちの整理もつかないでしょ？今夜1晩ゆっくり考えて、改めてお話をしましょう」

ク「送って行こう。元の場所でもいいね？」

1 通り話を終え、クロノに連れられ部屋をあとにした……オレ以外……

リ「どうしたのかしら？ナイトくん」

直「あなた方はこの事件を「民間人な介入してもらうレベルの話ではない」って言いましたよね？」

リ「？ ええ、言ったわ」

直「オレやなのは、「民間人」ですよね？」

リ「ええ」

直「…だったら、オレたちはもう何もしなくていいはず。…」
1
晩ゆっくり考える」必要がどこにあるんですか？」

リ「！？ それは…」

ここにきてようやくリンディさんに焦りの色が見え始める

直「おそらく、高ランクの魔導師であり純心な子供でもあるのはを味方につけたかった、そんなところですか？」

リ「……………」

直「…悪いんですが、オレはあなたたちには協力できません。少なくとも、今は…」

そう言ってオレは艦長室をあとにした

・
・
・
・
・

その日の夜、

やはり原作通りなのはたちはアースラへ行った…

士郎さんたちは裏山にトレーニングに行っていて、オレはかなりヒマをもて余していたりする

直「…ランニングでも行くか？」

だらけててもしょうがないから、夜のランニングに出ることにした

直「（これからどうするかだな…。オレが関わらなかつたらアースラとなのはは原作通りに動くはずだ。だったら今日から約10日時間が出来るな…どうしよう？）」

なんて考えながら走っていると…

？「あの、すみません」

直「はい？」

後ろから声が聞こえ、振り向くと、フード付きのコートを羽織りフードを被った人が立っていた

直「（…声からして女。けど、走ってきたとき人なんていたっけ？）えつと、どちら様？」

？「その質問に答える前にこちらの質問に答えてください…。あなた、ナイトですよね？」

直「！？…そつだ、と言ったら？」

そつ言いながらオレは手首のバリーに手をかける

？「ハア、やっと見つけた。僅かな魔力をたどるのって疲れるんですよ…」

直「（誰なんだ？）」

すると、その人は被っていたフードを取った

？」「こちらの自己紹介からさせていただきます。私はプレシァ＝テス
タロツサの使い魔、リニスと言います」

S I D E : 直樹 O U T

第十六話 時空管理局（後書き）

次回はほぼオリジナルストーリーで行きます

第十七話 ヒマな時間の過ごし方 前編（前書き）

今回は予告通り、オリジナルストーリーです

…オリジナルって難しいですね…

書いてるうちにどんどんグダグダになっていくし…

とりあえず第十七話、始まります

感想待ってます！

第十七話 ヒマな時間の過ごし方 前編

S I D E : 直樹

リ「こちらの自己紹介からさせていただきます。私はプレシア＝テスタロッサの使い魔、リニスと言います」

……………ええっ!?

リニス!? リニスってフェイトが小さいときに契約が切れて消滅したんじゃない…

直「え〜っと、ちょっと変なこと聞いてもいいか?」

リ「何ですか?」

直「リニスとプレシアの契約ってどんな内容なんだ?」

リ「…おもしろいことを聞くんですね。わかりました、教えてあげます。まあ変わった契約なんですけどね」

直「変わった契約?」

リ「はい。私たちの契約は、「生涯を共にすること」なんです。まあ、これと同じ契約を結んでいるペアがいるんですけどね」

直「…フェイトとアルフ、か？」

リ「はい、あの子たちも本当に仲良くて…。あっ、少し無駄話が多かったみたいですね。では、そろそろ本題に入ります」

リニスが真つ直ぐにオレを見つめてくる

リ「プレシアからあなたに伝言を預かってきました。「答えが決まったので1度こっちに来てほしい」、だそうです。意味はわかりますか？プレシアは言えばわかるって言ってましたが…」

直「ああ、大丈夫だ。行こうと思えばすぐに行けるがどうすればいい？」

リ「ではお願いします。すぐに出発です」

すぐにリニスの足元からオレとリニスを囲むように魔方阵が広がる

リ「行きますよ！」

そして、オレたちは時の庭園へと転移した

・
・
・
・
・

リ「プレシア、ナイトくんを連れてきましたよ」

プ「ありがとうリニス。こっちに通して」

リ「わかりました。さあナイトくん、どうぞ入ってください」

朝に来た時に入った大広間の扉の前で待たされたが、2つ返事ですぐに入れた

直「プレシアさん、ずいぶんと返事が早かったですね」

プ「……………まあね」

リ「プレシア、私は厨房にいますから用ができたら呼んでくださいよ」

そう言ってリニスは大広間から出ていく

直「…じゃあプレシアさん、あなたの答えを聞かせてくれませんか？」

プ「それはいいけど、あなたあのおかしなお面は着けなくてもいいの？」

直「はい、プレシアさんなら大丈夫だと思っっているからこそその行動です。ついでに自己紹介しておきましょうか…僕の名前は有沢直樹と言います。年はフェイトと同じ9才です」

プ「9才…とは思えないわね…まあいいわ。…あなたは今から私が言おうとしている答えはコレでわかっているって言ってたわね。どういづことかしら？説明してくれる？」

そう言いながらプレシアさんが手に取り、渡してきたのはあの「思い出」と書かれた本だった

直「…最初、本だと思って見ましたがそれは違った…この本は、アルバムだった」

開くと、中には綺麗に整理された写真が収められていた

直「最初のほうにあなたと写っているのは多分アリシアちゃんでしょう。成長の記録と言ってもいいくらいにたくさん写真があります。…けど、このページを境にいきなりアリシアちゃんが大きくなっています」

オレが広げたページでは右のアリシアは5才位だが、左になるといきなり大きくなっている

直「…この間に、あの事故があって…フェイトが誕生したんじゃないですか？」

プ「っ!？」

直「それに、ここから先の写真にはアルフも写るようになってますから間違いなくこの子はフェイトです」

プ「……………ええ、あなたの言う通りよ。でも、それと私の考えとどう繋がるのかしら？」

直「簡単ですよ…最初の方のアリシアちゃんと写っているあなたも、つい最近…たぶんここ半年以内に撮られたようなこの最後のページでフェイトと写っているあなたも…どちらも、偽りなく、本当

に幸せそうに笑ってますよ?」

プ「……………」

プレシアさんは目を見開き、息を吐きながら椅子の背もたれに体を預ける

プ「…あの事故でアリシアが死んだとき、私はどうやってでもアリシアを生き返らせようと思ったわ。そして、プロジェクトFATEでフェイトを造った……けどね、アリシアの記憶を持たせていてもあの子はアリシアではなかった。それがわかった時に、私はあきらめた……。もちろん、今やろうとしているアルハザートへ行く計画ももうその時には考えていたの……けど止めたわ。フェイトと接しているうちにどんだんフェイトに対する思いが変わっていった。アリシアの代わりとしか思ってたのにね……」

プレシアさんはそこでオレを真っ直ぐ見てきた

プ「…いつの間にか、1人の……愛しい娘としてみたの。なら、今はフェイトと生きようと思った。今でもその思いは変わらない……私の娘は、アリシアとフェイトの“2人”よ」

その瞳は、もう揺らいではいなかった……

プ「でも……出来るならアリシアとも暮らしたい……私とアリシアとフェイト、それにリニスとアルフ……それが私の家族だから」

直「……わかりました。僕も喜んで力を貸しましょう……それでいつアリシアちゃんを生き返らせれば?」

プ「私としては、フェイトとアルフにきちんと説明してからがい
いんだけど、あの子たちきつとジュエルシードを全部見つけるまで
は帰って来ないと思うから…」

直「そのあと、ですね。…それじゃ、とりあえず今日は帰ります。
ジュエルシードが全部みつかったら僕がこっちに来ますから」

プ「わかったわ…直樹、本当にありがとうね」

直「その言葉はまだ早いですよ、それでは失礼します」

そう言ってオレは取り出したどこでもドアをくぐり、海鳴市へ帰
っていった…

・
・
・
・
・

その翌日、学校ではなのはが休学することが先生からみんなに伝
えられた

しかし、身内の不幸でも病気でもないのに休学ってよく認められ
たな…

桃子さん、何言っただ？

そのあとは何事もなく授業を消化し、あつという間に放課後

直「ジュエルシードに関しては次に関わりに行くのは海の時だからそれまで無視するとして…ヒマになるから土郎さんとひたすら特訓しておこうかな？」

ブ「マスター、もしかして忘れてますか？」

直「何が？」

ブ「今日から土曜と日曜の3日間、土郎さんと桃子さん、それに玲子さんは余っていた旅行券で旅行に行っていていませんよ？」

直「あつ、そう言えばそんなこと朝に言ってたな」

ブ「それに恭也さんも月村家に、美由希さんもテストが近いからとかでご友人の家にそれぞれ泊まりに行ったので今日は家に誰もいませんよ」

直「…何だろうな、壮大なご都合主義の気配を感じるぞ…」

ブ「ここで家の鍵が無くて家に入れないなんて展開が来たりして…」

直「まさか…鍵ならちゃんとポケットに…無い？」

ブ「これは…何かしらのイベントフラグでは？」

直「…そうは信じたくないな…。とりあえず、ダメもとでオレもすずかの家に行ってみるか…」

オレは高町家に向けていた足を方向転換した

・ ・ ・ ・ ・

直「……………ウソだろ？」

ブ『予感って当たるものなんですね、マスター』

そうやり取りするオレたちの視線の先には、溝に車輪が挟まってしまった自分の車椅子を必死に戻そうとしている1人の女の子がいた…

S I D E : 直 樹 O U T

第十七話 ヒマな時間の過ごし方 前編（後書き）

まあ、最後に出てきた女の子…わかりますよね？

次回にもう1話オリジナルを挟んでその次は海のジュエルシード
です

第十八話 ヒマな時間の過ごし方 後編(前書き)

なんか今回、やっちゃった感が漂ってます

とりあえず第十八話、始まります

第十八話 ヒマな時間の過ごし方 後編

S I D E : ?

ああ、やってもたわ…（涙）

晩御飯の献立考えながら買い物から帰ってたら車椅子の車輪溝に
はまってまうし…

?「ふん！よいしょ！」

……ビクともせえへん

どないしょ…このままずっと帰れなかったり…

こんな時になんかのネタみたいにカツコええ男の子が助けてくれ
たり…するわけないか……ハア…

直「大丈夫か？もしよかったら手伝っけど…」

……あるもんやねんな…

S I D E : ? O U T

S I D E : 直樹

直「大丈夫か？もしよかったら手伝うけど…」

オレは当然見捨てたりするわけなく、女の子に声をかける

？「へっ？えっ…と、ええんか？」

… 関西弁… 車椅子… 決まりだよな…

直「いいっていいって…んじゃ持ち上げるぞ？」

？「う、うん」

オレは車椅子を押すハンドルを握り、溝から外れるように力を入れ傾ける

直「よっと！…よし、もう大丈夫だぞ」

？「おお〜！ありがとうな〜！…えっと、同い年くらいいなんかな
？」

直「そうかもな。オレは有沢 直樹、9才だ」

?「あっ、やっぱり同じ年やんか。私は八神 はやて いうんよ、よろしくな?直樹くん」

ボンゴ~~~~!!

やっぱりはやてだったか…

まさか無印の時に会うなんてな…

直「こっちこそよろしくな。…にしても、ずいぶんとたくさん買ったんだな…買い物袋3つって」

は「いやね、私がこんなんやからなかなか買い物に行けんくてな。いつもこうしてたくさん買っくんよ」

そうは言うはやてだが、明らかに持てる荷物の量をオーバーしている

直「…よし、オレが持ってやるよ」

オレは買い物袋を3つとも持ち上げる

は「えっ!そんなんええって!私は大丈夫やから!」

直「気にすんなって、オレも今は急いでるわけでもないし…な? (ニッコウ)」

は「(ドキッ)…う、うん…ありがとうなノノ (メツチャカ

ツッコいじゃん！それに、その笑顔は反則やって…／／／」

ん？ はやての顔が少し赤くなってる……疲れてたのか？

ブッ（……フラグルート突入…さすがマスター）『

・
・
・
・
・

は「着いたで！ここが私の家や」

立派な一軒家だな…

けど、女の子1人が住むには広すぎる

…寂しかっただろうな…

は「直樹くん、もしよかったらお茶でも飲んでいかへん？お礼も
したいし…」

直「そんな…お礼なんてしてもらうようなことはしてねえよ」

は「ええのええの、私がしたいだけやねんから。さ、上がって上
がって」

オレははやてに促されてはやての家に入る

そして、お茶をご馳走になりながらはやてといろいろと話をした

その中で、今のはやてのこともいろいろ聞いた

はやての身の回りはほぼ原作通りみたいだ

直「（…そう、アレも…原作通り…）」

家の中から微弱だが魔力を感じられた…

・
・
・

直「…おっと、もうこんな時間か」

部屋にあった時計を見ると、もうすぐ7時になろうとしていた

は「あつ、もしかして何か予定あった？」

直「いや、予定って訳じゃないけど…ただ、今夜の寝床を確保しないといけないからさ…」

は「ええっ！直樹くん、家ないんか!？」

はやては足が悪くなければ立ち上がりそうなら驚く

直「そういうんじゃないよ…偶然の連続で家に入れなんだ…」

で、友達の家泊めてもらおうと歩いてる時にはやてにあつたんだ」

は「なるほど…よし！直樹くん、今日はウチに泊まら

へんか？」

直「…いやいやはやて、今日会ったばかりのヤツをいきなり自分の家に泊めようとするのはどうかと思うぞ??」

は「ええやんか！うちと直樹くんはもう友達やる?…それに、この家には私しかおらへんねん。たまには人と喋りながら晩御飯食べたいなあ〜って思ってたんだけど…イヤならしょうがないな…」

そう言うのはやての目にはキラリと光るものが…

直「（…もしかしてオレ今悪役になってる?…しょうがないか…）はやて、お前の言う通り今日は泊めてもらっから、頼むから泣か「ホンマやな!」…ない…で?」

は「泊まるって言ったやんな!ちゃんと聞いたで!」

あれ、はやてさん?

泣いてませんでした?

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : はやて

は「それじゃ晩御飯つくるから直樹くんは椅子に座って〜」

直「何か手伝わなくていいのか？」

は「ええって、直樹くんはお客さんやねんから」

そう言っつて私は台所に入る

さあ、気合い入れてつくらんな〜

…でも…何かこの感じ、若奥様？みたいやな〜

…つと、料理に集中せえへんな！

それからだいたい15分後…

は「はい、これで出来上がりや！」

直「おお〜、どれもこれもうまそうだな！」

は「まあ、とりあえず早く食べよか？それじゃ…」

は・直「いただきます」「」

礼を終えたら、直樹くんはすぐに食べ始めた

ちなみに献立は、ご飯、豆腐とわかめの味噌汁、肉じゃがに野菜のサラダ

直樹くんが何好きなんかわからへんかったからハズレの無さそうなものにしたんやけど…

は「直樹くん、どうや？」

直「ああ！どれもメチャクチャうまいぞ！」

は「そう、よかった〜」

どうやら喜んでもらえたみたいや

嬉しいな〜、こんなこと初めてやからな〜

直樹くんはそのあとおかわりまでしてくれた

直「ふう〜ごちそうさま！」

は「はい、お粗末さま〜」

直「しっかし、はやての飯は本当にうまいな」

は「そんな…そんなことないって」

直「いやいや誇っていいと思うぞ。オレと同一年でここまでの料理が出来るなんて相当すごいことだからな！」

そ、そんなに言われると照れるやんか／＼／

けど、このあと…私はもつと真っ赤になることになる…

直「はやてならきつといいお嫁さんになれるな」

は「へえ！？お、おおお嫁さん！？／／／」

な、なんてこと言いだすんや！？

お嫁さんって…／／／

さつきから私、真っ赤にされてばかりや…

何か挽回する方法は…！！　そうや！これなら一石二鳥や！

…フッフ…直樹くん、覚悟しいや！

S I D E : はやて O U T

S I D E : 直樹

晩御飯のあと後片付けの手伝いをし、風呂にも入り後は寝るだけになった

直「はやて、オレはどこで寝たらいいんだ？」

は「あっ、もうこんな時間なんか…それじゃ案内するからついて来てな」

そして、はやてについていき着いた部屋は…

直「……………なあはやて」

は「何や直樹くん？」

直「ここって…はやての部屋だよな？」

は「そやで」

直「…一応聞くけど、どうやって寝るつもりだ？」

は「決まってるやんか、そのベッドで2人で寝るんやで」

……………ハアアアアツ！？

直「いやいやおかしいだろ！？ もう1度言うけど、オレは今日知り合つたばかりの人間だぞ？」

は「ええやんか」

直「ダ・メ・だ！」

は「……………グズッ」

直「お、おいはやて？」

は「…寂しい時も多いからな…甘えたかつてん。ワガママ言っ
てゴメンな…他にもベッドのある部屋あるから…」

直「（…ハア、オレって本当に意思が弱いな…）わかった。一緒
に寝ればいいんだろ？」

その瞬間、はやての顔が素早く上がる

は「その言葉を待ってたで！さあさあ寝よか！」

そう言うてはやては車椅子からベッドへと移る

そして、オレはその横に少し距離をとって寝転ぶ

直「んじゃ、お休みはやて」

は「うん、お休み直樹くん」

そのままオレはすぐに眠りについた…

・
・
・
・
・

明くる朝、オレはいつもの朝練をすれたため起きようとする

けど…

直「（…起き上がれない？何で…それに左腕がなんか重…！？）」

オレが見たもの、それは…

は「…すう…すう…」

眠っているはやてだった

ただ、問題を挙げれば1つ…

はやては「オレの左腕を抱きしめて」寝ていた

直「……………なんでさ／＼」

その朝、オレは朝練を諦めた…

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : はやて

朝を起きた時、予想通り直樹くんは真っ赤になっていた

けど、私もずいぶん大胆やな？

何で抱きつくなんて出来たんやろ…

それに…直樹くんを見ると胸がドキドキする…

もしかして…これが…

・
・
・

そして、直樹くんと話してうちにお昼前になった

直「それじゃそろそろオレ帰るな？」

は「もう1泊してほしいところやけど…まあこれ以上ワガママは
言えへんしな。外まで見送るよ」

私たちは外まで出てくる

直「今度、またヒマが出来たら遊びにくるけど、いいか？」

は「もちろん、大歓迎や！」

直「そっか…それじゃはやて、またな！」

は「うん！またね〜」

直樹くんは走っていき、道の角に消える

…今度来てくれるときまでにはもっともっと料理の腕上げと…

……初恋の人のために…

S I D E : は や て O U T

ブ『(マスターは気づいているのでしょうか？ フラグが完全に
立ったことを…)』

第十八話 ヒマな時間の過ごし方 後編（後書き）

次回からはいよいよ終わりを目指して激動していきます！（予定）

第十九話 動き始めた闇の歯車（前書き）

今回の前書きで、原作と全く違うキャラの説明を簡単にしたいと思えます

~~~~~

プレシア＝テストロッサ

経歴等は原作通り

実験失敗の事故により1人娘、アリシア＝テストロッサを亡くす

その後、プロジェクトFATEによりアリシアのクローンである  
フェイト＝テストロッサを造る

初めはアリシアとの違いに戸惑ったが共に暮らすうちにフェイト  
のことを「2人目の娘」として見るようになった

その後アリシアを蘇生する研究も止め、アルフとリニスを合わせ  
た4人で平和に暮らしていた

ところが、約3ヶ月前に時の庭園に来たプロキオンからジュエル  
シードでアリシアが助けられることを教えられ、行動に移した

リニス

原作との違いは契約はフェイトが生み出されてからすぐの時

その時にアリシアのことは聞かされている

契約内容は「生涯を共にすること」、「つまりどちらかが死ぬまで  
契約は続くことになる

~~~~~

こんな感じでしょうか？

では第十九話、始まります

第十九話 動き始めた闇の齒車

S I D E : 直樹

はやての家でのお泊まりから約9日…

原作ならそろそろフェイトたちが海のジュエルシードに目をつける頃だよな

最近よくなのはやフェイトの封印の魔力を感じたから変わらないと思うけど…

…けど、最近土郎さんの稽古マジでキツくなってきたな

何だったっけ？ 御神流剣術居合い、空牙、だっけ？

あれの稽古なんか半端ないって…

居合いで5メートル先の的を斬り落とすってどんなんだよ！？

もはや斬撃とばすようなモンじゃん…？

魔法無しでそれ出来たら化け物だろ…とか思ってたら土郎さんは見本でオレのより遠くに置いた的を1メートル後ろにあった予備の的数個ごと斬った

……化け物じゃん…？

士郎さん曰く、「ちよつと力んでしまった」だそうだ……ちよつと…

絶対オレより士郎さんの方がチートだよな…うん決定…

そんなことを考えながらオレは自主トレを続けた

・ ・ ・ ・ ・

それから2、3時間後…

…ゴロゴロ…ドオオン！……キイイイインッ！！

ブ『マスター！』

直「ああ、発動したみたいだな…」

空はフェイトが撃ち込んだ魔力で曇り空になっている

なのはもたぶん来るはずだ…

今回は…始めから介入する！

直「バリー行くぞ、セットアップだ！」

ブ『はい、スタンバイレディ セットアップ』

いつも通りセカンドのバリアジャケットを纏い、お面を被る

直「そんじゃ行きますか！ 九ツ星神器 花鳥風月 セイクー
！」

すると、オレの背中に大気に乗り自由に飛行する1対の翼の神器、
花鳥風月 セイクー が現れる

直「よっしゃ！」

オレはそのまま地面を蹴り、空に飛び出す

SIDE：フェイト

…くっ…手強い…

最近ではジュエルシードを探しても管理局から隠れながらだからど
うしても遅れを取っちゃう…

だから、まだ探したことのない海で無理して探知魔法を使った結果としてはそれでジュエルシードは残りの6個全部が見つかった…けど…

フ「もう…無理かもしれない…」

ジュエルシードによって発生した竜巻

溢れてくる魔力が体にビリビリ伝わってくる

もうバルディッシュの魔力刃も維持できない位魔力が少なくなっている

……どうしたら…

その時、空の雲がちぎれて光が差し込んでくる

その方向を見ると…

フ「……………なのは!?!」

雲の上からセットアップしたなのはが降りてきてこっちに飛んでいく

ア「フェイトの邪魔をするなあ!」

アルフが飛びかかろうとするけど、緑色の魔方陣がそれを止める

ユ「違う！ボクたちはキミたちと戦いにきたわけじゃない！」

あの声はなのはが連れてたユーノっていうフェレットと同じ…

なのはは使い魔じゃないって言ってたから、変身魔法だったのかな？

そんなことを思っているうちになのはがこっちに飛んできた

な「フェイトちゃん！手伝って、ジュエルシードを止めよう？」

すると、なのはのレイジングハートから桃色の光が伸びてバルディッシュに入っていく

バルディッシュは桃色に一瞬光りそして…

バ『パワーチャージ』

魔力が回復？ 違う…なのはが分けてくれた？

な「2人できっちり半分だよ」

なのははそう言って笑いかけてくる

…ゴオオオオ…

その時、6つの竜巻が1カ所に集まり出しだんだんと形を変え始めた

そして…その姿は水で出来た巨人の上半身みたいになった
な「なにこれ!？」

ア「デカ過ぎないかい!？」

アルフの言った通り…大きい…

たぶん20メートルはある…

水の巨人はいきなり右手をこっちに伸ばしてくる

な「危ない!」

レ『ラウンドシールド』

咄嗟になのが出した防御魔法がそれを止める

けど…

……ピキピキ…

な「!？」 もう持ちそうにない!？」

どんどん送られてくる海水の水圧にシールドにヒビが入る

マズイ…そう思ったときだった…

直「アイアン・グラビレイ!」

救いの手が来てくれたのは…

S I D E : フェイト O U T

S I D E : 直樹

花鳥風月 セイクー を使えばフェイトたちのところへは5分と
かからないはずだった

なのに、オレが飛び始めてからもう10分はたつ

何故か？

理由は……簡単だった…

直「ザケルガア！」

右手からザケルガが放たれ、また4、5体を貫く

直「バリー、あと何体位だ？」

ブ『残り50体…いえ、まだ増えていきます！』

バリーの言う通り大群の後ろでは魔方陣が光り、そこからまた飛び出してくる

直「ずいぶん形が違っけど…コイツらも機巧人形　ドール　なんだよな？」

ブ『はい、ボディに使われている金属の材質はこないだの2足歩行型と全く同じです』

そう聞き、オレはヤツらを見る

こないだのド　イドもどきより胴体は太くなっていて、手には前と同じ銃を持っている。

背中にはV字型の翼があり、脚の代わりにブースターのようなものがつき、そこから炎を噴射して飛んでいる

直「そこまで強いわけじゃないのに…数ばっかり増えやがって」

ブ『マスター、上空で魔力反応を確認。なのはさんです』

直「そろそろ時間切れか…。こつちがこんなだからな…向こうでも原作と違うことになってるかも知れない…仕方ない、一気に潰すか」

オレは花鳥風月　セイクー　を操って加速する

機巧人形　ドール　たちはオレのあとを追いかけて飛んでくる

ブ『…マスター、有効範囲に全機が入りました。いつでもどうぞ』

直「よし、いくぞ！」

この術でピンポイントを狙うのは未だに難しいけど…そんなこと言ってられない！

直「ハアアアッ！ バベルガ・グラビドン！！」

唱えた瞬間、ヤツらが通りすぎようとした場所を巨大な重力が襲う

機巧人形 ドール は一瞬止まったあとペシャンコに潰れ海へ叩きつけられる

術の威力のあまり海にすらも一瞬穴を開けた

直「バリー、どうだ？」

ブ『…転送されてくる気配はありません！』

直「よし、すぐに…って何だアレ！？」

オレの視線の先には巨大な人のようなものが映る

やっぱりジュエルシードも原作通りじゃないのか？

オレは急いで巨人の方へ向かう

・
・

直「…！ マズイ！」

近くまで駆けつけると巨人のパンチをなのはが受け止めていたが、そのシールドが破られそうになっていた

直「水なら斬っても無駄…なら！ アイアン・グラビレイ！」

オレの放った重力は巨人の腕を真ん中でちぎった

直「なのは！ フェイト！ すぐにそこから動け！」

な「ナイトさん！？」

フ「ナイト！？」

2人はオレに驚きながらも急いで飛ぶ

そして、2人とユーノ、アルフがオレの方に飛んできた

な「ナイトさん、ありがとうございます」

直「気にするな。それより…アレはジュエルシールドなんだよな？」

ア「そうさ…最初は竜巻だったんだけどね、いきなり形が変わったんだよ」

なるほど…何か見れば見るほどポセイドゥン、て感じのヤツだな…

直「よし、オレも手伝ってやるからとっと封印するぞ」

フ「どうやって?」

直「力でごり押しだ。まずユーノとアルフでヤツの動きを鈍らせる。そしたらオレがデカイのを1発撃って体勢を崩すからなのはとフェイトが2人で封印する…簡単だろ?」

な「うん、それならすぐに済みそう…フェイトちゃん、頑張ろうね!」

フ「うん」

直「ジュエルシードは6つあるからな…封印にも魔力が結構いるはずだ。もう今からチャージしておけ」

な・フ「うん!(了解)」

なのはとフェイトはオレたちから離れ、魔力を溜め始める

直「始めるぞ!ユーノ、アルフ!やれ!」

ユ「オツケー!」

ア「任せな!」

ユーノとアルフはそれぞれストラグルバインドとチェーンバインドを使い、巨人を縛りつける

直「さあいくぞ…ぶち抜け! エクセレス・ザケルガ!」

構えたオレの手からX字型の電撃の砲撃が放たれる

電撃はそのまま巨人の中心を貫き、巨人の胴体に直径10メートルぐらいの風穴が開いた

ア「……突っ込まないよ……」

ユ「ボクも……」

何か言ってるけど今はスルーで！

直「なのは、フェイト！やれ！」

な「うん！フェイトちゃん、せうのだよ？」

フ「わかってるよ、それじゃ……」

な・フ「せうの……」

フ「サンダー……レイジィ……」

な「デイベイーン……バスター……」

直後、黄色い雷撃と桃色の砲撃が巨人に命中し、辺りがまぶしい光に包まれる

そして、光が晴れたそこにはジュエルシールドが6つとも浮かんでいた

……そういえばこのあとどうなるんだ？

プレシアさんがあれだからここでのイベントは終わり？

ブ『…！ マスター！上空に魔力反応です！』

直「何！？」

ウソだろ！？ プレシアさんな訳がない！

…その考えは当たっていた…

空から降ってきたのは…

…緑色のレーザーだった…

直「デカイ！」

ブ『マスター、あれは機巧人形 ドールのビームと同じエネルギーのようです』

直「つまり非殺傷じゃない、ってことか！」

1発目は威嚇で海に… 2発目は…まさか！？

その時、空から2発目が発射される

目標は…

フ「えっ！？」

やっぱりフェイトか！

直「マ・セシルド！」

ギリギリで間に合わせたマ・セシルドがビームを防ぎきる

直「ふう〜間に合った。フェイト、大丈夫だったか？」

フ「う、うん／＼　ありがとうナイト（何だろう？ドキドキする…）」

ア「フェイト！急いでジュエルシードを回収しないと！管理局が止まるんだ！」くそっ、もうきた！」

アルフの言う通り、すぐ近くまで黒…ゴホンゴホン…クロノが近づいていた

ア「ジュエルシードを！」

ク「させない！」

2人がジュエルシードめがけ飛んでいく

そして2人は空で交錯した

ア「くそっ！3つしか…」

どうやら原作と同じように3つずつになったみたいだ

ア「フェイト！今はとりあえず退くっ！」

フ「うん！」

2人は飛んでいき、転移魔法で消えた

ク「また会ったな…ナイト」

直「オレは会いたくなかったけどな…」

しばらくクロノとにらみ合いをしていると…

リ「3人とも戻ってきて。ナイトくんもこっちにきてくれない？」

直「…わかりました」

管理局なら…機巧人形 ドール に関するデータを持ってるかも
知れない…

とりあえずついていくか…

S I D E …直樹 O U T

S I D E …プレシア

プ「さっきの攻撃はどういうつもりなの!？」

?「どういうつもりも何も…ゴミ掃除だよ。役立たずの人形を処分してやるつもりだ」

私は大広間で怒鳴っている

理由は、さっきコイツが行った次元跳躍攻撃だ…

コイツが狙ったのは…フェイトだった…

コイツの攻撃は非殺傷じゃない

なのに平気でフェイトを狙った…

?「おおい、聞こえてんのか、プレシア？」

プ「ええ、聞こえてるわよ、プロキオン」

プロキオン…それがコイツの名前だ…

コイツには惑わされた…けどそれももう終わりだ…

プレ「プロキオン、あなたに言うておくことがあるの…」

プロ「何だよ？」

プレ「…アルハザードへ行く計画は止めるわ」

プロ「ハア?バカか?アリシアを生き返らせなくてもいいのかよ」

プレ「アリシアを助けてくれるって言うってくれる人がいてね…それにその人のおかげで本当の気持ちを思い出せたわ」

プロ「……………」

プレ「フェイトは私の大切な娘…あなたが言うような人形じゃないのよ!」

プロ「……………」

プレ「これから私は今まで集めたジュエルシードを持って管理局に行くわ。そこであなたのことも話す…じゃあね」

私はそこまで言い、プロキオンに背を向け歩きだす

プロ「(…ハア…アイツの言う通りになるなんてな…。アイツの力を使うのは癪だけど…しょうがないか…)…おい、プレシア!」

プレ「何?まだ何か…!??」

振り向くといきなり何かが飛んできた

とっさにそれを手で受け止めてしまう

それは…

プレ「……………カード?」

一枚のカードだった…

けど、ここで気を緩めたのがいけなかった

次の瞬間、カードからどす黒いオーラが流れ出し、あっという間に私を包み込む

プレ「何これ！？…！？　アアアアアアアッ！」

突然頭が痛み出し、どんどん痛みが増してきた

何なの！？このオーラのせいなの！？

プロ「プレシア、アンタにはまだ動いてもらわなきゃ困るんだよ
…だからしばらくの間、“従って”もらっぜ…」

…イヤ…頭の中がどんどん真っ白になって…いく…

…リニス…アルフ…アリシア……フェイト…

S I D E : プレシア O U T

第十九話 動き始めた闇の歯車（後書き）

余談ですが、さっき見たところアクセスが86746、PVが1590となっていました！

皆さん、ありがとうございます！

第二十話 異変（前書き）

1週間ぶりの投稿です！

書いてる途中で書きたいことが増えてきて、書き直してたら時間がかかりました

あと注意です！

この話、今まで以上に地の文の少なさに仕上がってしまいました！

とりあえず第二十話、始まります

第二十話 異変

SIDE：アルフ

あたしは今、リニスと一緒にプレシアに呼ばれて大広間に向かっているところだ

ア「にしても…プレシアはいつたい何の用事だろうねえ。あたし、フェイトについておきたいんだけど…」

リ「まあまあ、プレシアもすぐに済むっていいんじゃないですか？」

ア「うん…」

フェイトはたくさん魔力を消費したからか帰るなりグッスリ眠ってしまった

フェイトも鍛えてるって言ってもまだ子供だもんね

そんなことを考えているうちに大広間に着いた

けど…

リ「プレシア…？居ないんですか？」

ア「何さ、呼んでおいて自分は来てないのかい。困った人だねえ……」

リ「まあ、ひよっとしたらプレシアだって何か先に済ませる用事が……！？ アルフ！危ない！」

えっ？ と振り向くと……リニスが傷ついていた……

……紫色の魔力弾で……

ア「リニス！」

近づいて調べると、気を失ってはいるけど酷いケガはないみたいだ

プ「あら、1回で仕留めれなかったみたいね……」

ア「プレシア！？……アンタがリニスを！？」

プ「……ええそうよ……。要らなくなった人形は……捨てなきゃね……」

！？ この人、本当にプレシアなのかい？

リニスを「人形」って言うなんて……

プ「そうそう……アルフ。……あなたにも……消えてもらっつわよ」

プレシアはそう言って杖をこっちに向けてきた

マズイ！！

ドオオオオンッ！！

ア「…………カハツ…ハア…ハア…」

とつさにバリアを張ったけど、相手は大魔導師とも呼ばれた魔導師
大部分がバリアを突き破ってあたしに当たった

プ「…やっぱり死なないわね…。けど…これで終わりよ」

そう言っただけで構えたプレシアの杖には雷の魔力弾が生成され始めた
なんとか逃げないと…でも、転移魔法は間に合わない…どうした
らしいんだい！？

プ「…死になさい…ファイ…！？ ウウウウ……………」

殺られる！…そう思った時、いきなりプレシアが頭を押さえてし
やがみ込んだ

ア「プレシア！？ 大丈夫なのかい！？」

こんなことになってるのに相手の心配だなんて…あたしも甘いね…

プ「…………ルフ、…なさい…」

ア「えっ？」

プレシアは顔を地面に向けたまま何か言っているみたいだ…

プ「…ハア…ハア…、…アルフ…逃げなさい…リニス…を…連れて…」

！？ どういうことなんだい！？ こんなことをした本人が「逃げろ」だなんて…

…でも、今はそうするしかない！…ゴメンよ、フェイト…すぐに戻るから…

あたしはすぐに転移魔法を発動して時の庭園から脱出した

だから気づかなかった…

地面に伏せてたプレシアの目から…涙が流れていたことに…

S I D E : アルフ O U T

S I D E : プレシア

…くっ…なんとか…アルフたちは逃げれた…みたいね…

…うっ…また…頭が…

何も…考えられない…

・
・
・

フ「母さん、呼んだ？」

プ「ええ…フェイト、あなたが集めてくれた…ジュエルシードは9つ…。まだ足りないのよ…急いで取ってきて…」

フ「は、はい…（？） 母さん、何だか元気がない？…気のせいだよ（ あれ？ アルフは？」

プ「ああ…あの子なら逃げたわ…。もう集めるのは…嫌だそうよ…」

フ「そんな！？…そんなこと…」

プ「とりあえず…早く行ってきて、フェイト。…アルフのことは…あとで話しましょうっ？」

フ「…はい。行ってきます」

SIDE…プレシア

OUT

SIDE：直樹

リ「指示や命令を守るのは個人のみならず、集団を守るためのルールです。勝手な判断や行動があなたたちだけでなく周囲の人たちも危険に巻き込んだかもしれないのは、解りますね？」

な・ユ「はい……」

海のジュエルシード事件のあとなのはとユーノ、そしてオレはアースラへ転移した

リンディさんに怒られてるところをみると、どうやら原作通り命令無視で抜け出してみたいだな……

リ「本来なら厳罰に処すところですが、結果としてプラスになったこともあるのでこの件については不問とします。但し、2度目はありませんよ……いいですね？」

な「はい……」

ユ「すいませんでした……」

リ「はい……。さて、次にナイトくんに聞きたいことがあるんだけど……」

オレ？ まためんどくさいことだったりして…

直「…答えれることなら答えます」

リ「わかったわ。エイミィ、モニターに出せる？」

エ「はい、すぐに出します」

そして、オレたちが囲んでいたテーブルの中央にモニターが現れて、映像が流れる

直「これは…」

な「ナイトさんの戦ってるところ？」

そう…なのは言う通り、モニターにはさっきのオレの機巧人形ドールとの戦闘シーンが流れていた

場面は進み、オレがバベルガ・グラビドンを使ったところで映像は終わった

な「…圧倒的なの…？」

ユ「そ、そうだね…？」

そうか？ そこまで圧倒的なつもりはないんだけどなあ…

リ「まあナイトくん力のことは置いておいて…私たちが聞いたのはこっちのことなの」

リンディさんがそう言うとモニターは機巧人形ドールをク

―ズアップする

リ「あなたが戦っていたコレについて、あなたは何か知ってるかしら？」

直「…わかりました。バリー、出せるか？」

ブ「もちろんです」

すぐになのは、ユーノ、クロノ、リンディさんの前にバリーのモニターが出て、さっきの飛行型とこないだの歩行型を映す

直「説明します…あの黒い魔導師フェイト」テストロッサとその使い魔アルフの話によると、コレらの総称は機巧人形 ドール。テストロッサ本家に居候している魔導師の召喚機だそうです」

リ「コレらの特徴は？」

直「まず…こっちの歩行型ですが…」

オレが話したすとモニターは歩行型との戦闘シーンに変わる

直「移動速度は人の小走り程度…けど手に装備されているビームガンは非殺傷設定なんか無い質量兵器です。喰らえば物理的ダメージを受けます」

リ「……………」

直「続いて…この飛行型…」

モニターの映像は飛行型の映像に変わる

直「最高速度はわかりませんが戦闘のスピードを見る限りたぶん時速30〜40キロつてところだと思います。手には歩行型と同型と思われるビームガン、脚の代わりにブースター、背中のV字型の翼などが主な装備みたいですね」

リ「なるほど…ナイトくんは機巧人形 ドール についてどう考えているの？」

直「たぶん…機巧人形 ドール のバリエーションはまだあると考えておいた方がいいと思います。それと、これは推測なんですがこの機巧人形 ドール の召喚士がこの事件の主犯かもしれませぬ」

実際、あの時のビームはたぶん…

ク「それについてはボクもそう思います」

その時、クロノが話し始めた

ク「あの時の砲撃…いや、ビームと言った方がいいのかもしれない…あのビームの構成エネルギーと機巧人形 ドール のビームのエネルギーが一致したことがさつきわかりました。なので艦長、ナイトと意見は半分正しいかと…」

リ「半分?…どういうことかしら?」

ク「ボクの考えでは主犯はもう1人います。エイミィ、モニターに出して」

エ「はいはい」

またテーブルに出たモニターにはプレシアさんが映っていた

やっぱり原作通り目を付けてみたいだな…

けど、原作と違ってプレシアさんは攻撃してないから容疑者の域を抜けないみたいだけど……っと、考えてるうちにクロノの説明が終わったみたいだ

リ「とりあえず、本件の主犯はプレシア＝テストロッサ女史、それに正体不明の召喚士の2人とします」

チツ「プレシアさんを容疑者から外せると思ったのに…

リ「それじゃ、なのはさん」

な「あ、はい」

リ「ご家族も心配されてるだろうし、一旦家に帰ってもらっていいですよ。ここには…そうですね、明後日の朝に戻ってきてください」

な「はい、ありがとうございます…」

その後、オレたちは転移魔法で海鳴市に戻った

・
・
・

……そして翌日……

オレとなのはは学校に来ていた

なのははアリサとすずかにまたすぐに行くことを話している

す「そっか……でも、今日は遊べるんだよね？」

な「うん、だから2人と遊びたいなあ〜って思ってた……」

ア「じゃあウチに来る？今ね、ちょっとおもしろい動物を保護してるんだ〜」

直「おもしろい動物？（……まさかな……）」

ア「そう、それがね？ 昨日帰り道に見つけたんだけど犬と猫がケガをして寄り添いながら倒れてたのよ」

な「どんな子達なの？」

ア「えつとね……犬は狼みたいに大きくてオレンジの毛並みで、あと額に宝石みたいのがついてたわ。猫は山猫でね、犬とは仲が良いみたいなのよ」

な「！？（もしかして……アルフさん？）」

直「……（おかしい……明らかにその2匹はアルフとリニスだ……）

ケガをしてるってことは原作みたいに逃げ出したってことなのか？
いや、あり得ない。プレシアさんに限ってそんな……確かめた方
がいいな……）　なあアリサ、オレも行っていいか？」

ア「ええ、もちろんいいわ！直樹とはいつかのゲームの決着も着
けたいしね」

直「サンキュー」

・
・
・

そして、放課後になりオレたちはアリサの家に向かった

ア「こっちよ……ほら、あそこの檻にいるの」

檻に近づいてみると……

な「（やっぱり……アルフさん……）」

ア「（あんだかい……周りにいるのも温泉で見た子達ばかり……っ
！？　ちよつとそこのあんだ！　あんだナイトだろ！？）」

な「（………ふええええええっ！？　ナ、ナナイトさんが直樹
くん……？）」

ユ「（ほ、本当なの？　直樹……）」

直「（………ハア、ちよつと迂闊だったかな？）」

な「（本当に直樹くんが…）」

犬の…いや、狼の嗅覚を甘く見すぎたか…

ア「なのは、どうしたの？ さっきから口開きっぱなしよ？」

な「ふえっ！？ な、何でもないよ！？ 大きな犬さんだなくって思っつて」

ア「（ちよつと！ アタシは狼だよ！）」

な「（ごめんなさ〜い（涙））」

ア「それじゃそろそろ部屋に行きましょう」

直「あつ、オレもう少しここにいていいか？すぐにそっち行くからさ」

す「じゃあ早く来てね？直樹くん」

その時、なのはの肩からユーノが飛び降りて檻の前に行く

ア「ユーノ！危ないわよ！？」

ユ「（なのは、彼女からはボクと直樹が話を聞いておくからなのははアリサちゃんたちと…）」

な「大丈夫だよ…（うん、お願いね？ユーノくん。それから直樹くんも、あとでいろいろと聞かせてほしいの）」

直「（わかったわかった…。家に帰ったら話してやるから今はアリサたちと行け）」

な「（うん）」

なのはとアリサ、すずかは屋敷の中に入っていく

ア「直樹だったっけ？…ゴメンね、アタシのせいでバレちゃったみたいで…」

直「気にするなって…そのうちバラすつもりだったからさ。それより、そっちの猫はリニスなのか？」

ア「リニスのこと知ってるのかい!？」

直「一応知り合いだ」

ア「そうなんだ…。リニスは疲れてたみたいで、寝てるんだよ」

ユ「それで、アルフはどうしたの？そんなケガして…」

ア「あんたがいるってことは…管理局もこれを聞いてるんだろうね…」

そこにタイミングを合わせたクロノの通信が入る

ク「時空管理局執務官、クロノ〓ハラオウンだ。詳しい話を聞かせてくれないか？」

ア「わかったよ…でも、アタシには信じられないんだよ！プレシアがあんなこと言うなんて…」

そこから、アルフの話は始まった…

アルフの話では、プレシアさんがジュエルシードのことを突然言い出したのは今から3ヶ月前、それも機巧人形 ドール の召喚士、プロキオンが居候し出してすぐのことらしい

その頃を境にプレシアさんからは笑顔があまり見られなくなった
そうだ

フェイトとアルフ、さらにはリニスもその目的は知らないらしい

ク「なるほど…キミの話を聞く限りではそのプロキオンという男が怪しいとみえる。けど、プレシア＝テストアロツサもまだ容疑者ではあるけどね…」

ア「昨日のあの人はおかしかった…。まるで別人だよ」

ユ「（なのは、今の話聞いてた？）」

な「（うん、聞こえてたよ）」

なのはもちやんと念波で聞いてたみたいだ…

ア「…なのは…、頼めた義理じゃないけど…フェイトを助けてやってくれないかい？あの子、今1人ぼっちなんだ。どうなってるか…」

な「（任せて！私だってフェイトちゃんを助けたいし、それに…友達になりたいっていう言葉の返事ももらってないしね！）」

ア「（…ありがとう）」

ク「ナイ…じゃなかった…直樹、キミはフェイトはどうしてくれると思う？」

直「たぶんだけど、昨日のヤツでジュエルシードは全部出揃ったはず…ならあとやることは…」

ク「お互いの手持ちを賭けての…勝負」

直「たぶんな…」

ク「…ボクもそうなる確率が高いと思ってる。なのは、そうなたときは…」

な「（わかってます。私がフェイトちゃんと戦います…その後、きちんとお話するの！）」

ク「…よし、それで行こう。とりあえず明日は予定通りあの公園に来てくれ。例え戦闘になるとしても近くには海があるから移動すればいいだろう」

直「クロノ、オレも行くぞ？」

ク「ああ、構わない。それじゃあ通信を切るぞ」

すぐにクロノとの通信は切れた

直「それじゃオレもそろそろアリサたちがうるさそうだから屋敷に行くけど、ユーノはどうする？」

ユ「ボクは…もう少しここにいるよ」

直「そっか、んじゃ」

オレはユーノたちから離れ、屋敷に入って行った

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : アルフ

まさかあのバカみたいに強いナイトがフェイトと同年ぐらいの子だったなんてねえ…

ア「それよりユーノ…あなたは行かなくてよかったのかい？別にアタシは見張られなくても逃げたりしないよ？」

ユ「そういうわけじゃないよ…ただその…話し相手になるのかな、
って思ってた…」

ア「ハア？」

何言ってるんだい？コイツは…

ユ「キミは、キミの主であるフェイトが今は1人ぼっちになって
るって言ったよね？」

ア「ああ…」

ユ「でもね、一緒に檻にいるそのリニスっていう人は今寝てるで
しょ？だったら…キミも1人ぼっちになっちゃうなあって思ったん
だ。ボクはそんなに強くないから出来ることは少ないけど…目の前
の寂しがってる人を元気づけることなら出来ると思うんだ！」

ア「！？」

…本当に、なんてこと言うんだろうね…

アタシはちつとも…寂しくなんか…

ユ「やっぱり…余計なお世話だったかな？」

ア「…ああそうだね！大きなお世話だよ！」

ユ「そっか…じゃあ」でも！」「…えっ？」

ア「でも…どうしてもって言うなら…話し相手にならせてあげてもいいよ…」

ユ「アルフ…」

ア「か、勘違いするんじゃないよ!? アタシはただあんたが惨めだったから妥協してあげただけだからね!？」

ユ「フフツ…わかったよ。じゃあ話し相手にならせてください」

ア「ああ…どうぞ」

全く…アタシも素直じゃないねえ… 嬉しいのに…

ユ「あっ、そうだ!話し始める話題としてはおかしんだけど、ちよつといいかな?」

ア「? なんだい?」

ユ「初めて会って戦った時から思ってたんだけど…アルフはさ、綺麗なんだからもう少し穏やかにした方がいいと思うよ?」

ア「……………ハアアアツ!? / / / / /」

なななな何を言い出すんだいコイツは! / / / / /

アタシが…綺麗!?

ア「何を言ってるんだよ! / / / / /」

ユ、「ゴ、ゴメン…でも、どうしても言いたくてさ…アルフは本当に綺麗なんだから自分を大事にするべきだよ！」

ア、「うう…／＼／＼／」

2回も言っんじゃないよ…恥ずかしいだろ…

その後はなのはたちが帰るまでユーノとずっと話をしていた…

S I D E : アルフ O U T

第二十話 異変（後書き）

次回はいよいよなのはVSフェイト!!

…と言っても、原作と酷似しそうな予感しかしません…？

とりあえず、そこそこ期待して待っててください！

第二十一話 一騎討ち(前書き)

今回、書いていてわかりました

やっぱり僕には戦闘描写を書くスキルが決定的に不足している、
と…

あと余談ですが…

十万アクセス突破しました！

メチャクチャうれしいです！

これを励みに頑張っていきたいです

では第二十一話、始まります

第二十一話 一騎討ち

S I D E : 直樹

アルフたちと会った翌日の朝：オレはいつも通り朝練の素振りをしていた

直「…にしても、酷い目にあつた…誰だよ、なのはをあんな風にしたのは…」

それは昨日、オレが寝ている時に起こつた…と思う

・ ・ ・

直「さて、明日はたぶん無印の最終決戦になるはずだ…。今日は早めに寝とくか」

オレはベッドに入るとものの数秒で寝付いた

それから約15分後、午後11時半頃…

……ッ
タッタッタッタッタ……ドオオン！！

部屋の前の廊下から足音が響き、オレの部屋の前で止まるとドアがいきなり激しく開かれた

な「直樹くん！まだ私お話聞かせてもらってないよ！」

飛び込んで来たのはやはりなのはだった

けどオレは…

直「…すう…すう…すう…」

もちろん寝ていた

な「！ あう／＼／＼…直樹くんの寝顔…カワイイ／＼／＼…って、そうじゃなくて！ ああもう、起きてよ直樹くん！」

けど…オレは目覚めなかった

な「…しょうがないの、お話は明日にするの…。その代わりに…」

…そう言っただけなのは取った行動は…

な「おやすみなさい、直樹くん」

オレのベッドに潜り込む、だった

だがオレは起きない

そして迎えた翌朝午前4時前…

直「…（パチツ）…ふあああ…よく寝た…。さてと、起きて朝練…！？」

まあ驚くさ…起きて寝返りをうつたら、なのはの顔が目の前に広がっていた

直「…はやてといいなのはといい、何でこの世界の主要キャラは添い寝してくるんだよ…／＼／」

オレはなのはを起こさないようにベッドから降り、着替えて庭に出していく

・
・
・

直「もしかして…オレって男と思われてないのか？」

ブ「（まさか、その逆ですよ…鈍感ですね）」

直「ん？ バリー、なんか言ったか？」

ブ「いいえ…それより、なのはさんも昨日「明日は5時に起きる」と言っていました。でもってもうすぐ5時ですよ？」

直「そうか…そんじゃそろそろ切り上げて…！」

歩き出そうとした時、前から土郎さんが歩いてきた

土「…直樹…前に僕が教えた教訓、覚えてるか？」

直「…力に溺れるな。相手を見誤るな…でしたっけ？」

士「ああ、それを忘れないヤツが戦いに勝つんだ。忘れずに行くんだぞ」

直「……やっぱり、士郎さんは何か知ってるんですか？もし知ってるなら…」

士「…そのうちに、な」

そう言って士郎さんは家に戻っていく

直「…原作との相違、か…」
その時…

な「直樹くん！そろそろ出発したいんだけど！」

直「えっ！？ち、ちよつと待て！5分で着替えるから！」

おいおい、さっき起きたんじゃないのかよ！

オレはぼやきながら急いで部屋に行った…

SIDE：直樹 OUT

SIDE：なのは

私は今、直樹くと一緒に公園を目指して走っている

ユーノくんは直樹くんが肩に乗せてくれてるの

しばらく走っていると背中に猫さんに乗せたアルフさんが合流しました

直「リニス、お前大丈夫なのか？」

アルフさんの話では猫さん、リニスさんはフェイトちゃんのお母さんの使い魔らしいの

リ「はい、どちらかというと日頃の疲れで眠ってたみたいなものですから」

直「そっか……」

リ「あの…直樹くん？」

直「ん？どうかしたか？」

リ「あの…肩に乗ってもいいですか？ 何だか無性に…直樹くんに飛びつきたくなっちゃって」

…すごい！ 直樹くんのネコ団子スキルは使い魔でも関係ないんだ

直「…ハア、いいぞ。それきつとオレのせいだから」

リ「ありがとうございますー！」

リニスさんはアルフさんの背中からユーノくんがいるのとは反対の肩に飛び乗った

リ「~~~~~」

かなり機嫌がよくなったみたいなの…？

・ ・ ・

何やかんやとありながら私たちは公園についたの

あとは転移魔法でアースラに行くだけ

…けど、私にはわかってしまう…

クロノくんや直樹くんは「もしかしたら」って言ってたけど…

もし私がフェイトちゃんなら…今を狙わないはずがない！

だから私は叫んでいた

な「ここなら戦えるよ…出てきて、フェイトちゃん！」

しばらく辺りには波の音だけが響いていた

周りにいる直樹くんたちも黙ってる…

その時…

バ『サイズフォーム』

電子音が鳴り、待っていた人は…来た…

S I D E : な の は O U T

S I D E : フ ェ イ ト

ジュエルシードは全部で21個

そして、その全てがもう封印されていて私の持つてる9個以外の
12個は管理局…ううん、なのはが持っている…

これ以上のジュエルシードを手に入れる…それはつまり…

なのはと戦うというのと

初めて会った同い年ぐらいの女の子…

初めて私に「友達になりたい」と言ってくれた子…

本当は戦いたくなんかない…でも、母さんが望むなら…私は戦つ！

私はあの公園に行った

何故かはわからないけど、なのはは必ずここに来る

そんな気がした…そしてそれは…

な「ここなら戦えるよ…出てきて、フェイトちゃん！」

正しかった…

バ「サイズフォーム」

バルディッシュの魔力刃を展開して、私はなのはの近くに降り立つ

なのはの側にはユーノ、アルフとリニス、それに知らない男の子
がいた

ア「フェイト、大丈夫だったかい!？」

フ「? どういうこと? アルフ」

ア「プレシアに何かされなかったかい？」

フ「？ 別に何もなかったけど…」

ア「そ、そう…」

直「いいんじゃないか？ フェイトは見たところ無事なんだからさ」

ア「直樹…」

私とアルフが話していると後ろにいた男の子が話してきた

フ「えつと…誰？」

直「！ ああ、フェイトにはまだ顔見せてなかったな…。オレの名前は有沢 直樹、ナイトだ」

フ「ナイト！？ ……よかった…（ボソツ）」

直「何か言ったか？」

フ「ううん！？ 何にもないよ！？ / / / / （言えない…気にかけた人の顔がカツコ良くて嬉しかった、だなんて…）」

でも…本当にカツコいい…

直「そうか……言いたいことはあるだろうけど、とりあえず今話す相手はオレじゃないな」

フ「そうだね…」

そう言って私はなのはの方を振り向く

な「フェイトちゃん…ここに来たってことは…」

フ「うん、なのはが思ってる通りだと思うよ」

それを聞き、なのはは無言でセットアップする

な「だったらやることは1つ…」

フ「お互いのジュエルシード全部を賭けた…」

な・フ「真剣勝負!」

レ『プットアウト』

バ『プットアウト』

合わせたようにレイジングハートとバルディッシュからそれぞれのジュエルシードが出てきて私たちの周りに浮かぶ

な「始めよう、最初で最後の…本気の勝負だよ!」

S I D E : フ ェ イ ト O U T

S I D E : 直 樹

なのはとフェイトは戦うために海の方へ飛んでいく

直「……クロノ、聞こえるか？」

ク「ああ、聞こえてるが？」

直「結局、お前は今回の犯人をどう考えてるんだ？」

ク「…やはり1番可能性があるのはプレシア「テストロッサとプロキオンというヤツの共犯の線が強いとは思う。だけどそれが本当に正しいかどうか…。どちらにしろなのはたちの戦いには何かしらの介入をしてくると思ってる。その時に判断するさ」

直「そうか、わかった」

オレはクロノとの通信を切り、なのはたちがいる空を見上げる

リ「直樹くん…直樹くんはフェイトとなのはちゃんのどちらが勝つと思いますか？」

まだオレの肩に乗っていたリニスが聞いてくる

直「リニスはどう思うんだ？」

リ「私は…フェイトが勝つと思います。あの子は天才ですから」

ア「あたしもフェイトが勝つと思う…フェイトは何年も空戦の訓練をしてきたんだ。負けるはずがないよ！」

ユ「ボクはなのはだと思う。なのはだって、魔法で出会ってから今日まで1日も練習を欠かしたことがない。だから…」

ア「直樹は？」

直「オレは……わからないかな。どちらが勝ってもおかしくない戦いだからな…。運とかの要素も絡んでくるだろうし…」

そう言っただけでオレたちはまた空を見上げる

さあ、原作と変わってくるのか…見物だな…

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : なのは

な「やあああああつ！」

フ「ハアアアアッ！」

ガキン！ガキン！

…さつきからずっと接近戦が続いてる

やっぱりフェイトちゃんは自分の得意な土俵で戦いたいみたい…

でも…私の土俵は接近戦じゃない…

私が得意なのはもちろん…

ガキン！

フ「!?!」

遠距離戦なの！

な「レイジンググハート！」

レ「ディバインシューター」

つばぜり合いの状態から離れて私は魔力弾をつくる

フ「っ！ バルディッシュ！」

バ「フォトンランサー」

フェイトちゃんもすぐに魔力弾をつくっていた

な「シュウウツッ！」

フ「ファイアツ！」

お互いの魔力弾が相手目掛けて飛んでいく

私は飛行魔法でかわして飛ぶ

フェイトちゃんも避けてるみたい

けど、これだけじゃ終わらせない！

私はもう1度4発のデイベインシューターをつくってフェイトちゃん
が避けきつてスキが出来た瞬間…

な「シューウウツッ！」

撃ち込んだ！ このタイミングなら避けられない！

けどフェイトちゃんは…

バ「サイズフォーム」

フ「フツッ！」

バルディツシユの魔力刃で次々と斬り割っていく

なら…、と考えているときだった

バ「ソニックムーブ」

3発まで斬り裂いて4発目をかわした瞬間、フェイトちゃんは高
速移動魔法で消えた

な」(今までなら後ろだったけど…どこから来るの?)」

辺りを見回してもフェイトちゃんは見えない

周りにはいない…まさか!?

バ『サイズスラッシュ』

フ『ハアアアアッ!』

やっぱり…上から!

私はフェイトちゃんの攻撃をギリギリでかわす

バリアジャケットは少し破れたけど…

とにかく距離をとらないと!

私はフェイトちゃんとは反対側へ飛ばうとした

けどそこに待ってたのは…フェイトちゃんのフォトンランサーだ
った…

S I D E : : な の は O U T

S I D E : : フェイト

なのはは見事に罠に引っ掛かった

けど、これで終わるはずがない

ほら…上手くシールドを張って避けてる

…今がチャンス！

フ「撃ち抜け轟雷！ サンダーアースマッシュャー！」 バランス
を崩したなのは目掛け雷の砲撃を放つ

決まった！…そう思った…

けどなのはは…

なっつ！ レイジングハート！」

気づいて振り向いて…

レ『ダイバインバスター』

ノーチャージで砲撃を撃ってきた

フ「（あのタイミングで撃てるなんて…でもノーチャージじゃ勝
てるわけ……っ！？ 押し切れない！？）」

私の砲撃となのはのノーチャージの砲撃が同レベルだなんて…

このままじゃいつまでたっても…

そう思い、私は砲撃の繋がりを無理矢理断ち切った

フ「ハア…ハア…」

もう魔力も少なくなってきた…

…決めるなら、次で決めるしかない！

私はバルディッシュを手前で強く握り、魔法陣を展開する

まずは…捕らえる！

なのはに向けバインドをかける

フ「ライトニングバインド！」

そして発動するのは…私が見える最高の魔法！

フ「アルカス・クルタス・エイギアス…」

S I D E : フ ェ イ ト O U T

S I D E : 直 樹

ア「マズイ！フェイトのあの魔法は！」

リ「間違いないです。当たれば必倒…フェイトの最高の魔法です」

ユ「なのは、今サポートを…」

な「（駄目！）」

ユーノが動こうとしたがなのはがすぐにそれを制す

な「（アルフさんもりニスさんもユーノくんも、もちろん直樹くんも手を出さないで！ 全力全開の一騎討ちだから…私とフェイトちゃんの勝負だから！）」

ア「（でも…フェイトのソレは本当にマズイんだよ！）」

な「平気！」

直「……………なのはがああ言ってるんだ…。ここは手を出さない方がいい」

ア・リ・ユ「……………」

…それに、原作通りなら…もうすぐ終わる

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : なのは

やっぱりフェイトちゃんはすごいや…

このバインドってヤツも全然外れそうにない

そうしてる間にもフェイトちゃんの周りには魔力球ができていてもうすぐ発射されそうだ

…こうなったら出来る戦い方は1つだけ

な「レイジングハート、出来る？」

レ「もちろんです、マスター」

レイジングハートも私のやりたいことはわかるみたい

まずは…あれを耐える！

そして…

フ「フォトンランサー、ファランクスシフト…打ち砕け、ファイア！」

フェイトちゃんの魔力球から大量のフォトンランサーが放たれる
全部止めてみせる！

レ『ラウンドシールド』

私の防御魔法がフォトンランサーを受け止める

…やっぱり数が多い

けど…止められない強さじゃない！

そしてなんとか全部を止め、煙が晴れていく

フェイトちゃんは私が無事なのを見てかなり驚いている

な「撃ち終わると、バインドつてのも解けちゃうんだね……今度
はこっちの…」

私はレイジングハートをフェイトちゃん目掛けて構える

レ『デイバイン』

な「番だよ！」

レ『バスター』

さっきとは違っちゃんとチャージしたデイバインバスターをフェイトちゃんへ放つ

フェイトちゃんは防御魔法で受け止めてるみたいだ

な「（…これだけじゃ勝てない。だったら…）」

フェイトちゃんは自分の最高の魔法を出してくれた…

だったら…私だって！

レイジングハートと組み上げた私の最高の魔法…

それでフェイトちゃんに勝つ！

デイバインバスターを撃ち終わったあと、すぐにチャージを始める

な「受けてみて…デイバインバスターのバリエーション！」

レ『スターライトブレイカー』

私の前に魔法陣が広がって、そこに魔力が収束されていく

私の魔力だけじゃない…辺りに散らばっている魔力も集めて収束する

フェイトちゃんは逃げようとするけどそうはいかないよ！

私だってバインドってのをかけれるんだから！

さあ…行くよ！

な「これが私の全力全開！ スタアーライト…ブレイカーツ！
」

私が放った収束砲撃は真っ直ぐにフェイトちゃんを撃ち抜く
数秒たってようやく撃ち終わる

な「ハア…ハア…」

さすがに…もう限界かも…

フ「……………」

な「っ！ フェイトちゃん！」

気づくとフェイトちゃんが下の海へと落ちていっていた

追いかけないと…と思ったけど、必要なかったみたい

だって…フェイトちゃんはもう下にまわってた直樹くんがバツチ
り受け止めてたから…

……あっ……お姫様抱っこ……フェイトちゃん、ズルいよ……

S I D E : : なのは O U T

S I D E : 直樹

な「これが私の全力全開！ スタアーライト…ブレイカーッ！
！」

……魔王誕生か…

さて、決着もついたな

…っと、このままじゃフェイトが海に落ちちゃうな…

直「九ツ星神器、花鳥風月 セイクー」

オレは花鳥風月 セイクー を発動して飛び上がる

ア「直樹？ どうしたんだい？」

直「いや、フェイトが海に落ちそうだからな。ちょっと受け止め
に行ってくるわ」

ア「そうかい。頼むよ」

直「おう…！」

オレはフェイトが落ちそうな場所へと急ぐ

…と言っても花鳥風月 セイクー で飛んでいるのでものの数秒

で到着し…

直「ほい、キャッチっ」と

タイミングよく受け止める

フ「……………ん」

するとフェイトのまぶたが開いてぼんやりとオレを見上げる

直「気がついたか？」

フ「……………直樹っ！？／／／（えっ？ これって…お姫様抱っこ！？／／／） あう…／／／」

ん？ なんかフェイトの反応が変だけど大丈夫なのか？

なんて思っているとなのはがオレの方に飛んできた

な「直樹くん！フェイトちゃん、大丈夫？」

直「ああ、大丈夫そうだ！ フェイト、飛べるか？」

フ「うん、大丈夫」

フェイトはオレから降りて一人で飛んでなのはと向き合う

な「私の勝ち、だよな？」

フ「そう…みたいだね」

バ『プットアウト』

バルディッシュから出されたジュエルシードがフェイトの周りに
浮かぶ

ク「よし、なのは。ジュエルシードを確保して…それから彼女を
…」

その時…

エ「待って！来たよ！」

エイミーさんの言葉通りオレたちの上に雲が広がり、そこから…

ゴロオオオオンッ！

紫色の雷がフェイト目掛け落ちた

フ「！？ か、母…さん？」

攻撃に耐えきれず、バルディッシュは強制的にスタンバイモード
に戻る

直「（プレシアさん！？ 本当に何があったんだ？ フェイトに
まで攻撃するなんて…）」

そして、その間に出ていた9個のジュエルシードは物質転送魔法
で消えてしまった

エ「オツケー、尻尾掴んだ！……座標も割り出せたよ！……それと、さっきの攻撃の魔力パターンも管理局に登録されてるプレシア「テスト」スタロツサのものと一致したよ！」

リン「武装局員、転送ポートから出勤。任務はプレシア「テスト」ロツサ及びプロキオンの身柄確保です！」

くっ……何でこうなるんだよ！

このままじゃプレシアさんは……

ク「なのは、ユーノ、直樹。フェイトとその使い魔たちを連れてアースラへ戻ってくれ。ゲートはこちらで開く」

な「わ、わかりました」

……何としても……止めてみせる！

S I D E : 直樹 O U T

第二十一話 一騎討ち（後書き）

次回、とうとう直樹とプロキオンが…

第二十二話 敢えて言おう、カスであると!! (前書き)

ようやく完成しました…

プロキオンの能力ですが…まず謝っておきます

気に入らなかつたらすいません! m () () m

とりあえず第二十二話、始まります!

第二十二話 敢えて言おう、カスであると!!

S I D E : 直樹

「第2次部隊、転送完了!」

「第1小隊侵入開始!」

アースラに到着したあとクロノと別れ、オレとなのは、ユーノ、
フェイト、アルフ、リニスはブリッジに向かった

その際にユーノ、アルフ、リニスは人型に戻っていた

ブリッジではもう時の庭園への武装局員の突入が始まっていて、
その管制が行われていた

リン「みんなお疲れさま…それからフェイトさん、はじめまして」

フ「…はい」

フェイトはだいぶ落ち込んでいるみたいだ…

やっぱりプレシアさんに攻撃されたのが信じられないのか

リン「…母親が逮捕されるシーンを見せるのは忍びないわ。な

のはさん、彼女をどこか別の部屋に」

な「（あっ、はい） フェイトちゃん、よかったら私の部屋に…
っ！」

けど、なのはは最後まで言えなかった…

フェイトと同時にモニターに目がいつてしまったからだ

「総員、玉座の間に侵入。目標の2人を発見！」

「プレシア…テスタロッサ、プロキオン…時空管理法違反で貴女方を逮捕します。武装を解除してこちらへ」

モニターには玉座に座ったプレシアさんとその側に立つ20代前半といった感じの男が映っていた

直「（アルフ、リニス、アイツがプロキオンか？）」

ア「（ああ、そうだよ）」

リニ「（間違いないです）」

なるほど…確かに黙ってれば爽やかな好青年、って感じの容姿だな…

プレシアさんたちが騙されたのも無理はないのかもな

プレ「私のアリシアに…近寄らないで！」

直「!?!」

プレシアさんの声が響きわたり、モニターを見てみるとアリシアのポッドの前でプレシアさんが局員を吹き飛ばしていた

直「（やっぱりアリシアがいる隠し部屋も見つかったか…、それにしても…プレシアさんのあの態度はまるで…）」

プレシアさんはその後攻撃してきた局員を返り討ちにし、また玉座の間に戻ってきた

フ「アリ…シア？」

予想通りフェイトは混乱中かよ…

その時…

プレ「管理局、それにフェイト…見ているんでしょう…」

「「「「「!?!」「」「」「」

みんなプレシアさんが話しかけてくるとは思ってなかったみたいだ…

プレ「もう駄目だわ…時間がないの…。たった9個のロストロギアではアルハザードにたどり着けるかどうかは微妙だとプロキオンも言っているけど…」

プレシアさんはそこで1度句切り、伏せていた顔をあげた

プレ「でも…もう終わりにするわ。この子を亡くしてからの…あ、暗鬱な時間も…、この子の身代わりの…人形を…娘扱いするのも…」

…おかしい、プレシアさんが変だ…喋っている内容はまるで原作のそれと同じ…

でもそれ以上に変なのは…

プレ「聞いて、いて…あなたのことよ…フェイト…。せつかくアリシアの記憶をあげたのに…そっくりなのは見た目だけ…や、役立たずで…ちつとも使えない、私のお人形…」

…なんでこんなに辛そうに喋ってるんだよ…

プレ「だからね…フェイト…アリシアが蘇るまでに私が…慰みに使う…だけの人形のあなた…は、もういらないわ…どこへなりと…き、消えなさい！」

プレシアさんは突き放すように叫ぶが、その表情には微かに悲しみの色が見えた

そしてついには…

ポロツ…

フ「…えっ？」

な「な、何で？」

余りのことに全員が驚く

それもそうだろう…

プレシアさんが泣きながら喋っているのだから…

直「（…自分の言葉に傷ついている？……っ！まさか！？）」

オレの考えた仮定は、すぐに正しいことが証明された

プレ「…っ！？ あアアアアッ！？」

突然プレシアさんが頭をおさえながらしゃがんだかと思うと、プレシアさんの体から黒いオーラののようなものが溢れだし上へと浮かび上がる

オーラはだんだん纏まり、やがて1つの形を成した

直「カード？（あれ？あのカードどこかで…）」

けど、判別する前にカードは回転しながら飛んでいった

プレシアさんの隣にいたプロキオンの手元へと…

プロ「…ったく、アイツのカードも大したことねえな！オレの機巧人形 ドール を散々バカにしたクセによ。…にしても、これでまた面倒ごとが増えたのか」

っ！ やっぱりコイツが何かしてたのか！

プロ「まあとりあえず、このジュエルシードは頂いておくか」

そう言ってプロキオンは宙に浮かんでいたジュエルシードに手をかざした

するとプロキオンの手の前に魔法陣が広がり、ジュエルシードを1つ吸収した

ク「アイツの目的はやはりジュエルシードだったのか！」

クロノの悔しそうな声が聞こえる

プロ「さてと…次はこっちの…っ！？ オイ、邪魔してんじゃねえよ！プレシアア！」

2個目のジュエルシードを取ろうとしていたプロキオンをいくつもの紫色のバインドが捕獲する

プロキオンの言う通りプレシアさんがかけたみたいだ

プロ「プレシアア、お前この程度のバインドでオレを止めておけると思っただけだ」「思っただけだ」「…ハア？」

プレ「ただ…少し時間が出来ればいいのよ。…アナタをここから

跳ばすためのね！」

プレシアさんが叫ぶと同時にプロキオンの足元に魔法陣が広がる

プロ「チツ！強制転移魔法か！」

プロキオンはすぐに玉座の間から姿を消した

プレ「……管理局の皆さん、プロキオンはまだこの時の庭園の中にいます。だから……今からジュエルシードを暴走させてこの時の庭園を私とプロキオンごと虚数空間へ落とします」

リン「！？ プレシアさん、それは！」

プレ「ごめんなさい……今は時間がないの……。フェイト、聞こえる？」

フ「母さん？聞こえるよ！」

プレ「さつきは……非道いことを言っでごめんなさい……。操られたものもあるけど、もしかしたら心のどこかでああいう風に思っている私がいるのかもね……。でもね、今は胸を張って言えるわ……。フェイト、あなたは人形でもアリシアの身代わりでもない……。私の大切な娘よ」

フ「母……さん……」

フェイトの目からは涙が溢れてくる

悲しい泣じゃない……嬉し泣だ……

プレ「だから、“最後”に言わせて？」

フ「母さん？ 母さん！止めて！」

プレ「……大好きよ、フェイト……」

ドオオオオオンッ！……！

「ジュエルシード8個の発動を確認！次元震、どんどん強くなります！」

リン「転送可能な距離を維持したまま、影響の薄い区域に移動！
武装局員は？」

「既に全員帰投しています！」

…プレシアさん、何でそんなことするんだ！？

いや、落ち着け……プレシアさんを助け、アリシアを助ける…

そのための力じゃないのか？ オレの力は…

なら、やることは1つ

オレは、バッドエンドは認めない！

直「リンディさん、オレがあそこに行く許可をください！」

リン「！？ ……止めても、行くわよね？」

直「もちろん」

リン「…いいでしょう、認めます。クロノも向かうはずだから合流して時の庭園に向かってください」

直「了解！」

な「直樹くん！ 私も行くよ！」

ユ「ボクも！」

ア「アタシも行くよ！」

リニ「私も行きます！」

直「…リンディさん」

リン「いいでしょう、なのはさんたちも同行して構いません」

な「ありがとうございます！」

オレは出ていく前に立ち尽くしていたフェイトに声をかけた

直「フェイト、お前はどつするんだ？」

フ「……………えっ？」

直「ただ待っているだけじゃ何も変わらないぞ。…プレシアさんは助けられる。今、オレたちが動けばな……………フェイトはどうしたい？」

フ「私は……………」

フェイトは1度顔を伏せ、手に持っていたバルディッシュを見る

そして……………

フ「私は……………もちろん、母さんを助けたい！助けに行く！」

直「……………よし！それじゃ行くぞ！」

S I D E : 直 樹 O U T

SIDE：プロキオン

全く…残りの魔力は空っぽのクセにオレに挑んでくるなんてよ…
マヌケにも程があるぜ

オレの前にはボロボロになったプレシアが横たわっていた

オレは転移魔法で玉座の間から大広間へと転送された

その後プレシアが入ってきたがこの揺れかたから考えてプレシアは残りのジュエルシードを発動させてからここにきたらしい…

オレの足止めのつもりで来たみたいだが、魔力のない魔導師に何
が出来るとだよ…

全く…本当に笑わせてくれ…っ！

…侵入者か、数は…7

しかも…1人はイレギュラーか！

面白え！ ジュエルシードで完成へ1歩近づいたコイツの試運転
の相手になってもらおうか！

プロ「ヒハハハハッ！！」

オレたちは今、時の庭園の門を破りプロキオンとプレシアさんのいるところを目指して走っている

通路には原作と同じように虚数空間へ続く穴が空いていた

ク「さっき通信が聞いた通りこの最上階にある駆動炉もロストロギアだ。そして、それも今暴走しているんだ。だからその封印に行って欲しいんだけど……」

な「それなら私が！」

ユ「ボクも！」

リニ「私も行きます。案内が必要でしょうから」

ア「アタシも行くよ、戦力的にこれでいい感じのはず」

ク「よし、ならこれで行こう。プロキオンの逮捕とプレシア＝テスタロツサの“救出”にはボクと直樹、フェイトで向かう」

直「それでいい」

フ「私も」

オレたちはそのまま走り続ける

リニ「この先の扉の向こうで上と下に別られます！」

それを聞き、オレとクロノは走ってきた勢いのまま扉を蹴破ったけど、そこにいたのは…

ク「機巧人形 ドール ！！」

機巧人形 ドール 歩行型が階段ホール一杯に並んでいた

ク「…ここはボクが片付ける。キミたちはそれぞれ先に「ダメだ」なっ！？」

クロノが言いかけたがオレがすぐに拒否した

直「クロノはこんなところで無駄弾を撃つな。ここは…オレがやる」

そう言っただけは右手を前にかざす…ただし…

直「時間が無いからな…2頭で行かせてもらう」

現れた魔法陣は“2つ”だ

直「サモン・クリーチャー、ティガレックス！ナルガクルガ！」

詠唱が終わり、魔法陣をくぐり抜けてきたのは2頭の竜

1頭は橙色の鱗を持ち“轟竜”の名を冠する竜、ティガレックス

もう1頭は漆黒の体毛を持ち“迅竜”の名を冠する竜、ナルガクルガだ

直「ティガ！ナルガ！オレたちの通る道を開けてくれ！加減は一切必要ない！」

「ガアアアアツ！」

「ギヤアアアツ！」

ティガレックスとナルガクルガは1度咆哮をあげると機巧人形ドールの大軍へと突進していく

な「突進！？翼があるのに飛ばないの？」

直「アイツらは空中戦より地上戦を得意としてる竜なんだ。でもってその強さは…見た通りだ」

なんて説明しているうちに2頭はどんどん攻撃する

ティガの突進で1直線に機巧人形ドールを潰せば、ナルガの尻尾の横払いで残っていたヤツを吹き飛ばし、ナルガが尻尾から棘を飛ばして撃ち抜けば、ティガは地面を砕き岩弾として機巧人形ドールにぶつける

そして…召喚から約2分後…

ク「…確認した限りで機巧人形ドールは約200体はいた…」

フ「それをほんの少しの時間で…」

な「さすが直樹くんの召喚竜というか…?」

直「おいおい、ボオ〜っとしてるヒマなんか無いだろ?早く急がなきゃ」

オレはティガとナルガを戻しながらなのはたちに言う

ク「…それじゃ、ここで別れよう。直樹、フェイト、行こうか」

直「おっしゃ!」

フ「わかった」

オレとフェイトはクロノを先頭に下へと降りていく

な「じゃあ私たちも、リニスさん!案内お願いします!」
リ「もちろんです。行きましょう!」

なのはたちも上に上がって行ったみたいだ…

・
・
・

数分後:

直「フェイト、このフロアか?」

フ「うん、さっき映ってた玉座の間を含めた重要な部屋が集中し

ているのはここだよ」

ク「なら…手分けして探そう。ボクはこっちの方へ行く。直樹とフェイトはそっちに」

直「わかった…行くぞフェイト！」

フ「うん！」

オレたちは着いたフロアの廊下でクロノは左に、オレとフェイトは右に行くことになった

直「（答えを出す者 アンサートーカー を使えばすぐに見つかるだろうけど…アレは魔力の消費が激しいからな…。これから未知の敵と戦うんだから出来るだけ魔力は温存しておきたい）」

しばらく走っていると、見慣れた扉が見えてきた

直「ここは…大広間か？」

フ「どうする？直樹…。この先もまだ部屋は続くよ？」

直「そうだな…こうなったらオレたちも別れて（ゾクッ）っ
!？」

オレは通り過ぎようとしていた大広間の前に急いで戻る

フ「どうしたの!？」

直「…フェイト、構えろ」

フ「えっ？」

直「今、ここから一瞬だけどかなり鋭い殺気を感じたんだ…。ここにいてもかもしれない」

フ「じゃあ…」

直「ああ、とりあえず突入する。で、フェイトには頼みがある」

フ「何？」

直「フェイトはプロキオンには一切構うな…。プレシアさんを見つけたらプレシアさんを助けることだけ考える。ここにプロキオンしかいなかったらすぐに出ていけ…。いいな？」

フ「…うん、わかった」

直「よし、それじゃ…。バリー、モード2だ」

ブ「了解です。モード2、スサノオ…。ローディング…。コンプリート」

バリーの形態をスサノオに変えておき、扉を見据える

直「…よし、行くぞ！ 五ツ星神器、百鬼夜行 ピック！」

百鬼夜行 ピック は扉を突き破り、扉は砕けた

そして、オレたちが中に入ると…

フ「っ!?! 母さんっ!」

床には至るところにケガをしたプレシアさんが倒れていて…

直「………… お前がプロキオンか…。やっと会えたな…」

いつもプレシアさんが座っていた椅子にはプロキオンが座っていた

プロ「…よお、ようやく来たのかよ…イレギュラー」

直「イレギュラー? どういうことだ!」

プロ「イレギュラーだろ? この“物語”の“正歴史”に存在してねえヤツなんだからよ!」

っ!?! 何だと!?!

直「お前はいつたい…………、転生者なのか?」

プロ「ハア? 意味がわかんねえ…とりあえずその転生者ってのじゃねえな」

どういうことだよ! 転生者でもないのにこの世界の歴史を知ってるだと!?!

プロ「そんなことはどうでもいいんだよ! オレは今お前と戦いたくてウズウズしてんだからな…相手してもらっぜ?」

直「…その前に聞かせろ…。さっきプレシアさんの様子がおかし

かったのは何でだ？」

プロ「そこにいる人形が大切だとか言い出してな…ちょっと洗脳させてもらったんだよ」

直「……プレシアさんのあのケガは……」

プロ「ああアレか、魔力もロクに残ってねえクセに挑んで来やがってな…遊んでやったんだよ！」

………コイツは……

直「フェイト、プレシアさんを連れて下がっておいでくれ」

フ「う、うん……」

フェイトと今は意識のないプレシアさんは後ろへと下がってもらった

プロ「何だ…やる気になったのか？　じゃあとつとと始め「ザケルガア！」おいおい、フライングは無しだぜ？」

オレはプロキオンのセリフを無視してザケルガを撃ち込んだ

普通のヤツなら急所に直撃するタイミングだ

プロ「
」

ザケルガが炸裂する少し前にプロキオンは何か呟いていた気がしたけど、ザケルガの閃光ですぐに見えなくなった

フ「やった！」

直「……………」

プロキオンのいたところには煙が立ち込めていたが、だんだんとそれは晴れてきた

直・フ「「!?!?!」」

プロキオンは無傷だった…

そして、プロキオンの前には今までとは形の違う新しい機巧人形ドール が浮かんでいた

形状は今までのバランスのとれていた形とは違いいびつで、最たる特徴は…

直「…盾、か…」

本体の大きさに不釣り合いなデカさの盾だった

見たところあの機巧人形 ドール がザケルガを防いだみたいだ…

プロ「ハハッ！ まさかこの程度で終わりなんてことないよな？」

直「当たり前だ…お前だけは必ず潰す！」

プロ「オレ、お前に何かしたか？」

直「幸せな家庭を崩壊させようとした…それだけで理由は十分だ！」

プロ「……そういう正義ぶったセリフは大嫌いなんだよ！…まあいい、お前にはオレの新しい武器の実験体になってもらおう！」

そう言っつてプロキオンは椅子から立ち上がり、手を前にあげる

プロ「来い、トップドール！アタックドール！キャリアードール！コアドール！」

そう叫ぶとプロキオンの回りを囲むように今まで機巧人形 ドール を召喚していたのと同じ灰色の魔法陣が現れ、中からさっきの盾を持った機巧人形 ドール と同じ青色でいびつな形の機巧人形 ドール が4体出てきた

直「…それで？（あれ？何かどこかで見たことあるような…）」

プロ「慌てるなっつて……行くぜ？ トップ、アタック、ガード、キャリアー、コア！トランスフォーメーション！」

プロキオンの言葉と共に5体の機巧人形 ドール は浮き上がり、変形していく

けど、それよりもオレの目に止まっていたのは…

直「！？ ウソだろ？」

機巧人形 ドール が変形している中心で、何とプロキオンまで

変形していた

手と足の先から灰色の粒子になって消え始め、腕は全て消え脚は太ももの半分まで消えた

そして、胸には何かを接続するような穴が開いた

プロ「驚くことはないだろ？最初っからサイボーグだったただけだ」
やがて変形が止まったそれぞれはプロキオンへと合体し始めた

“キャリアードール”と呼ばれた機巧人形 ドール は大きな脚のようなものになりプロキオンの下半身と接続した

“アタックドール”と呼ばれた機巧人形 ドール は右腕に変形し、右肩に接続した

アタックというだけあって、手の甲側から伸びた長剣が目に入る

“ガードドール”と呼ばれた機巧人形 ドール は左腕に変形し、左肩に接続した

さつきザケルガを防いだ盾が目立つ

“コアドール”と呼ばれた機巧人形 ドール はプロキオンの胴体を包むように囲み、胴体の穴に合わせて接続した

その胸には“ ”のマークがあり、その中では青い光が輝いていた

そして、“トップドール”と呼ばれた機巧人形 ドール は甲

冑の兜のようなものになりプロキオンの頭を包んだ

その正面には十字型の溝があり、溝が交差する場所に赤く光る目のようなものがあつた

合体が終わつたのか浮かんでいたプロキオンは地面に着地する

全長は約3メートルつてどこか…

プロキオンは動作チェックのつもりなのか手を握ったり開いたりを繰り返している

プロ「ズイブント余裕ナンダナ…。接続完了マデノ約10秒、攻撃スルチャンスハアツタハズダゾ？」

…何か急に声が変わつたな…

直「それがお前の武器なんだろ？お前みたいなクソ野郎には自分の自信を砕かれた絶望を味わってもらいたいからな…」

プロ「…ハツハツハツ！無理ダナ！ジュエルシールドニヨツテ完成シタコノ“機巧帝 キコウテイ”ニハオマエジャ勝テネエヨ！」

直「（……………機皇帝！？ いや、字が違うのかも…。でもそう言われれば、何か見た感じどこことなくワイ ルに似てる気がするな…。胸に“ ”マークあるし…）」

プロ「サア、始メヨウカ…。殺シアイヲ！！」

プロキオンは右腕をあげると手のひらにある砲口にエネルギーが

チャージされ始めた

直「このぐらい避ければ…っ!? (後ろにフェイトたちが…)
クソッ、ならこっちも撃つ!」

同時にプロキオンもチャージが終わったみたいだ

プロ「食ラエ! アボロディア!」

直「エクセレス・ザケルガ!」

緑色のビームと雷の砲撃が衝突し、爆風と煙が発生する

直「クソッ…プロキオンは?」

一瞬目を瞑ってしまい、あわてて向き直ると…

煙を突き破りこちら目掛け迫ってくるプロキオンが見えた…しかも…

直「(速い!?! 何でこんなスピードが…)」

プロキオンのスピードはその巨体からは想像出来ない凄まじい速さだった

おそらく人間の全速力と同等ぐらいだった

プロキオンはその加速を利用し、右腕の長剣で素早い縦振りを仕掛けてきた

プロ「ハアアアッ！」

直「！？（受け止めるには重すぎる！）」

受け止めず、受け流す！

ギギギギギギッ！

オレはバリーを素早く抜き、斜めに構えて、プロキオンの剣を受け流した

直「（チツ、何てパワーだ…まともに受けてたらバリーが折れたかも…）」

オレは数歩後ろに下がった

プロ「ドウシタドウシタ！攻メテコネエナラコッチカライクゾ！」

クソッ、あまり調子に乗るなよ…すぐにその自信、ぶっ潰してやる！

SIDE：直樹 OUT

第二十二話 敢えて言おう、カスであると！！（後書き）

プロキオンの能力：元ネタがわかった人も多いかと…

さて、次回でいよいよ最終戦も決着です！

そこそこ期待して待ってもらえると嬉しいです！

余談ですが、お気に入り登録数が100件を越えました！

本当に嬉しいです！

登録してくださっている方々、ありがとうございます！

第二十三話 決着（前書き）

お待たせしました！

ようやく最終戦の話が出来上がりました！

…時間かけた割には微妙すぎる内容と仕上がりますが…

…まあ、戦闘描写スキルの無さなら自覚してるし…

とりあえず第二十三話、始まります！

感想待ってます！

第二十三話 決着

S I D E : なのは

な「ハアアアアッ！！シユウウツッ！」

私の掛け声で魔力を込めたシューターが機巧人形 ドール 目掛けて飛んで撃ち抜いていく

狼形態になったアルフさんが機巧人形 ドール に噛みついて倒したり、リニスさんが魔力弾で飛んでる機巧人形 ドール を撃ち落としてる

ユーノくんは攻撃が苦手みたいだけど代わりにバインドでたくさん機巧人形 ドール を縛りあげて私たちが攻撃しやすいようにしてくれてる

…それでも、ここにいる機巧人形 ドール はなかなか減つてくれない

な「もう！ちっとも減らないよー！」

リ「頑張ってくださいなのはさん！コイツらさえ倒せば、あとは戻るだけですから！」

そう、私たちが今戦っているのは暴走している駆動炉があった部屋なの

過去形になってる理由は簡単…もう駆動炉になってたロストロギアは私たちが封印したからなの

その後、直樹さんとクロノくんと打ち合わせ通り急いで帰ろうとした時にいきなりたくさんの機巧人形 ドール が召喚されたの！

そのせいで戦うことになっちゃって…

ア「でも、来的时候には1体もいなかったのにねえ！」

ユ「たぶんだけど、プロキオンもそのロストロギアが欲しいんじゃないかな？ジュエルシードは大して獲れなかったみたいだし…」

リ「でも、魔力の反応からしてこの最下層で戦っているのは直樹さんとプロキオンです。ならこの召喚は何かを媒体にした自動召喚かも…」

な「そ、そんなことが出来るんですか！？」

リ「よっぽど優秀な召喚士なら…十分可能です」

…てことは…その媒体つてのを壊さないとキリが無いってことなの！？

でもどれが…

ユ「……！？　ちよつとみんな、いいかな！？　あれなんかそれっぽくない？」

な・ア・リ「……えっ？」「」

私たちはユーノくんが指差す方を見てみる

そこには機巧人形　ドール　の軍団の後ろでじつとしている大きな機巧人形　ドール　がいたの

な「（……大仏様みたい……）　ユーノくん、あれがどうかしたの？」

ユ「うん、さっきまでは戦うのに必死で気づかなかったんだけど、あの機巧人形　ドール　の胸に刻んであるマークが光ってから機巧人形　ドール　が召喚されてるんだ……ほら！」

ユーノが言ったあとすぐにマークが光って、機巧人形　ドール　が召喚されたの！

な「本当だ！」

ア「ならアイツさえ倒せば……」

リ「召喚が止まる……試す価値は十分あると思います！」

ユ「なら……なのはは砲撃のチャージをしておいて！この中で一番攻撃力があるのはなのはだから」

な「任せて！」

スターライトブレイカーは使えないけど…今出来る全力で…撃ち抜くんだ！

S I D E : な の は O U T

S I D E : アルフ

なのはが攻撃するってことは…

ア「アタシたちはなのはに邪魔が入らないように周りの相手だね
」！

リ「はい、けど倒したら増えるだけですから動きを止めるしか
…」

ア「しょうがないね！」

アタシはチェーンバインドで片っ端に機巧人形 ドール を縛っ
ていく

ア「なのは、あとどのくらいだい！？」

な「あと…10秒あれば！」

ア「よし！楽勝だね！」

…その気の緩みがいけなかった

ジャキツ…

ア「!？」

後ろで機械音が鳴り、振り向くと…

銃口をこっちに向けてもう引き金を引いている機巧人形 ドール
がいた…

ア「（…ダメだ…、アタシが避けたら…後ろにいるのはに当た
るかも…でも、コイツらの銃は…殺傷…設定…）」

倒すにしてももう遅い

放たれたビームはもうほんの少しでアタシに当たる

…死んじゃうのかな…、フェイト…リニス…なのは…ユーノ…

ユ「アアアアアッ!!」

一瞬のことで、何が起きてるのかわからなかった

視界の端ではリニスがなのはの前でビームを防いでて同時になのはが砲撃を放っていた

…何で？ 何で避けれたんだい？

その答えは…すぐにわかった…

ユ「くっ……」

ア「ユ、ユーノ!?」

地面に落ちたアタシに覆い被さってユーノが倒れてた

けど…何かおかしい…

アタシは人型に戻って急いでユーノを起こそうとして背中に手を
回す

ピチャッ…

ア「…えっ…」

ユーノの背中を触ると何か液体に触った

触った手をみると…赤かった…

ア「ユーノ!? アンタまさか、アタシを庇ってケガを！」

ユ「…大丈夫だよ…ちょっとかすった…だけだから」

ア「そんなわけないだろ！」

リ「アルフ！大丈夫ですか！」

な「アルフさん、ユーノくん！…！？ ユーノくん！？」

なのはとりニスがこっちに向かってきた

周りを見てみるともう機巧人形 ドール は1体もいなかった

ア「リニス！ 何とかしてくれおくれよ！ ユーノが！」

リ「落ち着いて！ 見た目ほど酷いケガじゃありません。応急措置程度の回復魔法しか私はできないので…とりあえず魔法はかけますから急いでアースラに行くのが1番です！」

な「なら、早く行きましょう！」

リニスが回復魔法をかけながらユーノの体を浮かせて急いで移動する

ユーノ、なんでこんなに無茶をするんだい！

…死んじゃ嫌だよ！！

S I D E : アルフ O U T

S I D E : 直樹

ドコオオオオンッ！！

大広間に土煙がたち、その中からまずオレが背中向きに飛び出し、それを追いかけてプロキオンがすぐに出てくる

プロ「ドウシタ？ 逃げてバカリジャ勝テネエゾ！」

直「チツ…ディオガ・テオラドム！」

オレはプロキオン目掛け巨大な爆発の塊を放つ術、ディオガ・テオラドムを撃つ

けど、これでも…効かない…

プロ「無駄ダア！」

プロキオンは左手に付いている盾をディオガ・テオラドムに向けて構える

そして、盾に術が触れた瞬間…ディオガ・テオラドムはかき消された…

プロ「何度モ同ジコトヲ言ワセンナヨナ!“ガードール”ノ盾
ハ機巧帝トナツテイルトキ、魔力ニヨル攻撃ヲ全テ打チ消ス!ド
ンナ強力ナ攻撃デモナ!”

クソツ…幻想殺し イマジンプレイカー ですか、って話だよ…

オレの攻撃はほとんどが魔力を使ってるからな…

あの盾で触れば全部消せるってことか…

落ち着いて考えれば何か突破口になりそうなものがあるはずだ…

プロ「アボロディア!”

プロキオンがまた右手からビームを放つ

直「ラシルド!”

オレは雷を付加して反射する能力がある盾、ラシルドで受けプロ
キオン目掛けて跳ね返す

プロ「跳ね返シテクルカ! ダガ甘イ!”

プロキオンは跳ね返した自分のビームも盾で受け止める

直「!?!? 消せるのは魔力だけじゃないのか?”

プロ「ソノトオリ、盾ノ力デ消セルノハ魔力ダケ…ダケドナ、盾
本来ノ防御デモアノクライ防ゲルンダヨ!”

…つまり、ラシルドで足した雷を能力で消してビーム自体は盾そのもので受けたってことか…なら…

プロ「止マツテル時間ガ長インダヨ！」

プロキオンはまた急加速して迫ってくる

どうやら、脚や背中に付いているスラスタで加速してるみたいだ

プロキオンは右腕の剣を振るってくる

直「(ココだ!)」

バリーを斜めにしてプロキオンの剣を受け流してそのまま至近距離に迫る

プロ「ナツ!?!」

直「動きが大きすぎだ…」

オレは腰の横にバリーを構え…振り抜いた

直「御神流剣術居合い、空牙！」

S I D E : 直樹 O U T

SIDE：フェイト

直「御神流剣術居合い、空牙！」

プロキオンの剣を受け流して間合いにはいった直樹は構えてた剣をプロキオン目掛けて振るった

その時、直樹の剣が一瞬何かを纏ってたように見えたのは…気のせいかな？

とにかく、直樹の剣は真っ直ぐにプロキオンに向かう

プロ「クソオオツ！」

けど、プロキオンはギリギリで少し左に避けて剣を体の中心から逸らした

それでも直樹の剣はプロキオンの右腕を人でいう二の腕の半ば辺りから斬り落とした

フ「ッ!？」

ちょっとびっくりしたけど切り口から見えるのは機械だけだからかすぐに落ち着いた

直「さあどうする？ 見たところ攻撃手段が無くなったみたいだけど？」

プロ「ハッ！ゴ心配ドウモ…ケド、スルベキハオレノ心配ジャネ
エナ…ハアッ！」

プロキオンはいきなり盾を地面に突き刺した

するとプロキオンを囲むように緑色の障壁ができる

直「…鉄 クロガネ ！」

すぐに直樹がその障壁に攻撃する

鉄 クロガネ って言ったら私が直樹と初めて会ったときに直樹が
使ってた技だよな…大きさが全然違うけど…？

鉄 クロガネ は障壁に当たるけど、当たると同時に消滅した

盾と同じ能力！？

プロ「氣ツイタミタイダナ…ソウ、コノ障壁八盾ト同ジ能力ヲ持
ツテイル！ タダシ、時間八20秒ダ」

何のためにそんな…

その時、プロキオンは壊れた右腕、“アタックドール”をいきな
り切り離れた

直「！ そうか！」

直樹は何か気づいたみたい…けど…

プロ「遅イ！ コーリング、 “アタックドール2”！」

すると、プロキオンの右側に魔法陣が現れて、中から新しい機巧人形 ドール が出てくる

機巧人形 ドール は出てくるとすぐに変形を始めてプロキオンの右肩に接続される

新しい右腕は剣が無くなって、代わりに大きな三ツ又の爪が伸びていた

それに所々違つところがあるみたい…

プロ「サア、第2ラウンドダ！」

それと同時に障壁が無くなってプロキオンは直樹に向かってビームを撃つ

直樹はそれを避けながらまた斬るため間合いを詰めようとする

……これじゃ…

フ「これじゃいつか直樹が負けちゃう！」

どうしたら…どうしたらいいの！？

その時…

プレ「……フェイト……」

フ「！？ 母さん！大丈夫なの！？」

気絶していたはずの母さんが体を起こしてこっちをみていた

プレ「ええ、何とかね……。フェイト、直樹が勝つにはあなたの力が必要よ」

フ「母さん、どうすればいいのかわかるの？」

プレ「推測だけだね……。さっきからの戦闘を見ていて思い付いたの。いい、フェイト……。私の言う通りのことを試してみて？　きっと直樹を助けられる！」

フ「……うん！　任せて！」

そして始まる……。 “大魔導師” プレシア＝テストロッサとその娘、フェイト＝テストロッサによる……。反撃が……

S I D E : フェイト O U T

S I D E : 直樹

クソッ……。さっきから同じことばかり繰り返してる

このままじゃ……。こうなったら……。今フェイトたちに見られるのはい

ろいろとまずそうだけど、アレを使うか…

プロ「いい加減消エロ！アボロ…」

直「チツ…バリー！モード…」

けど、アレを使うのは止めた…

オレとプロキオンの間に…フェイトが来たからだ…

直「フェイト！？」

プロ「アア！？ 人形が邪魔二入ッテンジヤネ「サンダースマッシャー！」ツ！？（アボロディアガ間二合ワネエ！？）クソオ！」

プロキオンは右手のチャージを止め、盾を構える

サンダースマッシャーは盾に当たってすぐに消滅していく

サンダースマッシャーを消しきったプロキオンは構えを解いた

その瞬間…

フ「ファイア！」

フェイトの掛け声と共にフォトンランサーがプロキオンへと発射される

また消されるだけだ…

そう思っていたオレは次の瞬間驚いた

プロキオンはフォトンランサーを“かわした”…

直「なっ!？」

プロキオンは大きく右に移動してフォトンランサーを避けた

フェイトは向きを変えてすぐにプロキオンを狙う

ところが、今度のプロキオンはフォトンランサーを“盾の能力で消した”

直「……………まさか」

フ「…母さんの言った通りだ…(直樹、聞こえる?)」

直「(ああ、聞こえるぞ)」

フ「(今の攻撃でわかった…。プロキオンの盾は母さんの言った通りだ)」

直「(プレシアさんの?)」

フェイトはフォトンランサーを連射しながら答える

フ「(母さんの話だと…あの盾は受け始めた攻撃を消しきるまでは能力は続くみたい。けど、1度能力を終了すると次に使えるまで少しだけ“インターバル”がある。それを利用したら…)」

直「（十分勝てる！…フェイト、力を貸してくれないか？）」

フ「（…もちろん、いいに決まってるよ！）」

直「（ありがとう…）…行くぞ！」

フ「うん！」

フェイトはフォトンランサーを止め、横に避ける

プロ「フウ、ヨウヤク終ワツタカ…。マツタク、無駄モイイト
コロダゼ…サア、ソロソロ終ワラセヨウカ！イレギュラー！」

直「そうだな…そろそろ終わりだ…ザケル！」

プロ「ナツ！？」

プロキオンは驚いている

まあそうだろ…オレが術を地面目掛けて放ったんだからな

辺りをザケルの閃光が包み、一瞬何も見えなくなる

プロ「クソツ！眩シクシタトコロデ何モ変ワンネエゾ！」

おお…賭けだったんだけどサイボーグでも眩しかったみたいだな…

でもってこれで…勝利の方程式は整った！

プロ「…ッ！？アノ人形ハドコイッタ！？」

もう遅い…

直後、プロキオン目掛けて上から雷が落ちてくる

プロ「ッ!?!」

プロキオンはギリギリで反応し、盾を上にも構えた

雷は消滅していくが、その前に…

フ「サンダァー…レイジィイ!!」

次弾は放たれた…

フェイトはさっきのザケルの閃光の間にプロキオンに気づかれな
いように上に飛び上がった

フ「ハアアアッ!」

プロ「調子に乗ってんじゃネエゾ、人形ガァ!」

フ「私は…人形なんかじゃない!母さんの娘、フェイト!!テスト
ロツサだ!」

…よし、魔力のチャージもこれでいける!

フェイトが教えてくれたあの盾の弱点は2つ

1つは、消している攻撃を消しきらない限り盾は動かせない

今プロキオンは盾を支えるために両腕を上にもっている

つまり…

直「ザケルガア！」

プロ「ッ!？」

がら空きだ…

するとプロキオンは無理にでもサンダーレイジから逃げ出してザケルガを避けるしなくなる

プロ「クソッ！」

ここで弱点の2つ目が活きてくる

2つ目は、盾の能力は次に発動するまでにインターバルが存在すること（約数秒）

つまり…今この瞬間撃つ術は…無効化されない

オレは構えてた両手をプロキオンに向ける

フェイトはもうオレの後ろ側に下がっていた

直「…チェックメイトだ」

オレの両手が金色に光る

そしてオレは叫ぶ…

オレたちに勝利をもたらすであろう…雷の竜の名を

直「バオウ・ザケルガア!!!」

「バオオオオオ!!!」

プロ「…クソツ…クソツ…クソガアア!!!」

プロキオンは盾を構えるが能力のない盾ではバオウを受け止められないわけがない

あっという間に盾は砕け散り、プロキオンは雷の奔流に飲まれた

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : フェイト

フ「す、凄い……」

直樹の決め技は私の想像を軽く越えた術だった

あんなのを受けたらいくらプロキオンでも……

煙がだんだん晴れてきてプロキオンのいた辺りも見えるようになってきた

フ「……嘘……」

プロキオンはまだ立っていた

けど、両腕は無くなっていて体もところどころ溶けてたり、ケールブルが出てたりしていた

プロ「……マサカ、負けチマウ、トハナ……」

プロキオンはギシギシいわせながら顔をこっちに向けてきた

プロ「ダケドナ……オレノ目的……ジュエルシードノ回収……ソレニ、イレギュラーノ、戦闘データノ収集……ハ全部……達成サレタ！」

その時、プロキオンの足元に魔法陣が広がってプロキオンを光が包む

プロ「オ前二ハ……イズレマタ挑ムコトが、アルダロウ……セイゼイソレマデ、生キテオクンダナ！」

そう捨て台詞を残してプロキオンは消え去った

フ「お、終わったんだね…」

直「…ああ、完全勝利って訳でもないけどな…」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ...

直「…もうすぐ崩れそうだな…急いで脱出するか。フェイト、プレシアさんを支えてくれ！」

フ「うん！」

その時、大広間に来る前に別れたクロノ執務官が走って入ってきた

クロノ執務官もかなりボロボロになっていた

直「クロノ、お前何してたんだ？」

ク「ああ…プロキオンを探して玉座の間に入ったんだが…そこで残りの8つのジュエルシードを獲ろうとしている機巧人形 ドールと戦いになってね…。結局、半分の4つも獲られてしまった…」

直「そっか…。まあそのことはあとで話し合うとして…クロノ、なのはたちはどうなったか聞いてるか？」

ク「彼女たちはもうアースラに戻ってる、とさっき連絡が入ったよ」

直「…てことはあとはオレたちだけなんだな…よし、どこでもドア！」

直樹はバリアジャケットについていた白いポケットからピンク色のドアを引き出した…ってどうやって!?

直「これの説明ならあとでする！えっ…と、アースラのブリッジ！」

そう言っつて直樹がドアを開けると、ドアの向こうはなんとアースラに繋がっていた…ええっ!?

直「3人とも先に行ってくれ！」

フ「直樹は!?!」

直「オレはまだここに用事があるんだ…大丈夫！すぐに戻るから！」

直樹は私と母さん、クロノ執務官をアースラに急いで乗せる

直「じゃあ、また後で！」

直樹がドアを閉めるとドアはみるみるうちに消えていった

…早く戻ってよ？直樹…

SIDE:フェイト OUT

第二十三話 決着（後書き）

次回でようやく無印編が終了します！

出来る限り早く投稿するつもりです！

第二十四話 終結 前編（前書き）

「さあ、ガンバルぞ！」と意気込んで無印編最終話を書き始めたのが約2週間前…

結果から言うと、作品自体は1週間前に出来上がりました

ところがその文字数を見てビックリ…

文字数：2万字オーバー

…いやいや…さすがに1話でそれは…ちょっと…

と言う訳で文字数削減アンド複数話への分割作業を始め…1週間…

結果、まさかの前・中・後編となりました

…まあとりあえず第二十四話、始まります

中編は今日の12時、後編は今日は18時に予約投稿済みです

第二十四話 終結 前編

SIDE：直樹

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ...

直「ヤバいな…さっさと済ませないとここ、崩れちまうな…？」

オレは目的の場所目指してひたすら走っていた

オレの目的っていうのは…いわゆる、回収だ

回収しにきたのは2つ

1つは…

バアン！

直「オリヤアアツ！ …えつと…！！ あった！」

ほとんど体当たりも同然に扉を開けて入ったのは、初めて時の庭園に来た時に入ったプレシアさんの自室だ

目的のものは幸いにもすぐ目につくところに置いてあった

オレはそれを四次元ポケットにしまおうと急いで部屋から出る

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

直「ヤバいやババ！ 電光石火 ライカ！」

オレは電光石火 ライカ を装着して廊下を一気に加速していく

もう1つの目的のものもちょうどこのフロアにある

直「ここか！よし、当たり！」

その場所は…玉座の間…

そつ…ここでの目的は…

直「…君のお母さんと約束したからね……迎えに来たよ」

1人の少女を収めたポッドだった…

SIDE…直樹 OUT

SIDE…なのは

な「フェイトちゃん!」

フ「なのは…」

ユーノくんを医務室に連れていったあと、私は状況が気になってブリッジに行ったの

そしたらいきなりピンク色のドアが出てきて中からフェイトちゃんとかクロノくん、それにプレシアさんが出てきたの!

リン「クロノ!? フェイトさん!? プレシアさんまで!?!」

リンディさんもかなり驚いてるみたい…

リン「3人ともケガをしてるわね…。特にプレシアさんが酷いわ。誰か手の空いている人、3人を医務室へ!」

プ「私なら大丈夫…。だいたい治したから、見た目ほど悪くはないわ」

ク「それより艦長、まだ時の庭園に直樹が!」

な「!?!? 直樹くんが!?!」

そんなっ!?! だってあそこはもう…

「時の庭園、間もなく崩壊します!」

管制の人の声が私をますます焦らせる

その時…

ヒュン！

「「「「「つ！？」」「」「」「」

私たちの前に直樹くんのあのピンク色のドアが出て…

直「でえいやあああっ！」

そこから直樹くんが飛び出して来たの！

直「ハア〜ツ… ギリギリセーフ！」

な「直樹くんっ！」

フ「直樹っ！」

私は我慢出来ず直樹くんに抱きついた

フェイトちゃんもほとんど同時に飛び付いたから直樹くんの右側に私、左側にフェイトちゃんがいる状態になったの

な「心配したんだよ？ あの中に残ったって聞いたから…」

フ「あんまり無茶はしないで…」

直「ゴメンゴメン…、オレはちゃんと戻ってきて…。心配してくれてありがとな？」

そう言っただけで直樹くんは私たちの頭を撫でてくれたの／／

な・フ「あう…／／」

顔がどんどん熱くなるのが嫌でもわかった

隣を見るとフェイトちゃんも赤くなっていた…やっぱり、フェイトちゃんも…

直「あれ？　そう言えばユーノとアルフ、それにリニスも…どこにいるんだ？」

な「あつ…、アルフさんとリニスさんはユーノくんの付き添いで医務室に居るよ」

直「ユーノ、ケガしたのか？」

な「うん…」

直「…よし、医務室に行こう。プレシアさんもクロノもケガしてるしな」

ク「待ってくれ直樹、残っていたい何をしてたのか先に教えてくれないか？」

直「そのこともちゃんと話すから、とりあえず医務室に行こうぜ」

ク「…わかったよ」

それからクロノくんを先頭に直樹くと私、フェイトちゃんとプレシアさんは医務室に移動するためにブリッジから出ていったの…

S I D E : な の は O U T

S I D E : アルフ

ユーノのケガはリニスの言った通りアタシが思ったたよりは深くなくて、リニスの回復魔法で血は止まってユーノは今、アタシの目の前でベッドで寝ている

疲れてたみたいだったしね…

リニス は 飲 み 物 を 貰 い に 外 に 出 て い っ て 、 ア タ シ は ユーノのベツドの側で椅子に座ってる

ア「…人に体を大切にしろ、なんて言うって…自分はどうかんだい…。いくらアタシが無事でも、アンタがケガしてちゃ意味ないよ…」

…ユーノがアタシのせいでケガをして血を流しただけで、こんなに胸が苦しくなる…

もしこのせいで、ユーノがアタシのこと嫌いになったら…イヤだよ…

…ッ！？ 何で…こんなにユーノのこと…考えちゃうんだろ？

考えてみたけど、答えが出る前に考えるのを止めた

医務室に、待っていた人を含めて大勢入ってきたからだ

けど本当に…何なんだい？ この気持ち…

S I D E : アルフ O U T

S I D E : 直樹

クロノに連れられてきたのは原作でフェイトが寝ていた部屋だった

やっぱりここが医務室だったのか…

ア…っ！ フェイト…！

オレたちが入っていくとフェイトに気づいたアルフがこっちに向かってきた

ア「フェイト、大丈夫だったかい？」

フ「うん、心配かけてゴメンね？」

抱きついてきたアルフをフェイトは受け止めて頭を撫でる

プ「…アルフ」

ア「っ！ プレシア…」

プレシアさんがアルフに近づいていく

プ「…ごめんなさい！」

ア「えっ!？」

プ「いくら操られてたとはいえ、あなたとリニスを私はこの手で傷つけた…。本当に、ごめんなさい！」

ア「…いいさ」

プ「…えっ?」

ア「操られてたつてのはさっきわかったしさ…それに、アンタはフェイトを好きでいてくれるからね。もういいさ」

プ「アルフ…ありがとう」

ア「いいっていいって！ あっ、それと…リニスにもちゃんと謝ってあげなよ？」

プ「…もちろんよ」

このあと、プレシアが謝っているのをリニス在必死に顔を上げさせようとしていたのは言うまでもない…

ユ「…ん…ふああ…あれ？　ボクはいつたい…」

プレシアさんがアルフに謝り終えた頃、ユーノがちょうどベッドから起き上がった

直「ようユーノ、元気か？」

ユ「直樹…そうだね、まだ少しケガが痛むけどもう結構元気だよ」

直「そっか…まあ念には念を入れるか…。ユーノ、ちょっと立てるか？」

ユ「？　うん、全然大丈夫だけど？」

直「んじゃ立ってくれ。で、ユーノの前になのはとフェイトが1列に並んで…そうそう…でもってユーノの後ろにクロノで、最後にプレシアさんが1番後ろに。で、列を崩さずに…はいオッケー！」

な「直樹くん、これで何するの？」

直「ん？ 治療だけど？」

そう言いながらオレは列の前に立つ

直「アルフは…ケガは大丈夫そうだな」

ア「ああ、アタシはユーノのおかげで大したケガはしなかったんだ」

直「わかった、そんじゃやるか…」

オレは両手を上に上げる

人数が多いからな…少し魔力多めでいくか

直「いくぞ！…サイフォジオ（大きめ）！！」

魔力を増やしたので少し大きめになったサイフォジオを振りかぶり…

直「そおおれええっ！」

5人に刺した

サイフォジオは5人を真っ直ぐに貫通する

な「ダメージは無いって知っててもやっぱり怖いよ〜！（涙）」

フ「私は…これで3回目だから平気かな？」

1分ほどで全員が回復し終わり、サイフォジオは消えた

プ「見事な回復魔法だね。あなたって何でも出来るのね」

直「そんなことないですよ」

ク「直樹、そろそろ話を聞かせてくれないか？」

直「そうだな…オレがあそこに残った理由はな…忘れ物を取りに
いったんだよ」

ク「忘れ物？ すまないが見せてもらってもいいか？」

直「いいけど…1つ言っておくことがある。クロノ、ユーノ…お
前らはいあんまりじっくり見るなよ？」

ユ「どういう意味？」

直「すぐにわかるって…オレが持ってきたのは2つ」

オレは四次元ポケットに手を入れて1つを取り出す

直「1つはこれだ」

プ「っ!？ それは私のアルバム!」

1つ目は初めて来たときに見つけたテストタロツサ家のアルバムだ

直「こんな大切なものを無くしたらもったいないと思ひまして、
急いで取ってきたんです」

プ「直樹…ありがとう」

プレシアさんの目には微かに涙が浮かんでいた

直「まだ泣くのは早いですよ？プレシアさん」

プ「？ どういうこと？」

直「すぐにわかりますよ」

ク「これのどこが“じっくり見てはいけないもの”なんだ？」

直「それは2つ目のものだ…いいか？ 絶対じっくり見るなよ」

そう言ってオレはまずポケットから毛布を出しておく

そして…

直「…よっ…っいしょー！」

ポケットに両手をつっ込んで“ソレ”を引っ張り出す

ゴトンッ…

な「そ、そんな…」

フ「…嘘…」

プ「…アリ…シア？」

…そう、2つ目は…アリシアを収めたポッドだった…

ユ「……／／／」

ユーノは一瞬確認したあとすぐに顔をそらした

やっぱり…裸だもんなあ…

ク「……っ！／／／ キミはこれを持ってきて何がしたいんだ！」

さすがは執務官…何とか視界に入れないようにして意地でも聞こうとしてくる

直「決まってる…プレシアさんとの約束を果たすためだ」

プ「私との…まさか!？」

直「はい…、アリシアちゃんを蘇生させます」

ク「そんなこと、いくらキミでも出来るはずがない！」

直「出来るからするんだって…そうだな…」

その時、今までいなかったリニスが入ってきた

リ「うう…結局どこに飲み物があるのかわかりませんでした…
涙…って、これは!？」

直「おお、ちょうどいい。リニス、それにアルフとプレシアさん。アリシアちゃんをポッドから出してください…あっ、体はその毛布でくるんであげてください」

プ「わかったわ」

ア「いいけど…」

リ「何が何だか…とりあえずやりますよ」

3人が作業に取りかかり出す

直「ほらクロノ、ユーノ。オレたちは後ろ向いとくぞ？」

ユ「う、うん…わかったよ」

ク「…絶対に出来るはずがない…」

数分後…

プ「終わったわよ」

直「ありがとうございます」

振り向くと、ポッドから出されたアリシアちゃんがさっきユーノが寝ていたベッドに寝かされていた

フ「直樹、本当に…アリシアは生き返るの？」

直「ああ…ただフェイト、お前はどっ思うっ？」

フ「えっ？」

直「ついさつき通信でも聞いた通りプレシアさんはお前のことを本当の娘だと思っている。その上でアリシアとももう1度暮らしたいと思っっている。もちろん、フェイトも一緒のはずだ…そうですね？プレシアさん」

プ「当たり前よ…アリシアもフェイトも…私の大切な娘よ」

そう言い切ったプレシアさんの瞳は揺れること無くしっかりとしていた

直「それで…フェイトはどう思うんだ？」

フ「…私は…」

フェイトは1度うつむいて顔を上げる

フ「私も…アリシアに生き返って欲しい！確かに、私はクローソナだっけ聞いた時は悲しかったけど…母さんは私を娘だっけ言ってくれた。その母さんがアリシアにもいて欲しいって思うなら…私は賛成するよ。…それに…お姉ちゃん…欲しかったし／＼」

プ「フェイト…」

フ「だから直樹…出来るのなら…アリシアを生き返らせて！」

直「…もちろんだ」

オレは四次元ポケットからアナログ式のストップウォッチのよう
なものを取り出す

もちろん、これもひみつ道具だ

直「タンマウォッチ」

オレは名前を呼びながらボタンを押す

その瞬間…世界が止まった

“タンマウォッチ”の効果は今やった通り時間停止だ…

…青き機械猫よ、お前も実はチートの仲間なんじゃないのか？

なんて思いながらオレは行動することにした

時間を止めた理由は簡単だ

この部屋にもたぶん監視カメラや盗聴機があるだろう…

今からやる方法は見られる訳にはいかない

だって…オレもやり方わからないし…？

直「…なあ、バリー？ 喋れるか？」

ブ『はい、もちろんです。そして久しぶりのセリフです』

直「……とりあえずあとで不満は聞いてやるから今はそついう話は止めよう、な??」

ブ「……わかりました。それで何ですか?」

直「オレがこの世界に転生するときには、リアから“7回何でも願いを叶えられる力”ってもらっただろ?

あれの使い方を教えて欲しいんだ」

ブ「わかりました……。用途は……アリシアさんの蘇生ですよね?」

直「ああ」

ブ「では私を腕輪に戻して嵌め、アリシアさんにそのてをかざしながら言霊を私の言った通り唱えてください。いきますよ?」

直「オツケーだ」

ブ「……力を行使する者、名は有沢 直樹」

直「力を行使する者、名は有沢 直樹」

ブ「力を伝えし依り代よりしろ、名はブレイバリー」

直「力を伝えし依り代、名はブレイバリー」

ブ『願うは輪廻転生の阻害』

直「願うは輪廻転生の阻害」

ブ・直『「神より賜りしその神霊、今こそ…その力を示せ！」』

言霊を唱えると同時にかざした右手から眩い光がアリシア目掛けて放たれる

数秒後…

直「…ハア…ハア…、かなり疲れるんだな…この力って」

ブ『でも、疲れたかいはあつたみたいですよ』

バリーに言われ、顔を上げて見ると…

タンマウオツチのせいで止まってはいるが、明らかに血色の良くなったアリシアがそこにはいた

直「成功したんだよな？」

ブ『大丈夫だと思いますよ』

直「よし、そんじゃ次だな」

オレは手にタンマウオッチを持ち直してプレシアさんに当てる

タンマウオッチの効果の中で自分以外の人間が動くにはタンマウオッチをその人に当てればいい

プ「…えっ？」

直「プレシアさん、わかりますか？」

プ「直樹？何の…っ！？時間が止まってる！？」

直「僕が止めてるんです。アリシアちゃんを蘇生させる方法を管理局に見せる訳にはいかなかったんで」

プ「っ！アリシアはどうなったの？」

直「大丈夫です。成功しましたから…時間停止を解除すればアリシアちゃんは動きますよ」

プ「…直樹、本当に…ありがとう…」

プレシアさんの目からはどんどん涙が溢れてくる

直「…で、プレシアさんに少し相談があるんです」

そう言っつてオレは四次元ポケットから1枚の布を取り出す

プ「…何、かしら？」

直「ズバリ、若返ってみませんか？」

第二十五話 終結 中編（前書き）

続けて中編、第二十五話始まります

後編は今日の18時に予約投稿済みです

第二十五話 終結 中編

SIDE:フェイト

…カチツ…

フ…えっ?」

何だろう? 今、何か違和感があったんだけど…

ク…っ! 直樹はどこに行ったんだ!？」

リ「えっ!? プレシアとアリシアもいませんよ!」

そんなっ!? 3人ともどこにいったの?

その時…

ウィーン

直「オイッス」

「「「「「「「「「「「「「「「」

全員かなり驚いている

直「おいみんな、どうした？」

な「どうしたじゃないよ！何で直樹くんが部屋の外から入ってくるの！？」

なのはの言う通りだよ……

直樹が「…もちろんだ」って言うてから5秒も経たずに3人ともいなくなっちゃったんだよ？

直「気にするな…オレは気にしない」

な「いやいや、気にするよ！？」

ク「…っ！直樹！いったいどうやって死人を生き返らせるつもりだ！？」

我慢できなくなったのかクロノ執務官が直樹に聞く

直「どうやって何も…もう終わったぞ？」

「……………はっ？」「……………」

びびりびびり……

フ「直樹、びびりびびりことなの？母さんとアリシアはどっ行ったの？」「……………」

直「ああ、2人なら今風呂に入ってるぞ」

フ「風呂って…っ!? じ、じゃあ…」

直「もちろん、蘇生は成功した。ただ、アリシアはずっとあの溶液に浸かっててベトベトだったし、動かさなくてガチガチに固まった筋肉をほぐした方が良かったから2人には風呂に行ってもらったんだよ」

ク「…そんな…あり得ない…」

直「あり得ないも何も…おっと、戻ってきたな」

フ「えっ?」

直樹につられて私もドアを見ると…

ウィーン

?「…えっと、みなさんこんにちは! アリシア=テストアロツサです!…お母さん、これでいいのかな?」

プ「もちろんよ、アリシア」

ドアから水色のワンピースを着たアリシアと紫色のシャツを着て紺色のロングスカートを履いた母さんが入ってきた

…開いた口が塞がらないって言うのはどういふことをいうのかな?

直樹以外はもう石像のように固まってしまった

だって…アリシアが生き返ったのは納得したとして…何で“アリシアは私と同じ身長”なの!?

さっき見たアリシアは絶対私より小さかったはず…

私はびっくりして声が出せなかった

アリ「…ふえ…（涙目）…お母さん、私おかしなことしたのかな？（涙）」

プ「だ、大丈夫よ!? みんなアリシアに初めて会ったから緊張してるのよ!（直樹、説明してくれてないの!?!）」

直「（今からするところですよ…）おゝい、まず全員思考の海から戻ってこい!」

「「「「「ハッ」「」「」「」

やっと私を含めて全員動き出した

…あれ? 気のせいかな…母さんが“若くなってる”気がするんだけど…?

直「まあとりあえず説明するから聞いてくれ」

(直樹の話では) 数十分前

SIDE：直樹 (過去)

直「ズバリ、若返ってみませんか？」

プ「……………はい？」

直「いや、だから若返っ「いえ、それはわかったわ」…：そうですね？」

プ「理由を聞いてもいいかしら？」

まあ、説明しといた方がいいよな…

直「あまり深い理由では無いんですけど…：アリシアちゃんの記憶は当然5才の時のままです。記憶にあるプレシアさんと今のプレシアさんとは違いがあるに決まっています」

プ「つまり、アリシアを驚かせないように私を若返らせておく、ってことね？」

直「はい、あとついでにアリシアちゃんもフェイトと同じ9才程度まで体を成長させたいんですけど…：」

プ「なるほど…、構わないわ」

直「わかりました…：で、失礼かも知れないんですけど…：プレシア

さんって今何歳なんですか？」

本当は知ってるけど…聞いておいた方が不自然じゃないよな？

プ「あら？ 女性に年齢を尋ねるなんて本当に失礼ね」

直「す、すいません！」

プ「冗談よ…私の歳はね…（ピー）歳よ」

直「本当ですか！？ 全然見えませんよ！？」

プ「嬉しいこと言ってくれるわね…でも本当よ？」

直「（やっぱり）信じられない…」

プレシアさんの年齢は17番目の素数です

直「…ゴホン…、じゃあまずプレシアさんから…。アリシアちゃん
が9才になるから…え…っと、だいたい3（ピー）歳まで年齢を
逆行させます」

逆行後の年齢は12番目の素数です

プ「わかったわ…でもどうやってやるの？」

直「僕の稀少技能 レアスキル、それにこれを併用します」

オレは手に持っていたものを見せる

プ「……ただの布じゃないのね？」

直「もちろんです…、これは“タイムふるしき”というもので、包んだものの時間を進めたり戻したり出来るんです。これに僕の能力をいくつか掛け合わせてプレシアさんとアリシアちゃんの年齢を操作します」

プ「…相変わらず凄いこと出来るのね…、いいわ。じゃあ始めてちょうだい」

直「わかりました」 オレはビックライトを使ってタイムふるしきを大きくする

直「（バリー、聞こえるか？）」

プ「（もちろんです。またあの力を使うんですね？）」

直「（ああ、道具だけだと永久的な年齢操作にはならないから…。あの力で永久的なものにする。出来るよな？）」

プ「（はい、言霊もさつき唱えた効力がまだ残っているのでマスタ―が心で念じれば発動します）」

直「（オツケー、サポートは頼むぞ？） じゃあ、始めます」

オレはプレシアさんに楽にして立っておいてもらい、その上からタイムふるしきを被せる

すると、タイムふろしきがプレシアさんを認識して時間逆行が始まった

直「答えを出す者 アンサートーカー 発動！」

オレは答えを出す者 アンサートーカー を発動する

理由はタイムふろしきを取るタイミングを見極めるためだ

タイムふろしきはその性質上被せている限りずっと時間を逆行していく

タイミング良く取らないと狙った通りの時間逆行は出来ない

直「（そういう意味ではドラえもんは高性能なのかも……。見た目何もしてないのに取るタイミングはバッチリだしな）」

何か今日は彼の凄さを改めて実感する日みたいだ……

そして……

直「（……今だっ！） プレシアさん、取ります！」

プレシアさんに声をかけながらオレは一気に取り払う

プっっ！ 眩しっ……？ 直樹、どうなったのかしら？」

結果はもちろん……

直「成功ですよ。あつ、見ますか？」

オレは四次元ポケットから全身うつせる大きさの鏡を取り出す
こういうときに日用品も入れておいて良かったって思えるよな

プ「…っ！？ 本当に若返ってる…」

鏡に映ったプレシアさんはさっきまでとは明らかに変わって背も
少し伸び、お世辞ではなくまさに美人って言葉が似合う姿だった

…っていうか、この世界の母親はみんな歳と容姿が一致しないな…

直「じゃあプレシアさん、次アリシアちゃんの方をやります」

オレはタイムふるしきをプレシアさんに被せた面と反対にしてア
リシアに被せる

こうすることでタイムふるしきの効力は時間進行になる

直「（今回は4年だからすぐに終わるな…）」

思ってた通りアリシアの方はすぐに終わった

プ「…凄すぎて何も言えないわね…？」

直「まあ、気にしないでください。それより、そろそろ対面の準備は…いいですか？」

プ「…ええ、お願い」

プレシアさんの言葉を聞いてタンマウォッチをアリシアの体に当てて

ア「……………(ピクッ)……………んっ……」

プ「っ!?!」

ア「……ん……んにゃ?」

プ「……アリ……シア?」

ア「へっ……あっ!お母さん、おはよう!」

プ「ア……リシア、アリシアッ!」

プレシアさんは涙を流しながらアリシアに抱きつく

ア「お、お母さん……くすぐったいよ!……あれ? 体が動かないよ
」?」

プ「アリ……ええっ!?! な、直樹!どういっこと!?!」

プレシアさんはオレの肩を掴んでグラグラ揺らす

直「うおっ……お、落ち着いてください!予想通りですから!」

プ「えっ、予想通り?」

直「考えてみてください。アリシアちゃんは何年も動いてなかったんです…だから、筋肉が強張ってるはずですよ。マッサージすればすぐに動くと思いますよ？」

プ「！　そ、そっか…そうよね…ごめんなさい、取り乱しちゃって…」

直「いえいえ」

その時…

ア「ねえお母さん、このお兄ちゃんだあれ？」

プ「あつ、この人は…そうね、あなたの“妹”の友達なのよ」

直「どうも、アリシアちゃん。オレは有沢　直樹っていうんだ…よろしく！」

ア「あつ、こんにちは！私、アリシアⅡテスト…ええっ！？　妹っ！？」

アリシアはプレシアさんに抱えられたまま驚いて声をあげる

プ「ええ、あなたの妹よ、アリシア。後で紹介してあげるからね？」

ア「うん、わかった…そうだ！よろしくね、直樹お兄ちゃん！」

直「お兄ちゃん？」

ア「…お兄ちゃんって感じだったんだけど…ダメ？（涙目）」

直「い、いや！全然オツケーだ！お兄ちゃんでもいいぞ」

ア「……うん」

ふう〜、焦った〜？

…さて、そろそろ時間停止も解除しないといけないし…

直「プレシアさん、風呂に入って来ませんか？」

プ「お風呂？」

直「はい、アリシアちゃんがこのまま保存液でベトベトなものかわいそうですし、それに風呂の中でマッサージしたらアリシアちゃんの体も早く動くと思いますよ？」

プ「そうね…アリシア、それじゃお風呂に行きましょうか？」

ア「はい！」

プ「でも…どこのお風呂を使うの？ 直樹がまたそのポケットから出すのかしら…」

直「そうしてもいいんですけど…まあここは…」

プ「ここは？」

直「この艦の風呂を勝手に借りましよう」

プ「……………まあ、いいでしょう…」

そして、オレとアリシアを抱えたプレシアさんは医務室から出て、
アースラの浴場に向かった…

S I D E : 直樹 (過去) O U T

直「…っという訳だ」

なるほど…じゃあ母さんが若く見えるのは気のせいじゃないんだ
ね？

私が驚いていると…

アリ「ねえ！」

フ「へっ!？」

ボウくっとしてて気づかなかったけど、私の横にアリシアが来て
いた

アリ「あなたがフェイト？」

フ「う、うん…」

アリ「本当に私とそっくりだね〜 あっ、私一応あなたのお姉ちゃんのアリシアだよ！よろしくね？」

フ「…うん！よろしく、アリシア…お姉ちゃん」

アリ「…うん…あっ、そうだ！私ね、直樹お兄ちゃんのおかげでフェイトと同じ年なの！だ・か・ら！無理して“お姉ちゃん”って付けなくていいよ？」

フ「う、うん…わかったよ、アリシア」

私が少し笑うとアリシアは満足したのか嬉しそうに笑った

アル「フェイト〜（泣）！よがっだね〜！」

リ「アルフ、泣きすぎですよ？ まあ気持ちはわかりますが…」

声のした方を見ると大泣きしているアルフと嬉しそうにしているリニスが近づいてきた…

アリ「…？ お母さん、この人たちは？」

プ「えつとね、そっちの泣いているのがフェイトの使い魔のアルフ…で、もう1人が私の使い魔のリニスよ」

アリ「そっか〜…よろしくね、アルフ！リニス！」

リ「はい、よろしくお願ひします」

アル「よろじ〜」（泣）「！」

…にしても、アルフ泣きすぎだよ…？

直「…さて、んじゃなのは、ユーノ、クロノ！ オレ腹減ったからさ、一緒に食堂に行かないか？」

な「えっと…っ！（そっか！） じゃあお供しようかな？」

ユ「っ！（なるほど…）うん、じゃあボクも」

ク「ボクはいい。まだ事件の事後処理もあるし、プレシアさんにも聞きたいことが…」

けど、クロノ執務官が言い終わる前に…

直「グダグダ言わずについてこい！」

直樹がクロノ執務官の服を掴んで無理矢理引きずっていった

ク「直樹！ボクには仕事が「食堂で蘇生のこと話そうか？」よし、早く行こう！」

とたんにクロノ執務官は自分で歩いて出ていった

直「ふう、手間掛けさせやがって…んじゃ、オレたちは出ていくんであとは…テストアロッサ家で積もる話でも」

そうやって直樹はなのはとユーノと一緒に出ていった

プ「…それじゃあ…せっかく直樹が時間作ってくれたんだから…

お話ししましょうか？」「

…直樹には…本当に感謝してばかりだね…

…ありがとう…直樹…／／／

S I D E : フ ェ イ ト O U T

S I D E : 直樹

…世の中には…やはり譲ってはならない時というものがあって…
オレの場合は今がまさにその時だろう…

直「…だから、さっさとプレシアさんを無罪にしろって言うてる
だろ？」

ク「それは無理だと言っているだろ？」

直・ク「……………」

直「全部プロキオンの罪にすればいいだろ？」

ク「いくらプロキオンを主犯に仕立てあげたとしてもプレシア女史が事件に参与していたのは事実だ。これは逃れようがない」

直「操られてたんだからしょうがないだろ？」

ク「確かに洗脳はされていたみたいだけど最初から洗脳されていた証拠はない」

直・ク「……………」

…ああ言えばこう言う、ってこういうのをいうんだろっな…

な「…ふえ〜…空気が重いのか…？」

ユ「まあ、話題が話題だけに…しょうがないとは思っけど…？」

ク「…ハア、いい加減諦めろ…プレシア女史は、残念だが無罪にはならない」

……いいだろう、ならオレがそのふざけた幻想をブチ殺す！…なんちゃって…

直「…だけど、そもそもプレシアさんの罪に問おうとする方がおかしい」

ク「…どういうことだ？」

直「例えば…プレシアさんはジュエルシードの危険性を知って娘

のフェイトに頼み、それらを封印してすべて終わったときに管理局にジュエルシードを持っていくつもりだった、としたらどうなる？」

ク「そんな訳が「もし！」「っ！？」

直「もしこれが真実だとしたらプレシアさんが無罪どころか管理局の方が悪者になるよな？」

ク「なんでそうなる！」

直「だって…もしそうだとしたら管理局は、“善意の協力者”の行動を犯罪と称し彼女たちの家に“不法侵入”し、更には“プライベートでもある”アリシアちゃんの遺体の入ったポッドを無理矢理調べようとして、それを守ろうとしたプレシアさんに“攻撃を仕掛けた”…ほら、こう考えただけで善悪が入れ替わる程度のことなんだ。なら無罪でいいんじゃないのか？」

ク「そんなの…ただの屁理屈「無罪でいいんじゃないかしら、クロノ？」「っ！？ かあ、艦長！？」

振り向くと食堂の入り口にリンディさんが立っていた

直「リンディさん…そちらの方はどうなっただんですか？」

リン「ええ、あなたとクロノのおかげでジュエルシードの暴走による次元震も予想より遥かに小規模で済んだわ。時の庭園が虚数空間に飲み込まれたのは残念だけどね…」

直「そうですか…よかったです」

ク「艦長！ さっきの話は本気なんですか！？」

クロノはオレたちの横に座ったリンデイさんに激しく聞く

リン「もちろんよ？ 今回のプレシアさんたちの犯罪と確認出来るようなものは“私が見た限りでは”フェイトさんの管理局に許可なくロストロギアを収集していたことだけ…。でもクロノはそれは罪とは考えてないんでしょう？」

ク「…そりゃ…親の頼みごとをこなしていただけの子を罪には問えませんよ…」

リン「でしょ？ だったら私はこの艦に乗っているテストロッサ家の皆さんには少しも罪は無いと思うんだけど…」

ク「…でも「そ・れ・に」「…？」

リンデイさんはニッコリ笑いながらクロノに言う

リン「本当はあなただって全員無罪にしてあげたいんでしょう？
クロノ執務官」

ク「んなあ！？ そそそんな訳あるはずがないじゃないですか
／／／！」

クロノは顔を真っ赤にして反対する

……いや、それはもう肯定だろ？

直「へえ、クロノっていいヤツだったんだなあ！（ニヤリ）」

ク「違う！そんな訳……」

ユ「素直じゃないんだね」（ニヤリ）」

ク「ち…違…」

な「クロノくんって、実は結構優しいんだね！（ニコツ）」

ク「……………う……」

クロノのライフはゼロのようだ…

…ん？ クロノがプルプル震えてる…

ク「うが…っ！そうだよ！無罪にしたいよ！どうせボクなんか…
素直になれない間抜けさ！！ ……ハハハ…」

…ヤバい…クロノが少し壊れたみたいだ……………まあいつか、すぐ
に直るだろ…

そのあと、食堂に来たテストアロッサ家も交えて（クロノは置いていて）食事会を行って、ようやくこの忙しかった1日が終わろうとしていた…

第二十六話 終結 後編(前書き)

いよいよ後編です

では第二十六話、始まります

感想待ってます！

第二十六話 終結 後編

S I D E : なのは

あの最後の事件から数日、私と直樹くん、それにユーノくんは無事に地球に帰って来ました！

フエイトちゃんとそのご家族は見事無罪になりアースラで保護観察処分になってるの

ただ、一応事情聴取を受けないといけないので一旦ミッドチルダに行くとのこと

ちなみにユーノくんはもう少し地球に居たいらしく、引き続きフレットに変身して家に残るみたい

…そんなこんなで、ようやく私にも普通の生活が戻ってきました！

今まで心配かけた分、アリサちゃんやすずかちゃんとは学校でいっぱいおしゃべりしたの

まあ、直樹くんはいつも通りアリサちゃんとケンカしてたけど…？

そして、帰って来てから5日後の朝…

… P P P P P ……

な「…んにゃ…」

…もう…土曜なのに、アラーム仕掛けちゃったの…？

私は枕元に置いてあった携帯のボタンを押して音を止める

… P P P P P ……

な「…ん〜…うるさいの…」

寝ぼけながら携帯を開くと…

な「…あつ、電話だったんだ〜…えっと、どちら様…ってええ〜
っ!?!?」

私は驚いて急いで通話ボタンを押した

だって…表示されてたのは…『時空管理局』だったから…

S I D E ……なのは O U T

S I D E ……直樹

オレはいつも通りの朝練を終わらせて、今は道場での稽古の準備をしている

もちろんそれは、このあと朝ごはんを食べ終えてから土郎さんとの稽古の準備だ

直「…そういえば…今日今まで習った剣術の型をテストする、って言ってたよな…」

また制限時間アリでの試合形式なのか？

…何て思っているか…

スパーン！！

大きな音と共に入り口の引き戸が激しく開き…

な「直樹くん！ 急いで胴着替えて！」

直「……………」

…ちびっ娘魔王様があらわれた……「コマンド『無視』を選択…

な「無視しないで〜！」

…出来そうにないな…

稽古前に精神統一したかったんだけどな…

直「どうしたんだ？ いきなり着替えるって…」

な「さっきクロノくんから電話があつてね、フェイトちゃんたちが今日ミッドチルダに出発するんだって！で、行く前に私と会いたってフェイトちゃんが言ってるから少し会わせてくれるんだって！」

直「…で、それで何で急いで…っ！…まさか…」

な「…私が寝ぼけてたのと…直樹くん探してたので…今結構時間ギリギリ…にはは…？」

直「……………」

な「で、でも！直樹くんのあのピンク色のドアがあればすぐにつくよね！？」

直「…どこでもドアは今酷使したから分解修理中だ…」

本当はタイムふるしきで直したいんだけど、それをするとオレが改造したもので消えちゃうからな…

な「…じゃあ…レイジングハート！ セエ〜ット「アホか！」んにゃー…」

いきなりセットアップしようとするとは…思わず叩いてしまった…

な「うう〜…痛いの…（泣）」

直「…ハア…なのははユーノを連れてきて門の前で待つとけ。オレの能力で行くから」

な「う、うん！」「その代わり」…？」「

直「少し乱暴に行くぞ？」（ニヤリ）」「

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : フェイト

次元震が小規模で済んだこともあって、ミッドチルダ方面の次元航路が早く安定したらしく、アースラは今日出発することのこと…

ならばと、リンディ提督とクロノ執務官になのはと直樹に会いたいと頼むと2人とも快く許してくれた

…という訳で私たちはなのはと戦った臨海公園のもう少し海に近い広場でなのはたちを待っている

ちなみに来ているのは私とアルフ、それにクロノ執務官だけだ

母さんはアリシアが「疲れたからまだ寝る〜」と言って起きなか

ったので一緒にアースラに残っている

リニスと母さんだけじゃ心配だそうで、2人と一緒にいる

……まだかな？

ちなみに今は約束の時間から10分オーバー……

ク「……遅い……（怒）」

ア「ま、まあまあ……？ もう来るって……たぶん……」

……気長に待てばいいよね？

ア「……ん？」

フ「？ アルフ、どうしたの？」

ア「いや、今なのは声が聞こえた気がしてね……」

フ「本当に？」

私は聞こえなかったけどな……

とりあえず耳をすませてみた

「……え……」

やっぱり何も……？ 何だろ？ 今一瞬……

んの数分前に聞いたとこなんだ…。どっかの寝坊助のせいだな…」

な「ごめんなさ〜い…」

ク「まったく…それじゃボクたちは向こうに行っておくからなのはとフェイトはここで…、直樹はどうする？」

直「そうだな〜、オレもとりあえずそっちについていくわ。フェイトも1番話したい相手はなのはだろうし…。ほらユーノ、こっち来とけ」

ユ「うん」

ユーノはなのはの肩から腕を伝って直樹の肩に移動した

直「…そういうばプレシアさんたちは来てないのか？」

フ「うん、実は…」

私はアリシアのことを話しておいた

直「そっか…やっぱりまだ日常生活はしんどいのか？」

ア「それはどうかかわかんないけど、アリシアは毎日楽しそうだよ？」

直「…なら、とりあえずあまり激しくは心配しなくて良さそうだな…っと、時間も限られてるだろうしな…んじゃオレは向こう行くな？」

そう言っ て直樹を先頭に私となのは以外はみんな移動していった

な「…フェイトちゃん」

フ「…なのは…あの…覚えてる？　なのはが私に言ってくれた…
友達になりたい」って言葉…」

な「っ！　うん！もちろん覚えてるよ…」

フ「あの返事…まだしてなかったから…」

な「うん…うん！…」

フ「…私も、なのはと友達になりたい！…けど、友達ってどうやってなったらいいか…わからないんだ…」

な「…にははは！簡単だよ？友達になるの、すごく簡単！…それに、よく考えたらもう私たち友達かも」

フ「…？」

どういうことだろう…友達になる方法…

……私となのはがもつしたこと？

・
・
・

『これが私の全力全開！スターライト…ブレイカーアーツ…！』

『ふう…あああぁっ!!』

・
・
・

……っ!?! まさかコレが地球の友達になる方法!?

全力全開で戦うことが!?

……違うよね?……

な「…フェイトちゃん?どうしたの?」

フ「っ!?! なな何でもないよ!?!…コホン…それで…」

な「あっ、うん。友達になる方法だよね?…それはね? “お互いが相手のことを名前で呼ぶ”、だよ」

フ「…それだけで、いいの?」

な「もちろん だから呼んでみて? 私の名前…」

フ「…なの、は…」

な「うん…」

フ「なのは…」

な「うん、フェイトちゃん!」

フ「…今は友達らしいことは出来ないけど、1ヶ月もかからずにまたここに帰って来れるって…。だから、その時まで…友達でいてくれる?」

な「もちろんだよ!いつまでだって、私はフェイトちゃんと友達だよ!」

フ「…ありがとう」

嬉しくて…涙が出て来ちゃった…

…本当に、今はとっても幸せ

S I D E : フェイト O U T

S I D E : アルフ

フェイトはなのはと話し始めたみたいだね…じゃあアタシも…

ア「…ユーノ、ちょっとついてきてくれないかい?」

ユ「？ 別にいいよ？」

ユーノは直樹から飛び降りると人の姿に戻って、アタシの方に近寄ってきた

ア「直樹、クロノ。ちょっと向こう行ってきていいかい？」

ク「いいけど…すぐに帰ってくるように」

直「まあ、そんなに急がなくてもいいと思うけどな」

それを聞いてアタシたちは、フェイトたちとは離れた場所まで移動した

ユ「それで…どうしたの？アルフ…」

ア「いや…そのさ…ユーノにはたくさん世話になったけど…まだちゃんとお礼を言えてなかったからさ、言っておこうかなって思ってた…」

ユ「そんな…ボクは大したことはしてないさ…。直樹やなのはみたいに活躍した訳じゃないんだから」

ア「じゃあ！アタシがあの時ケガしそうになったのを自分がケガしてまで助けてくれたのは直樹かい？なのはかい？…違う、アタシを助けてくれたのは他でもないユーノ！スクライアなんだ！だから…素直に感謝されなよ…」

…ああ〜っ！恥ずかしい！／／

こんなにすらすら言えるなんてね…

ユーノは謙遜しすぎなんだよ！ あの時のユーノは…かなりカッコよかったんだから…／／／

ユ「…うん、わかったよ。ありがとう、アルフ（ニコッ）」

ア「っ！？／／／ バ、バカ！ お礼を言うのはアタシだろ！」

ユ「ゴ、ゴメン…？」

…まったく…、カッコいいときと抜けてるときのギャップがありすぎだよ…

…でも、そんなユーノのことが…アタシは…／／／

S I D E : アルフ O U T

S I D E : 直樹

アルフもやっぱり何か言いたかったみたいだな

アルフとユーノがいなくなったのでオレたちが待つために座っていたベンチにはオレとクロノしかない

なのはたちの方を見ると何かオレたちの角度からは見えない死角でゴソゴソやってる…何してんだ？

…まあ、まだ時間はかかりそうだな…

直「しかし、流れるにそうなたとはいえよく無罪を認めたな？クロノ」

ク「…あのままプレシアさんを有罪にすれば禁固刑はまず免れられない。そうなればあの親子は離ればなれなる…出来れば無罪にして親子一緒にいて欲しい、と思っただのは事実だからね…そうしただけさ。…家族は一緒にいるべきなんだ…いたくても、いれない人もいるんだから…」

…そっか…クロノは自分の境遇を重ねて見ていたのか…父親がいない、自分と…

…知り合ってみてわかったけど…案外いいヤツだよ、クロノって…

直「…やっぱり優しいんだな…」（笑）

ク「（笑）ってなんだ！バカにするなよ！？」

直「ゴメンゴメン…おっ、終わったみたいだぞ？」

気づくとなのはとフェイトがこっちに向かって歩いて来ていた

髪をほどいてるってことはリボンの交換したみたいだな…

な「お待たせ〜!」

ア「コツチも終わったよ〜!」

アルフとユーノも戻ってきていた

ク「…よし、それじゃあそろそろ行くこうか?」

クロノが端末を操作すると地面に転移用の魔法陣が現れる

フ「直樹、何度も言ったけどもう1度言わせて? 本当にありがとう!」

直「いいっていいって! あっ。プレシアさんたちによろしく言っ
といてくれ」

フ「うん、わかった」

フェイト、アルフ、クロノが入ったことで魔法陣が光だし、転移
が開始されようとする

な「さよなら! クロノくん! アルフさん! フェイトちゃん!」

なのはの声に手を振りながら3人は転移していった…

直「…行ったな…」

ユ「…行ったね…」

な「…うん」

これでめでたく無印は終了か…

オレたちはしばらく立ったままでいた…

直「…よし！帰るか！」

ユ「そうだね」

ユーノは応えながらフェレットに戻る

な「帰りは歩いて帰ろうね！？」

直「何でだよ？電光石火 ライカ で帰ればすぐに着くぞ？」

な「すぐに着くとしてももう怖いのはイ……………」

直「…どうした？「イ…」で止まって…っ！？」

…ウソだろ！？

なのはの方を振り向くと…なのはは止まっていた

…なのはだけじゃない…

…ユーノも…打ち付ける波も…空に舞う木の葉も…

オレ以外の何もかもが止まっていた

直「（時間停止！？ ひみつ道具どころかオレは何もしてないぞ！？） どうなってるんだ！」

その時…

ザッ…

直「っ！？」

明らかに今、オレの真後ろで地面を踏みしめる音がした

オレはすぐに後ろを振り返った

そこには…見たこともない白い服を着た人がいた…

「神界 シンカイ 最高裁判所所属の憲兵です。君を捕縛しに来ました」

無印編

終

第二十六話 終結 後編（後書き）

いや〜、ついに無印編が終わりました！

これからは短編を少し挟んでからA・S編に入りたいと思います！
ます！

ただ…次回の更新は最短でも1月の終わりになります…

理由は…僕が高校3年生だと言えはわかるでしょうか？

…そうです…早いもので“ヤツ”との闘いもあと残り1ヶ月に迫って来ました

そろそろ闘う準備…もとい、勉強しないとマズインですよ〜…

…というわけでしたら早く更新はストップさせていただきます！

ここに笑顔で帰ってこれるよう頑張ります！

では、ベルワンでした！

第二十七話 神のみぞ知る…

前編（前書き）

…ついに…ついに…

センター試験が終わったあああつ！！！！（ ）（ ）

長かった…ようやく遊べるZ.E…（涙）

…という訳で、今日からまた更新を再開したいと思います！

さっそく勉強の合間に“つい書いてしまった（笑）”話を更新します！

442

…けど、なんかひどいことになってます…

内容かなり意味不明になっちゃってるし…

あと、少しお知らせです

新年ということもあり、1度自分の小説を見直してみました

でもって、感想でも時々言われてたので決意しました

今回から少し小説の書き方を変えてみることにしました

なのでこれからしばらく書き方が安定しないかもしれません…

感想は待ってますが、今は書き方のアドバイスも欲しかったりします

長々とすいません…

…まあ、とりあえず！

第二十七話、始まります！

第二十七話 神のみぞ知る… 前編

S I D E : 直樹

「神界 シンカイ 最高裁判所所属の憲兵です。君を捕縛しに来ました」

「…神界？ 憲兵？ …何それ？ おいし」申し訳ないのですが君とここで無駄話をしている時間はありません。説明は“向こう”でしますのでついてきてください」…ボケ殺し…」

そう言った憲兵が指パッチンをするとオレの前に見たことのない形の魔法陣が現れる

「…断つたら？」

「…そうですね…、ならこの女の子を消しましょうか…」

「なっ！？」

憲兵は腰につけたサーベルのような剣に手をかけたままなのはを見る

「……状況を理解して下さい。私が君に言っているのは“依頼”ではなく……“命令”です」

「……………」

……クソツ……仕方がないか……

簡単に時間を止めるようなヤツだ……戦うのは得策じゃないな……

オレは無言のまま目の前の魔法陣に足を踏み入れ……

ゴオオオオオオッ！

その瞬間魔法陣が光出し、オレはどこかへと飛ばされた……

.....

「……っ」

オレはいきなり目の前で強烈な光を見たため、しばらく目を閉じていた

「着きましたよ…っ、大丈夫ですか？」

「ああ…大丈夫…だ!？」

オレは薄目で見た光景に驚いて目を見開いた

「どこなんだ…ここは…」

「ここは、神々の住まう聖域“ヴァルハラ”です。今から私たちが向かう神界最高裁判所はここにありません」

「…ヴァルハラ…」

オレは辺りを見回す

どうやらここはその聖域の入り口らしく、前方には神話で出てきそうな神殿がいくつも建っていて後方には…雲海が広がっていた

「ではこちらに…裁判所に着きしだい“審問会”はすぐに始まります」

「……………(。□。)」

「…あの、聞いてますか？」

「……………っ！ えっ？何？」

「…はあ、もういいです。早くこちらに来てください」

「あ、ああ…」

オレは憲兵のあとをついて行きながらヴァルハラの中を進む

…上はどう見ても青空だよな…まあ何か雲の上みたいだし…暑くないのか？

…なんて無駄なことを考えながら歩いていると憲兵が1つの神殿の前で立ち止まった

「ここが…最高裁判所…」

「はい、そうです」

……………「デカイな…？」

「先程言った通り君の審問会はすぐに始まります。この入り口から入って通路をそのまま進んでもらえば法廷に着きます。では…」

そう言っって憲兵はどこかに行こうとする

「ん？ アンタは来ないのか？」

「憲兵の仕事は対象者をここまで連れてくることです。なので私はここまで…、そんなことより早く中へ」

「…よし、行くか！」

オレは裁判所の入り口のデカイ扉を押し開けた

中は広くはなっていたが見たところ1本道みたいだ…

50メートルほど進むと反対側の壁に着き、そこにはまた扉があり、豪華な装飾が施されていた

「ここか…よし…」

オレは扉を押し開けた

「……広いな…」

そこには日本の最高裁判所の法廷より2倍近く広い法廷が広がっていた

すると…

『前に進みなさい』

法廷に声が響いた……辺りを見ても誰も見当たらない

「……………」

オレは無言のまま進む

すると前に被告人が裁判の時に座る椅子が出てきた

『座りなさい』

オレは言われるままに椅子に座る

その時…前にあつた裁判官たちが座る机の列にいきなりたくさん

の人が現れる

姿は老若男女様々、オレより小さなヤツも見える

「（転移？ いや…魔力も何も感じなかった…。憲兵が言っていた通りならコイツらは…神…）」

「彼も到着した…。それではこれより審問会を開始する！なお議長は私、ガリアが務めさせて頂く」

中央にいた初老の男性が話し出し、横に座っている女性の前で紙とペンが勝手に動き出す…。あの人が記録係か？記録の仕方は凄いいけど…？

「まずは彼の存在、及び彼の召喚された理由を明らかにしておく。被告人、君の名は有沢 直樹…転生者。間違いないかね？」

「（オレ、被告人かよ…） はい、合ってます」

「よろしい、では次だ。君はなぜここに呼ばれたか理解しているか？」

「…いいえ。憲兵からはここでわかる、と聞いてますが？」

そう言うつと周りにいた他の神がざわつく

…マズイ…何か余計なこと言ったか？

裁判つて余計なこと言ったら敗けるつてのが法律ドラマの掟だも

んな…

『(マスター、緊張感ゼロですね…)(』

「(いやいや、これでも結構緊張してんだぞ?…っていつか…お前は何か知らないのか?)」

『(すみません…私もアリア様の元で生み出されてすぐにマスターの世界に来たもので…)(』

「(そっか…)」

すると、ざわつきが収まりガリアがまた話し出す

「なるほど…ではこちらが確認した君の“罪状”を読み上げる。

まず、転生した世界においての輪廻転生の運行の阻害、及び死人の蘇生行為!

現世の生物の寿命操作!

そして1番重い罪は、これらの行為全てに“神力 シンリヨク”が付加されていることだ!”

…輪廻転生…寿命…っ!? もしかして、アリアとプレシアさんのことか!? …でも、神力って…何だ?

「その顔を見るとどうやら心当たりがあるようだな。どれも神の領分を犯した重罪だ！だが「待つてくください！」…何かね？」

「確かにそれらをしたことは認めます！だけど、その神力つてのは何なんですか？」

「…神力とはその名の通り“神の力”…、例え転生者だとしても到底手に入れれるモノではないのだがね…」

「（神の力…アリシアとプレシアさんに使った…まさか…バリ、もしかして神力つて…）」

『（はい…、おそらくアリアス様から託されたあの“願いを叶える力”ではないかと…）」』

「（…聞いてみた方が良さそうだな…：あの…、もしかしてその神力つてオレがタイムふるしきと一緒に使つてたりしますか？」

「やはり自覚があつたようだな…。そう、蘇生の際に1度、そして今君の言つた異世界の道具と共に2度、計3度の神力の発動をこちらは確認している」

「（やっぱりか…）それなら確かに使いました。けど、その力は転生の時に貰つた力の1つでまさかそんな力とは「何を言ってるんだ？」知ら…：はい？」

何か変なこと言つたっけ？

「君の口振りでは君を転生させた神がいるような言い方だが…君

は“自然転生者”だろう？」

…？ 自然転生者？

…“自然”に“転生”した“者”？

ハアアアアアツ！！？

「人間が使用出来た理由はわからないが、神力を使用したこと事実！それは罪にあたる！…よって有沢 直樹君！君には申し訳ないが…」

「ちょっと待ってくれ！オレが自然転生者ってどういうことだよ！」

「…何を言い出すかと思えば…言葉通りだ。君を転生させたという申請は神界のどの神からも来ていない。それとも…君を転生させた神の名前でも言えるのかね？」

「ああ言えるさ！オレを転生させた神の名前はアリアスだ！」

「…は？………」

アリアスの名前を言った瞬間、今までざわついていた神たちが一気に静まり返った…

次の瞬間…

「ハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！」

その場にいた神が全員声を上げて大きく笑い出した

「何がおかしいんだよ!？」

「いやいや、失礼…。あまりにも、面白いものだったものでな…」

ガリアが笑いをこらえながら喋る

すると…

「ガリア様！彼は理由がわからないようです！私から説明してもよろしいでしょうか？」

オレから見て左側の手前に座っていた神が立ち上がる

「…いいだろう、サンガ。発言を許可する」

「はっ！」

サンガと呼ばれた神はガリアに一礼すると立ったままオレの方に向けて体を向ける

「有沢 直樹君…だったね？我々が笑ったことがさぞかし不思議だろう」

「…当たり前だ…」

「ソレを説明するには今の神界のある問題を話さねばならない」

…問題？ 神の揉め事とオレと何の関係が…

「近年、この神界では1つの議題でいくつかの派閥が出来ている…。内容は…『転生者を認めるかどうか？』…だよ」

「！？ どういうことd…ですか？」

オレはギリギリで敬語にする

「君は知っているかどうか知らないが…これまで我々神は、理由は千差万別だが過去から数えれば今君のいる地球の人口に匹敵するほどの数の転生者を生み出してきたんだ…。そして、それぞれの転生者によって無数の平行世界 パラレルワールド が生まれた…。ここまではいいかい？」

「はい…」

「問題はそこからだった。平行世界の中から転生者が原因で滅ぶ世界が現れ始めたんだよ！」

「っ！？」

「1つの世界が滅ぶだけでも莫大な数の生物の魂が天国と地獄に送られる。本来あり得ない数だ…。そして、滅ぶ数はここ数十年で加速度的に増えているんだよ！」

「……………」

「そして初めに言った問題に戻る……。『転生者を認めるかどうか？』…、これ以上転生者を増やすべきなのか？我らに非があるうと簡単に転生させるべきか？神界はその是非で割れているんだよ！」

「コイツのこの芝居がかった口調は素なのか？」

「…まあ、それはわかったんですが…それとアリアスが何か関係あるんですか？」

「…ハア、これだから人間は…」

…ウザッ！ 何コイツ！？

「わからないのかい！君のいうアリアス様は“転生者増加”について賛成の態度をとられてない神の1人として有名なのだよ！つまり！そのアリアス様が転生者を生み出すはずがない！」

「すぐに理解しろよ…」

「嘘をつくならもう少しましな嘘をつけばいいものを…」

…なんか外野がうるさいな…っていうか…

「…お話はわかりましたが…いくつかいいですか？」

「何かな？」

「ここに居るあなたたちはどちらの派閥で？」

「我々は反対派だ。我々の中には自分が転生させた転生者が世界を滅ぼしてしまった者もいる……。あのようないことが2度と無きように、という誓いの下我々は集ったのだ」

オレの質問にガリアが答えた

「…なるほど、じゃあ2つ目。アリアスの“賛成の態度をとってない”ってのは、イコール“反対している”ってことになるんですか？」

「「「「「！？」」「」「」

「な、何を言い出すのかな？君は……」

サンガってヤツが詰まりながら聞いてくる

「だから、アリアスは本当に反対派なのかって聞いてんだよ…神様のくせに聞こえなかったのか？」

「何だと！？ 貴様、私を侮辱する気が！？」

サンガは見るからにキレている

……怒りの沸点低いな……

「うるさい…声のトーン下げろ。あと別に侮辱なんかしてねえよ…。それより、ガリアさん」

「ん？ 何かね？」

ガリアは特にオレの言葉を気にしてないみたいだ……まあ一応敬語のままにしとくか…

「アリアスが反対しているかどうか、手っ取り早くアリアスをここに呼んだらすぐにわかるんじゃないですか？」

「……そうしたいが、アリアス様にコンタクトを取るのには難しくてな……」

「……アリアスって、もしかして偉いんですか？」

「少なくとも……ここにいる誰よりも偉い」

……マジで？

「さて……どうしたものか……。直樹君：君はやはり、アリアス様に転生させてもらい、神力はその時に頂いた、という主張は変わらな
いのだな？」

「当たり前です。オレ、嘘は言ってますから……」

そう言うとガリアを含め周りの神は全員、ウームとかナーとか唸りながら考え始める

……1人「有罪だ！」とさっきからギャアギャア騒いでいるヤツがいるけど……

1分ほど経ってガリアが顔を上げた

「やはり、このことを解決するにはアリアス様に来て頂くしか無
さそうだ…」

他の神たちも頷いているヤツが多い

ガリアは周りを見回して…

「どうやら賛成が多いようだ…。では、アリアス様に来て頂ける
よう頼み、それが叶うまで決定は延期。直樹君にはしばらく待つて
いてもらおう」

待つておく？ …… 待つてことはまだ帰れないのかよ!?

「ではこれにて「ちょっと!」「…まだ何かあるのかね…」

「待つてるってどのくらい待つてば?」

「…さあ? そこそこだ」

…ナニソレ!? アバウト!??

アリアス、来てくれよ (泣)!

「まあ、諦めてたまえ。待つための部屋はこちらで用意『その必
要はありませんよ、ガリアさん』…っ!? まさか!?!」

ガリアの言葉を遮って法廷に声が響く

これって最初にガリアの声を聞いたのと同じ聞こえ方だ…っ
てあれ?

…今の声、どこかで…

オレの疑問はすぐに解消された…

声が響いたあと、後ろでオレが入ってきた扉が大きく開かれる音がして、足音が聞こえてきた

「私がちゃんとここに来ましたから」

「……ア、アリアス様っ!?!?!」

「えっ！ アリアス？」

神たちの声を聞いてオレは急いで振り向いた

そういえばあの声はどことなくアリアスに似ていた……何か記憶と少し違う気がしたけど…

そして振り向くとそこには…

身長がだいたい160ぐらいの美少女というべき女の子が立っていた…

「……アリアス？」

S
I
D
E
:
直
樹

O
U
T

第二十七話 神のみぞ知る…

前編（後書き）

後編はすぐに投稿したいと思っています！

第二十八話 神のみぞ知る…

後編(前書き)

…モンハンやって、小説書いて、モンハンやって、小説書いて…

…気づいたら朝…？

…まあ何とか書き上げました！

変なところもあるかもですけど…

とりあえず第二十八話、どうぞ！

第二十八話 神のみぞ知る… 後編

S I D E : 直樹

「アリアス様！？ ど、どうしてこちらへ？」

ガリアがテンパリながらアリアスに聞く

さっきまでの固い話し方はどうしたんだよ…

……にしても……

「いえ、こちらで直樹さんが審問会にかけられると聞きましたので、証言しに来ました」

この人が本当にアリアスなのか？

オレが会ったアリアスは見た目幼女のはずだけどな…

「そ、そうでしたか…それでは…時間を多く頂く訳にいかないの
で単刀直入にお聞きます。…そこにいる転生者、有沢 直樹君は
アリアス様、あなたが転生させたのですか？」

「はい、その通りです」

アリアスの答えに神たちは大きくざわつき出す

「…しかし、こちらの資料には直樹君を誰かが転生させたという記録はありません…。アリアス様は届けを出されたのですか？」

「それが…」

「「「…それが？」」」

「…出し忘れてました　ごめんなさい　」

ズテーン！！

効果音としてはそれが正しいと思う…

神たちの半分近くが椅子からずっこけた…って、神ってこんな
のばっかりなのか？

「転生届けは今ここに持ってきてありますのですぐに提出出来ま
すよ？」

「…わかりました。…では、次の質問ですが…彼に神力を与えた
というのは本当なのですか？」

「はい、本当ですよ？ただお守り程度にあげただけだったんです
けど…発動出来ちゃったみたいですね」

…どういうことだ？　アリアスはオレに能力としてその神力って

のをくれたんじゃない……

「……そうですか……。なら、転生届け並びに今回のことについての報告書を3日以内にこちらへ出してください。今回の件はそれですよとしましょう」

いいのかよ!? 軽いな!?

……あつ、あれか?

ドラマとかでドス黒く描かれる“上司には逆らうな!”みたいなやつか?

……なんか、神を信仰してる人たちに謝れ、って感じだな……

「ありがとうございます、ガリアさん」

「……私は任を全うしただけです……。では、これを以て本法廷は閉廷とする!」

ガリアがそう宣言すると、神たちが次々と消えていく……アリアスに一礼してから……本当に偉いんだな……?

……ん? サンガが睨んでた気がするけど気のせいだよな……

そして、法廷にはオレとアリアスだけになった

「……ふう〜、それじゃ私たちも行きましょうか? 直樹さん」

「待つてくれ……いろいろと聞きたいことがあるんだけど」

「わかってますよ。でも、ここではちょっと……なので」

「…わかった、じゃあとりあえず移動すればいいんだな？」

「はい！ ではこちらに」

アリアスが促した方には憲兵が出したのと同じ模様の魔法陣が広がっていた

どうやらこれが神界の魔法陣みたいだ…

オレは歩いてアリアスの後から魔法陣に入る

その瞬間、オレたちは法廷から消えた…

・ ・ ・ ・ ・

「着きました！ここが私の家です！」

「おお…アリアスの家ね…って、はいいいいっ!？」

まあ驚くさ…何せアリアスの家、と言われた神殿はさっきまでの最高裁判所より敷地の広さは軽く5倍以上あった

…っていつか無駄に広すぎないか？

オレはアリアスに案内されながら神殿に入っていく

見た目通り中もかなり広い…

「広いな…？」

「す、すみません…父様の趣味で…」

「そつか…、アリアスの父さんって誰なんだ？　もしかしてオレでも知ってるような有名な神だったりして…」

「たぶん知ってるんじゃないですかね、父様は地球で確か神話になってるはずですから」

「ふうくん、で名前は？」

「オーデインです」

なるほどね、オーデインか…

確かによく知っ……………！！！？

「オーデインッ！？　オーデインって北欧神話で最高神のあのオーデインか…？」

「はい、そうですよ」

「……………」

…最高神の娘…、そりゃアリアスが努力したかはおいとも
…自然と偉くなるよな…？

「あつ、ここです」

話しながら歩いているとアリアスが1つの扉の前で立ち止まった

「ここが一応我が家の談話室です！」

入ってみるとそれはそれは豪華な部屋だった

オレたちは部屋にあった椅子にテーブルを挟んで向かい合ってた
った

「…それじゃ質問していいか？」

「はい！出来る限り答えます！」

「んじゃあ…その姿が本当の姿なのか？ オレを転生させた時は
もつと小さかったよな？」

「ああ、それはですね。私は姿を色々変えられるんですよ。だか
らあの時はあの姿だったんです」

「えつと…何で姿変える必要があったんだ？今の姿じゃ不味かつ
たのか？」

「いえ、父様が「今現世では幼女がブームだ！男は幼女を求めて
いるんだっ！」と仰っていたのでやってみました」

オイ、オーデイン！？ 娘に何教えてんだよ！？

「…直樹さん？」

「…ハツ…いや、何でもない…。じゃあ次、神力のことを教えてくれ。あれは願いを叶える力じゃなかったのか？それにお守りつて…」

「お守りつていうのはあの場を早く切り抜けるためのウソなんです。あれはバレなきゃいいかな、なんて思っただけ授けたんですけど…バレちゃいましたね」

「…ハア、そっか…。ちなみにオレつてもう帰れるのか？」

「はい、もちろんです！ただ、また目をつけられるのはちょっとマズイので神力はこちらで回収します」

まあ、これから先は神力がなくても大丈夫だろ…

「オツケーだ。やるならやってくれ」

「では…」

そう言っただけアリアスはオレに手をかざして何か呟く

すると左手につけていたバリーが一瞬光ったかと思うとバリーから光の球が飛び出してそのままアリアスの手に吸収された

「ふう、これでオツケーです！もしお望みなら代わりに新しい能力をあげれますけどどうしますか？」

「いや、今のままで十分だ。自分が弱いつて感じたら鍛えればいだけだからな」

「そうですね……あつ、そういえば……。直樹さん、今までの戦いを見てて思ったんですけど……。何でブレイバリーをもっと変形させないんですか？」

「……………はい？」

何のことだ？ バリーって“スサノオ”と“アマテラス”に変わるだけじゃないのか？

「ブレイバリーは私の神力で作った特別製のデバイスなんです。だから、質量保存の法則なんか軽く無視する形態変化が登録さえすればいろいろ出来るんですけど……。もしかして知りませんでした？」

「……………バリー？」

『……………すみません……教えるのを忘れてました』

「……ハア、まあいいさ……。アリアス、ちょっと今のも含めてやることもあるしそろそろ帰りたいんだけどいいか？」

「はい、もちろんです！そこに出した魔法陣に入ればすぐに地球に帰れますよ……。あつ、ちなみに直樹さんが戻れば止まっていた時間が動き出しますので！」

「そっか……。それじゃ行くわ！アリアス、いろいろありがとうな」

「いえ、私の不注意で迷惑をかけたんですから当然ですよ」

「そうか？ でも、ありがとう」

オレは椅子から立ち上がって談話室に出ていた魔法陣に入った

「それじゃあ…転送！」

その瞬間、オレは神界から転移した…

S I D E : 直 樹 O U T

S I D E : ア リ ア ス

直樹さんが転移していつてからも私はしばらく談話室で座っていた…

「……………直樹さん、実はまだあなたに言っていないことがあるんです…
神力というのは…本当は“どんなに頑張っても人間に使える力なんかじゃない”んですよ…

…例え、転生者だとしても…

今でも“そこ”にいるって…期待してもいいんですか？…

……“兄様”……」

私の言葉に答えてくれる人は…いない…

S I D E : ア リ ア ス O U T

S I D E : 直 樹

・ ・ ・ ・ ・

ゴオオオオオオッ！

「…っと、着いたのか？」

「……やなのー！！」

「うおっ!？」

海鳴の公園に戻って来た瞬間、隣からなのはの大声が放たれた

そういえばどうやって帰るか話してる最中だったな…

「ふえ？ 直樹くん、どうかした？ 疲れてるみたいだけど…」

「気のせいだろ?…それよりさっさと帰ろっぜ! 出かける前にも言ったけど、オレ士郎さんと稽古の約束があるんだよ」

「そういえばそうだったね。早く帰らないと! 直樹くんはどうぞお先に「ていうわけで…」…え?」

オレは無言を言わずなのはを抱える

「ユーノ、なのはの上に乗れ」

「うん、わかった…っつて、えっ? この体勢って…」

なのはのお腹によじ登ってからユーノが声をあげる

「ま、まさか直樹くん…人のお話、聞いてた?」

「いや、ゼンツゼン 六ツ星神器、電光石火 ライカ」

オレは電光石火を発動させて走り出す…もちろんかなりのスピードで…

「いやだつて言ったのにいい!！」

…何はともあれ、これでようやく一段落かな？

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : プロキオン

「…ちくしょう!全然修理が進まねえ!」

オレはあのイレギュラーから逃げたあと何かアジトに戻って来た

だが壊された体を直すにもあの“雷の竜”をまともに食らった
せいでパーツ同士の接続部分が溶け合つて離れなくなつちまった

おかげで今は神経系のケーブルを傷つけないように少しずつ外し
ていくしかないんだが…

「ああっ!じれったい!こんなにゆっくりだといつまでかかるん
だよ!」

ちなみにあの戦いからすでにかなり日は経っているが、未だに4分の1すら終わってねえ…

「ああ…暇だ…」

「そう嘆くな…プロキオン」

「ん？ つ！？ アルタイル様！？ どうしてこちらに!?!」

開いたドアから声がしたと思って見てみると何と我らがボス、アルタイル様が立っていた

「今回の件でまだ礼を言ってなかったからな…、それに詳しい報告を聞きたいんだ」

「…わかりました」

オレはアルタイル様に今回のことについて知っている限りのことを話した

「…最後に、1つ目の要望のジュエルシードですが、結局のところ5つしか奪取することが出来ませんでした…。2つ目のイレギュラーの戦闘データはそこにあるディスクに纏めてあります」

「なるほど…よく頑張ってくれた。褒美は約束通りジュエルシード1つだ」

「よ、よろしいのですか!?!」

それは上手くいったときに約束してた報酬じゃ…

「お前はよくやってくれた。特にこのデータがちゃんとあれば十分な功績だ…。もう1度言っておこう、よくやってくれた」

「…ありがとうございます！」

やはり、この人について正解だったな…

「…そうだ、次のターゲットについてなんだが、キミはとりあえず待機して修理に専念しておいてくれ。現地にはシリウスとデネブに行ってもらうことにした」

「…しょうがないですね。了解しました」

アルタイル様はオレの返事に頷くと部屋から出ていった

まあ正直、次のターゲットはイツらの方が適任かもな…

デネブはともかくシリウスなら確実にこなすだろう…

場所は今回と同じ海鳴市…

ターゲットは…呪われし魔導書、ロストロギア…

……………“闇の書”……………

S I D E : プ ロ キ オ ン

O U T

センターが終わったのでちょっと挑戦パート1！

キャラとの対談

ベ「という訳で、どうもベルワンです！ そして…」

直「どうも、この小説の主人公、有沢 直樹です！ しかし、ついにやってしまったなあ…キャラ対談は人気作家の特権じゃないのか？」

ベ「大丈夫だろ？ 問題ない問題ない」

直「その自信はどこから…、まあいつか…。ところでさ、今回を合わせたこの前後編だけど…設定に無理がありすぎだろ…」

ベ「そうかそうか 悪かったよ」

直「…バカに機嫌がいいな…やっぱりアレか？」

ベ「当然 センターが終わってようやく遊べるんだぞ！これを喜ばずして何を喜ぶんだ？」

直「そ、そうか…？（…このテンションじゃ何をフっても無駄だな…） じゃあそろそろ締めようか？」

ベ「おう！　今回でようやく本当に無印が終わった感じがします。
これからはあと2つ話を挟んだ後、A・S編に入ります！」

直「これからもこの小説をよろしくお願いします！」

ベ「ではまた今度！」

短編集(前書き)

この短編集は今まで何やかんやの理由で本編からカットされたものを繋ぎ合わせたものです

では、どうぞー！

短編集

魔王が生まれた本当の瞬間

第八話 小さな相違点より

「（いずれわかるさ。それよりもだ……今からオレの召喚竜があの壁を潰す。それに合わせてお前はアレを封印。いいな？）」

「（で、でも）（い・い・な・？）」「……わかりました」

「（よし、こっちは今からすぐやる。お前も準備しとけ）」

「は、はい！」

私は助っ人と名乗った人の言う通り封印の準備を始め……ようとした……

「ユ、ユーノくん！？ あんなに遠いところにあるのにどうしたらしいのー!？」

「と、とりあえず近付くしかないんじゃないかな？」

「でもそれじゃあ…」

助っ人さんのタイミングに合わせられないよ！

どうしようー！！

その時…

「ガアアアアアアッ！」

「あれが召喚竜なのか…」

「すごい…大きいね…」

…ってこんなゆっくりしてられないよ！？

どうしようどうしようどうしよ「ゴオオオオオオオ！」…えっ？

私の目にはあのドラゴンさんが樹の壁を光線で焼き払っている光景が映っていた

「……………これだよっ！」

「えっ？　なのは？」

「大丈夫…何とかなりそう！レイジングハート！…（ゴニョゴニョ）…出来る？」

『もちろんです。マスターと私なら余裕です』

「よし！行くよ！」

『シーリングモード』

私に応じてレイジングハートは形を変える

「まさかなのは…ここから狙うの!？」

「大丈夫だよ！問題なし！」

その時、樹の壁が崩れ落ちてジュエルシードのある樹が見えるようになった

「行つけえええつ!!！」

ジュエルシード目掛けて封印魔法の砲撃を放つ

砲撃はピッタリジュエルシードに命中して無事封印する

ジュエルシードが光ると樹がだんだんとなくなっていく

「……………(プルプル)」

「なのは？」

「…これだよ…この感じ最高っ！」

「はいいつ!？」

「何でかわかんないけど砲撃ってスカッとするね！ハマっちゃうかも！」

「……………？（なのは…怖いよ？）」

こうして、魔砲少女は誕生した…

end

幼き日の思い出

第十三話 意地の張り合いにはご用心を より

…ここは、ミッドチルダのアルトセイム地方にあるとある家族が
住む家…といってもかなりの大きさだが…

今日はここに住んでいる1人の少女をクローズアップしてみよう…

・ ・ ・

「ふんぷん それそれ」

私は今、自分の部屋で机に向かっている

勉強してるわけじゃないんだけどね

「何してるんだい、フェイト？」

「あつ、アルフ！ 今ね、ちょうどアルフの絵を描いてたところなんだ！」

「本当かい！ 見せておくれよ」

「ダメダメ、完成してからだよ」

「うゝ……」

「ゴメンね？ でも、もう少しなんだ……」

それから30分後……

「……よし、完成！」

「おおー！ようやく見せてくれるのかい？」

「うん、ほらー！」

「……すごい！上手く描けてるよフェイト……」

「そうかな……。じゃあ」お母さんに見せてくるね!」

「いってらっしゃい!アタシはちょっと……ふあ〜……寝ようかな?」

そう言ってアルフは私のベッドで横になった

「よし、行こう!お母さんはこの時間なら……書斎かな?」

・
・
・

…「ンンン…」

「はい、誰かしら?」

「お母さん、フェイトです!」

「あら、フェイト。入ってもいいわよ?」

「はい!」

私は一応ノックしてから書斎に入った…マナーらしいからね

「フェイト、どうしたのかしら?」

「あのねお母さん!コレ綺麗に描けたよ! 私とお母さんとアル

フ!」

私が見せた絵には私とお母さんとアルフが1列に並んだ絵が描い

である

「まあ！ フェイト、とっても上手よ！」

お母さんは絵を持って見てから私の頭を撫でてくれた…気持ちいいな…

「…でもフェイト、リニスはどうしたの？ 描いてないみたいだけれど…」

「うん、あのね…」

・
・
・

「入るわよ、リニス」

「プレシアですか？ ゴホッ…どうぞ…」

私はリニスの部屋に食事を持って入る

リニスはベッドで寝たまま…

そう、リニスは今風邪を引いて休んでいる

「すみません…本当なら食事の支度は私がやらなくちゃいけないことなのに…」

「そう思うなら早く風邪を直しなさい。食べれそう?。」

「はい、だいぶ良くなったんで…でも、プレシアにうつしたくないんで早く部屋から出ていってください」

「わかってるわ…。あつ、そうだったわ。リニス、フェイトがこれをあなたに、だそうよ?。」

そう言っ て私は一緒に持ってきたものをリニスに渡す

「…よく描けてますね…」

そう、それは昼にフェイトから渡されたあの絵だった

「あとフェイトから伝言よ…その絵を私たちだと思ってね! リニスは1人ぼっちなんかじゃないから!…だそうよ」

「…本当に優しい子ですね…」

リニスは涙ぐんでいた

「…そうね、大切な我が子だもの…」

…この時の絵は今でもテストロッサ家のアルバムに収められている…

e n d

これで平等だよな

第二十六話 終結 後編より

「…今は友達らしいことは出来ないけど、1ヶ月もかからずにまたここに帰って来れるって…。だから、その時まで…友達でいてくれる?」

「もちろんだよ!いつまでだって、私はフェイトちゃんと友達だよ!」

「…ありがとう」

嬉しくて…涙が出て来ちゃった…

…本当に、今はとっても幸せ

「あつ、そうだ!…フェイトちゃん!」

「えっ? 何かな?」

「フェイトちゃんって…直樹くんのこと、好きだよな」

「……ええっ／＼／！」

な、ななな何で気づかれてるの!?

私ってそんなにわかりやすいのかな…

「どうなの? フェイトちゃん」

「…うん、好き…だよ／＼」

「やっぱり〜! そうだよね〜、直樹くんかっこいいもんね?」

なのはは顔を赤らめながら喋る

…やっぱりなのはも…

「…なのはも、直樹のこと好きなんだ…」

「…うん、大好きだよ／＼」

「そうなんだ…」

…どうしよう、このままじゃ…なのはの方が有利!?

「でね? 今から離れちゃうフェイトちゃんにプレゼントだよ! レイジングハート、“あのフォルダ”を送ってくれないかな?」

『わかりました。フェイトさん、バルディッシュを出してもらえませんか?』

「えっ、うん……これでいいかな？」

『十分です。フォルダ送信……完了。バルディッシュ、受け取れましたか？』

『問題ない。受信を完了した』

「なのは、何を送ったの？」

「いいものだよ　アースラの中でも見てね！」

「？　うん、わかったよ」

そして、なのはたちと別れて、今はミッドチルダを目指すアースラの中

「うん……そろそろ寝ようかな？」

私が寝ようとベッドに行くと、バルディッシュに声をかけられる

『サー、なのはさんからもらったデータはどうしますか？』

「あっ、そうだったね……バルディッシュ、どんなデータなの？」

『中身は……画像と動画のようです。開きますか？』

「うん、お願い」

バルディツシュからモニターが出て、データが映され始めた

「!!!? こゝ、これは!?!」

そこには……直樹が映っていた

いわゆる、直樹の日常生活のスナップ写真みたいだ

…ベッドで寝ている直樹や…どこかで勉強している直樹…ご飯を食べている直樹…スポーツをしている直樹など、種類はかなりあった

『どうやら、レイジングハートが撮ったようですね』

なるほど、だから直樹が自然体で映ってるんだ…

…ん?最後のは…写真じゃなくて、メール?

「フェイトちゃんへ

これを見てるってことは写真と動画を全部見たのかな? それともまだ途中かな?

これはレイジングハートが撮ってくれた直樹くんコレクションなんだ

フェイトちゃんにもあげるね!

…これでフェア、かな?

あと、一言言っておくね？

私、負けないからね！

帰って来るの楽しみにしてます！

なのは」

「……………なのは……私も、負けないよ！」

e n d

御神流の型

第二十六話 終結 後編より

「士郎さん、すいません！遅くなりました！」

「別に構わないさ。友達の見送りだったんだろ？」

「はい……でも遅れてしまった分、より一層本気で行かせてもらいますー！」

「よし。それじゃあまずは基本の型の確認だ……といっても、あの数を全部確認している時間はないから……言いたいことはわかるな？」

「基本の型全てをマスターした上で成り立つ御神流奥義の1つ、神速を常時使用した斬り合いの稽古、ですね？」

オレは土郎さんと適度な間合いを取って木刀を1本構える

「その通り……あまり過度の負荷はよくないから……。時間は30……いや、20秒だ、僕から1本を取るか20秒間に僕から1本取らなければならない合格だ」

土郎さんは腰に差していた木刀の小太刀を2本、つまり御神流の正しい刀を構える

「それじゃ……」

「ああ……」

土郎さんが手に持っていたタイマーのスタートを押す

「いざ参るー!!」

その瞬間道場で対峙していたオレと土郎さんの姿が消え、タイマーが宙を舞いながら床に落ちていく

その落ちていく間にもオレたちの間には何十という斬撃の組み合わせが繰り広げられる

オレは神速で動きながらスキを狙って打ち込むけど、土郎さんはそれを上に跳んで逃げたかと思うとすぐさま天井を蹴って加速しながら斬りかかってくる

やっぱり土郎さんは十分チートだよ！ 本当に人間？って思っちゃうよ！？

「チツ！ シェアア！（御神流、撃！からの、双突！）」

土郎さん目掛け御神流基本型の上段から高速で振り抜く“撃”を放つ

それを簡単にかわされるけど、そこから間髪入れず胴への二連突き、“双突”を繰り返す

それでも…土郎さんには届かない

小太刀を交差させて突きを2回とも位置をずらして放つたにも関わらず防いで見せる

…こうなったら、空牙だ！

オレは1度距離を取り、すぐに神速で加速する

木刀を空牙の構えにし、一気に近づいていく

「オリヤアアアツ！」

だけど、オレの木刀が振り抜かれることはなかった…

P i P i P i P i P i P i ……

「ふう…ここまでだ直樹、お疲れ」

「ああ〜っ！ また勝てなかったあ！」

オレはその場で背中から床に倒れる

「まあ、内容的には納得のいくものだったよ。強くなったな」

「…まだまだ、ハア…：土郎さんには勝てる気が、ハア…：しませんけどね…」

オレは結構脚がガクガクするぐらい疲れたのに…：土郎さんは息を乱してすらない

………やっぱりチートだ…

「…よし、午前中はこれで終わっておこう。“我流型”は午後に見せて貰うからな」

「わかり…ました」

土郎さんは道場から出ていく

…：“我流型”っていうのは、文字通り“自分の型”のこと

初めて土郎さんから御神流を習った時に聞いた話では、土郎さんが継いだ御神流は他に枝別れた御神流と違い、受け継いだ者がそれぞれ基本型を完成させたあと、自分だけの型を編み出すのが掟らしい

ちなみに恭也さんは、我流型は目下仕上げの最中だとか…

オレも編み出すには編み出したけど…正直に言つとオレの我流型はどれも真価を發揮するのは“魔力を併用した”時なんだよな…？

…どうしようかな？

オレは憂鬱になりながら道場をあとにした…

e n d

短編集(後書き)

ベ「…ジンオウガが倒せない…どうも、ベルワンです…」

直「有沢 直樹です。…って、ここでは気分を入れ替えて話せてさっき言っただろ！ ザケル喰らうか？」

ベ「ヒッ!? 電撃は止めてくれ！ 今かなり電撃がトラウマになってるからさあ！」

直「…はあ…、そんなに強いなら武器強化してもう1度行けよな」

ベ「ありきたりなアドバイスありがとう…」

直「ザケルウ！」

ベ「ひでぶっ!?!」

直「ったく…、こうなりそうだったからベルワンのヤツにはこれからのことを聞いときました」

何でもA・sまでにあと1話、でもってそのうちにめでたい20万アクセス記念作品を投稿するらしいです

…おい、何か言わないのか？」

ベ「…どうせオレなんか…(ボソツ)」

直「……はあ……」

第二十九話 とある少女の希少技能 レアスキル ? (前書き)

最近、どうしてもだらだらした生活になってしまいました…？

まあそのおかげで小説をたくさん書けるんですけどね！

では第二十九話、始まります！

第二十九話 とある少女の希少技能 レアスキル？

S I D E : 直樹

…それは、フェイトたちがミッドチルダに向かってから1週間ほど経ったある日の朝のこと…

…~~~~~…

…ん？ 携帯が鳴ってる…、着信音は…電話のか

「…今は学校の用意で忙しいんだぞつと！…もしもし？」

オレは教科書をカバンに入れながら電話に出る

「ああ、直樹か？ こちら時空管理局執務官、クロノハハラオウ
ンだ」

「クロノ？ どうしたんだ？ 何か…あったから電話してんのか」

「ああ、その通りだ。ちなみに、アースラは無事にミッドに到着してもう本局への移動も済んでいる。」

今はボクがプレシアさんやフェイトから事情聴取して情報を纏めてるところだ」

「…ん？ 特に問題ないんじゃないか？」

「いや、ボクが電話した用事はそれについてじゃない…。アリシアについてなんだ」

「アリシア？ どういうことなんだ？」

「…実は……………」

・ ・ ・ ・ ・

「……………わかった、すぐにそっちに行く」

「助かるよ…、昨日からプレシアさんがずっとソワソワしててね…。もうすぐ暴れだしそうだったんだ」

「そ、そうか…？ たぶん2、3時間で行けると思うから誰か目立たないところに迎えを寄越しといてくれ魔力を放出しといてくれたら有難いんだけど…」

「2、3時間って…？ 相変わらずキミはすごいな。でも目立た

ないところと言つのはどういう…、それに魔力って…」

「どこでもドアで行くからな…、そつちで余計なヤツに見られたくないんだよ。魔力はその本局のマーカ―みたいなものかな？ あつ、オレが知ってるヤツで頼むぞ」

「…よし、了解した。それじゃあ待つてるよ」

そつ言つてクロノは電話を切つた

さて、どうやらトラブルだな…

クロノが言うにはアリシアがここ数日、不定期の頭痛に悩まされているとのこと

別れの日に来れなかったのもそのせいで疲れてたかららしい…

向こうの医者が出たらしいが特に異常はないらしいが…

そこでクロノが思いついたのが、他にもないアリシアを蘇生させたオレに相談する事だそうだ

「力になれるかはわかんないけど…とりあえず行くか」

ミッドチルダへの行き方は単純そうだが案外難しい

それは…どこでもドアで次元を移動しまくつてミッドチルダに行く、だ

……まあ、何とかなるだろ…

オレはコピーロボットでコピーを作ってから私服に着替える

「じゃあ行って来るわ。いつ帰って来れるかわかんないけどいな
間頼むな」

「任せとけ。んじゃオレは学校行ってくる」

そう言ってコピーは部屋から出ていった

「んじゃオレも……」

オレは用意した靴を履いてどこでもドアを出し……

「行きますか!」

ノブを引いてドアをくぐった……

S I D E …直樹 O U T

S I D E …フェイト

• • •

…ここは時空管理局本局に停泊しているアースラ、その中の食堂…

私はクロノに、ここで魔力を出しながら待つていて欲しい、つて言われたけど…誰を待つてればいいの？

それに魔力を出しながら…

意味はわからなかったけどとりあえず言われた通り魔力弾を作つてついでに操作訓練をしていた

その時…

フウーン…

「ふう〜、着いたのか？ …おっ、フェイト！ 久しぶりだな！」

「…え…ええっ!？」

私はかなり驚いた…

何せ、いきなり直樹のどこでもドアが出たと思ったらそこから直樹が出てきたんだから！

「ど、どつして直樹がここに？ …とうとうりびつやって来たの!？」

「地球からどこでもドアでピュンピュンと」

「ム、ムチャクチャだよ…？ あっ、で何でここに？」

「ああ、クロノにいきなり呼び出されてな…アリシアが大変なんだって？」

「うん…何ともない、って医者の人には言われたけど…アリシア、結構辛いみたい…」

「…よし、とりあえずアリシアのところに案内してくれ。オレも出来る限りの協力はするつもりだから」

「直樹…ありがとう」

「気にするなって！それより早く」

「うん、こっちだよ！」

私たちはアースラから降りて本局に入ってしまった

S I D E : フェイト O U T

S I D E : 直樹

「アリシアは今は母さんとリニスと一緒にリンディ提督が用意してくれた部屋にいるんだ」

「なるほど…」

通りで居住区画に進んでる訳だ

「アルフはどうした？」

「今、クロノから事情聴取を受けてると思うよ？」

「そっか…」

「あつ、ここだよ…今開けるね」

フェイトはポケットからカードキーを出すとリーダーに通した

ピッ！ シューン…

「ただいま〜！」

「お帰りなさい、フェイト…って直樹くんっ!？」

「久しぶり、リニス」

出迎えてくれたのはやっぱりリニスだった

「クロノから話聞いてないのか？ フェイトも知らなかったみた

いだけど…」

「聞いてないですね…？　もしかして来た理由って…」

「アリシアのことだ」

「そうですか！　プレシアも喜びますよ。じゃあこっちです」

リニスに案内されてオレは部屋に入る

…って、一時滞在に使う部屋のはずなのに…広いな…？

「プレシア、フェイトが帰って来ました。あと直樹くんが来ましたよ」

リニスが1つのドアの前で止まって声をかけたと思った瞬間…

「直樹っ！？」

ドアは激しく開かれ中からプレシアさんが出てきた

「お、お久しぶりです、プレシアさん」

「…直樹…アリシアが…」

「わかってますよ…それでどんな状況なんですか？」

「………こっちに入って」

入るとそこは寝室になっていて1つのベッドにアリシアはいた

「あつ、直樹お兄ちゃん…こんにちは！」

「ああ、こんにちははアリシアちゃん」

「むー！ちゃん付けしないで！ これでももう直樹お兄ちゃんとは同じ年だよ？」

「…フツ、了解…アリシア」

アリシアと呼ぶと満足したのがニコツと笑った

「じゃあとりあえず診てみますか…プレシアさん、リニス、フェイト。全員出といてください」

「…わかったわ、お願いね」

プレシアさんたちは部屋から出て行ってオレとアリシアだけになった

「やて…」

オレは四次元ポケットに手入れると中から小型のトランクケースのようなものを出す

「直樹お兄ちゃん、それ何？」

「これか？ これはお医者さんカバンって言ってな、どんな病気でもたちまち治してくれるんだぞ」

本当に“病氣”なら絶対だろ？

「すごい！ 頭痛いのも治る？」

「もちろんだ、じゃあ始めるぞ？」

オレはカバンについている聴診器のような形をしたケーブルをアリシアのおでこに当てる

「これでしばらく待てば…」「ピンポン！」「…出たか」

【診察結果 異常ナシ】

「…マジかよ…」

どづいことだ…まさか未知の病氣なのか…わかんねえ…

…けど、オレのその疑問は…次のアリシアの言葉で解決する…

「へえ、直樹お兄ちゃんの悩み事は最近なのはが朝、ベッドに潜り込んでくることなんだ。モテモテだね！」

「いやいや…実際結構困って…っ！！？」

オレは背中からかかったきたアリシアの言葉に驚いた

…待て…アリシアは何でそんなことがわかったんだ！？

オレは教えてなんか…

「……まさか…、なあアリシア？」

「なに？」

「頭が痛くなった時にさ、決まって何かしてたりしたか？」

「ん…：そうだね…、あつ、そうだ！ 頭痛い時はね、いつも
“何でかな…？つて不思議に思っただよ！” だよ！だから今もち
よつと痛いな…」

……間違いない……

…病気じゃない頭痛…

…疑問に“答え”を出そうとして起きる頭痛…

…そしてアリシアは…“死からの生還者”…

「…わかったよ、アリシア。治療法が…」

「本当に！？ 頭痛いの治る？」

「ああもちろん。じゃあとりあえず…」

オレは始めることにした

……“治療”を……

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : プレシア

直樹が私たちを出してからもうすぐ1時間が経つ…

…まさか何か大変なことに…

…それとも…2人きりなのをいいことに何かいかがわしいことをしてるんじゃない?」

「プレシア、直樹さんに失礼ですよ」

「そ、そうだよ／＼ 母さん」

…あら? もしかして、口に出てた?

その時玄関のドアが開いて…

「ただいま〜! 帰ったよ! あと、クロノとリンディ提督も来たよ
」!

「失礼します」

アルフ、クロノ、リンディが入ってきた

「その後どうですか？アリシアちゃんは…」

「それが…」

リンディに直樹のことを話そうとした時…

プシュッ…

「あゝ、疲れたゝ…って、何だこれ？全員集合？」

直樹が部屋から出てきた

「直樹！アリシアは？」

フェイトがすぐ直樹に聞いた

「ああ、もう大丈夫…なんだけど…」

「なんだけど、ってどういうことなのかしら？」

私はたまらず直樹に聞く

「…わかりました。説明します…、集めたかったメンバーは全員いるみたいですし……アリシア、来てくれ」

「はい」

すると寝室から元気そうなアリシアが出てくる

「アリシア！？ もう大丈夫なの？」

「うん、もちろん！ それよりお母さん！ 私すごいんだよ！」

「すごい？」

「それについては僕から説明します」

私たちは直樹の話を聞くためにリビングに移動した

S I D E : プレシア O U T

S I D E : 直樹

オレたちはリビングに移動してそこにあつた椅子に腰かけた

「ズバリ言うと、アリシアの頭痛の原因は…自分の覚醒した能力の負担によるものです」

「覚醒した能力？ どういうことなんだ？」

クロノが訳がわからないとばかりに聞いてくる

「アリシアは1度死亡し、オレの力で蘇生した。その際に能力…いや、希少技能 レアスキル と言っているものを手に入れたみたいだ…。頭痛は無意識にその能力を使ったことで頭がオーバーヒートしたせいだと思う」

「…なるほどね、それでアリシアさんの希少技能というのはどういう力なのかしら？」

予想通り、リンディさんは内容を気にしてきた

まあ話さないところの先マズイもんな…

「はい…でもその前に一応見ておきますか？ アリシア、出来るか？」

「うん！ いくよ？」

アリシアは答えると1度目を閉じて顔を伏せる

そして…

「…はいっ！ これで出来たかな？」

アリシアは顔を上げて目を開けた

「アリシアっ！？ あなた、目が…」

プレシアさんが最初に気づいたみたいだな…

アリシアの赤い瞳にはさっきまで無かった幾重もの輪が刻まれていた

「この目は能力が発動している証です…そしてこの能力は…オレが持っているのと同じ能力、**「答えを出す者 アンサートーカー」**です」

「……………!?」「……………」

「答えを出す者？ 何なのかしら？それは…」

リンディさんが聞いてくる

まあ当然だよな…

「…答えを出す者…、それはあらゆる事象、問題、疑問に対して正しい答えを出す、というものです」

解りやすく例を挙げると、戦闘においては**「どうしたら攻撃を当てられるか？」**、**「どうしたら相手の攻撃を避けられるか？」**などがわかります」

「そ、そんなにすごいっ!？」

フェイトはかなり驚いてるみたいだ

まあ、オレもかなり驚いたからな…

まさかこの世界の住人が異世界の能力を手に入れるなんて思っ

なかつたし…

「ああ、この能力は鍛えれば知識としてはほぼ最強クラスの能力になる。もちろん限界はあるけどな…。その上、アリシアのはオレのと違って魔力を一切使わないで発動できる。つまり、オレのより優れた能力なんだ」

「そんな…本当なのね…」

プレシアさんも相当驚いたのか呆然としている

「はい、今は僕が制御のコツを教えましたが、完璧な制御には程遠いです…。だからしばらく僕が制御の訓練をしたいと思います」

「ええ、お願いするわ」

オレは頷くとリンディさんの方に顔を向ける

「…で、リンディさんとクロノには相談が…」

「このタイミングってことはやっぱりアリシアさんのことかしら？」

「はい、さっき説明した通りこの力はあらゆることに対して“答えを出す”ことができます。これが悪用されれば…」

「ちょっと待って！アリシアがそれを悪用するって言うの！？」

プレシアさんが見るからにキレて怒鳴ってくる

「少し違います。アリシアはまだ自分を守る術を持っていない…。脅迫、洗脳……従わせようと思えばいくらでも方法はあるはず…だからこそ今はこの力を秘密にするべきです」

「っ！？……………」

「…なるほど、直樹の言ってることは一理ある。…母さんはどう思いますか？」

「そうね…、管理局でも自分の希少技能を隠している人もいない訳じゃないしね…。私たちが秘密にしておけばバレることはないでしょう」

「じゃあ…秘密にする、ということをお願いします」

「任せなさい 直樹くん」

よし、とりあえずこれでしばらくはアリシアは安全だろ…

「直樹…さつきはごめんなさい…。あなたはアリシアのことを考えて話してくれたのに…」

「そんな…気にしないでください…。それより、今はアリシアのことを考えましょう」

「…そうね」

…ふう、どつちら少し帰るのが遅くなりそうだな…

S
I
D
E
:
直
樹

O
U
T

第二十九話 とある少女の希少技能 レアスキル？（後書き）

ベ「ジンオウガ倒したぜ！ヒヤッホーイ！」

直「他の作家さんにアドバイスをもらったことを忘れるなよ？」

ベ「もちろんだとも！ アドバイスをくださった方々、ありがとうございます！」

直「…にしても本編だよ…。アリシアに答えを出す者って…」

ベ「いや、実はこれ、小説を書くことって思ったときから考えてたネタなんだよな。アリシアを生き返らすなら何か能力をつけたいなあ、って思ってたら…そうだ！ 答えを出す者にしよう、となつたんだよ！」

直「へえ、…で、これで次回からA・S編なんだよな？」

ベ「……………いや、もう1話挟もうかな、なんて…」

直「… “自分の言葉に責任を持つ” ってことを知らないのか？」

ベ「まあまあ…、言い訳…もとい理由は次の後書きで話すからさ」

直「はあ…」

ベ「さて、最近感想をたくさん送っていただけてかなり嬉しいです！ これからもこの小説をよろしくお願いします！」

第三十話 … 犬のおまわりさん？（前書き）

ようやく書き終わりました！

では第三十話、始まります！

第三十話 … 犬のおまわりさん？

S I D E : 直樹

「直樹、時間を取らせてしまつてすまない…」

「いいっていいって、オレからも事情聴取すればフェイトたちの拘束がもっと早く解けるなら喜んで協力するからな」

…ここは時空管理局本局、その中のいわゆる執務用の区画に当たる場所だ

アリシアの“答えを出す者”の制御訓練のためにここに残っていたところ、クロノから事情聴取のことを聞いてこつちに来てるっていうわけだ…」

「何をぶつぶつ言ってるんだ？」

「（…口に出てたか？） いや、突然の展開を読者の方々に説明してたんだよ」

「…？ まあいいか。それじゃボクはこれからこの聴取を纏めなといけないからここで別れるよ。帰り道はわかるよな？」

「当たり前だ。んじゃ」

そう言ってオレはクロノと別れ居住区画を目指して歩き始めた…

・
・
・

「…にしてもここって広いよな。これで次元の海に浮いてる艦
なんだから…やっぱり技術力高いよな」

まあオレも“答えを出す者”とひみつ道具使えばこれ以上のもの
は作れるけど…めんどくさいな…

「…軽く1つの街ぐらにはありそうだもんな。探せば迷子を見
つけたりして…まあそんなことが「うう…お兄ちゃん…」(泣)
「…マジで？」

そう、オレの目の前にはいかにも迷子っぽい感じで泣いてる女の
子がいた

…周りに人はいない…

…っというかオレだけ…

…ハア…しょうがないか…

「ちよつといいかな？」

「…ふえ？　っ！？　だ誰ですかあなたは！？」

「あゝ…とりあえず不審者じゃないからな？ オレは有沢 直樹
っていうんだ。キミの名前は？」

「えっと…、ティ…はっ！ し、知らない人に名前を教えちゃダメ
なんです！ お兄ちゃんが言っていました！」

おおゝ…いい心掛けだな…でも今は迷惑な心掛けだ…

…っていつか、その“お兄ちゃん”はどこだよ？

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : クロノ

直樹が来てくれたのはこちらとしても助かったな…

おかげでより早くデータに纏められる…

ボクとしても早くテストロッサ家の皆さんを解放したいし…

これで邪魔さえ入らなければ「クロノ〜！（泣）」……現実
は甘くないか…

向こうから大声かつ泣きながら向かってくるのはボクと同期で執

務官になった人だ…

…と言ってもボクよりも3つ年上だけどね…

「何か用ですか？」

「聞いてくれクロノ！ オレの…オレの妹がいないんだ！」

「…どこかに遊びにいっただけなんじゃ」「それが危険なんだよ！」

……

「オレの妹は空前絶後の可愛さなんだぞ！ もし誰かの毒牙にかかったら…ああ〜！」

…重度のシスコンだな…1度ブレイズキャノンの的にでもしたら治るのか？

まったく…シスコンなんて見苦しいな…

ベルワン「直樹のおかげでシスコンにならなかった執務官（笑）」

…ん？ 何か今かなり失礼なことを言われた気が…気のせいかな？

「とにかくクロノ！ 妹を探すのを手伝ってくれ！」

「…拒否権は「ない！」…ですよね…」

…すまない、フェイト…なのはに合わせるのは少し遅れそうだ…
…けど、ここついつときは直樹が見つけてたり…してるかもな…直樹だからな…

まあ、探してみるか…

S I D E : クロノ O U T

S I D E : 直樹

「わあ〜っ！」

迷子の女の子が喜んで声をあげる

やっぱり知らない人なままだと警戒され過ぎるので、とりあえずオレはその警戒心を和らげることにした

その方法は…

「ねえねえ！ もつと遊ぼ？」

「」「」「ドララ〜！」「」「」

…まあ、ずいぶんと他人任せな気がするけど…

ミニドラたちに任せたのは正解だったみたいだな

「お兄ちゃん、この子たちってお兄ちゃんの友達？」

「ああ、オレの友達…それに仲間だな」

「へえ〜」

だいぶ柔らかくなったか？

そろそろ話を聞かせてくれるか…

「そろそろ教えてくれるか？ キミのお兄ちゃんってやっぱり管理局の局長なのか？」

「はい！ お兄ちゃんは執務官なんです！」

「執務官かあ〜、立派なお兄ちゃんなんだな。他にここで知り合っているのかな？ もしオレが知ってる人がいたら連絡出来るんだけど…」

「え…っと…マルセさんに、デールートさんに、キリスさんに…」

やっぱり知らないヤツばかりだな…

こりゃこの子連れてしらみ潰しに探すしか…

「あとは…お兄ちゃんの友達のクロノさんです」

そうかそうか…あとはクロノか…って！

「クロノ！？ クロノって執務官のクロノ…ハラオウンか？」

「は、はい…そうですが…あっ！ もしかして」

「ああ、クロノならオレも知り合いだ。すぐに連絡取ってやるからな？」

「ありがとうございます！」

さて、さっさと呼び出すか…

あっ、まだこの子の名前教えてもらってないな…

・
・
・
・

「おい、クロノ！こっちだ！」

あれからクロノに連絡して、指定された広場に来て待っていると
少ししてクロノがこっちに走ってくるのが見えた

「あっクロノさん！ こんにちは！」

「ああ、こんにちは。直樹、すまなかった…いろいろ助かったよ」

「偶然出会っただけだからな、全然構わないさ。それより…」

そこで区切ってこっちを見ている女の子を見る

「この子の兄はどこだよ？」

「ああ、キミから連絡を受けてからすぐに伝えたからもうすう
おおおおっ！！！！」…来たよ？」

雄叫びがした方を見ると陸上選手のごとく綺麗なフォームかつハ
イスピードで迫ってくる男がいた

「…不審者が…バリー、セツトアツ」待て！？ 確かに不審者に
見えなくもないがあれは違う！」…あれがそうなのか…」

…ん？ どこかで見たことがある気が…

…確かあの人は…

「お兄ちゃん！」

「おおおっ！ ゴメンなあゝ可愛い妹よ！ 不甲斐ないお兄ちゃ
んを許してくれ！」

……………？

「（おいクロノ、もしかしてこの人…アレか？）」

「（…ああ、文句のつけようのない重度のシスコンだ）」

「…珍しいな。お前が人の悪口を言うなんて…」

「（この人限定だ…）」

「おい、ちょっといいか？」

念話でクロノと話しているとシスコン兄が話しかけてきた

「シスコンの何が悪い！！」

地の文を呼んだ…だと…！？

「…で、何か用ですか？」

「ああ、とりあえず礼は言うておく。妹を見つけてくれてありがとう」
「とう」

「いえ、通りすがりに出会っただけなん「ただ！」「…で？」

「妹にちよつかい出したら…全力でお前を叩き潰す！ いいか！」

「…はあ…わかりました…」

「お兄ちゃん！ 直樹お兄ちゃんを怒鳴っちゃダメ！ 優しい人なんだよ！」

「でででもなテ「でもは無し！」 すいませんでしたあ！」

…威厳ないな、兄ってこんなもの…なわけないか…

「クロノ、それから…直樹だったか？ 2人とも改めて言うておくよ。ありがとう」

「止めてください。あなたがまともにしてると違和感があります」

「お前…せつかくオレがきちんと礼を言うてるのに…」

「お兄ちゃん…しょうがないよ、普段がダメなんだよ (ニコッ)

」

「グハッ!？」

「(…何だコレ?) クロノ、ずいぶんこの人と親しそうだな」

「ああ、確かに年は少し離れてるけど執務官になったのが同期なんだ」

「それ以来の付き合いだよな？」

「なるほど…」

通りで信頼し合ってる感じがするんだな…

「それじゃクロノ。オレたちはそろそろ行くわ」

「直樹お兄ちゃん、バイバイ！」

女の子がオレに手を振ってくれる

オレは軽く振り返しておいた

「ああ…そうだ、そっちにも結構仕事が回っていたはずだ。早く片付けないと後で大変だぞ？」
「ティータ」

……………はいつ！？

「ティータ？」

「ん？ ああ、そういえば自己紹介がまだだったな。
オレはティータ「ランスター」、職業は聞いての通り執務官だ」

…ええっ！？ ウソ！？ ティータが執務官！？

…どこまで歴史が変わってるんだよ…

…ってことはこの妹ってのは…

「あつ、私も自己紹介してなかった…。改めまして！

ティータお兄ちゃんの妹の“ティアナ”ランスター“です！

よろしくお願いします、直樹お兄ちゃん！」

「あ、ああ…よろしくな、ティアナ…」

……………本当に、この世界はよくわかんねえ…

S
I
D
E
:
直
樹

O
U
T

第三十話 … 犬のおまわりさん？（後書き）

ベ「ふう〜、ようやく終わった〜」

直「この話は何のために書いたんだ？ あまり意味がないと思うが…」

ベ「いやあ〜、どうしてもA・S編終了までに直樹とティアナを知り合いにしたかったんだよ」

直「ふう〜ん、まあとりあえず、これでようやくA・S編に突入だな」

ベ「その通り！ 今週末までにはA・S編第一話に当たる話を書き上げたいと思ってるぞ」

ベ・直「」では「！」「」

第三十一話 目覚めろ、その魂(前書き)

何とか間に…合ってませんかね…

日曜日って1週間の終わり？ 始まり？

…まあとりあえず第三十一話、始まります！

第三十一話 目覚めろ、その魂

SIDE：直樹？

「起立！…礼！」

「」「」「さようなら〜！」「」

ようやく終礼も終わり、帰る用意を始める

「……はあ……」

そんな子供ならテンションが上がりそうな時間にため息をついているのは、他ならぬオレ、有沢 直樹である

「（…今日で10日…、何やってんだよ）」

何が10日なのか？ それは「直樹くん！」「…あとにしよう…」

「おう、なのは。アリサにすずかも。どうしたんだ？」

「どうしたじゃないわよ！アンタが遅いから来てあげたんでしょう！」

「アリサちゃん、怒鳴っちゃダメだよ…」

「じゃはは…？ で直樹くん、早く帰ろつよ！」

なのはがもう1度オレに言ってくる

「わかってるって…すぐに行くから先に門まで行ってくれ」

「うん、わかったよ…けど、早く来てね」

「オツケー」

そのあと、なのはたちは先に教室を出ていった

……………よし、支度完了！

待ってるだろうしさっさと行くか…

…今日で10日…、 “この体” で学校に来はじめてから10日…

…そう、オレは…コピーロボットの有沢 直樹なんです…（泣）

オイ、本物！！ いつまで帰って来ないんだよ！

確かに「いつ帰って来れるかわかんない」って言ってたけどさ！

10日はかかりすぎだろ！？

遊んでるんじゃないか？

オレは毎日ビクビクしながら過してんのにな…

ドラえもののひみつ道具であるコピーロボット…その最大の弱点

は鼻のスイッチにある

コピーロボットのコピーを解除する方法はコピーする時に触った鼻のスイッチをもう一度押すことだ

つまり…“うっかり”何かにぶつかつたりしてスイッチが押されると、人間がいきなりぬいぐるみサイズの人形になるという怪奇現象が起こってしまうのでいつも警戒してなくちゃいけない…

その上、運動能力こそ本物と同じくらいあるけど魔力はほとんどないし、バリーはついてるけどこれもコピーだからセットアップなんて出来ない…当然術も出ない、神器もない…

……コピー弱っ!?

…はあ…、帰るか…

・
・
・

「じゃあ私たち今日塾だからここで別れるわね」

「直樹くん、また来週ね」

「じゃあね直樹くん」

「おう、またな」

合流してから数十分後、いつも別れてるところでなのはたちと別れ、オレは1人家路につく

ちなみにすずかの言ったまた来週つてのは、今日が金曜日だからだつたりする…

「今日は翠屋の手伝いの日じゃなかったよな…んじゃさつさと帰…あつ、そういえば桃子さんから買い物頼まれてたっけ？」

オレはお使いを済ますためスーパーに向かった

・
・
・

「……………これで全部だよな？ ジャガイモ1袋、ニンジン3本、ニンニク1個、しいたけ1パック、白菜2分の1カット、豚肉700グラム、カレールー……………あつ、キャベツ買ってないな……………」

……………て言うかこれ何作るんだ？

カレーかと思っただけ……………カレーにキャベツや白菜入れてたっけ？

まあ前世でもごく普通の料理しか出来なかったしな……………オレが考えても無駄か……………

何て思いながらオレは野菜のコーナーに戻る

「えつと…キャベツキャベツ…、おっ見つけ！ラスト1玉」

オレはキャベツに手をかけた…が、誰かの手と重なった

キャベツを取り合った相手との間にはオバチャンが1人いて、相
手は見えない…

けど…これは譲れない！

「オイ、このキャベツはオレが先に見つけたんだ！」

「違うわ！このキャベツは私が先に狙いをつけてたんや！」

「……………ん？」

…今の声って…まさか…

間にいたオバチャンがようやく退いて向こうにいた相手が見えた

「…はやて？」

「な、直樹くん！？」

そう、そこには車椅子に乗り、買い物かごを脚に乗せたはやてが
いた…

SIDE…直樹^{コナ}

OUT

SIDE: はやて

「いや、助かったわ！直樹くん、荷物持ってくれてありがとうな。おかげでいつもよりずっと早く買い物済ませれたわ」

「いっていいって、オレも買い物してたところだったからさ」

「そう？ ホンマにありがとうな……」

直樹くんは自分の買い物と私の買い物まで持って車椅子を押してくれてる

ホンマに優しいねんな……

……やっぱり、アタックしてみよかな？／／／

けど直樹くんカッコいいからな、彼女がもういたらどうしよう？

……なんか聞き出すいい機会はないかな？

………！ そつや、よく考えたら明日は“あの日”やんか！

それに明日は土曜日やし、上手く行けば家に泊まってくれるかもしれへん！

よおし！ 頑張るで〜！！

S I D E : はやて O U T

S I D E : 直樹^{コナト}

オレははやての買い物を手伝ったあと、ついでにはやてを家まで送っているところだ

ちなみに、キャベツははやてに譲った

…まあ、しょうがないだろ…

…おっ、あそこだな…

「はやて、もうすぐ着くぞ?」

「……………(ブツブツ)……………」

「…もしもし、はやてさん!着きますよー!」

「へえっ!? あっ、もうそんなに進んでたんか…、ありがとう
な、直樹くん」

「いいって、…ほい着いた! んじゃはやて、また会おうな!」

オレははやてに荷物を渡すとそのまま帰ろうとする
その時…

「ち、ちちちょっと待ってくれへん？」

後ろからはやてに呼び止められた

「どうした、はやて？」

「あ、あのな？　もしよかったらでええねんけど…今日ウチに泊
まってくれへんかな？／＼／」

「……はいいいっ！？」

…今なんて言いましたか！？　“キョウウチニトマツテクレヘン
カナ？”…だつて！？

「い、いやはやて…前は宿無しだったからしょうがなかったけど
…」

「…あかんかな？（涙目）」

…（グサツ！）…うう、心に罪悪感の刃が…

「それにな…明日、私は誕生日なんやんか…だから、出来れば直
樹くんに泊まってもらって今日と明日お祝いしてほしいな…なん
て思ったり…／＼／」

…そうか…誕生日なのか…、じゃあ1人は絶対寂しいよな……

あれ？

はやての誕生日って…何かがあったような…あれ？ なんだっ
たっけ？

コピーだから記憶が若干ぼやけてんだよな…

……まあいつか…

「…どうかな？ 直樹くん…」

「…わかった、家に1度帰って用意してくるよ」

「（パアツ！） ホンマにっ！ホンマに来てくれるん？」

はやては見るからに嬉しそうに話す

「ああ、だからとりあえず帰るな？」

「うんっ！ じゃあ待ってるなあ！」

はやては喜びながら家に入っていく

…はあ、とりあえず帰って…土郎さんか桃子さんか母さん、誰か
に伝えてから準備するか…

オレは携帯を取り出して翠屋の番号を電話帳から探す

「…にしても明日ってはやての誕生日だったんだな、確かに今
日は6月3…日…ああっ！？」

そうだった！ はやての誕生日って闇の書、もとい夜天の魔導書が起動してシグナムたち守護騎士が出てくる日じゃねえか！

……どうしょ？……

…魔力そんなにないから目をつけられたりしないよな？

……自信が持てない……？

…出来る限りの“対策”はしとくか…

オレは若干重くなった足取りで家に向かった…

S I D E : 直樹^{コナ} O U T

S I D E : はやて

やったで！ 直樹くんがウチでまた泊まってくれる！

私は台所にいって直樹くんのためにも急いで晩ごはんの下ごしらえを始めた

今日の予定は直樹くんがキャベツを譲ってくれたからやっぱり思

つてた通りロールキャベツにしよかな〜

まだ夕方やから…今から下ごしらえして、少し間を空けてから作
つたらいい時間かな？

さあ！ 張り切つてやるで！

S I D E : はやて O U T

S I D E : 直樹^{コバ}

「ふう〜、旨かった〜！ごちそうさま！」

「ふふっ、お粗末さま」

いや〜、前に来た時もはやての料理食べたけどやっぱり上手いよ
な〜

前より腕が上がつてる気すらするな〜

「…でも、本当に晩ごはんの用意手伝わなくてよかったのか？」

「ええのええの！ 直樹くんはお客さんやから、私のもてなすの
が道理やで…！」

「そっか…あつ、はやて。誕生日のケーキってもう何か考えてあったりするか？」

「ううん、元々1人の予定だったからケーキはええかな、って思ってたから…」

「じゃあさ、オレがケーキ持ってきていいか？」

「直樹くんが？」

「ああ、オレがもう何年も居候している家の人が駅前で喫茶店やっつててさ…聞いたことないか？ 喫茶翠屋って」

「それってこの辺で話題になってる人気店やないか！ へえ、直樹くんってそんなところで暮らしてたんか？」

「ああ、それでさっき泊まることのでいでに誕生日のことを話したらケーキを作るうか？って言うてくれてさ…お代はいいみたいだぞ？はやてが決めてくれ、って…」

「…ええんかなあ、なんか悪い気が…」

「大丈夫だつて！それにわがままの1つぐらい言ってもいいだろ？」

「…うん、じゃあお願いしても、ええかな？」

「もちろんだ。じゃあ明日の夜持つてくるな？」

「うん」

そしてそのあとは特に何事もなく時間が過ぎていった

…まあ、一緒に風呂に入ろうと誘われたりされた以外は…？

…という訳で時刻はあっという間に11時を回っていた…

…そんな中、オレの状況はというと…

「…はやて、どうしてもなのか？」

「うん、家主命令や」

…前門にはやてのベッド…後門にタヌク…ゴホン…とりあえず、逃げ場がない…

「…やっぱり他のベッドで…」

「あいにく他のベッドは全部塞がっております」

「…じゃあソファで…」

「風邪引いちゃつやる」

「…じ、じゃあ…」

「タイムアップ　ドゥーン！」

「おわっ!？」

オレは後ろからベッドに突き飛ばされた

…って力強っ!？

「直樹くん、ええやんか…それとも私と寝るの…イヤなんか？
涙目）」

「…別に、イヤって訳じ「じゃあオツケーやな　「…はあ、
もういいさ…」

それからすぐにはやてが入ってきた

まあ早く寝るか…といってもすぐに起きることになりそうだけど
な…

今の時間は…ざっと11時50分ぐらい…かな？

「…直樹くん、ありがとうな…」

いきなり横からはやてが話してくる

「ここ何年か…同年代の友達に誕生日祝ってもらったことなかつ
たから…嬉しかった…ホンマにありがとうな　」

「…このぐらいで喜んでくれるなら毎年祝ってやるよ」

「…ふふっ…ありがとう…とっ」

…ん？ 寝ちゃったのか…

…んじゃオレも寝よ『起動します』… タイミング悪っ!？

「…ん〜、何なん?…つて、へっ!？」

オレのツッコミも虚しくはやての部屋に眩しい光が溢れた…

SIDE…直樹^{コナト} OUT

第三十一話 目覚めろ、その魂（後書き）

ベ「いやあゝ、とうとうA・S編始まったなゝ」

コ直「始まったなゝ…じゃねえよ！ 何でオレコピーのままなんだよ！？」

ベ「その方がおもしろそうだから！（キリッ）」

コ直「…くそっ…元に戻ったらバルギルド・ザケルガで精神壊してやる…」

ベ「何も聞こえない。さて、次回はいよいよあの人たちの登場です…」

コ直「目標としては今週の金曜日までに投稿したいらしいです」

ベ・コ直「」ではまた今度！」「」

第三十二話 回避不能!? (前書き)

何とか出来上がったあ!

では第三十二話、始まります!

第三十二話 回避不能!?

新暦65年 6月4日 午前0時…

海鳴市にある八神家…

そこで…4人の騎士たちが再誕した…

S I D E : 直樹^{コバト}

部屋にいきなり溢れた光はものの数秒で収まった

うつすらと目を開けるとそこにはミッド式の魔法陣とは別の魔法陣が広がっていて、ノースリーブの簡易的な服を纏った…

「闇の書の発動を確認しました」

ピンク色の髪をポニーテールにした女性と…

「我ら、闇の書の蒐集を行い主を守る守護騎士にてございます」

金髪のボブカットの女性と…

「夜天の主の下に集いし雲」

体格のいい白髪の男性、そして…

「ヴォルケンリッター…何なりと命令を」

赤色の髪を三編みのツインテールにした女の子がその上で跪いていた…

「（ここまでは原作通り…いや、オレがいるから違うか…）」

そして、その夜天の主はというと…

「…キユ〜………」

見事に気絶してオレにもたれかかっていた…

ヴォルケンリッターたちははやてが声をかけないから跪いてうつむいたままだ

「（…しょうがないか） おゝい、ちょっといいか？」

「『『『『?!?』『』『』」

4人が一斉に顔をあげた

…ってことはオレが主じゃないってことはわかってるんだな

「誰だよテメエ！」

赤髪の女の子が怒鳴りながら立ち上がる

「オレが誰かってことより、お前らが言ってる“夜天の主”って
はやてのことか？」

「そうだが？」

今度はポニーテールの女性が喋る

「…はやて、気絶してるぞ？」

「ええっ!？」

金髪の女性が焦って近づいてくる

「…う、うん…あれ？私、どうしたんや？」

その時、もたれかかっていた声が聞こえはやてが起き上がった

「おおはやて。気づいたか」

「直樹くん？ 私はいつたい…。それにその人たちは？」

…とりあえず必要なのは、お話だな…

SIDE:直樹^{コト} OUT

SIDE: はやて

あれから私たちは一旦リビングに出て、私はいろいろと話を聞いた

「そっか、この子が闇の書なんやね。で、みんなが守護騎士の
…」

「シグナムといます」

「シャマルです」

「ザフィーラです」

「……ヴィータ」

ポニーテールの人はシグナム、金髪の人がシャマル、男の人がザフィーラで、小さい子がヴィータか

なんや、ずいぶん賑やかになりそうやな

「まあとりあえず、私は闇の書の主として守護騎士みんなの衣食住をきつちり面倒見なあかんってことや。改めて、私は八神 はやて。呼び方は何でもええよ。よろしくな？ シグナム、シャマル、ザフィーラ、ヴィータ」

「はい、主はやて」

「もちろんです。えっと、はやてちゃん」

「よろしくお願いします、主はやて」

「…よろしく、はやて」

よしよし、みんなええ子そつやな〜

「…なあ、はやて」

「どうしたん？ ヴィータ」

振り向くとヴィータは1人の人を見つめてた。それは…

「あいつ、誰？」

ソファーに座った直樹くんやった

「…主はやてに危害を加える存在なら、我らが叩き潰しましょうか？」

シグナムが胸元のネックレスに手をかける

他のみんなもやっぱりピリピリしてる

「あかんあかん！ 直樹くんは私の友達や！ 敵とかとちゃうから！」

あわてて私は直樹くとみんなの間に入る

「でも…その直樹くんも魔法のことを知ってるんじゃないですか？ 私たちの話を聞いても全く驚いてないみたいですし…」

シヤマルが警戒しながら直樹くんを見る

シヤマルの言う通りやな…直樹くんは私たちが話してる間ずっと黙ったまま座ってた

変なぐらい落ち着いて…

「直樹くんもしかして…魔法使いなんか？」

直樹くんはしばらくうつむいて左手首につけてた腕輪をさすってた…

ほんで…

「いや、オレは魔法使いじゃない…少なくとも今は、な」

「ど、どついついことやっ？」

今は？ ということはそのうちなるんか？ それとも前そつちったんか？？

ん……わからへん…

「まあええわ！ そのうち詳しく教えてや？」

「ああ、きつと近いうちに話せると思うから」

「そう、なら今日はもうみんな寝よか。もう遅いし……」

「よ、よろしいのですか!? 主はやて!」

「コイツ、やっぱり危険なんじゃ!」

シグナムとヴィータが困惑した表情で話してくる

まあ、私の心配してくれてるのはわかんねんけどなあ……?

「ええのええの。直樹くんならきつと大丈夫やから! はい、みんなのベッド決めるからついてきてなあ!」

そう言っって私は空き部屋へ車椅子を走らせる

ちよつと心配やけど……大丈夫やる……たぶん……

S I D E : はやて O U T

S I D E : シグナム

我らは主はやてに部屋とベッドまで頂いた

主はやてにしてみれば我らはいきなり現れた他人だ

…にもかかわらず、あの方は我らをまるで家族のように扱ってくださった

このような主は…未だかつていなかった…

「何ていうか…不思議な子ね、はやてちゃんって…」

「お前もそう思っていたか」

「シグナムも？」

「ああ…」

…闇の書の旅も、あの方ならあるいは…

「しかしシグナム」

「何だザフィーラ」

向かい側にいたザフィーラが話しかけてくる

「あの直樹という少年、どうする？」

「決まってるんだろ！今すぐにでもブツ潰すんだよ！」

今まで黙っていたヴィータが声を荒げる

「ヴィータちゃん、少し落ち着いた方が…」

「あたしは普通だ！ それより何でそんなに迷ってんだよ！？
今までだって、主に近づく怪しいヤツはみんな潰してきたじゃねえか！」

「主はやては彼を友と仰っていた。ならその意志を尊重するべきだろう」

ザフィーラがヴィータを宥めようとする

しかしヴィータは聞く耳を持つとしない

「…シャマル、あの少年の魔力は？」

「私も気になってさっき調べたの。少しあるぐらいだったわ」

……どうしたものか……

我らは主の守護騎士……

主の意志は尊重するべきだ……

しかし、我らの第1の使命は…主を守ること

……ならば……

「…ならば、あの少年が少しでもおかしい行動をとった時…その時には、我らが彼を消そう。それでいいか？ ヴィータ」

ヴィータは少し悩んでいたがやがて…

「…わかった。けどあいつが少しでも！少しでも変なマネしたら…その時は【ギシッ】っ!？」

今の音は…床のなつた音!？

【ギシッ、ギシッ、ギシッ】

足音は…進んでいる？

「(シャマル、この足音はまさか…)」

私は彼に聞かれないように念話でシャマルに話しかける

「(ええ、魔力反応から見て間違いなく直樹くんだわ。あっ!今玄関から出ていったわ!)」

「(ほら見るシグナム! こんな時間に外に出ていくんだぞ!？ 変だろ!?)」

…確かに今は午前3時前…

ただの子供が起きて、なおかつ外に出るのがおかしいというのは
一理ある

「(…わかった。念のためについていこう。ザフィーラとシャマルは万が一に備えてここに残っている。行くぞ、ヴィータ)」

「(承知した)」 「(わかったわ)」 「(おう!)」

…直樹、と言ったか？

本当にただ者ではないのか？

S I D E : シグナム O U T

S I D E : 直樹^{コバト}

オレは今、はやての家から少し歩いたところにある空き地に来ている

時間は午前3時過ぎ…

何でこんな時間にこんなところにいるか？

それはもちろん、誤解を解いておくためだ

あの場でのヴォルケンリッターたちの警戒心はかなり強かった…

あのままじゃはやてがいくら止めていてもそのうち争いになるはずだ

なら…今話し合っておくべきだろう

けど、たぶん話し合いではすまないはずだ

O H A N A S H I覚悟でいた方がいいだろうな…？

オレは手首につけたバリーを見る

このバリー、セットアップは出来ないがその他いろいろな機能なら使える

例えば今使っているのは…ただの時計機能だ…？

今の時刻は…午前3時07分…

「…約束通りなら…あと23分……っ！ 来たか…」

背を向けていた空き地の入り口を振り向くと、そこにはシグナムとヴィータが立っていた…

「…何か用か？」

「直樹、だったな。お前に聞きたい…お前の言葉にあった“今は魔法使いではない”…これはどういうことなんだ？」

いきなりそれを突っ込んでくるか…

まあ当然と言えば当然か…

「そのままの意味だ。今のオレは魔導師じゃない。それだけだ」

「信じられねえな！ シグナム、悪いけどもうコイツ潰すからな！ アイゼン！」

ヴィータがネックレスについたハンマーのミニチュアをつかみながら叫ぶとミニチュアは大きくなり、まるでゲートボールのスティックのような長い柄のハンマーが手に握られた

これがヴィータのデバイス、“鉄の伯爵”くろがね グラーファイゼンだ

「待て、ヴィータ！ 主はやての言葉を忘れたのか!？」

「うるせえ！ こいつは絶対に潰した方がいいヤツだ！ 悪いけど止まる気はねえぞ…」

シグナムは止めようとするがヴィータは聞く耳持たない、つて感じだな…

…時間はあと…19分…

…しょうがない…やるか…

「わかった。戦えばいいんだな？」

「ああ！ まだ騎士甲冑は賣ってないけど、そのくらいベルカの騎士のあたしにはどうってことねえ！ ちょうどいいハンデだな！」

「言ってくれるな…。けど、ここでやるのは危ないな。場所を変えるからついてきてくれ」

オレは威嚇しまくりのヴィータとため息をついているシグナムを

連れて歩き出す

「…ん？ おい！ どこに行くんだよ。そっちは行き止まりじゃねえのか？」

そう、この空き地は入ってきた入り口側以外は全て周りをブロック塀や民家の壁に囲まれている

そしてオレたちは入り口と正反対の壁に向かっていた

「いや、こつちであつてる。戦う場所は…ここだ！」

オレが指を指した先には……………

壁に貼られたシャッターのような模様のポスターだった

「テメエ、ナメてんのか!？」

「別にナメてなんかないって…よつと！」

オレがポスターの下の方を掴んでシャッターを開けるように持ち上げると、ガラガラと音をたてながらポスターのシャッターが動いた

「っ!？ 絵が、動くだと!？」

「な、何だよコレ!？」

2人ともかなり驚いているみたいだ

まあ当然か…これ、魔法じゃなくてドラえもんのひみつ道具だか

らな…

このポスターは“壁紙シリーズ”といって、それに描いてある店や娯楽施設なんかに入れる道具だ

例をあげると“壁紙レストラン”や“壁紙学校”なんかがある

そして今回使ったのは…

「これは“壁紙秘密基地”っていつてな、中はかなり頑丈に出来てるし、広さも十分ある。戦うならこの中で戦ってもらうぞ」

まあ広いっていつても改造してせいぜい東京ドームが1個スッポリ入るぐらいだけだな…

「…わかった。あたしは潰せさえすればいいからな！」

「…ハア…、何でそうなるんだ…」

ん？ シグナムがうなだれてる気がするけど…気のせいか？

…にしても…結局自分から勝負ふっかけちゃったなあ…？

どうしよ…まあやれるだけやるか…

オレは2人を連れてポスターの中にあつた階段を降りていく

全員が入るとシャッターが勝手に閉まっていった…

S
I
D
E
:
直樹
OUT

第三十二話 回避不能!? (後書き)

ベ「ぷっ、結局自分から戦闘開始って…バカだろwww」

コ直「うるせえ!っていつかそれはお前のせいだろ!？」

ベ「まあまあまあまああ」

直「6回…」

ベ「ネタはここまでにして、いよいよ次回はヴィータと戦闘です。本当は今回の話にくつつけたかったんですけど長くなりそうだったのでわかることにしました。次回は頑張って次の月曜日までに投稿します!」

ベ・コ直「」ではまた今度!」

第三十三話 さあ、戦いだ！（前書き）

ヤバい…かなり遅れた…

とりあえず第三十三話、始まります！

第三十三話 さあ、戦いだ！

S I D E : 直樹^{コトキ}

壁紙秘密基地の階段を降りていくと、広い空間に出る

秘密基地といっても大した設備はないけどな…

訓練用にオレが作った仮想の敵をつくるシュミレーターとか、仮
眠用の部屋とか… e t c

まあとにかくそんなにすごいところじゃない

その中の広いスペースでオレとヴィータはお互いに向き合っていた

「それじゃそろそろ始めるか」

「おう…シグナム、合図頼んでもいいか？」

ヴィータが少し離れたところで立っていたシグナムに尋ねる

「（本当にやるのか？ 直樹が死ぬと主はやてが悲しむぞ？）」

「（当たり前だ！ アイツはさっさと潰した方がいい、ってあた
しの本能が言うんだよ！）」

「（…わかった） それでは始めようか。ヴィータ、直樹…両者準備はいいか？」

「ああ」「おう！」

シグナムは歩いてオレたちの間に立ち…

「……………始め！」

開始を宣言した

「行くぞアイゼン！」

『ヤー！ シュワルベフリーゲン』

開始と同時にヴィータがアイゼンを横に振ると、ヴィータの前に少し大きめのビー玉大の鉄球が出てきて浮かぶ

その数は、3つ…

「行けええっ！」

ヴィータが叫びながら鉄球をアイゼンで叩いてオレめがけて飛ばしてくる

直線的だがスピードがあるので、“今の”オレでは到底避けきれない

なら…“受け流す”！

オレはズボンに張りつけていた“四次元ポケット”から、両面がそれぞれ赤と青の二色ずつの布を取りだし…

「（方向は…正面に2、上から1!）おらあっ!」

迫ってくる鉄球めがけて扇ぐようにふった

すると…

「なっ!?!」

オレに当たるはずだった鉄球はまるでオレを避けるかのように外れ、地面に落ちていった

「ふう〜、何とか間に合ったな…」

オレが今使った道具は、“ヒラリマント”

自分に向かってくるものにマントをふると、向かう方向を別方向へ変えることが出来る道具だ

ちなみに、コピーのオレが使ってる四次元ポケットは万が一に備えて本物のオレが家に置いておいた四次元ポケットのスペア、“スピアポケット”だったりする

「（何で外れたんだよ？ あの布のせいかな？ なら…）近づいて叩く!」

遠距離ではダメと思ったのかヴィータは飛んで接近してきた

「おりやあぁっ！」

素早く振られたアイゼンはオレへと迫ってくる

だけど簡単に食らうわけにはいかない！

「ヒラリマントッ！」

オレの振ったヒラリマントとヴィータのアイゼンがぶつかりあつ

けど、ヴィータはすぐには弾かれずにしばらくぶつかりあつた

「…くっ、せいっ！」

「うわっ！？」

オレはもう一度ヒラリマントを振ることでヴィータを吹き飛ばした

ヒラリマントの吹き飛ばしに少しでも耐えるなんて…

さすがベルカの騎士、ってか…

…こっちからも攻めないとな… けどダメージを与えれそうな道具
具というところりあえずアレだな

オレはヒラリマントを左手に持ち、右手を四次元ポケットに突っ込む

そして取り出したのは、パツと見は刃渡り30センチ程度のおも

ちやの刀

もちろん、おもちゃではないが…

「（あまり長引かせるとこつちが不利だ…。けどさっきの“ただの”打撃じゃダメだ、ってわかったはず…。きつとアレを使ってくる…そこが勝負だ！）」

「（くっそ！ 厄介な布だな……………こうなったら！） アイゼン、カードリッジロード！」

『エクスプロージョン ラケーテンフォーム』

アイゼンの柄についている回って押し込まれ、魔力の込められたカードリッジをロードする

すると、アイゼンのハンマーの部分が徐々に形を変え、片側にスパイク、反対側にロケットブースターのような噴射口がついた、ラケーテンフォームに変形した

ヴィータはアイゼンを構え直すと…

「ブチ抜けえ！ ラケーテン…！」

アイゼンの噴射口から火が噴き出し、ヴィータはまるでハンマー投げのようにグルグルとアイゼンによって加速しながら回る

そして…

「ハンマアアアッ！！！」

その加速のままさっきまでとは比べものにならないスピードで突っ込んできた

当たれば間違いなく今のオレなら1撃でスクラップにされそうな攻撃だ

けどこれは…

「(来た！ チャンスは今だ！)」

オレが狙ってた瞬間でもある

オレはヒラリマントを手放して刀を体と平行に頭の右側で構える
八双の構えで構え、ヴィータを見据える

これで、終わらせるっ！

S I D E : 直樹^{コト} O U T

S I D E : シグナム

始め、私はヴィータの勝ちを確信していた

シヤマルの言う通り、直樹には魔力は僅かにしか感じられなかった
それほど警戒する相手ではないと思っていた

しかし、それは間違いだった…

ヴィータのシュワルベフリーゲンとアイゼンでの打撃…どちらも
威力のある技だ

しかし、直樹はそれを布1枚で防いでみせた

何か仕掛けはあるのだろうか、ヴィータの攻撃を防いだ…これは
紛れもない事実だ

さらに直樹は玩具のような剣をどこから取り出した

ヴィータがラケーテンで突っ込んで行く中で直樹はその剣を構え
直し、ヴィータを見据えていた

「（あの目は…何かを狙っている！？）」

その予想通り、ヴィータがアイゼンを当てようとした瞬間、直樹
は剣を横一線に振り抜いてヴィータを斬った

ヴィータは一瞬止まり、その場で崩れ落ちた

…どうやら、ヴィータの直感は正しかったらしい…

あの強さ…是非とも戦いたい！

私は無意識のうちに胸元の剣のミニチュアに手を伸ばしながら2人のもとに歩いていった…

S I D E : シグナム O U T

S I D E : 直樹^{コバエ}

「嘘…だろ!？」

何かどこかで聞いたことあるセリフを言いながらヴィータが倒れる

ヴィータを1撃で倒した刀…

これは“名刀電光丸 メイトウデンコウマル” といって、刀の中にはリーダーが組み込まれていて相手の動きをキャッチして自動的に1撃でダウンする場所を斬る、という道具だ

ただ、確実に倒せるわけじゃない…今は相当運が良かったのとヴィータがオレを甘く見ていたおかげで勝てたんだ

これが例えば油断のない剣の達人、例を挙げるなら「直樹、次は私と勝負だ!」…そう、いつの間にか近くまで来てたシグナムとか…

「…シグナム、一応聞くけどお前はオレと戦うの反対してなかつ

たか？」

「…あゝ…その…わ、私もお前が危険だと思ったからだ！ 決してお前が強そうだから戦いを挑んだわけではないぞ！？」

…全部言ってるぞ…？

…にしても、オレ生きてここ出られるのかな…（泣）

「…わかった。けどその前にヴィータを運ぶから待ってくれ」

「あ、ああ…わかった」

オレは側で気絶していたヴィータを抱えるとそのまま少し離れたところまで行き…

「…よつと！」

そこで大きく足を踏み込んだ

すると地面から四角い箱がせりだしてきて、徐々に変形しながら簡易的なベッドになった

オレはそこにヴィータを寝かせるとシグナムのところに戻った

「待たせたな…それじゃ始めようか」

オレは右手に名刀電光丸、左手にヒラリマントを持ち直してシグナムと向き合う

「ああ、そうだな。レヴァンティン！」

シグナムが胸元の剣のミニチュアを掴むと、ミニチュアは光ながら大きくなり、光が収まるとシグナムの手には白い片刃の長剣が掴まれていた

これがシグナムのデバイス、“炎の魔剣”レヴァンティンだ

「では…参るぞ！」

その声と共にシグナムは素早く間合いを詰めてくる

その動きに合わせてオレも電光丸を振りかぶる

そのままレヴァンティンと電光丸は激しくぶつかりあった

「くっ！重い！？さすがシグナム、つてか…」

横斬り、突き、斬り上げ…いろいろ試してみるがやっぱり攻めきれない

「…得物の差か…」

名刀電光丸は一見無敵の剣に聞こえるが、当然弱点はある

それは、バッテリー式だということだ

電光丸はバッテリーで動いている…しかもその消費はかなり早い

バッテリーが減るのに比例して強さが変わる

つまり、こっちはずっと打ち合っているよ…

「どうしたっ！ 動きが鈍くなってるぞ！」

「ちっ…」

こっちはだんだん押されてくるってわけだ…

オレは斬り下がりで一旦距離を取りヒラリマントをしまつて他のひみつ道具を取ろうとした…が、それはまずかった…

「スキだらけだっ！」

「っ！？」

一瞬の油断だった…気がつけばシグナムはすぐ傍まで迫りレヴァンティンを上段に振りかぶっていて、今まさに降り下ろそうとしていた

「（っ！ ヒラリマントはもうポケットの中…この電光丸じゃ…）
くそお！」

レヴァンティンを電光丸で受け止めるがさらに不運が重なった

何とここで電光丸のバッテリーが切れてしまった

黄色だった刀身はみるみるうちに灰色に変わり、脆くなる

そして…

バキッ！！

電光丸の刀身は粉々に碎け散った…

それでもレヴァンティンの勢いは完全に殺せてなく、オレめがけて迫る

身体を捻って避けようとしたが、遅かった…

レヴァンティンはオレの右腕に命中し、そのままの勢いで吹き飛ばされて地面に打ち付けられた

「…う…（身体が…動かない…）」

今の攻撃で身体の中のケーブルがいかれたみたいだ…

目線の先にある左手のバリーを見ると、今の時刻は…午前3時…29分…

「…これまでのようだな…。少々期待外れだったが、魔力なしでよくやった」

「……………へへっ」

「…何がおかしい？」

「…ああ、そろそろ…時間だ」

同時に時刻は午前3時30分を指した…

「時間？ いったいどうい【ガラガラガラ……、コッ、コッ、コッ
…】っ！？ 誰だ！」

秘密基地の中に入り口のシャッターを開く音と階段を降りてくる
音が響く

午前3時30分…

それははやての家で“コピーのバリーをさすってから” ちょうど
2時間後…

そして入り口から現れたのは…

「ふう〜、エマーゼンシーがバリーに届いたから急いで帰って
来て見れば… こういうことか… 忘れててゴメンな、 “オレ”」

今まで帰って来なかったバカだった…

S I D E : 直樹^{コバ} O U T

S I D E : 直樹

オレは入り口から呆然としているシグナムの横を通り抜けてコピ

「なところ近づく

「立てるか？」

「…ちよつと無理っばいわ…。悪いけどもう閉まってくれないか？ 今日までの愚痴は後で言っつてやる」

「はいはい、わかってるって」

オレはコピーと握手してオレが居なかった間の記憶を渡してもらおう
本当のコピーロボットはおでことおでこを合わせることで本人が居なかった間の記憶をもらおう

けどオレはいちいちそれをするのが面倒くさかったから握手でもらえるように改造した

「よし、記憶は全部渡したぞ」

「おう、お前はポケットで休んでおいてくれ」

「ああ」

オレはコピーの鼻を押して元に戻してポケットに入れた

「…さて、待たしたな。シグナム」

オレはシグナムの方を向いて声をかける

「お前は…誰なんだ！？ さっきまで私が戦っていた直樹は何な

んだ!？」

まあ、戸惑うのが当然か…

「さっきまでのオレはコピーロボット、つまり偽物だ。でもって…」

『スタンバイレディ セットアップ』

「オレが真正銘本物の、魔導師 有沢 直樹だ」

バリーが自動でセットアップしてくれたのは管理局で新しく組んだ新プログラムだ

神界でリアからバリーのことを聞いてから組み始めたプログラムが向こうでようやく完成した

バリアジャケットは前までのと一新し、上は白いTシャツに黒いベスト、下は青色のラインが入った黒いロングズボン

バリーの形状も初期状態を元モード2のスサノオに換え、他にいくつかモードを追加した

しかも、全モードにはカートリッジシステムを復活させた

無印のときは突っ込まれたら面倒くさいから外してたんだよね

「魔導師…しかも、剣士か…」

シグナムはオレの姿を見てレヴァンティンを構える

「…今日はもう遅いし、オレも疲れてるんだ…。だから、勝負は1撃に賭けないか？」

「…いいだろう。その代わりに、こちらも少し本気で行く！ レヴァンティン、カートリッジロード！」

レヴァンティンがカートリッジをロードし空の薬莖が排出される

そして、レヴァンティンは激しい炎を纏った

「…バリー、カートリッジロード！」

『了解！ ロードカートリッジ！』

バリーの柄の部分でカートリッジがロードされ、下から薬莖が排出される

すると、バリーは魔力で出来た“風”に包まれる

「カートリッジシステムか…おもしろい！ 行くぞ！」

「おう！」

オレとシグナムはお互いの剣を構え、一気に走り出した

そして…

「紫電…」 「空牙…」

「「一閃ッ！！！」」

炎と風をそれぞれ纏った剣がぶつかりあう

「はああああっ！！！」

「おおおおっ！！！」

数秒そのままだったが…

「うわあっ！？」

「くっ！？」

オレとシグナムは相手の斬撃に吹き飛ばされた

「くそっ…」

オレはすぐに起き上がった

シグナムも同時に立ち上がっていた

「…引き分けで…いいか？」

「…ああ、私もそう思っていたところだ。また戦ってくれるか？
直樹」

「考えておきます…。それより、オレはヴォルケンリッター全員
とちゃんと話がしたい。日が昇ってから時間を取ってくれないか？」

「いいだろう。とりあえず今は…」

「はやての家に帰るか」

ハア、これから大変そうだな…

S I D E : 直樹

O U T

第三十三話 さあ、戦いだ！（後書き）

ベ「ふう〜、何とか生き延びたなあ〜コピー」

コ直「ボロボロだけだな」

ベ「なら修理に行つてらっしゃい ポチツとな」

コ直の下に落とし穴出現

コ直「あつ！おまええええ……」 穴に落ちていく

ベ「というわけで！ 今回より本物の方に戻します！」

直「おつ、出番か？ 改めて読者の皆さん、よろしくお願いしま
す」

ベ「にしても、“空牙一閃”って何さ？」

直「いやあ〜、何となく“一閃”ってつけたかったんだよ。技的
には居合いの空牙と変わらないぞ？」

ベ「ふう〜ん。さて、次回は目標今週の金曜日中で書いていくつ
もりです！」

ベ・直「」ではまた今度！」「」

第三十四話 … 仲直り？（前書き）

今回は少し短め、かな？

では第三十四話、始まります！

第三十四話 … 仲直り？

S I D E : ヴィータ

… あたしたち闇の書の守護騎士は昔からいろんな主のところを闇の書と一緒に転々としていた…

その中にはあたしたちを奴隷のように扱うヤツ、ひたすら戦わせようとするヤツ… もっと非道いヤツもいた…

いつしかあたしは、どんな主でも信じられなくなっていた…

命令されれば人殺しだって平気でやった

そんな毎日が嫌になってたのかもしれない…

次の主もロクなヤツじゃないに決まってる…

そう思って眠りについたのは憶えてる

けど… それは違った…

今度の主は、今までみたいなのとか偉い魔導師とかじゃなくて…
ただの女の子だった…

その上、あたしたちにまるで家族みたいに接してくれた…

信じられなかった…でもこれは事実…

新しい主、八神 はやては間違いなく今までの主とは違う…そう
思えた

だからこそはやての近くにいたアイツは信用出来なかった

それで戦いを挑んで…あれ？ どうなったんだ？

確かあの直樹ってヤツが刀を構えて…

あたしはラケーテンで突っ込んで…

…っ！ そうか…負けたんだな…

あたし、今どうなってるんだ？

ヒュッ…

ん？ 風か？ あの場所は地下だと思ってたけど…

…ユサッ…ユサッ…

…軽く揺れてる？ それに何か…暖かいな…

とりあえず、目開けてみるか…

ゆつくりと開いた私の目に映ったのは、澄んだ夜空と煌めく星、
それに…

「おっ、気がついたか？ ヴィータ」

…直樹の顔がかなり近くに見えた…

よく見てみると直樹の横にはシグナムがいて、あたしは…直樹に
抱えられていた…

…俗に言う…おおお姫様、ただ抱っこで…／／／／／

「……ハアアアアアツ！？／／／／／」

S I D E : ヴィータ O U T

S I D E : 直樹

目を開けたかと思ったたらヴィータはいきなり大声を上げた

やっぱりこの運び方は問題だったか…

「ゴメンな…、これ迷惑だったか？」

「えっ！？ い、いや…別に迷惑じゃ…ハッ！ 違う違う！ 迷惑だ、早く下ろせ！／＼／＼／＼」

ヴィータは顔を真っ赤にしながらじたばた暴れる

そんなに嫌だったのか… ここまで嫌がられるとは少しショックだな…

「悪かったな、ほい」

オレは足からゆっくりとヴィータを下ろす

「お、おう…あつ、そういうえばシグナム、直樹とお前は戦ったのか？」

ヴィータは地面に下りるとシグナムに聞いた

「ん？ 私はお前に戦うと言ってないはずだが…」

「いやいや、バトルマニアのお前が目の前で戦いを見て「私も戦うぞ！」って言わないはずがねえだろ？」

「……………」

シグナム…お前つて既にそんな認識だったんだな…

「まあ戦いはしたけど、なあ…」

「ああ、あれでは納得がいかない。再戦する約束はしたからな」

シグナムもとりあえず今はまた戦う気はないみたいだ…

管理局本局から地球まで“答えを出す者”を使いながらどこでもドアで帰ってきたからな…

今日はもう寝たいな…

「直樹、今日はもう遅い。夜が明けてから改めてお前のことを話してもらおう。それでいいか？」

「ああ、オレはかまわない…。おっ、着いたな。それじゃ話はこれぐらいにしとくか」

「そうだな」

話してるうちにはやての家に着いたのでオレたちは静かに家に入っていた

…今から朝まで…少ししか寝れないな…？

まあ、しょうがないか…

オレは諦めながらベッドに入る

…はやてのベッドに…

…別にやましい思いで入るわけじゃないぞ!?

朝はやてが起きたときもしオレがいなかったら後が怖いからな…
それだけだ…

本当だぞ？

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : はやて

あれから一晩明けて、今は朝の9時ってところかな？

リビングには夜同じとように全員が集まっとった…

理由は、直樹くんが自分のことを話してくれてるから

だいたい話は聞いたんやけど…

「ようするに…直樹は魔導師で、昨日魔法が使えへんかったんはそのときの直樹くんがロボットやったから、ってことか？」

「ああ、そういうことだな」

へえ、魔法ってすごいねんなあ…昨日いた直樹くんがロボットやなんて…

「それで、みんなはどうなんや？ まだ直樹くんとは上手いかなか？」

「…いいえ、とりあえず差し迫って危険人物、というわけではないようです」

「…あたしも、とりあえずはコイツのこと認めるよ…」

「私はシグナムたちがオツケーならいいと思います」

「私もです、主はやて」

…何や、晩とは大違いやな

まあええことやな！

「よし、それじゃ話はこれぐらいにしとこか！」

「…じゃあはやて、オレはいったん帰ってもう1度夕方ぐらいに来るよ」

直樹くんはそう言うつと纏めてた荷物を持って立ち上がった

「そうか…それじゃまた後でな？」

「おう、んじゃー！」

直樹くんはリビングから出ていった

「主はやて、直樹の見送りをしてきてもいいでしょうか？」

そしたらシグナムも立ち上がって私に聞いてきた

「ええよ、お願いな？」

「はい」

そう言っつてシグナムもリビングから出ていった

シグナム…もしかして直樹くんのこと気に入ったんか？

まあ、好きな人が気に入られるのは…気分がええな

S I D E : はやて O U T

S I D E : 直樹

オレははやての家を出て、高町家を目指して歩いてるとこだ

このまま帰って時間潰して…夕方に翠屋でケーキをもらってもう一度はやての家、って感じか？

…にしても…

「何でお前がいるんだ？ シグナム」

「気にするな、一応見送りをしているだけだ」

さつきから隣にはシグナムがいる

見送りらしいけど…オレは一人で帰れるって…

「…あつ、そうだシグナム」

「何だ？」

「とりあえずにしても、何でオレのこと信用してくれたんだ？」

「…優れた剣士は刃を交えるだけで相手の考えがわかるといふ…。私は正確にはわからなかったが、お前の剣から覚悟と願望が感じ取れた。それも、邪な気配を感じないものだった」

「……………」

「お前が何を望んでいるのかは知らない。が、何故か打ち合った瞬間にお前は悪いヤツではない…そう感じたんだ」

…すごいな…、あの一瞬でそんなにわかるんだな…

「ありがとうな…シグナム。今もう1度、ここで誓う…オレは絶対にはやてに危害を加えたりしない、絶対にだ」

「…わかった、ヴィータたちも一応納得はしてくれただいしな。それでよしとしておこう。ここまででいいか？」

「ああ、それじゃあな」

そう言って手を振るとシグナムは軽く振り返しながら戻っていった

…さて、帰りますか

ゴゴゴゴゴゴ...

大気が震えてる…ように感じる…

そのぐらいの威圧感を今オレの前にいるヤツは放っている

ゴゴゴ、高町家の玄関…

そしてオレの前には…

「直樹くん…どこにいったのかな？（ニコッ）」

…白い魔王だった…

…ヤバい…魔王さんに言っの忘れてた…

「直樹くん！」

SIDE…直樹 OUT

第三十四話 … 仲直り？（後書き）

ベ「…どうしよ？」

直「開口一番に何言ってるんだ？」

ベ「…こないだ20万アクセスの記念話書く、って言っただろ？」

直「ああ…まさか書くのやっぱ止めた！、みたいな言い出すのか？」

ベ「いや、書いてるんだよ？ 今はだいたい半分ぐらい書けたかな」

直「じゃあ何だよ」

ベ「…もたもたしてるうちについてのか26万アクセスになっ
てた…」

直「（。口。）」

ベ「…どうしよ？」

直「…タイトルだけ換えればいいんじゃないか？」

ベ「…やっぱりそうするか…。さて、次回はいよいよあの人たちが帰って来ます！」

直「そのセリフだけで展開が読めそうな気がするのにはオレだけか？」

ベ・直「」ではまた今度！」「

第三十五話 彼らが海鳴にやってえ……来たあっ!!!(前書き)

くそっ…昨日のうちに投稿するつもりだったのに…

あと、タイトルのネタ……はい、わかってます

古いですよね…そんなの関係ねえ!と同じぐらい古いですかねえ…

直「タイトルのネタマジ古いwww」

そこ! うるさいぞ!

…とりあえず第三十五話、始まります!

第三十五話 彼らが海鳴にやってえ……来たあぁっ!!

SIDE：直樹

八神家での揉め事から1週間…

あれからちょこちょこ顔を出したりして少しずつ信頼関係をつく
っていこうとしている

…いろいろと大変だけどな…烈火の将さんとか鉄槌の騎士さんと
か…

そんなわけで、とりあえず死亡フラグは何とか回避出来た

…で、今は何をしてるかというと…

・
・
・

「直樹くん！ 早く、急いで！」

「慌てるなって、なのは。約束の時間までまだあるだろ？」

「でもでも、ひよっとしたら少し早く来るかもしれないよ？ 遅
いより早い方がいいでしょ！」

…どこまでテンション高いんだよ…？

まあわからないでもないけどな…

今日はなんと、テストロッサー家がようやく事情聴取が終わって地球に来るとのこと

どうやらオレが詳しく話したことで1週間近く予定より早く終わっただらしい

そんなわけでオレとなのは、ユーノはフェイトたちと別れたあの海の側の公園を目指して歩いていた

すると…

キイイイン…

甲高い音と共に広場に魔法陣が展開された

「ほら直樹くん！ もう来ちゃうよ、急いで！」

「本当に早く来たな…なら電光石火 ライカ 使うか？」

「走るからそれはいいの〜！」

「2人とも気をつけないとコケちゃうよ！」

そんなやり取りをしながら到着するとちょうど魔法陣が光だし、その上に6人の人が転送されてきた

6人が完全に出てくると魔法陣は消え、ようやく対面できた

「なのは!」

「フェイトちゃん!」

なのははフェイトと…

「ユーノ!」

「アルフ、久しぶり」

ユーノはアルフと再会を喜んでいた

オレはというと…

「直樹、久しぶりね」

「1週間ぶりなんですけどね…直樹くん」

「直樹お兄ちゃん久しぶり」

「まあそうなんだけどな…お久しぶりです、プレシアさん、リニス、アリシア」

残ったテストロッサ家の人と話し、さらに…

「じゃあボクは帰ります。荷物はもう届いてると思うので」

「ええ、ありがとうクロノ」

「お疲れさん、クロノ」

「ああ、あとは任せたぞ直樹」

付き添いできたクロノと話してた…まあ今帰ったけど…

「じゃあ、そろそろ移動しましょうか？」

「ええ、そうね。直樹、悪いんだけど…」

リニスの言葉に応えてたけどプレシアさんは不安そうだ…

まあそうだろ…初めて来る場所なんだから道とかわかんないよな

「僕が案内しますよ…おい、なのは、フェイト、ユーノ、アルフ

！　そろそろ行くぞ！」

オレは向こうで集まってたなのはたちに声をかける

さあ、行くか…新しいテストロッサ家に…

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : なのは

「フェイトちゃん、元気だった？」

「うん、元気だよ。なのはは？」

「元気いっぱい」

フェイトちゃんはこないだまでよりいっぱい笑うようになった
やっぱり家族が一緒だと違うんだね！

「なのは、久しぶりだね！」

「アルフさん！ お久しぶりです！」

アルフさんの肩にはフェレットモードのユーノくんが乗っている

「ユーノも久しぶりだね」

「うん、久しぶりフェイト」

……あれ？

「フェイトちゃん、直樹くんには挨拶行かなくていいの？」

「えっ？ うん、直樹とはそんなに久しぶりでもないから」

「……？ どづいひいど？」

直樹くんとは久しぶりじゃない？

だってフェイトちゃんたちが本局に行ってからだいたい1ヶ月ぐらいだよね…

「直樹とは…1週間ぶりぐらいだね、フェイト」

「そうだね、アルフ」

……えええええっ！？

1週間前って、直樹くんが家に居なかった日？

「…おい、なのは、フェイト、ユーノ、アルフ！ そろそろ行くぞ！」

……とりあえず、直樹くん…あと O H A N A S H I I しようか…

S I D E …なのは O U T

S I D E …直樹

「ふえ〜！ フェイトちゃんたち、海鳴に住むのっ!？」

「うん、リンディ提督とクロノが母さんと一緒に家を探してくれ
たんだ」

「まあ…プレシアが家を選ぶと…ねえ」

「うん…ちよっとね」

…プレシアさんの家選び…

…ああ、あの高層マンションか…

子ども1人にあれは…なあ…

それからしばらく歩くと…

「あっ、あれみたいですよプレシア」

「そうみたいね。直樹、あそこよね？」

「住所は…はい、あそこで合ってます」

…しかし、予想通りというか…

テスタロッサ家の新居…マンションって聞いたときまさかとは思
っただけど…

目の前にあるマンションは、原作でもハラオウン家が住んでたあ
のマンションだった

立地も原作と同じで…

「ここって…私の家の近くだよ!」

「えっ、本当に?」

高町家の近くだった

・
・
・

「うわあ〜! 本当に近いよ、あそこが私の家!」

「あれかな?」

「違う違う! あれだよ!」

なのはとフェイトはベランダに出て景色を見ている

残りのメンツはというと…

「プレシアさん、これは!」

「ああ直樹、それはあっちの部屋の棚に置いてくれるかしら」

「プレシア〜、この包みは?」

「リニス、それは台所をお願い。お皿とか入ってるから気をつけ

て

「お母さ〜ん、私とフェイトの服ってど〜?」

「えっ…と、たぶんこの箱に…あっ、あったわ。アリシア、あそこの部屋があなたとフェイトの部屋だからそこで開けてね?」

「は〜い」

プレシアさんを司令塔に荷物を片付けていた

アルフとユーノ（2人と人間モード）が外から荷物を運んできて、オレ、リニス、アリシア、プレシアさんで片付ける…その繰り返しだった

そのおかげで30分ほどで片付いた

「…だいたいこれで終わりでいいわね。リニス、アリシア、直樹、アルフ、ユーノありがとう。…そうね、直樹となのはさんの家族には挨拶しておいた方がいいかしら」

「あっ、それだったら今日はお父さんとお母さん、翠屋に行ってるんで一緒に行きませんか?」

「いいかもな。プレシアさん、どうですか?」

「それじゃお邪魔しようかしら。みんな、出かけるわよ!」

「「「「は〜い!」」」」

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : フェイト

私たちはなのはと直樹に案内されてなのはのご両親が経営している喫茶店、喫茶翠屋に来ている

なのはが外国の友達ということで私とアリシアのことを話してたらしく、母さんがお店の中でなのはのご両親と話している

私とアリシア、なのはは外にあったテーブルで軽いお茶会をしている

直樹は私たちのケーキを取ってくるって言うってお店の中に…

リニスは何かの用事で、アルフとユーノは散歩に行つて別行動なんだ…

「…で、本当なの？ 直樹くんが本局に10日間もいたって…」

「うん…でもこっちにもずっといたんだよね？」

どういづことだろ？ 魔法なのかな？

「直樹お兄ちゃんは名前はわからないけど自分の「コピー」をつくるひみつ道具を使ったんだよ」

「アリシアちゃん、何でわかるの？」

「私の希少技能 レアスキル なんだ！ どんなことでも答えがわかるんだよ！ まあ、まだ特訓中だから少ししかわかんないけどね」

「ふえ〜！ すごい、アリシアちゃん！」

「えへへ」

アリシアはとってもうれしそうだ

「直樹はね、アリシアのこの能力の制御のために来てくれたんだ」

「そうだったんだ〜。(真面目な用事だったんだ…?) ……そういえば、2人は学校ってどこか行くの？」

「えつとね、母さんはどこかに手続きしてたみたいだよ」

「どこかはわかんないけどね」

どこに行くんだろ？ ……出来るなら…

「教えてあげましょうか？ アリシア、フェイト」

「「リニス！」」

後ろから声が聞こえて振り向いてみると大きな箱を2つ持ったり
ニスが立っていた

「これを見たらわかると思いますよ？」

そう言っってリニスは箱を私とアリシアの前に置いた

開けてもいい、ってことだよね？

私とアリシアは箱の蓋を開けた

「えっ？ これって…」

中に入っていたのは…1組の服だった…

S I D E : フ ェ イ ト O U T

S I D E : 直 樹

オレはなのは、フェイト、アリシアにケーキを持っていこうと店
に入ったが、なぜか大人の会話に巻き込まれてまだ店の中にいた

「…という事で、これからもよろしくお願いします」

「いえいえ、近所なんですから仲良くしましょう」

「なのはと直樹もそちらのお子さんとは仲がいいみたいですし、むしろこっちからお願いたいたいぐらいですよ」

桃子さんも土郎さんもプレシアさんは好印象みたいだ

だからだろう…

「でも本当にいいんですか？ 私がここで働いても…」

「もちろんですよ！ 仕事を探すなら知り合いのところの方が落ち着くだろうし」

「…ありがとうございます」

プレシアさんはやはり嬉しいんだろう…

顔に柔らかい笑みが浮かんだ

「そういえば、お子さんの学校はもう決まっただんですか？」

「はい、もう編入手続きも済ませました」

そのとき…

「（お）母さん！」「」

ドアが開いて外からフェイトとアリシアが何かの箱を持って入ってきた

その後になのはとリニスが入ってくる

「お母さん！ この制服って…」

「なのはと同じ、だよな？」

2人が中身を見せると中には確かに聖祥大付属小の制服が入っていた

「そうよ、2人とも週明けからなのはさんと直樹のクラスメートね」

「ああ、聖祥小学校ですか。あそこはいいところですよ、なあなのは」

「うん！」

土郎さんの質問になのはは大きく頷いた

…まさか、こうなるとはな…

オレはこれからのことを思って心の中で小さくため息をついた…

SIDE：直樹 OUT

ボクは今、アルフと一緒に街を軽く散歩している

何でも、アルフは人間モードの姿をひよっとしたらなのはの家族に温泉で見られたかもしれないから遠慮したかったらしい…

じゃあ狼モードならいいんじゃない？っていう意見はなぜか黙殺されてこうして散歩してるってわけ

「それにしても、前に来たときはドタバタしてたから気づかなかっただけさ…いいところだね、ここは」

「…うん、ボクもあまり知ってるわけじゃないけど…この街はいいところだと思うよ」

話しながら歩いていると、道の端でたくさん荷物を持ったお婆さんが座り込んでいた

「ん？ お婆さん、どうしたんだい？」

アルフはお婆さんに気づくとすぐに声をかけた

やっぱり、アルフは優しいんだね…

「ああ、この先にある家に帰るところなんだけど、どうにも腰の調子が悪くて動けなくてねえ」

「なんだ、それならあたしたちが手伝ってあげるよ。いいかい？
ユーノ」

「もちろん。それじゃあどうやって運ぼうか」

「うん、ユーノはお婆さん背負えるかい？」

「たぶん…行けると思うよ」

「よし！ それじゃあたしが荷物を全部持つからユーノはお婆さんを背負ってあげて」

「うん、わかったよ」

ボクはお婆さんの傍に行くとき背中を向けてお婆さんをおぶさった

その後、アルフは置いてあった荷物を両手で持ち上げた

「悪いねえ、坊っちゃん。それにお嬢ちゃん、力持ちだねえ」

「まあね！」

ボクたちはそのままお婆さんに道を聞いて歩いていった

お婆さんの家につくと家にいた家族の人らしい女の人が出てきた

「お義母さん！ 大丈夫ですか！」

「大丈夫…とは言えないけど、この人たちが助けてくれたんだよ。
ありがとうねえ」

「いいんだよ、体に気をつけなよ、お婆さん？」

「そうですか…。あの、義母を助けてくださってありがとうございます！
います！」

「いいですよ。助けたいと思っただけなんですから」

「そうですか…あつ、ちょっと待っていてください！」

女の方は一旦お婆さんと家に入ると少ししてもう1度出てきた

「これ、商店街のくじ引きで当たって使い道がなかったんですけど…よかつたらもらってくれませんか？」

そう言っただけで女の方は何かが入った封筒を差し出してきた

「えっ？ いいんですか？」

ボクは思わず聞き返してしまった

親切をただけなのにお礼なんてもらっていいのかな？

「もちろんですよ！ それに、さっき言った通り使い道がないので…もらってくれませんか？」

「…わかりました。ありがたく頂きます」

ボクは女の方から封筒を受け取った

そのあと、もう1度お礼を言われながらその家を後にした

「ねえユーノ。その中身ってなんなんだい？」

「えつとね……あつ、遊園地のフリーパス引換券、みたいだね。それも2枚」

中にはここから少しだけ離れたところにあつたはずの遊園地のフリーパス引換券が2枚入っていた

しかも……

「期限が…明日までだね」

「…ふうん…」

どうしよう…やっぱり使うべきだよね

せつかくもらったんだし…

直樹たちにあげようかな

「……ねえ、ユーノ…」

「えつ、何かな？」

「…よかつたらでいいんだよ？…よかつたら、さ…その引換券、あたしとユーノで…使わないかい？／／／／／」

アルフは顔を赤らめながら提案してくる

それって…

「それって…つまり…」

「…あたしと一緒に行かないかい？ …遊園地／＼／」

…とりあえず浮かんだのは…直樹たちに券をあげるのは止めよう、
ってことだった…

S I D E : ユーノ O U T

第三十五話 彼らが海鳴にやってえ……来たあっ!!!(後書き)

直「タイトルのネタマジ古いwww」

ベ「後書きにまで引っ張るかっ!?!」

直「悪い悪い…バカに出来るなら出来るだけするのが最近のマイブームなんだ」

ベ「なんてひねくれたマイブームだ…」

直「次は…なんだ？ ユーノとアルフ主体なのか？ ならオレの出番は無さそうだな…」

ベ「いや、なんとか出してやるよ！ 次の更新は…そうですね、来週の月曜日…の朝にします!」

直「ずいぶん限定したな…まあとりあえず」

ベ・直「」ではまた今度!」」

第三十六話 STANDING BY…(前書き)

…月曜日の朝って言ったのに…？

とりあえず投稿しますが、これは準備編みたいなものです！

本編は今から食べる昼飯を食べ終わってから投稿します！

では第三十六話、始めます！

本編をすぐに投稿するので後書きはなしです！

第三十六話 STANDING BY…

その日、海鳴市ではとある計画に向けて動き出す者たちがいた…

SIDE：なのは

「ふう〜…さっぱりした〜。明日は何しようかな？」

ガチャッ…

「あっ、なのは…ちょっといいかな？」

「ふえ？ どうしたの、ユーノくん」

お風呂から上がって部屋に戻ると机の上にあったユーノくんが声をかけてきたの

「明日、1日出かけてもいいかな？」

「別にいいけど…どこに行くの？」

「えっ！？ えっ…と、ちょっとその辺までだよノノノ…じ、じゃあボクもつ寝るね！ おやすみ！」

そう言つとユーノくんは寢床の籠に入ってしまった…

…うん、怪しい…

そんなときだった…

「（なのは、聞こえるかな？）」

「（フェイトちゃん！？）」

フェイトちゃんから念話が届いたのは…

S I D E : な の は O U T

S I D E : フェイト

「…よし、準備完了！」

私は引越した夜、やることがなかったから週明けから行く学校のカバンの用意をしていた

「早いんじゃないの？ フェイト」

「だって…やることがなかったし…アリシアはやらないの？」

「学校は明後日からだしね、明日やるよ」

そのとき…

「フェイト、ちょっといいかい？」

アルフが部屋に入ってきた

ちなみに、家の中の部屋割りとしては私とアリシアの部屋、アルフとリニスの部屋、そして母さんの部屋だ

母さんは部屋に本が多いから1人部屋になっているんだ

「どうしたの？」

「あのさ…明日ちょっと出かけてもいいかい？」

「いいけど…どこかに用事なら私もついていこうか？」

「えっ!?! い、いいよ! それに、1人ってわけじゃないし…
／／／」

「えっ?」

「じ、じゃあそういうわけだからよろしく!」

「あっ、アルフ!」

アルフは早口でそう言つとさっさと出ていった

誰かと出かける？ …誰だろ？

「…ユーノと出かけるみたいだね、アルフ」

「えっ？ …あつ、答えを出す者 アンサーターカー？」

「うん、でもわかったのはユーノと出かけるってことだけだね」

…ユーノとか…こういうのって詮索しちゃいけないだろうけど
…気になる！

そこで私は何か知ってそうなのはに念話で話しかけた…

S I D E : フ ェ イ ト O U T

S I D E : なのは

「(そっか、ユーノくんはアルフさんと出かけるんだ)」

「(なのはは知らなかったの?)」

「うん、私には出かけるとしか言っていなかったからね」

「（こっちも、アリシアがいなかったらユーノが相手ってわからなかったよ…）」

うん、ここまで秘密にしてお出かけ

しかも、男の子と女の子の2人で…

……まさかね……

…でも、気になるな

「（…ねえ、フェイトちゃん…）」

「（何かな？　なのは）」

「（…尾行、してみようか？）」

「（び、尾行！？　アルフとユーノを？）」

「（うん）」

「（でも…私たちじゃバレちゃうよ…アルフは一応狼なんだし…）」

…ムム、そっか………あっ！

「（大丈夫だよフェイトちゃん！）」

「(えっ?)」

「(こっちには“頼れる”助っ人がいるからね! というわけで明日は2人の尾行をしよう)」

「(…えっと…うん、了解。……………アリシアに聞いたら、2人は明日駅前で待ち合わせるみたいだよ)」

…答えを出す者 アンサートーカー って…プライバシーなんて関係ないんだね…?

アリシアちゃん…恐ろしい子なの!

「(それじゃ明日はフェイトちゃんはアルフさんに、私はユーノくんについて行って私たちも駅前で待ち合わせなの!)」

「(わかったよ。じゃあね)」

…さて、助っ人を呼びに行くの

S I D E : : なのは O U T

「…（ブルツ）…何だ？ 嫌な予感がメチャクチャする…？」

『気のせいでは？』

「…どうだろ？」

第三十七話 それは…少年と少女が奏でし協奏曲 コンチェルト (前書き)

第三十六話も今日投稿したんで読んでください！

では第三十七話、始まります！

なお、今回はこの小説初の恋愛話です

たぶん至らないところだらけなので、出来ればアドバイスが欲しいです！

第三十七話 それは…少年と少女が奏でし協奏曲 コンチェルト

S I D E : ユーノ

フェイトたちテスタロッサ家が海鳴市、しかもなのはと直樹の家の近くに引っ越してきてから1日…

ボクはなのはたちの家から1番近い駅の広場にいた

ちなみに服はいつも人間モードのときに着ている服じゃない

ダメもとで今朝直樹に頼んでみたらひみつ道具を使って新しい服を出してくれた

詳しく言えば、黒色の英字のプリントが入った白色のTシャツにチエック柄の緑色のシャツ、クリーム色の7分丈ズボンだ

あの…着せかえカメラ、だったっけ？

カメラに挿し込んだ絵と同じ服が出てくるなんてすごいな

時間はもうすぐ9時15分前…

ちょっと早かったかな…

そう思っていると、向こうの方から待ち合わせ相手であるアルフがこっちに向かって走っていた

「ユーノ、早いねえ！ あたしが先に来て待っててあげたかったのに…」

「いや…その、緊張しちゃってさ…早く来ちゃったんだ…。女の子と2人でどこかに行くって初めてだからさ…」

アルフの服装はいつもの少し露出度の高い服じゃなくて、所々に花びらのアクセントが入った薄いピンク色のTシャツに青色のジーンズで、首元には金色の輪がいくつも繋がったチェーンネックレスがかかっていた…

「…どうだい？ いつもとちょっとイメージ変えてみたんだけど…」

「うん、すごく似合ってると思うよ」

「そ、そうかい？ ありがとうね…」

うっ…／／／ 何でだろ、今日のアルフ…かなり可愛い／／／

「じ、じゃあそろそろ行くか！／／／」

「そ、そうだね！／／／ 時間がもつたないからね」

そう言ってボクたちは駅の中に入っていった

…うっ…、緊張する…

S I D E : ユーノ O U T

S I D E : なのは

ユーノくんたちが駅に入ってからすぐ、私たちは隠れてた広場の
茂みから出た

「ユーノちゃんとアルフさんがね〜。まさかとは思ってたけど…」

「私も知らなかったよ…。ねえなのは、もう尾行するの止めない
？ アルフとユーノに悪いよ」

フェイトちゃん…私だってそう思うよ？

…だけどね、だけど…

おもしろそうじゃない！

「大丈夫だよ 2人の邪魔はしないから、ね？」

「う、うん…」

「と、いうわけで！ よろしく願いします、助っ人さん！」

頼れる助っ人さん…それはもちろん！

「何でオレがこんなことしなきゃいけないんだ…」

私たちの想い人、有沢 直樹くんです！

「ごめんね、直樹…付き合わせちゃって…」（ゴニョゴニョ）」

「いや、気にするな…悪いのはその魔王様だ…」（ゴニョゴニョ）」

「

「2人とも、何を言ってるのかな？」（ニコッ）」

「「いえ！ 何でもありませんっ！」「」

全く…2人ともノリが悪いの

「じついつのはその場の流れに身を任せるんだよ！

「さて直樹くん！ そろそろ行かないとユーノくんたちを見失っ

ちやうよ？ 何か追いかけるのに便利な道具ないの？」（ニコッ）」

「…ハア…、ほら…これを駅員の人に見せりゃ金なしで通してく
れる」

そう言っつて直樹くんはポケットから1枚のカードを取り出したの

…本当に？ 面倒くさいから適当なこと言っつてないよね？

「ほら、行くぞ。さっさと終わらせよう」

S I D E : なのは O U T

S I D E : 直樹

…ガタンゴトン…ガタンゴトン…

オレ、なのは、フェイトは今、電車の座席に3人並んで腰かけている

そして、オレたちが追いかけてるユーノとアルフは…オレたちのすぐ向かい側に座っている

日曜日の午前中だからか、オレたちがいる車両にはオレたち以外に数人客がいるだけだった

けど…向こうはオレたちには気づいてない

いや、気づくはずがない…

何しろオレたちは3人ともひみつ道具を使っているからだ

その名前は石ころぼうしと言って、被ると身体の周りを特殊な電

磁波が流れ、まるで道端に転がる石ころのように周りの人たちから認識されなくなる、という道具だ

ちなみに、電車に乗るときに使ったカードもひみつ道具だ

オールマイティパスと違って、見せるだけで交通機関はもちろんだ、娯楽施設…etc…とにかく、ありとあらゆるものがタダで使えるようになるというある意味犯罪クラスの道具だ…

まあ、これのおかげでユーノたちがどこに行っても追いかけるんだけどな…

今朝ユーノがかなり真剣な顔で「服が欲しい」って言ってきたから何かと思えば…こういうことが…

本当ならついていくなんて無粋なことはしたくないんだけどな…

魔王は絶対行くつていうだろうし…フェイトは魔王に押し切られるだろうし…2人だけにしたらコイツらユーノたちの邪魔するかもしれないし…

しょうがないからオレはついとかないとな

…しかし、ユーノもアルフも…さっきから顔赤くして黙ったままだな…

何か喋った方が「次は、~~~~~、~~~~~です」「おつ、ユーノたちが立ったつてことは次の駅で降りるのか…

さて、じゃあオレたちもいきますか

… 2人が、今日を無事に過ごせますように…

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : ユーノ

「しっかし改めて思うと、あたしたちかなりいいものもらったんだねえ」

「うん、ボクもここまですごいとは思ってなかったよ」

昨日のお礼にもらった封筒をよく見たら中には遊園地近くの駅までの電車の切符が往復分入ってたし、引換券にしても信じられないことに遊園地の中での食事やお土産の代金までこの引換券を見せたら必要ない、って書いてた

……つまり、今日は遊園地の中で一切お金がいらないってことになる

……いいのかな？

「あのぐらいのことだねえ…あたしたち運が良いね、ユーノ！」

…まあ、アルフが喜んでくれるから、いいか…

…あれ？ 何でアルフが良ければいいんだろ？

「ユーノ、そろそろ行こう」

…別にいいか…

「それじゃあ、入ろうか」

「ああ！」

・ ・ ・

「アルフは何に乗りたい？」

「そうだねえ…この“タツマキ”っていうジェットコースターが
ちよつと興味あるね」

アルフが園内パンフレットで指指したのは入り口からすぐ近くにある
ここで1番大きいジェットコースターだった

パンフレットによるとその目玉は名前通り、かなりたくさん
のループらしい…

「それじゃ行ってみようか。たぶんすぐには乗れないだろうけど
…」

「並んでたらずぐ回ってくるって！ 早く行こう！」

アルフはそう言うとボクの手を取って走り出した／／／

…あれ？ ボク、何で手を繋いだだけで赤くなってるんだ？

ボクは考えていて気づかなかった

「……………／／／」

…手を繋いできたアルフも赤くなってることに…

・ ・ ・

「いやあ〜！ 遊園地ってのは初めてだけどさ、楽しいところだ

ね

「うん、ボクもそんなに来たことあるわけじゃないけど、楽しい

ね

あの後30分ほど並んでようやく“タツマキ”に乗って、その後2、3個アトラクションに行くところとちょうど正午ぐらいだったのでボクたちは遊園地の中のレストランに入っていた

「やっぱり日曜日だから人が多いねえ」

「そうだね…この分だと、あといくつぐらい回れるだろ？」

「うん……」

ボクたちがテーブルに広げたパンフレットを見てると……

「お待たせしました！ カルボナーラとハンバーグセットです！」

ウェイトレスの人がボクたちが注文した食べ物を持ってきてくれた

ちなみに、カルボナーラがボクでハンバーグセットがアルフだ

ハンバーグセットはライス、スープ、サラダとありきたりなメニューだけど、なぜかメインのハンバーグだけはたぶん普通のレストランの常識サイズの3倍ぐらいありそうな大きさだった……

「それではごゆっくりどうぞ、ユ……お客様！」

ウェイトレスの人はそそくさと戻っていった

「わあ〜！ 美味しそうだね　　ユーノ、早く食べようよ！」

「そうだね、それじゃ」

「「いただきます（っ！）」」

アルフは大きな声で言うといそいそとハンバーグを切り分けて口へと運ぶ

「うん、美味し〜」

満面の笑顔でそう言うアルフはかなり可愛い……／／／　　…ハッ

！ いけないいけない、ボクも早く食べないと！

その後も話しながら食事を進めたけど、やっぱりアルフの方が量が多いからボクの方が早く終わりそうだった

「（…あと1口ぐらいかな？）」

ボクがあと少しのカルボナーラを食べようとすると…

「あつ、ユーノ。そのあとちよつとき、もらってもいいかい？

カルボナーラ、つてのあたし食べたことないんだよね」

「えっ？ うん、いいよ。」

「ありがとう！」

アルフは自分が持ってたフォークで残っていたカルボナーラを全部巻き取って自分の口に運んだ

「うん、美味しいね … あつ、でも今のつてユーノの最後のだよね？」

「気にしなくてもいいよ？ そこそこお腹はふくれてるし…」

「でもねえ… あつ！ それじゃこのハンバーグ1口食べなよ！」

そう言つとアルフはハンバーグの入った鉄板をボクの方に寄せてきた

「（…せつかくくれるって言うてくれてるんだから…、もらわな

「きや悪いよね？」　「じゃあ、もらおうかな？」

「ボクはハンバーグを自分のフォークで1口サイズに1つ切ってそのまま食べた」

「うん、美味しいね」

「そうかい？……あっ！？」

「ど、どうしたの？」

「な、何でも……ないよ……／＼／」

「アルフはそう言っていると赤くなってうつむいちゃった」

「……どうしたんだろ？」

それからすぐアルフが食べ終わって、ボクたちはレストランから
出た

・ ・ ・

数時間後……

・ ・ ・

午後からは上手く並べたからか、アトラクションに10個ほど乗ることが出来た

でもって、今はもう夕方で閉園時間間際

周りにはもうほとんど…いや、全くって言っていいぐらい人はいなかった

そんな中ボクたちは…

「…アルフ？ そろそろ帰らないと…。ここ、もう閉まるみたいだし…」

「もう少し！ …もう少し、だけ…待って／＼／」

こんな調子で広場のベンチに座ってた

「（……………やっぱり、チャンスだよね？ ……………よし！） ユーノッ！」

「は、はいっ！？」

「…あのさ…ユーノって…好きな人…いるかい？／＼／＼／」

「……………ええええええっ！？」

すすすす好きって…／＼／

どづいっ意味で？

…やっぱり…“愛してる”とかの方…だよね／／

ボクに…そんな人…いるのかな？

『ユーノ！』

…っ！ ……そっか…

『違う！ あたしを助けてくれたのは他でもないユーノ』スクラ
イアだ！』

…そういうことだったんだ…

『ありがとう、ユーノ』

…ボクにも…いるんだ…

「…そうだね…いるよ／／」

「っ！？ 誰…なんだい？」

「…その人はね、初めて会ったときから自分の大切な人のために
無茶なことばかりしてたんだ…

その人はね、自信のなかったボクに誇りと勇気をくれたんだ…

その人が傍にいてくれるだけで…ボクは嬉しいんだって、ようや
く気づいたよ／／」

「……………」

「ボクは…ユーノ…スクライアは、君のことが好きだよ…アルフ」

「…ううゝ！／／／ ユーノオオツ！（泣）」

アルフはいきなり泣き出すとボクに抱きついて…

「あたしも…あたしもユーノのこと、大好きだよ！／／／」

今のボクが1番望んでいた言葉を聞かせてくれた

ボクは嬉しくてアルフを抱き返した

「ユ、ユーノツ！？」

「…ダメかな？…“恋人”を抱きしめたら…」

「っ！ ううゝ…／／／」

アルフは恥ずかしいのか顔を真っ赤にしてうつ向いた

ボクだって恥ずかしいのに…／／／

…あつ、そろそろ閉園だったっけ…

「じゃあそろそろ」…ユーノ…//」

「えっ？ どうしたの、アルんっ!？」

「…んっ…ふっ…」

ボクの言葉は不自然なところで途切れた

ボクの口を、アルフの唇がふさいだおかげで…//

スクライアの部族のみんな…

今日、ボクに…“本当に守りたい人”ができました…

SIDE:ユーノ OUT

直「何で遅れたんだ？」

ベ「実は不思議な連鎖に飲み込まれてさ…」

直「連鎖？」

ベ「ざっと説明すると…」

もうすぐ第一志望の大学の入試だ

でも試験小論文だからやることない

…モンハンやるか、とゲームを閉まってる箱をあさる

偶然『流星のロックマン ペガサス』を見つける

久しぶりにやってみる

おもしろかったので箱をあさって『流星のロックマン2 ベルセルク/ダイナソー』もやる

おもしろかったので箱をあさって『流星のロックマン3 レッドジョーカー』もやる

気づくと月曜日だった…

……みたいな感じだな」

直「…アホ…。まあそれで今回の話だけどさ」

ベ「書くのになんか苦労したよ。恋愛表現って書くの難しいな…」

直「まあ頑張れ」

ベ「…ふう、今回は今回のデートに迫る！…つもりです。投稿は…金曜日が入試なんで…上手くいけば木曜日、ダメなら土曜日の予定です！長々とすいませんでした！」

ベ・直「…ではまた今度！」

番外編 そのとき彼らは…（前書き）

受験終わった〜！

結果は…まあ今気にしてもしょうがない！

急いで書いたんで雑ですけど、とりあえず番外編始まります！

番外編 そのとき彼らは…

ユーノとアルフ…

彼らは親切心と偶然によって手に入れたチャンスを活かし、見事恋人となった…

ところで…

そんな彼らを追っていたストーク…ゴホン…友人たちは結局その日何をしていたのか？

今回はそんな彼らの珍道c h…ゴホンゴホン…尾行記録を巻き込まれた男、有沢 直樹の視点で見よう…

・ ・ ・ ・ ・

「…よし、ユーノくんたちは中に入ったみたい。私たちも入るの！
あとから来てね」

なのははオレとフェイトをおいて突っ走ろうとする

しかし、オレがそれを許すわけがない

なのはを1人にしたら確実にユーノたちに見つかる、とオレの直感が叫んでいるからだ

「…手バリ！」

「にやつ!？」

オレはポケットから素早く小さな黄色い手のような道具、手バリをつけた釣竿を出してなのは目掛け振る

手バリにはコンピューターが入っていて、自動的に“獲物”を捕まえてくれる

本来は魚用だけどころやって人を捕まえたりもできる

なのはは手バリに服の襟を捕まれてこっちに帰ってくる

「ちよつと直樹くん!？ 何でこんなことするの!」

「お前1人にしたら絶対何か問題を起こすだろ! ユーノたちに見つかるぞ?」

「だ、大丈夫だよつ!？ 人をバカみたいに言わないで欲しいの!」

「バカじゃない…天然だ！」

「天然は…えっと…そう！ フェイトちゃんだよ！フェイトちゃんの方がきつと天然さんだよ！」

「んなわけないだろ？ 見てみるよ、フェイトはきちんとここに…いない？」

振り向くとフェイトは後ろにいなかった

さっきまで後ろにいたのに…

辺りを見回すと少し離れたところで金髪のツインテールがピコピコ揺れてるのが見えた

「…何であんなところに…。なのは、行くぞ」

オレはなのはから手バリを外すとフェイトがいる方へ走っていった

「…フフフ…、先に行ってるの」

…手にオールマイティーパスを握ったのはは…別方向に走っていった

・
・

「…じゃあ、ラッキーは家族みんなでこの遊園地を盛り上げてるんだね」

「(コクコク)」

「でも悪い魔女に声を獲られちゃって喋れないんだね？」

「(コクコク)」

「……うう、可愛いそうなラッキー……」

「……フェイト、何してんだ？」

フェイトに近づいてみると、フェイトはラッコかタヌキかわからない妙なぬいぐるみに話しかけていた

この遊園地のところどころにコイツの絵が見えるのでたぶんコイツはマスコットキャラクターだろう……

名前は……ラッキー、なのか？

そのラッキーにフェイトは真剣に話しかけていた

「あつ、直樹！ ラッキーが可愛いそうなんだよ！」

「……………はい？」

「ラッキーとその家族を……助けなきゃっ！」

フェイトの顔は……本気^{マジ}だった……

……なのは、お前が正しかったかもしれない……？

…いや、天然っっていうより…純真無垢？

オレはなのはの反応を見ようと振り向いた

けど…なのはの姿はなかった…

「…やられた…」

なのははたぶんもう遊園地の中だろう…

…さっさと見つけねえと

「フェイト、そろそろ行くぞ！」

「でも、ラッキーが！」

「ラッキーは…その…誰も助けられないんだ！」

「そんな！？ ラッキ…（泣）」

なぜか泣いているフェイトを引きずりながらオレはポケットからもう一つのオールマイティーパスを出してゲートをくぐった…

・
・
・

「取り寄せバッグ！」

「にゃあっ！？ 何か今日は扱いが酷いの…（泣）」

オレは取り出したいものの名前を言って手を入れると、それが取り出せる道具、取り寄せバッグを使ってなのはを引っ張り出す

とりあえず…

「お前ら、勝手に動きすぎだあ〜っ！」

「ごめんね、直樹…」

「…ごめんなさい」

…1人あまり反省の色が見えないけど…もういいや…

「…で、どうする？ 追いかけるならまだ十分行けるけど…」

「私は行きたい！…けど…これ以上はやっぱり悪いよね？」

なのはは若干しょんぼりしながらしゃべる

「私も…もう止めておいた方が…いいと思う」

「…よし、ならここからはユーノたちのことを忘れてオレたちで楽しむとするか？」

「…うんっ」

なんだかんだゴタゴタしてたらもうすぐ昼だな…

やっぱり飯を先に食べてからの方が…

「あつ、そつだ！ 直樹くん！」

「この遊園地でレストランって1つしかないんだよね？」

「ああ、パンフレットにはそう書いてるな」

「…あのね、直樹くん。…（ゴニョゴニョ）…って感じの道具ってないかな？」

「そりゃあるけど…何に使うんだ？」

「えつと…ユーノくんたちの見送り、かな？ すぐに戻ってくるから！ お願い！」

「……ほら」

オレはポケットから液体の入ったビンを取り出してなのはに渡す

「なりたいものを思い浮かべながら飲め。効果は20分ぐらいだ」

「ありがとう！ 行ってくるね 2人はそこで待ってて〜」

なのはオレからビンを受けとると走り出した

「直樹、あれは何ていう道具なの？」

「ん？ 変身ドリンクだ。使い方はさっき言った通り、それで動物なら人間でも何でもなれる」

「…相変わらず直樹のひみつ道具はすごいのばかりだね…？」

「まあ…」

なのははそれから15分ほどで帰ってきた

エプロンドレスを着た10代ぐらいの女性…つまりウェイトレスの格好の別人として戻ってきた

…本当に、何をしてきたんだ？

そのあとは答えを出す者を使ってユーノたちと鉢合わせないよう気をつけながら3人で遊園地を堪能して閉園時間ギリギリまでいた…

662

ちなみに、オレとなのはより1時間ほど経ってからフェレットモードで帰ってきたユーノは…嬉しそうに微笑みっぱなしだった…

番外編 そのとき彼らは…（後書き）

ベ「受験終わったあああつ！！！！」

直「終わったのはいいけど…受かるのか？」

ベ「大丈夫！ 倍率3・8倍だから！」

直「…（…神様、仏様、アリアス様…どうかコイツを浪人にはしないでください…浪人になったら更新速度落ちそうだし…）…まあ、がんばれ」

ベ「おう！ …さて、次はフェイトとアリシアの転校の話でも書こうかな？ 火曜日までに」

直「…また期限破りそうですけどよろしく願います」

ベ・直「…ではまた今度！」

第三十八話 普通じゃ済まない？（前書き）

まずは、東北関東大震災で被災された方々にお悔やみ申し上げます

まさかあそこまで酷いことになるとは…

大阪にいる自分には辛さがわからないことが悔しく思われます

更新が遅れていた理由についてはあとがきにて…

今回はかなり短めです

では第三十八話、始まります

第三十八話 普通じゃ済まない？

SIDE：直樹

「おはよう！ アリサちゃん、すずかちゃん！」

「おっす」

週明けの月曜日の朝、いつも通りに来たスクールバスに乗り込むとアリサとすずかがいた

「なのはちゃん、直樹くんおはよう」

「おはよう…ん？ なのは、何かあった？ 嬉しそうだけど…」

「ふえっ！？ そ、そんなに分かりやすかった？」

まあ当然だな…さっきからずっとニコニコしたままだからな…

オレたちが座席に着くとバスはゆっくりと動き出した

「それで？ どうしたのよ？」

「えっと…今日ね、友達が2人転校してくるんだ」

「転校？ こんな時期に珍しいね」

「まあそうだな。ちょっと事情があって家族みんなでごっちに引っ越して来たんだ」

「えっ？ 直樹もその子たちのこと知ってるの？」

「ああ、いろいろあってな。ちなみに2人とも女の子だぞ」

そう言った瞬間、アリスとすずかの顔が一瞬曇ったように見えたのは…気のせいかな？

「……すずか、どう思う？（ボソッ）」

「…なのはちゃんガンバレ、かな？（ボソッ）」

…何なんだ？ 本当に…

SIDE：直樹 OUT

SIDE：フェイト

「それじゃあまず私が入りますから、そのあとに私が呼んだらア

リシアさんとフェイトさんは中に来てね？」

「はい」

「は、はい…」

私たちは学校に来て最初に紹介された担任の先生に連れられて、
1つの教室の前まで来た

それで私たちと話した後、先生は先に教室に入っていた

『皆さん、おはようございます！』

『『『おはようございますっ！！』』』

あっ、思ったたより外に声が聞こえるんだ…

『さあ、知ってる人もいるかもしれませんが今日からこのクラス
に転校生が2人來ます！』

先生がそう言った瞬間、中からはなぜか『おお〜！』と大声が上
がった…何で！？

『先生〜！ その子たちは女の子ですかっ！』

…何かイヤな予感が『ええ、女の子…それもとても可愛い双子の
女の子です！』先生〜！（泣）

「可愛い双子だって！ 嬉しいね、フェイト！」

アリシア、楽しそうだね…

『それじゃあ、そろそろ入ってもらいましょうか。アリシアさん、フエイトさん、どつぞ〜!』

「よし! 行くよ、フエイト!」

「う、うん!」

とにかく、頑張らなきゃ!

SIDE：フエイト OUT

SIDE：直樹

全く…あんな紹介するなんてそれでいいのか、先生…

すると教室の前のドアがガラリと開き、フエイトとアリシアが入ってきた

プレシアさんによると、「とりあえず面倒だから双子ってことで申請した」らしい…

何でその双子が同じクラスになってるかは…まあご都合主義だか

らだろっ…

ちなみにフェイトとアリシアはパツと見外見が似ていたのでテストロッサ家での討論会の末、アリシアが髪をポニーテールにすることで決まったらしい

「えつと、アリシア…テストロッサです！ 一応私の方がお姉ちゃんなんで、よろしく！」

「…フ、フェイト…テストロッサ…です。よろしくお願いします」
2人が挨拶すると教室に拍手が溢れ、2人はペコリとお辞儀した

「それじゃあ2人の席は…そうそう、高町さんと有沢くんの後ろの机だからね」

オレとなのはは教室の1番後ろの席で、その後ろには真新しい机と椅子が置いてあった

フェイトとアリシアは歩いてきてオレたちの後ろの席に着いた

ちなみにフェイトはなのはの後ろ、アリシアはオレの後ろだ

「さて、それじゃあそろそろ今日の授業の準備をしてくださいかね？」

「」「はい！」

「…よろしくね、なのは、直樹」
ホッ

「私もよろしく！なのは、直樹お兄ちゃん（ボソッ）」

「もちろんだ（なの）」

SIDE：直樹 OUT

SIDE：なのは

・ ・ ・

あれから時間は進んで、今は4時間目…

教科は体育でフェイトちゃんたちとの親睦会も兼ねて、男女混合のドッジボールを“やっていたの”…

そう、間違っではないの…

私たちがしてたのは“普通の”ドッジボールのはず…なのに…

「なんでこんなことに？」

「なのはっ！ いったぞー！」

「ふえっ！？ へうっ！」

直樹くんの声が聞こえてハッとしたけどもう遅くてボールに当たっちゃった…

これで残ってるのはこっちのチームに…

「くそっ…、もう少し早く言うべきだった…」

「これで残ってるのは私と直樹だけだね」

直樹さんとフェイトちゃんの2人

でもって向こうのチームは…

「よしっ！　なのはを当てたわ」

「あとは直樹さんとフェイトちゃんか…強敵だね」

「まあ勝てない相手じゃないね！」

アリサちゃん、すずかちゃん、アリシアちゃんの3人

フェイトちゃんとアリサちゃんとすずかちゃんは運動神経がいいから残ってるんだと思う…

実際、男の子の子女の子関係なく3人ともかなりの人を当ててるしね

けど直樹さんとアリシアちゃんは…

「()さすが直樹お兄ちゃん…。こっちは最初から“答えを出す者

”を使って投げてるのに全然当たらないや…。だけど…”

「（…つたく、アリシアの奴ドッジボールに“答えを出す者”なんか使いやがって…。まあつられて使ってるオレもどうかと思うけどな…？ とにかく…）」

「（絶対にはげないっ！）」

…明らかに小学校3年生のドッジボールの域は飛び越えてると思うの…？

「これ…終わるのかな」

私の呟きはボールの飛び交う音に消えていった…

余談としてはさつき挙げた5人のうち、1人の男の子を除いた4人は昼休みにバテバテだったことを呟いておくの…

S I D E : な の は O U T

第三十八話 普通じゃ済まない？（後書き）

直「おい、前の投稿から約1ヶ月かかってるぞ。なんかあったのか？」

ベ「…うん、まあいろいろと」

直「いろいろ？」

ベ「…今はもう大丈夫だけど…つい最近まで浪人間近だったんだ。それは何とかなってさ、この第三十八話を投稿しようと思ったのが…3月11日なんだ」

直「…東北関東大震災か…。投稿を自粛してたってことか？」

ベ「…ちょっと違うな…。ちょっと話を変えてもいいか？」

直「？ いいけど…」

ベ「…オレがこの『小説家になろう』のサイトと出会ったのは高1の時でさ、クラスの友達から教えてもらったんだ。まあ、ユーザ登録する去年の夏までは読んでるだけだったんだけどな」

直「…？ それと更新が遅れたのは関係があるのか？」

ベ「…ああ。その友達は、中学からの友達だったんだけど高1の終わりに引っ越しで転校しちゃってさ、最後に会ったのも去年の春なんだ…」

直「それで？」

ベ「…そいつの引っ越し先がさ…岩手県の大船渡なんだ…」

直「っ！？ 大船渡って今回の地震でかなり被害の酷かった場所の1つじゃないのか！？」

ベ「…しかもさ…未だに連絡が取れないんだ…」

直「……………」

ベ「でも、まだ最悪の場合だとも限らないしさ、地震から2週間たったから、オレはこの小説を更新して待つとくんだ…。アイツが連絡してくれるのを…」

直「…きつと、大丈夫だって…」

ベ「…ありがとう。…さて、ずいぶんと暗くしちゃってすいません！ ちなみに次回は急展開！ 楽しみにしておいてもらえると嬉しいですよ！」

直「オレも…精一杯元気に行くぞ！」

ベ・直「…ではまた今度！」

第三十九話 偶然…と思いたくなる必然（前書き）

後書きにて今後のことについて報告があります

見てもらえると嬉しいです

では第三十九話、始まります！

第三十九話 偶然…と思いたくなる必然

SIDE：直樹

フェイトたちが転校してきてから数日後…えっ？ またアバウトに時間が跳んだ？ 気にしないでくれ…

とにかく、フェイトたちが転校してきてから数日後の日曜日

時間はだいたい…2時ぐらいか

そんな昼下がりにオレ、有沢 直樹はと言うと…

「……………眠い…」

高町家のリビングのソファーにて今にも眠りそうになっていた

理由として考えられるのは…まあ1つだな

ついこないだ行った平行世界でその世界の転生者にもらった能力、“1秒を10秒に変える力”を完璧にコントロールするためにほぼ徹夜で訓練してたからだ

この能力、言い方としては“1秒を10秒”でも“10秒を1秒”でもどっちでもいい

効果を簡潔に言っちゃうと…

“意識した間、通常の10倍のスピードで動く”

…みたいなもんだ…

普通の人にとっての1秒が能力発動中のオレには10秒に感じられる、ってことだな

…チートだよな…、まあこの能力の出てくる『うえきの法則』でも1、2を争いチート能力だもんな…

…で、話を戻すけどこの能力はまだレベル1っていう段階でもう1段上の“レベル2”の能力がある

それを使うには今のレベル1を極めなきゃならないんだけど…1晩ぐらいでは出来なかった…

幸いにも今日は日曜日、翠屋の手伝いの予定もない

もう、ここで…寝ちゃ「直樹く〜んっ!」…なのは?

声とともにドタバタと足音が聞こえ、なのはがりピングに入ってきた

「…何か…用か?」

「うん! …あれ? 直樹くんもしかして調子悪い?」

「悪いって言うか…眠い…」

「そっか…じゃあ無理に連れ出すのは悪いよね」

「…どっか行くのか？」

「うん、フェイトちゃんとアリシアちゃんにこの町を紹介しよう
と思って！ 直樹くん、どこを紹介したらいいか少し意見もらえな
い？」

「…そうだな…公共施設なんか…巡ったら、立派な町案内じゃな
いか？ 市役所とか…図書館…とか…。あとは、なのはの好きな店
とか…」

「そっか、ありがとう直樹くん！ それで行ってみるよ！ 行っ
てきま〜す！」

なのははくるりとUターンするとそのままリビングを出ていき、
すぐにドアが開け閉めする音が聞こえた

「…ふあ〜あ…、眠…もう寝よう…」

オレはソファアの肘掛けに頭をおいて寝転ぶとすぐに眠り始めた…

・
・
・

約1時間後…

…
…
…

…ん？ …携帯が鳴ってる…電話か…

…
…PII！

「ふあゝ…もしもゝひ…」

『あつ、直樹くん？ 八神やけど…』

「おおはやて…ふあゝ…」

『何や眠そうやなゝ、夜更かしでもしたんか？』

「ちよつとなゝ…それで、どうしたんだ？」

『えつと…今シグナムたちみんなと出かけててな。もうすぐ図書館に着くねんけど…そのあとにでも合流して一緒に遊べへんかなゝって思ってたんだけど…どうかな？』

「んゝ…ありがたい誘いなんだけど…今は、ふあゝ…ひたすら眠くてさ…ちよつと無理…」

『そつかゝ…なら夜はどうや？ また晩ご飯食べに来てくれへん？』

「あゝ、夜ならいけると、思う。何時ぐらいに行けばいい？」

『じゃあ…？時ぐらいでどしやろ？』

「オッケー…んじゃ、そのぐらいに…はやての家に行くわ…じゃあな」

『うん、待ってるで〜』

オレははやてとの通話を切ると携帯をしまい、また寝ようとする

「（はやてたちは図書館か……ん？ 図書館？ ……ま
さかな、そんな偶然に偶然を重ねたようなことが起きるわけが…念
には念を入れとくか） ……バリー」

『何ですか、マスター？』

「あのな、……………」

SIDE…直樹 OUT

SIDE…フェイト

「…どうかな？ アリシアちゃん、フェイトちゃん」

「うん、この町って思ってたよりずっといいところだね」

「私もそう思うよ」

私たちは今、なのはの案内でこの海鳴市を大まかに案内してもらっている

前に来ていたときは必死だから気づかなかったけど、この町は大会というほどは発展してないけど田舎っていうには発展し過ぎている…そんな印象の町だ

人がのんびりと暮らせそう…そんなことも感じられた

「なのはなのは！ 次はどこに連れていってくれるの？」

アリシアはさっきから楽しいのかソワソワさたまま…まあ無理もないよね

アリシアは5才のときに死ぬまでそんなに家からは出たことがないって母さんが言ってた

母さんの仕事が忙しくて無理だったこともあるらしいけど…

そんなわけでアリシアのテンションは天井知らずにどんどん上がっている

「そうだね、それじゃあ図書館に行ってみようか？」

「「「図書館？」

「うん、直樹くんが海鳴の公共施設も見せてあげた方がいいって
言ってたんだ！」

「そっか…直樹がそう言うなら行ってみようか、アリシア」

「そうだねフェイト！ それじゃなのは！ 早く行こう！」

「うん！」

このときの私は知らなかった

まさかこのあと、生涯のライバルって言うてもいい素晴らしい人
と会うことになるなんて…

SIDE：フェイト OUT

SIDE：シグナム

「では主はやて、私とザフィーラは外で待っています」

「そうか？ それじゃ手早く借りる本決めて出てくるな？ 行こ
か、ヴィータ、シヤマル」

「うん」「はい」

ヴィータは主はやての隣を歩き、シャマルは主はやての車椅子を押しながら図書館に入ってしまった

私は図書館の前の広場の木陰にあるベンチに腰かけ、ザフィーラはその近くでしゃがんだ

「シグナム、我に合わせずお前も主と共に行っていいのだが？」

「いや、主はやてが言うにはお前のような大型の動物を単独で放っておくのはこの世界では少しマズイらしい。それに、お前も話し相手がいた方がいいんじゃないか？」

「…我はそこまで寂しがり屋ではない」

そう言ってザフィーラはそっぽを向いた

その横顔が少し嬉しそうに見えたのは口に出さないのでおこつ

「…そういえばシグナム…お前は感じたことがあるか？ この町で時折現れる大きな魔力を…」

「ああ…、私も2、3度ある。初めは直樹かと思ったが次に感じたときは直樹がちょうどこちらに来ていたときだった…つまり」

「この町にはは直樹以外にも魔導師がいる、ということだな。…闇の書を狙う者だろうか？」

「さあな…だが、主はやてに近づくようであれば戦うまでだ」

「…そうだな」

このときの私は知らなかった…

まさか、後の最高の好敵手^{ライバル}となる少女とこのあと出会うことになることを…

S I D E : シグナム O U T

第三十九話 偶然…と思いたくなる必然（後書き）

ベ「え〜、オホン。いつもこの『魔法少女リリカルなのは』転生者はバッドエンドを嫌う〜』を読んでくださいますありがとうございます〜」

直「…（ずいぶん堅っ 苦しい挨拶だな…そんなに重要なことなのか？）」

ベ「この度、私情に私情に私情に私情に…（たくさん）…に私情に私情が重なりましてっ！ …ハア…ハア…」

直「…（息継ぎぐらいしろよ…）」

ベ「この小説の更新速度を1ヶ月に1度ペースにしなければならなくなりました！ 本っ当にすみません！」

直「…ハアアアアアアッ!？」

ベ「おい！ 耳元で叫ぶな！」

直「叫びたくもなるわ！ なんでそんなことになるんだよ!」

ベ「いや〜、理由はいろいろあるんだけど…説明しだすと長くな

るからカットで」

直「…ハア、これからずっとそうなのか？」

ベ「いや、月1ペースの予定は予定通りなら来年の1月か2月の頭ぐらいまでだと思う。それにちゃんとこの小説は完結させるから安心してくれ！」

直「…わかった。ただし！自分で言った月1は絶対対に守れよ！じゃないと読者の皆さんが離れちまうぞ！」

ベ「わかってるって。とりあえず4月の投稿はこの話の他、もしかしたらもう1話あげるかもしれない。もしかしたらなのであまり期待しないでください」

直「月1になってもこの小説のことを頭の片隅ぐらいに覚えていてもらえる嬉しいです！」

ベ・直「」ではまた今度！」

第四十話 想像通り（前書き）

何か「これからはしばらく更新は1ヶ月に1回にする」とかいいながらさっそく破っちゃいました

なので訂正します！

これからは「1ヶ月に1〜2回更新」します！

それと余談なんですが前に書いた連絡の着かなかった友達と一昨日ようやく連絡が取れました！

嬉しい限りです！

では、第四十話始まります！

第四十話 想像通り

SIDE：なのは

「着いたよ！　ここが私たちの家から1番近い図書館だよ」

私たちは自分たちの家と学校から1番近くにある図書館に来た

「ちなみにここはね、海鳴で1番大きな図書館なんだ」

「うん、確かに大きいね。　中も広そう」

「ね〜ね〜！　早く入ろうよ！」

も〜、アリシアちゃんは焦りすぎなの

「じゃあ入ろっか？　あつ、言っておくけど図書館なんだから別に面白いところじゃないよ？」

「そんなの心配ないって！　私はこういう風に新しいことをどんどん知れるのが楽しいんだもん」

…そっか、アリシアちゃんにとっては何もかもが新鮮な体験なんだよね

レアスキル
希少技能の力も重なって今のアリシアちゃんは知りたがり屋なのかな？

「じゃあ、行くぞう！」

私たちは図書館前の広場を横切ってそのまま図書館に入っていたの

・
・
・

「……………ん？」

「どうした？ ザフィーラ」

「…今…いや、気にしないでくれ。我の気のせいだ」

「そうか？」

「……………（…一瞬だったが、魔力を感じた気がしたのだが……………杞憂ならばいいが…………）」

・
・
・

中に入ってから私たちはだいたい30分後ぐらいに集合することにして1人で行動することになった

アリシアちゃんは「行ってくるね!」って言って私たちの年の子供が絶対に読まなそうな分厚くて専門的な本ばかりある本棚の方にフエイトちゃんは「ちよっと、気になる本があるんだ」って言って真剣な顔で2階にある児童文学のゾーンにそれぞれ行ったの

直樹くんここに提案されてからちゃんと部屋に戻って貸出カードも持ってきたから「借りたい本があったら持ってきていいよ」って言ったけど、2人は何を持ってくるのかな?

そういう私はというと最近気に入ってる作家さんのシリーズの小説が置いてある棚に来たの

そしたら…

「うん、やっぱり届かへんなあ…ヴィータかシャマルが戻ってくるの待とかな…いや、何事もチャレンジや! うん!」

車椅子に乗りながら上の方にある本を取ろうとしている女の子がいたの…

S I D E : : なのは O U T

S I D E : : はやて

…あかんのか？ 私じゃ無理なんか？ …いや、人間諦めへんかったら大抵のことは出来るんや！ 例え鷲のマークの 正製薬がつくつとる某栄養ドリンクがなくても、ファイト〜イツパ〜ツツ！！

「よいしょ〜！」

………まあ、無理か………しょうがないか、ヴィータたちを待とう

ヴィータとシャルムには今違う場所にある本を取りにいつてもらってる

早く帰って直樹くんのために晩ごはんの買い物に行くために手分けしたのに…何で本の場所が替わってんねん…ハア…

「ねえ、取るうとしてた本ってこれかな？」

ガツクリしてうつむいてたから気づかへんかったけど、私の隣に多分私と同じ年ぐらいの茶髪の女の子が立ってて、その手には…

「あつ、これやこれ！ ありがとうございませ〜！」

私が取ろうとしてた本があつたんや

女の子は笑いながら私が太ももに積んでた4、5冊の本の山の上にその本を置いてくれた

「いいのいいの。困つてるときは助けないとね！ 私、高町なのはって言うんだ！ 私立聖祥大附属小学校3年生！」

「あつ、3年生ってことは私と同じ年やんか。私は八神 はやて

って言うんよ。よろしくな、なのはちゃん!」

「うん、こちらこそよろしくね、はやてちゃん!」

何やめちゃくちゃええ感じの子やなあ…直樹くんが続いて友達2人目になってくれへんかな?

S I D E : はやて O U T

S I D E : シヤマル

ふう〜、やっとはやてちゃんが言った本を見つけたわ〜。にしても、まさか絵本だったとはね〜

普段文字だけの本ばかり読んでるからちよっと珍しいわね

さっ、早く戻りましょうか

「……………う〜(泣)」

えっ!?! 今変な声が…泣き声?

私は恐る恐る声の聞こえた方を覗き込んでみた

そこには…

「うう（泣）…何で王子様は気づかないの？ バカなの？ これじゃ…人魚姫がかわいそうだよ〜！（泣）」

絵本を読みながら号泣している金髪ツインテールの女の子がいた

…どうしよ？ やっぱり無視するのは大人としてよくないわよね
…ハッ、ち、違うもん！ 私、オバサンじゃないもん！

私はその子に近づこうとした

その時…

ゴオオオオオ……

えっ！？ 何これ！？ この子、はやてちゃんと同じぐらいの子なのに魔力がかなりある！

まさか…魔導師！？

そう思っていると女の子は泣き止んで読んでいた本を持って1階に降りる階段の方に向かっていった

…ひょっとしたら、仲間がいるかもしれないわね

私はとりあえずその子をつけてみることにした…

SIDE：シャル OUT

SIDE：ヴィータ

えっと…おっ、あつたあつた

…うん、これではやてに頼まれた本は全部だな

さてと、さっさとはやてのところに行って帰らねえとな

何せ今日は…直樹が来るし…ハッ、違う違う！ 何考えてんだア
タシ！？

早く帰りたいのは…そうだ！ はやてのギガウマな飯を食いたい
からだ！

べ、別にアイツと一緒に飯を食えるのが嬉しい訳じゃねえんだか
らな！／／／

まったく「あつ！」「へっ？

ドン！ 「あたっ！」「あう！」

考え事しながら歩いてたから本棚の影から出てきたヤツにぶつか
っちまった

「いてて…すみません、考え事してて」

「い、いえ、こつちも小走りだったんで…」

ぶつかった相手ははやてと同じぐらいの金髪の女だった

「えと…本当にすみませんでした」

ソイツはペコリと頭を下げるとまた小走りで時々キョロキョロしながら行っちゃまった

あれじゃまたぶつかるぞ？

「あつ、ヴィータちゃん！」

そしたら、さっきのヤツが来た方から今度はシャルマルが来た

・
・
・

「本当かよ、それ!？」

「ええ、私はさっきの子を追いかけるからヴィータちゃんは念のために早くはやてちゃんのところに戻っておいて!」

そう言ってシャルマルはさっきのヤツが行った方向に小走りで行った

シャルマルが言うにはさっきの女はこの世界じゃ考えられねえぐらいの高い魔力を持つてるらしい…

アタシはそういう探査系の魔法はそんなに得意じゃないからな…
気づかなかったな…

とりあえず、早くはやてのどこに行かねえと！

アタシはいつもはやてが行ってる本棚に走っていった

角を曲がってそこに着いてみるとはやてはさっきとは別の女と話
してた

まさか、アイツもそうなのか!?

「はやて!」

アタシは急いではやてのそばに駆け寄った…けど…

「ヴィータ、図書館では走っちゃアカンし大声出してもアカンっ
て前に言ったやろ？ 今日の晩ごはんのデザート抜くで？（黒笑）」

「すいませんでしたあ!」

ゴメンシヤマル…今は怪しいヤツよりデザートが大事だ…

SIDE:ヴィータ OUT

SIDE:なのは

はやてちゃんと自己紹介あつてから私たちはしばらくお話して
たの

「はやてちゃん、もしかしてはやてちゃんもそのシリーズ好きなの？」

私はさっきはやてちゃんに取ってあげた本を指差す

それは私が探してたシリーズの1冊でもあるの

「なのはちゃんも好きなんか。私もこのシリーズは最近のお気に入りなんよ。なのはちゃんはどれが1番好きなんや？」

「うん、どれも好きだけどね。あつ、あつた　私はこの『鏡の中の望み』が好きかな？」

そう言いながら私は本棚からその本を取り出す

「そうなんや。私はこの『二人で一人の探偵』が1番好きやな」
はやてちゃんはさっき私が取ってあげた本を手取る

私たちの話題に今出てるこの本は通称『仮面シリーズ』って呼ばれてる最近よく売れてるらしい小説なの

作者さんの名前は“森石 章次郎”さんって言って空想系小説の

第1人者とも言われてる人で、シリーズは今のところ全11作品

それぞれ、『古代からの護り人』、『記憶のない勇者』、『鏡の中の望み』、『近代モダンヒーロー的英雄』、『運命さだめられた戦い』、『妖あやかしを喰らう鬼』、『全てを越える疾さ』、『時を渡る臆病者』、『種族と種族のハザマで』、『破壊者と呼ばれた男』、『二人で一人の探偵』つというタイトルなの

近々最新作が出るらしくて今から楽しみなんだ

「そういえば、はやてちゃん1人で来てるの？ それとも友達か家族と？」

「えつとな、私こんな状態やから友達って呼べる人があんまりいないんですよ。両親はもう死んでるし…。今日は今家に居候してる外国の親戚と来てるんや」

「…そうなんだ…。でも！ 私はもうはやてちゃんと友達だと思ってるよ？」

「…ええんか？ 私なんかと友達で」

「もちろん！ あとで一緒に来てる友達も紹介するね？」

「ありがとうな…本当にありが「はやて!!」……………」

今の声は…あつ、あの子かな？

あの子がもしかしてはやてちゃんの言った親戚なのかな？

その子は向こうからこっちに向かって走ってきた

「…ヴィータ、図書館では走っちゃアカンし大声出してもアカンって前に言ったやろ？ 今日の晩ごはんのデザート抜くで？（黒笑）」

「すみませんでしたあ！」

…何でだろ？ はやてちゃんからものすごいお母さんオーラを感じるよ？

…とそこへ…

「あつ、いたいた。なのは〜」

「アリシアちゃん!…と、フェイトちゃん？」

後ろからアリシアちゃんの声が聞こえて振り向いてみると、分厚い本を何冊かもったアリシアちゃんと少し目の回りを赤くしたフェイトちゃんがいた

「フェイトちゃん？ どうしたの？」

「えっ…と、ちょっとね？ / / /」

フェイトちゃんは恥ずかしそうに顔を反らしてごまかした…どうしたんだろ？

「まあ、言えないよね〜 絵本読んでて号k y」わ〜！ アリシア、内緒にしてって言ったでしょ！ / / /」「」

その時、フエイトちゃんが来た方から金髪のお姉さんが少し駆け足で来た

「あれ？ シャマル？」

「はやてちゃん!？」

はやてちゃんの知り合いか……あれ？ 何でだろ？

何だかこれから何か起きそうな予感したしないんだけどな？

…何で？

S I D E : : な の は O U T

第四十話 想像通り（後書き）

ベ「いや〜、更新したね〜」

直「そうだな…まあ更新されるのはオレにとっては嬉しいけど、何で更新したんだ？」

ベ「いや〜、元々1ヶ月1回更新にした原因が今年1年かなり忙しくなるからでさ…一応話はノートにどンドン書いていつてるから更新するときはそれ見ながら打ち込むだけなんだけどね」

直「受験より忙しいことってあるのか？」

ベ「まあ、いろいろとね…。ただ言えるのは…大学受験はゴールじゃなかった、てことだな」

直「ふう〜ん…あつ、ところださ。今回の話で出てきた本ってあれはどう考えても平成仮面ライダー「当作品に登場する著者、出版物は全てフィクションであり、実在する個人、団体とは一切関係ありません」…あつそ」

ベ「さて！ 次回こそバトル勃発です！」

直「さてどうなるのか…ちなみに次の更新はゴールデンウィーク中らしいッス」

ベ・直「」ではまた今度！」

第四十一話 絶対に負けられない戦いがそこにはある(前書き)

ヤバい…風邪引きました…

インフルエンザじゃないのが幸いかな？

では第四十一話、始まります！

第四十一話 絶対に負けられない戦いがそこにはある

SIDE：なのは

えつと…どうも、高町 なのはです

「レイジングハート！ お願い！」

『シーリングモード アンド デイバインバスター』

「砲撃魔法？ ハッ、おもしれえ！ アイゼン、カートリッジロード…」

『ヤー ラケーテンフォーム』

「デイバイイイイン…」

「ラケーテン…」

…突然なんですけど、何でこうなったんでしょう…？

•
•
•

さかのぼること3時間前

私とフェイトちゃん、アリシアちゃんは今図書館前の広場に出てきてる

はやてちゃんがさつき会った2人以外にも親戚が来てるから紹介したいって言われたからなの

ちなみに私たちはそれぞれ本を1冊ずつ借りて持ってきてる

アリシアちゃんは結局悩んだ末に1冊にしたみたいなの

「えつと、それじゃ私たちから改めて自己紹介するね？ 私は高町なのは、それどこっちが私の同い年の友達でポニーテールの方がアリシア。テストロッサちゃん、ツインテールの方がフェイト。テストロッサちゃん。2人は双子でアリシアちゃんがお姉さんだよ」

「初めまして！ アリシア。テストロッサです」

「えと…は、初めまして。フェイト。テストロッサ…です」

アリシアちゃんは元気イッパイに、フェイトちゃんはちよつと震えながら自己紹介した

やっぱりフェイトちゃん、初対面の人と話すのは少し苦手なのかな？

「じゃあ私たちもせえへんとな！ 私は八神 はやて、なのはちやんと同い年ってことはアリシアちゃん、フェイトちゃんも私と同

い年やな　で、こつちが今家にいろんな事情で住んでる親戚や。みんな、簡単に自己紹介してくれへん？」

「…シグナムです」

「……ヴィータ」

「シヤマルです」

……？　な何でこんなにピリピリしてるんだろ？

「ううん、何やみんな固いな。あと、こつちの大きな犬がザフイーラや」

「……………（泣）」

あれ？　あの犬さん、涙ぐんでるみたいに見える…気のせいかな？

「…？　えと、はやて？　このザフィーラって、犬じゃなくて狼だよな？」

「「「「「！？」」「」「」「」

あつ、そうだったんだ。フェイトちゃん何で気づけたんだろ？

……あつ、そっか

フェイトちゃんはアルフさんを小さいときから育ててたって言うてたっけ

「……………（大泣）」

そしたら、ザフィーラの目からポロポロ涙が流れてきた

「あ、あれ？ どうしたの？ もしかして悪いこと言っちゃったかな？」

フェイトちゃんはオロオロしながらザフィーラの頭をなでる

「あゝ…ゴホン。テストロッサ、と言ったか？」

「は、はい…えっと、シグナムさん」

「ザフィーラのそれはおそらく嬉し泣きだ。気にしないでくれ」

「は、はい」

「……あつ、そうや！なのはちゃん、アリシアちゃん、フェイトちゃん。もしよかったら今日家に晩ごはん食べに来てくれへん？」

「は、はやて!?!」

「ちょう静かにして、ヴィータ。実は今日、もう1人の友達が食べに来てくれんねんけど、よかったらその人になのはちゃんたちを紹介したいねん。どうやる？」

「うん、ありがたいお話だよ… お母さんは…たぶんオツケーしてくれるよね？」

「私はたぶん大丈夫だよ…フェイトちゃんたちは？」

「私たちは…どうだろ？」

「……フェイトは行ってきなよ。私はお母さんがさみしがると思うから残るけど」

「…うん、わかった。じゃあ母さんに頼んでみるよ。たぶんオツケーだけど」

「じゃあ来てくれるんやな？」

「うん！」 「うん」

「それじゃ…今が4時やから…3時間後やな。その人とは7時に約束してるからそれまでに来てほしいねんけど、待ち合わせはどうしよか？ 当然家の場所なんか知らへんやろし…なのはちゃんたち、家はどっちの方？」

「えっと、あっちだよ。フェイトちゃんたちも私の家のすぐ近くだから」

「家と真逆の方か…それじゃ…」

はやてちゃんも少し困ってるみたい…

その時…

「！ はやて！ それじゃアタシとシグナムがここまで迎えにくるってことでどうだ？」

「…よし、それじゃ頼めるか？ ヴィータ、シグナム」

「おう!」「…わかりました」

「じゃあなのはちゃん、フェイトちゃん。ここには…そうやな、6時半ぐらいに来てな?」

「うん! じゃあ私たちは一旦帰るね?」

「またあとで」

「……………」

・
・
・

「楽しみだね〜フェイトちゃん!」

「そうだね…………? アリシア? どうしたの?」

フェイトちゃんの声聞いてアリシアちゃんを見ると、アリシアちゃんは少し難しい顔をして黙ってたの

そういえばはやてちゃんたちと話してる時も途中から黙ってたよね……

「……………なのは、フェイト。少しお願いがあるんだけど、いいかな?」

アリシアちゃんはさっきまでとはまた違うかなり真剣な表情で話

してきたの

「えっと、何をすればいいの？」

「念のためなんだけどね、あのはやてって子の家に行くとき、持って行ってほしいんだ…レイジングハートとバルディッシュを」

「「えっ!?!」」

ど、どういうこと!?! それじゃまるで…戦うみたいだよ?

「アリシア、何で？」

フェイトちゃんがアリシアちゃんに聞く

「ゴメン、理由は聞かないで。万が一に備えてだから、ね？」

「わ、わかったの…」「…わかったよ」

そう答えるとアリシアちゃんは1度頷いていつもと同じ明るい顔に戻ったの

「じゃあお願いね？」

「う、うん…あっ、そういえばアリシアちゃんは本当に行かなくていいの?」

「うん、お母さんが寂しいと思うのもあるし、この本も早く読みたいからね」

(…それに、私がいたらたぶん“足手まとい”になる…)(「

アリシアちゃんは抱えてた本を軽くポンポンと叩く

「アリシアちゃん、それって何ていう本なの？」

「えっとね、『新粒子発見とそれを伴うGNドライブの基礎理論』だよ。何か頑張ればこれ造れそうな気がするんだよね」

…何だろう？ その本はいろんな問題でダメな気がするよ…？

S I D E : な の は O U T

S I D E : アリシア

”
なのはたちが話しているとき、退屈だったからつい“ 答えを出す者
”
を使ってはやてたちを調べてみてしまった

それでわかったのは…はやて以外は普通の“人”じゃなかった…

それに上手く隠してるみたいだったけど魔力も感じられた…

まだ敵かはわからないけど、もしかしたら敵になるかも…

でも下手になのはたちに警戒させたらはやてのあの笑顔を壊しち

やう

ならせめて、最低限の準備だけでもしとこう

魔力があっても魔法が使えない私がいたんじゃ、2人の邪魔になるよね

だから私は家に残しておく

もしものときはお母さんに行ってもらおうかな？

…私に力があれば、こんなに考えなくてもいいのかな？

このときだけは、まだ構想の段階で止まってる“私のデバイス”を少し恨んだ

神様、お願い…2人がどうか、怪我をしませんように…

SIDE：アリシア OUT

SIDE：シグナム

あれから家に帰ったあと、主はやてはシャマルと買い物に出かけられた

食べる人数が増えたからか張り切って出かけていかれた

残った私たちはというと…

「だ・か・ら！ さっさと叩き潰すんだよ！ いいだろシグナム！」

「…ハア…」

デジャヴというものを信じなくなるな…

「ヴィータ、直樹のときと同じようなことを言ってるのをわかっているのか？」

「うっ…」

「それに、もし彼女たちが魔法のことを何も知らないただの子どもだった場合はどうする？」

「い、いやそれはねえ！ あんだけ高い魔力を持ってんだ！ 魔導師に決まってる！」

「そうかも知れない…だが、主はやての友だぞ？」

「それが狙いなんだよ！ アタシは決めたぞ！ あの広場でアイツらを潰す！」

「…（何を言っても無駄か…） ザフィーラ、お前はどう思う？」

「ザフィーラもアイツらは潰すべきだと思つよな!？」

「思わんっ!?!」

「「っ!?!」」

ほう、ザフィーラがここまで強く意思を示すとはな…

「な、何でだよ!?!」

「あのフェイトという少女、我を初見で狼だと理解してくれた…
そのようなヤツが主はやてを狙う者のわけがない!」

「「(。□。)」」

そ、そういうわけか…?」

しかし、ヴィータは忘れていいのか? この町で結界など張れば
確実に直樹が来るぞ…

「意味わかんねえこと言うな! とりあえずアイツらは潰す!
決定だ!」

そう言つとヴィータはリビングを走つて出ていった

「…シグナム」

「わかっている、暴走しない程度に止めるぞ」

S I D E : シグナム O U T

S I D E : なのは

そして時間がたって、今は約束の時間…

私はフェイトちゃんと合流して2人で広場まで来たの

でも…

「来てないね、なのは」

「うん、でもまだ10分前だしね。たぶん今来てるどころじゃないかな？」

「そうかもしれ…っ!？」

フェイトちゃんの言葉が途中で途切れる

けどそんなこと気にしてる場合じゃない! これは…

「「結界っ!？」」

私たちを閉じ込めるように広場に大きな結界が張られていた

『封鎖結界を確認。マスター、巨大な魔力反応が接近してきます』

『サー、正面からです。気をつけてください』

レイジングハートとバルディッシュが今の状況を教えてくれる

まさか、アリシアちゃんはこのことを予想して!?

『まもなく目視可能な距離に入ります』

レイジングハートの声に私とフェイトちゃんは身構える

そして見えてきたのは…

「えっ、ヴィータ…ちゃん？」 「シグナムさん？」

さっきまで会っていた人その人だった…

・
・
・

『（マスター、起きてください。マスターの予想通り結界が張られました）』

「（…ん？ そうか…それじゃさっさと止めに）」（えっ？ マスター!）」『ど、どうした!?!』

『（結界に向かって接近する高ランクの魔力を確認。プレシアさんです!）』

「(…ヤベエ！ プレシアさんが変に介入すると面倒くさいことになる！ バリー、プレシアのとこへナビしてくれ！)」

『(わ、わかりましたあ！)』

・
・
・

2人はそのままこつちに歩いてきてほしい7、8メートル手前で止まった

2人はさつきまでとは全く違った格好でヴィータちゃんは赤いドレス風の服にウサギみたいなアクセントがついた大きな赤い帽子シグナムさんは白色のスカートとピンク色のアンダーシャツ、それに白い羽織を纏ってるところどころに鉄のパーツがついていた

それは、コスプレなどというより…まるで戦闘服

「ヴィータちゃん？ その格好は「1度だけ聞く」…えっ？」

「お前らは魔導師なのか？ 答える」

「こつ！？」

何でヴィータちゃんが魔導師のことを知って…まさかこの2人も魔導師！？

「(なのは、どうする?)」

「(何がなんなのかわからないよ…。とりあえず、2人に事情を
聞い…)」「もういい」っ!」「

「黙ったままってことは、認めるってことだよなあ!」

『シュワルベフリーゲン』

「おらあっ!」

ヴィータちゃんの持ってたスティックハンマーみたいなものから
電子音が響く…。あれがヴィータちゃんのデバイス!?

それからすぐ空中に鉄球が1つ出てきたかと思うとヴィータちゃ
んはそれをハンマーで叩いてこっちに飛ばしてきた!

「危ないっ!」

私はとっさに防御魔法で鉄球を受け止める

「ビンゴだっ! ハアアアッ!」

すると、ヴィータちゃんは私がまだ鉄球の勢いを殺せずに止まっ
てるスキの上に跳んで上からハンマーを振り下ろしてきた…。このま
まじゃ!?!?

私は思わず目をつむってしまっ

『ゲットセット』

ガキイイーンッ!!

けど予想してた痛みは襲ってこなくて、代わりに聞こえてきたのは…

大切な友達の相棒の声と、金属と金属のぶつかる音だった

目を開けると、目の前まで迫っていたハンマーをフェイトちゃんが受け止めてた

「フェイトちゃん!」

「なのは! 私が足止めするから今のうちに! バルディッシュ!」

『サイズフォーム』

そう言つとフェイトちゃんはバルディッシュをサイズフォームに切り換えてヴィータを押し返した…よおし!

「レイジングハート! 行くよ!」

『スタンバイレディ セットアップ』

そのスキに私もレイジングハートをセットアップしてそのまま構える

フェイトちゃんとヴィータちゃんは空中で何回がぶつかり合ってお互いに離れ、フェイトちゃんは私の隣に、ヴィータちゃんはシグ

ナムさんの近くに着地した

「くそっ！ やっぱり2人も魔導師か…シグナム、お前も戦えよ！」

「…わかった」

そう言うとシグナムさんは腰に挿していた鞘から剣を抜いた…
たぶんあれがシグナムさんのデバイスだ

「ヴィータちゃん！ シグナムさん！ 何で戦わなくちゃいけないんですか！」

「うるせえ！ お前らはとっとと潰れりゃいいんだよ！ シグナム、お前は金髪の方だ！」

ヴィータちゃんは真っ直ぐにこっちに向かってきた

『フライヤーフィン』

私は飛行魔法を使って空へ上がった

ヴィータちゃんも追いかけてすぐに上がってきた

…わかったの…何も話さないって言うなら、まず止めてから
H A N A S H I するの！

S I D E : な の は O U T

SIDE：フェイト

なのはとヴィータは空で戦い始めた

「テストロツサ、だったな」

すると私の近くまで歩いてきていたシグナムさんが声をかけてきた
私はとっさにバルディッシュを構えようとしたけど、シグナムさんがさつき抜いていた剣を収めているのをみて、刃を地面に向けて構えを解いた

「はい…あの、シグナムさんも「シグナムでいいぞ」…シグナムも、私と戦うんじゃないんですか？」

「…悩んでいる。主はやての友であるお前たちと無理矢理戦うことは主はやての信頼に対する裏切りになる。しかし、先程のヴィータとの戦いから技量の高さが伺えるお前と戦ってみたいと思うのが本心でもある」

「シグナム…」

「それにな、今から始めても…おそらく途中で中断になる」

「えっ？ それってどういっ…」

「お前は感じないか？ “あの”魔力を」

その瞬間、私とシグナムの間を“誰か”が通り過ぎて行った…

S I D E : フ ェ イ ト O U T

S I D E : なのは

戦い始めてしばらくしても私たちはお互いに優勢とは言えなかった

あのデバイストレンジの形から考えるとヴィータちゃんショウが得意なのは近接
戦闘

だから私はシューターでヴィータちゃんを牽制して近づけさせないようにながら同時に当てようと狙う…けどなかなか当たらない

これじゃあいつまでたっても決まらない…なら！

「レイジングハート！ お願い！」

『シーリングモード アンド デイバインバスター』

砲撃で一気に決めるっ！

「砲撃魔法？ ハッ、面白れえ！ アイゼン、カートリッジロード！」

デイベインバスターのための魔力の収束を見てから、ヴィータちゃんの声に反応してヴィータちゃんのデバイスが動いた

そしたらデバイスから銃の薬莢みたいなものが出てきて、ハンマーの先端がさつきまでとは形が変わってた

まさか…突っ込んでくる！？ …でも、負けるつもりはないの！

「デイベイイイイン…」

「ラケーテン…」

私はチャージしながら杖先をヴィータちゃんに向ける

ヴィータちゃんはハンマーの先端の片側から出た炎でまるでジェットブースターみたい加速しながら自分を中心に回ったあと、その加速のまま突っ込んできた！

「ハンマアアアアッ！」

ヴィータちゃんとの距離がみるみるうちに縮んであと5メートルというときに私のチャージが終わった

「バス……」

けど、デイベインバスターは撃てなかった…

まさに撃とうとした瞬間…

ドンッ！

私とヴィータちゃんの間で一瞬で“誰か”が割り込んできた
速すぎてちゃんとわからなかったけど…

その人が片手で刃が水色の刀を持っていたのが見えたのと…

聞こえてきた声が誰なのかはわかったの…

「御神流剣術 我流がりゆういち一ノ型かた 夜嵐よあらしっ！」

そう聞こえた次の瞬間、私たちは突然出来た“竜巻”に巻き込まれて、すぐに視界が暗くなった…

S I D E : なのは O U T

S I D E : フェイト

私たちの間を走っていった誰かは飛び上がると竜巻をつくってなのはたちを巻き込んだ

竜巻が止むと空にはその人1人でなのはたちはどこにもいなかった

その人は着地するところちに歩いてきた

暗くて見にくかったけど、近くまで来てようやく“彼”の顔が見えた

「直樹!？」

「よっ、フエイト」

まあ、あんなこと出来る人って私が知ってる中じゃ直樹ぐらいだけだね…

「やはり来たか、直樹」

「そりゃ来るさシグナム、こんなところに結界作られたらな。外にはプレシアさんも来ちゃってたしさ」

「えっ、母さんが？」

「ああ、何とか説得して帰ってもらったけど、もう少しオレが来るの遅かったらここに特大のサンダーレイジが落ちるところだったぞ…?」

…母さん…? あれ? そっいえばなのはたちは?

「直樹、なのはたちはどうなったの?」

「ああ、2人も熱くなってたからな。落ち着いてもらうためにここに突っ込んだんだ」

そう言っ て直樹は手に持っ ていた四次元ポケットを前に出した

「よい…しよつとー！」

「にゃ！？」 「うお！？」

直樹が手を入れてから数秒後にポケットからなのはとヴィータが捕まれて出てきた

「それっ て人が入っ ても大丈夫なの？」

「もちろん、何なら入っ てみるか？」

目の前に四次元ポケットを差し出される

えつと…確かこの中つ て四次元空間になっ てるっ て言っ てたよね？

「上も下も何もわからなくて…グルグルしたの…」

「何か…気持ち悪い…」

「…え、遠慮しところかな…？」

「そっ か？ 楽しいと思っ っただけだな」

そう言いながらポケットをしまっ と直樹は私たち4人をみた

「みんな言いたいことはあると思っ っけど、とりあえず今は全員ではやての家に行くぞ。もうすぐ7時だしな」

「待てよ直樹！ コイツらは「オレの友達だけど？」「うっ…」

ヴィータが怒鳴ろうとしたけどすぐに直樹に抑えられた

「シグナム、それでいいか？」

「ああ、いいだろう。結界を解いてくる」

「…直樹くん、何ではやてちゃんやヴィータちゃんたちのことを知ってるの？」

「うん、私も気になってた」

「そのこともちゃんと話すから、さっ行くぞ」

私たちは結界が解かれたあと、はやての家を目指して歩き始めた

ヴィータはずっと私たちを睨んでたけど…？

SIDE：フヘイト OUT

第四十一話 絶対に負けられない戦いがそこにはある(後書き)

ベ「…どつも、ゴホッ…ベルワンです」

直「うわっ！ 風邪かよ！？ 起きてないで寝とけよ」

ベ「いやでも…後書きに出ないと…」

直「はい、退場ーっ！」

ベ「くそ…ゴホッ…」

直「…さて！ 見たた通りベルワンのヤツが風邪なんで後書きは短くやります。とりあえずやっときたいのはコレ！」

【新技について】

直「一応どんなのか簡単に解説入れときます！」

・御神流剣術 我流一ノ型 夜嵐

直樹の御神流剣術我流型の1つ

バリーのモード2、スサノオの時に使用可能

刃に風の魔力を多く集め、自分が高速で回ることによって自分を中心に竜巻を発生させる

竜巻の範囲は刃に纏わせた魔力によって調節可能

防御としても使用できる

直「こんな感じですかね？ 質問があればいつでも受け付けます
！では皆さん、風邪には気をつけてください！ ではまた今度！」

『予告』（前書き）

まず報告があります

今書いてる小説の第四章のタイトルを『A・S編』から『Beef Ore A・S編』に変更しました

理由としては、まだしばらくは実質的なA・S編には入らないからです

さらに、今回のこの『予告』ですが、これは正直これからのネタバレに近いです

今の更新ペースではA・S編が始められそうなのが早くて今年の冬になりそうなんです

なので、せめてこれからの雰囲気をつんでおいてもらおうと思って書きました

ネタバレがイヤは人は読まないことをおすすめします

これを読まないとその先話がわからないということはないので「安心を…」

では、『予告』が始まります

『予告』

強大な力を手にする権利を得た、1人の少女がいた…

「何度も言わせんといて？ 私は誰かを傷つけてまでそんな力は欲しくないんよ…わかってな？」

その権利を棄てた彼女を、世界は良しとはしなかった…

「主はやて…あなたのために我ら、あなたとの誓いを破ります！」

「シグナムさんっ！ はやてちゃんは、そんなこと望んでないはずです！」

歪み始めた運命に、更に影が射す…

「子供っ!?!」

「初めまして “ラグナロク” の幹部のデネブだよ」

介入者により、物語は徐々に闇へと加速していく

「お前たちは、やはりプロキオンの仲間か!」

「その通りじゃ。挨拶をしてなかったの? 僕は“ラグナロク”
幹部の1人、シリウスじゃ」

暴走する運命は聖なる夜に最悪の結末を迎えようとする、が…

「闇の書の足りないページは不要となった守護騎士たちで補う。
いつもそうだったはずだ…」

事態は思わぬ展開を迎える…

「はやてのこと、頼んだぞ…なの、は…」

「ヴイー…タ、ちゃん？」

「さて、お前たちには」「ゃ」「ん？」

「…いや…いや…いやあああああつ！」

「」「つ！？」

「強き意志を持つ少女は、優しさを忘れ…」

「もう迷わない…私は自分の信じるものを信じる！ だからお願い！ 私に力を貸して！」

心優しき少女は、己の信念を貫く…

「…ゴホツ…もし、力がもらえるなら…ボクは欲しい。直樹たちと…並んで戦える力が…それに…」

「力？ 欲しいに決まってるだろ？ フェイトや、家族を守れる

力が…それに…」

「「大好きなアルフ（ユーノ）を助けられる力が欲しいっ！」」

そして自分の無力を嘆いた者たちは、新たな力を手にし再び立ち上がる

「…頼む、クロノ。彼女を救ってやってくれ…」

「あなたに言われるまでもありません…エイミィ！ ボクも海鳴に向かう！ すぐに転送の準備を！」

「伊達に大魔導師って呼ばれてたわけじゃないのよ！」

「見せてあげる！ これが私の出した“答え”だよ！」

「なら、私が名前をあげる。強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール…リインフォースや」

「我が主…」

様々な思いが重なり合うとき…

『マスター、わかってますよね？ あなたの力はもう……』

「わかってるさ。けどな……オレは今この瞬間のために転生したよつなもんだ……なら、やれることをするだけだっ！」

……奇跡は起きる

A・S 編本編

2011年冬 開始予定

乞うご期待!!

第四十二話 まあ、とりあえずお茶でも飲んで（前書き）

今回は…短い&会話ばっか、です！

では第四十二話、始まります！

第四十二話 まあ、とりあえずお茶でも飲んで

SIDE：直樹

予想してた通りなのはたちとヴィータたちが衝突したな…

まあ、半分はオレの責任かな？

そんなわけでオレたちは今、はやての家に集合している

メンバーはオレ、なのは、フェイト、はやて、ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラだ

「えっと、それでどうということなの？ 直樹くん」

「はやてたちとはどういう関係？」

「何や、直樹くんもうなのはちゃんたちと知り合いやったんか？」

「1度に聞くな！ ちゃんと説明するから！」

…こりゃ、説明が長くなりそうだな……よし！

• •

ベ「長くなるんでカットします」 「おい！」

・
・
・

「つまり、はやてちゃんも魔力を持つてて、その本がデバイスで、シグナムさんたちは本当は人間じゃない？」

「私たちがそのデバイスを狙ってると思って攻撃してきた、ってことかな？」

「で、直樹くんも偶然知り合って攻撃もされた、と…こんな感じかな？」

「まとめるとそんなもんだな。はやてたちもだいたいわかったか？」

オレはなのはたちと反対側に座っていたはやてに話を振る

「えと、なのはちゃんとフェイトちゃんも魔導師で、直樹くんがお世話になってる家っていうのがなのはちゃんの家やったんやな」

「そういうことだな。そのうちオレが間に入って3人を会わせるつもりだったんだけど…失敗したな。ちなみに！ 2人はオレと同じで管理局に対してはまだ民間協力者止まりだから局員じゃないぞ、ヴィータ？」

「うっ…わ、わかってるって…」

ヴィータは気まずそうに視線を反らした

「でも直樹：何でシグナムたちは私たちがはやてを狙ってるって思ったの？ そんなにそのデバイスってすごいのか？」

「それは私が答えよう。主はやてがマスターであるこの闇の書は他の魔力を持つものから魔力を蒐集し、ページを増やしていく。そして魔導書の666ページ全てが埋まったとき闇の書は完成し、主は莫大な力を得る。その力を狙って近づいてくる輩が過去にかなりいてな」

「なるほど…だからヴィータちゃんやシグナムさんは直樹くんや私たちを攻撃してきたってことですね？」

「ああ」

「それでだ、オレとしては3人、それにシグナムたちも合わせて全員で改めて友達になってもらいたいんだけど…」

「…そんなの、ねえ？」

「うん、答えは…」

「決まってるやんな」

3人は席を立って近づくと…

「もちろんオツケー（なの）（だよ）（や）」「」

なのはとフェイトとはやてはそう言ってお互いに握手した

「そっか…よかったよ。内心どうなるのかなりドキドキしてたからな」

「そんな気にすることないって…あつ、そうや。シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ。今度は“キツチリ”自己紹介してや？」

「わかりました。改めて、シグナムだ。主はやてを守る守護騎士の将でもある。高町、テストロツサ、よろしく頼む」

「…ヴィータだ。アタシは正直お前らなことをまだ信用したわけじゃねえ。そこは覚えとけ。特にお前！ 高町…な、な、なぬは！」

「ち、違うよ！？ 私、なのはだよ！？ な・の・h「う、うっせえ！／／／…あう…」

「次は私かしら？ シャマルです。さっきは勝手に疑ってごめんなさい。これからよろしくね？ なのはちゃん、フェイトちゃん」

「…最後は私だな。ザフィーラだ。守護獣という存在でお前たちでいう使い魔に近い存在だな。よろしく頼む…それとフェイトよ。我を狼と認識してくれたこと、感謝する」

「あつ、うん。私もね、今狼の使い魔がいるんだ。それで何となくわかったんだ」

「そっか」

「…それじゃ！ お互いに仲直り（？） 出来たところで晩御飯に
しよか！」

「そうだな。オレも結構腹ペコなんだよな。はやて、献立は何な
んだ？」

「今日は大人数やからな、お肉いっぱい奮発して寄せ鍋すること
にしたんや。すぐにつくるから待っててなあ」

「あつ、はやてちゃん！ 私手伝うよ」

「私も手伝うよ」

「ありがとうな。じゃあお願いしよかな」

そう言うてはやてとなのは、フェイトはキッチンの方にいった

…今回のことでもう原作とはかなり外れてきたな…

これから先、どうなっていくか自信ないけど…何とかしないと

まあ、頑張りますか！

SIDE：直樹 OUT

SIDE:なのは

「はやてちゃん、白菜切り終わったよ！」

「わかった。じゃあそこボウルに入れといて！」

私たちは今はやてちゃんの指示ので協力して作業中なの

「こっちもお肉全部分け終わったよ」

「オッケーや。んじゃあとは…」

・ ・ ・

「…よし、これであとはもう少し煮て完成や」

「ふう〜、でもはやてちゃんすごいね。これだけの量をすぐにパッと作っちゃうんだもん」

「うん、本当に料理上手だね」

「へへへ…でも私の目は誤魔化されへんで？ 2人もかなり料理得意やる？」

「そ、そんなことないよ！ちょっと練習してるだけだから…」

「わ、私もそうだよ」

「大好きな直樹くんのためか？」

「うん、そうそう。大好きな直樹k…えええっ！？／／／」

「やっぱりビンゴか。ライバルは多そうやな…」

「ライバルってことは…はやてちゃんも？」

「うん…私も、直樹くんが好きや／／」

「うう…やっぱり直樹を好きになる人って多いね」

「それだけいい人ってことだよ、フェイトちゃん」

「そうやな…私はちよつと遅れて参戦やけど…負けへんで、なのはちゃん、フェイトちゃん」

「…私だって、負けないよ！」

「私だって」

「じゃあお互い」

「これから先は」

「正々堂々（多少の抜け駆けアリ）」

「「「^{なの}勝負(だよ)(や)!!」「」

ゼッタイに、負けないの!!

S I D E : なの は O U T

第四十二話 まあ、とりあえずお茶でも飲んで（後書き）

ベ「うん…」

直「どうした？ 変な声だして」

ベ「うん。40万アクセス記念なんだけどさ、なかなか話が纏まらなくてさ」

直「お前、アイデアもらっただろ？」

ベ「キャラ使用とか、条件とか、色々もらっただけど…あと少し欲しいんだよな」

直「…じゃあ、募集かけるか？」

ベ「…そうするか。ってわけで、今日が期限の『記念小説のアイデア募集』なんですけど、もう1度募集したいと思います！」

直「えっと…、キャラはもう集まってるんで出来れば『条件設定』を送って欲しいです。前に送ってくださった方でも送っていただいてオツケーです！…と」

ベ「方法は感想、メッセージどちらからでも。期限はこの投稿から48時間、以内におきます！」

直「皆さん、コイツに力を貸してやってください！」

「直ぐには待ってませぬ！」

EX第一話 旅行の準備を前日にすると大抵何か忘れ物をする(前書き)

さて、いよいよ40万アクセス記念作品が始まりました！

…えっ、章のタイトルがおかしい？

そもそも何で新章に変わってるのか？

えっと、説明するとまず記念作品の大まかな流れを書いてみると最低でも十話はかかりそうなんです

なので、思いきって新章にしました！

さらにアクセスを見てみると今で492752になってました

…あれ？もう50万アクセスいくじゃん？

じゃあもう50万アクセス記念にしちゃおう！ってことです！

さらにこの記念小説、なっぺさんの『魔法少女リリカルなのは』The Fantastic Story』とリオン・マグナスさんの『D.C. 孤独な転生者と孤独だった魔法使い』とのコラボとなっています！

なっぺさんとリオン・マグナスさん、もしおかしいと感じたら遠慮なく言ってください！

では、長々と書いてしまいましたがEX第一話、始まります！

EX第一話 旅行の準備を前日にすると大抵何か忘れ物をする

なのはとフェイトとはやて…

原作とは全く異なる出会いを果たし、友達となった彼女たち…

プレシア、アリシア、リニス、ユーノ、アルフも直樹から説明を受け、はやてたちと知り合うこととなり会う回数が増えるごとに徐々に親交をふかめていった…

そして、時は少し進み…日本は現在8月…全国的に夏休みに突入している「えっ!? いくら何でも時間飛びすぎだろ!? 何やってんだよお前!」…夏休みに突入していた!

しかしその頃、とある世界では小さな事件が起こっていた…

• • • • •

SIDE…

「アニキ！もうダメだ！オイラ走れねえよ！」

「チビ、諦めてんじゃねえ！まだ逃げるんだ！」

「アニキ、オラももう……」

「デク、走れ！もう少し行けば開けた場所に出る！そこなら……」

「そこなら……なんだ？」

「……で、出たああっ！」「」

オレたちの後ろ……さっきまで誰もいなかった場所にオレらを追ってきた赤色と黒色のゴツい鎧を着た男が立っていた……

S I D E : O U T

S I D E : ? ? ? ? ?

「……で、出たああっ！」「」

出たって……オレは化け物かよ……？

まあ、見つけたときからだいたい2、3時間は追い回したからな
そう思われてもしょうがないか…

オレの目の前にいるこの3人はこれでも一応、かなりの数の犯罪
を重ねてきた賊の主要メンバーだ

しかも、あの“アニキ”とかつて呼ばれてるヤツは転生者らしい
オレのいる世界って本当に転生者多いな…

「トワード」、他の賊の状況は？」

『はい…確認しました。対象となっている賊、2000人全て逮捕
完了しています』

「よし…聞いたか？ お前らの仲間は全員捕まった。これ以上抵
抗しなければお前らにも弁明の機会が与えら」ちつ、デク、チビ！
オレの側に来い！」…おい、話聞けよ」

3人が集まるとアニキってヤツが前に両手をかざし…

「座標…ええい！座標ランダム！クロスゲートオープン！」

そう言った瞬間、3人の足下に黒い渦のようなものが広がり…

「あばよ、時空管理局提督さんよお！」

3人は一瞬で中に飲まれた

「なっ!?!」

オレは近づいてまだ広がったままの渦の側に立つ

「くそっ、油断してた…。トワード、この渦はどこに繋がってるんだ?」

『不明。ただ、渦の先から並行世界因子を確認。いずれかの平行世界に繋がっていると思われます』

よりもよって並行世界か…しょうがない

「トワード、クロスオーバーフォームはこのまま維持。突入するぞ」

『はい。ただ、念のため シン・ライフオジオ を使っておくのを推奨します』

「そうだな。シン・ライフオジオ!」

呪文を唱えると同時に光の膜がオレを覆う

この光に包まれてる限り、宇宙や深海など普通では生きてはいられないところでも生きれるようになる

「よし、それじゃあ…よっと!」

準備を終えて、オレは渦の中に飛び込む

さて、誰の世界に着くのか：出来れば知り合いの世界がいいかな？

SIDE：???

OUT

・
・
・
・
・

一方、こちらはこの小説の主人公、でもって主人公なのに最近小説での出番が少ないな、とか作者に思われてる主人公、有沢 直樹の世界

「ん？ 今かなり「お前のせいだろ！」って突っ込みたくなる電波を受信しちゃった気が…」

まあとりあえず、有沢 直樹の世界

「ここでもまた少々珍事が起ころうと」「これは譲れないの！」「…ゴホン、起こっていた…」

SIDE：なのは

こんにちは、高町　なのはです

今は全国的に夏休み真っ最中！

なので、旅行に行きたかったんだけど…不幸にもお父さんもお母さんもこの夏は翠屋から離れられないとのこと…

けど、ガツカリしてた私を神様は見捨てなかったの！

何とプレシアさんが私や直樹くんやユーノくん、さらにははやてちゃんたちも合わせてみんなで旅行に行かないか、って誘ってくれたの

お父さんたちにもオツケーをもらって、今はテスタロッツサ家にて旅行先の相談をしてるんだけど…

「やっぱり夏と言えば海！これは譲れないの！」

「違うよなのは！夏だからこそ旅行は山だよ！」

「いやいや、2人とも違うって！　ここは間を取って森の中でキャンプやって！」

…意見が完全に割れちゃってます…？

「…それじゃ…」

「…こうなったら…」

「…アレやな？」

「「「…多数決っ！」「」」

…と、いうわけで多数決を取ってみただけど…

海：なのは、アルフ、ヴィータ

山：フェイト、ユーノ、ザフィーラ

森：はやて、アリシア、シャマル

どれでもいい：プレシア、リニス、シグナム

「…見事にバラけたな。っていうか、八神家で私の味方はシャマルだけか…」

「母さんたち、どれでもいいって…」

「うーん…こうなったら、直樹くんが来るのを待つしかないかな？」

ちなみに言っておくと、直樹くんは今ここにはいない

何でも、「ちょっと野暮用がある」「らしくて遅れてくるらしいの…ひょっとしたらもうそろそろ『ピンポン』あつ、直樹くんかな？」

「あっ、私出てくるね！」

アリシアちゃんが玄関に走っていく

ドアの閉まる音がしてから少しして、みんなでいたリビングにアリシアちゃんど…

「ゴメンゴメン、思ったより遅くなった」

思ってた通り、直樹くんが入ってきたの

S I D E : なのは O U T

S I D E : 直樹

「それでプレシアさん。行き先は決まりましたか？」

「それがね……ゴニョゴニョ……ってことになってね」

「なるほど…」

プレシアさんもたぶん子どもたちの意見を尊重したいんだろ…

「それで、これがその結果ですか？」

「ええ」

オレは多数決の結果を書き留めた紙を持ち上げて見る

えっと…海、山、森、か…ん？

「シグナム？ シグナム、何か希望はないのか？」

「…あ、あるにはあるのだが…」

「何だ、もしかして言うのが恥ずかしいのか？」

「そうじゃない…ハア、わかった言おう。私の希望は『戦える相手のいるところ』だ」

「……シグナムさん」

「……シグナム」

「…それは、ちょっとなあ…」

「…ほら、やっぱりこういつ反応になる…」

なのはたちは本当に微妙な反応してるな…

あっ、シグナムが床に手と膝をついてる…

…けど、今ので…済ましてきた『野暮用』が無駄じゃなくなったな

「じゃあ、埒が明かないしオレが独断で行き先決めるぞ！」

「海！海だよ、直樹くん！」

「山だよ！そうでしよ直樹！」

「アカンアカン！森や！な？直樹くん」

そう言った瞬間、プレシアさん、リニス、シグナム以外の9人が一斉に詰め寄ってきた

「あゝもう、静かにしろっ！」

「……………っ！」「……………」

オレが怒鳴るとようやく静かになる

「んじゃ発表するぞ？旅行の行き先は…『海と山と森があり戦える相手のいるところ』だっ！」

「……………はい？」「……………」

その瞬間、今度は12人全員がシンクロしてた

「…直樹、本当にそんな場所あるの？」

プレシアさんが信じられないとばかりに聞いてくる

「はい。そこなら旅費もいりませんし、予約も不要、荷物も…着替えと…デバイスと…あと水着かな？それだけで十分ですよ？」

「…信じられないけど、あなたが言うのと本当に聞こえるわね」

「まあ、信じてくださいよ。出発はいつにしますか？」

「そうね…準備がそれだけで予約もいらないうら早く出られるわね…。じゃあ、明後日なんかどうかしら？私たちは大丈夫だけど、なのはちゃんとはやてちゃんたちはどう？」

「私は…たぶん大丈夫です！」

「私たちが差し迫った予定はないんで大丈夫やと思います」

「んじゃ、出発は明後日だな。集合場所は…そうだな、この家でもいいですか、プレシアさん？」

「いいわよ。時間はいつ？」

「じゃあ…朝の8時で」

「わかったわ。じゃあみんな、明後日の朝8時にここに集合。持ち物は着替えと水着、あとデバイスね。2泊3日だからそこを忘れないでね？」

「…はい！」

「それじゃ今日は解散だな。じゃあオレはちょっと準備があるん

で失礼します！」

オレはそう言ってテストロッサ家から出ていく

さて、さっさと“準備”を済ませて、旅行の準備しないな！

SIDE：直樹 OUT

EX第一話 旅行の準備を前日にすると大抵何か忘れ物をする(後書き)

今回は後書き無しでいきます！

EX第二話 PARADISE 楽園 (前書き)

この記念小説、7月中には完結させたい…

そんな意気込みで頑張っています

そして今回は…まあ有名な固有名詞が出ます

まあ深くは突っ込まないでください

では、EX第二話始まります！

EX第二話 PARADISE 楽園

SIDE: はやて

話し合いから2日後…つまりは旅行当日…

「それじゃみんな、準備出来たか？」

私たちは旅行の集合場所のフェイトちゃんの家に行くために玄関に集まってる

「私は出来てます」

「あたしもオツケーだよ」

「私もオツケーです」

「私も…と言いたいのですが、本当によろしいのですか？主はやって」

「ん？ああ、荷物のことか？ええねんて。ザフィーラは服が少ないねんから私のカバンに纏めてんねんから。このぐらい私が持つよ」

私は太ももの上に載せてるカバンを少し持ち上げてみせる

「…すみません」

「ええねんええねん。私のわがままでザフィーラにはずっとそのままでいてもらってんねんから、な?」

「…はー」

「よし!それじゃみんな、行くで!」

「「「「はい!」」」」

SIDE:はさて OUT

SIDE:フヘイト

「プレゼミア、ロミ出し終わったよ」

「ああ、アルフ。ありがとう」

「あわわ〜」

…フヘイト

今日は待ちに待った旅行の日

みんなが来るまであと少し…私たちはそれぞれ最後のチェックを
しています

「プレシア、冷蔵庫の中のチェック終わりましたよ。腐りそうな
ものは残ってません」

「ありがとうリニス。私たちの荷物をリビングに出しといてくれ
ない？」

「はい」

「あわわ〜！」

…ドドドド

正直に言つと、今日が楽しみで昨日なかなか寝れなかったんだよ
ね

「母さん、戸締まりもオツケーだよ」

「ありがとうフェイト。さて…あとは…」

「あわわ〜！」

…ドドドド

「…ハア、アリシア。少し落ち着きなさい」

そう言って母さんが走ってたアリシアの手を掴んで止める

「んにゃ!?!? でもお母さん! 私まだ用意終わってないよ!」

「昨日のうちにやっておきなさいって言ってたでしょう?」

「えっと、明日にすればいいやって思って“答えを出す者”の練習してた」

…あ、あはは…? 真面目なのか不真面目なのかわかんないね…

「まったく…、フェイト、アルフ。悪いけど…」

「うん。アリシアの手伝いをすればいいんでしょ?」

「任せときな!」

「2人とも…ありがとう」

アリシアは嬉しくなったのか私たちに抱きついてきた

「はいはい、急がないとみんな来るわよ?」

時計を見ると今は7時50分すぎ…

「「「…マズイ(よ)!」」」

私たちは急いで私とアリシアの部屋に入って準備を始める

何とか間に合わせないと！

SIDE：フエイト OUT

SIDE：なのは

「ふんふんふん」

楽しみだなあ〜 やつとこの日が来たよ！

あと少しで旅行に出発

今、私と直樹くん、ユーノくん（フエレットモード）はフエイト
ちゃんの家目指して歩いてるところなの

直樹くんが薦めるんだからいいところなんだろうけど…

「ねえ直樹くん、どうしても教えてくれない？」

私は隣を歩いてる直樹くんに聞く

「しつこいぞ、あとほんの少しでわかるんだから我慢しろ」

「うう〜、でも〜」

「でもは無し。ほら、そう言ってる間にもう着いたぞ」

直樹くんに言われて見てみると確かにもうフェイトちゃんたちが住んでるマンションの前だった

私たちはエレベーターでフェイトちゃんの家の階まで上がってそのまま家の前まで来た

『ピンポーン』

インターホンを押してから少しすると…

『はい、どちら様でしょうか?』

聞こえてきたのはリニスさんの声だった

「リニスさん、なのはと直樹さんとユーノくんです!」

『ああ、待ってましたよ。ちょっと待っててくださいね?』

そう聞こえるとインターホンの通話が切れる音がして、すぐにリニスさんがドアを開けてくれた

「いらっしやい3人も。もうはやてちゃんたちも来てますよ?」

「にやっ!? 私たちが最後!?!」

「そんなに驚くことないだろ? なのはが出るのにあれだけもたついたんだからな」

「うう…」

直樹くんから鋭い一言が飛んでくる

それは確かに…少し、ほんの少し寝坊しちゃったけど…

何て考えてるとリビングに到着

もうみんな揃ってたの

「じゃあオレたちが最後みたいだから…これで全員揃ったな」

「直樹、もう教えてくれる？ 旅行ってどこに行くの？」

「そうやな。というより、どうやって行くん？」

フェイトちゃんとはやてちゃんが早くも聞いてくる

「慌てるなって。行き先はビックリさせたいからまだ秘密だ。けど、行き方は教えないとな」

そう言うと直樹くんはいつものようにズボンに貼り付けてた四次元ポケットに手を入れたかと思うと筒の形に丸められたポスターみたいなものを取り出したの

「プレシアさん、これあとで綺麗に剥がれるんで壁に貼ってもいいですか？」

「？ いいけど…」

プレシアさんが答えると直樹くんはリビングの壁にそのポスター
みたいなものを張り付けた

中の柄は…シャッター、かな？

「これって!？」

「あの中の…」

ん？ ヴィータちゃんとシグナムさんはこれのこと知ってるのか
な？

「それで、どうするのかしら？」

「はい、この中から旅行先に行きます」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」

SIDE…なのは OUT

SIDE…直樹

オレたちはテストロッサ家に出した壁紙秘密基地の中にエスカレ

ーターで降りてるところだ

ちなみにこのエスカレーター、はやてが来ることを考えて昨日コピーロボットで出したオレ3人と4人がかりの突貫工事で作った

そう言ってる間に前にヴィータたちと戦った広場に到着する

「ふえ〜！広〜い！」

「本当に…直樹の道具って凄すぎだよ」

「ほらほら止まらない。まだここがゴールじゃないぞ？」

オレたちは訓練場を兼ねた広場を通り抜けていくつかあるうちの1つの建物のドアをくぐった

「…あれ？何もないよ？直樹お兄ちゃん」

アリシアの言う通りドアの先には5メートル四方の何もない部屋があるだけだった

「慌てるなってアリシア。全員入ってるよな？…よし。バリー、下降開始」

『了解です』

バリーが応えると部屋が下に下がっていく

部屋に見えていたのは実はエレベーターだった、ってわけだ

1分ほど下がると入ってきたドアの先に広場が現れる

「よし、着いた。みんな降りてくれ」

オレに言われ全員エレベーターから降りる

最初の広場と比べるとそんなに広くなく、周りにも何もなくてあるものと言えば……

「これは…魔法陣、かしら？」

広場の中央に大きな魔法陣があった

「…これ、直樹の召喚のときの魔法陣と同じ？」

「…ユーノ、覚えてたのか？その通り、これはオレの召喚魔法陣と全く同じものだ」

「その魔法陣でどうするんだよ？あたしたちは旅行に行くんじゃないのか？」

「待ってってヴィータ、もうすぐだから。みんな魔法陣の中央に集まってくれ。荷物は全部オレの四次元ポケットに入れるからこつちに」

そして、荷物も入れ終えてオレたちは魔法陣の上に立つ

「じゃあ詳しい説明は“向こう”でするから、行くぞ？少し眩しいから目は瞑つといた方がいいと思う。……よし、じゃあ行くぞ！転送！」

そう言っつてオレが魔法陣に手をつけて魔力を込めた瞬間、魔法陣は光りオレたちは光の中に消えた…

・ ・ ・ ・ ・

「…おし、着いたな。もう目を開けてもいいぞ〜！」

オレの声を聞いてなのはたちは目を開けていく

「…えっ？ここ、どこなの？」

なのはがキョロキョロ辺りを見回しながら言う

まあ確かにさっきまでと景色が全く違うもんな〜

今オレたちがいる場所は少し開けた空き地になっているところ

けどそこから辺りは一面まるでジャングルかと思わせるような深い森

遠くにはここからでも分かるくらい高い山が見える

一言で言うなら、“大自然の真っ只中”…そんなところにオレたちはいる

「直樹、もう教えてくれるわよね？ここはどこなのかしら？」

呆けてしたメンバーでプレシアさんがいち早く復活しオレに尋ねてくる

「わかりました、もう引っ張ってもしようがないですね。説明します…バリー」

『はい、“この星”の立体図を表示します』

バリーがそう言うとバリーのクリスタル部分から光が出て球体の立体映像を出す

「…何やこれ？大陸の形が地球と全然違うやん」

「はやて正解。この星は地球じゃない」

「えっ？じゃあどこか別の次元世界かな？」

「いや、違うなフェイト。じゃあ答えを言おうか…」

「この星の名前はパラダイス…オレが創った星だ」

「……ええええつ！！！！」

なのはとフェイト、はやてが大きく声を上げる

他のみんなも大小様々な反応で驚いてるな

「創った……ってことは、もしかしてひみつ道具なのかしら？」

「……プレシアさん、凄いですね。そこまで分かるとは……」

「では、本当にひみつ道具で創ったのか？」

シグナムが信じられないとばかりに確かめてくる

「本当だつて。具体的に言われて言うただな……」

この星、いやこの星が存在してる“世界”を創ったひみつ道具……
名前は『創世セット』

過程を省いて結果だけ言うと、自分で世界が創れる

もつとも、望んだように創ることはほぼ無理だが絶対的な計算能力、例えば……“答えを出す者”とかを使えば無理じゃなくなる

けどこんな凄い道具もドラえもんの世界では『未来世界の小学生の夏休みの自由研究課題』なんだから驚きだ

「…とまあそんなわけで、オレが好き勝手に創った星、と思っ
といてくれたらいいから」

「もう…凄すぎだよ…」

「突っ込んでるこっちがおかしく感じてきちゃうよ」

ユーノとアルフが諦めたような表情で言ってくる

「…でだ、説明に戻るけど、この星には地球の生き物はほぼ棲ん
でない。棲んでるのは「ガオオオオ…」…ああいうヤツらだ」

オレが説明しようとしたまさにそのとき、空で存在を誇示するよ
うに吼えたのは雄々しき空の王者、火竜 リオレウスだ

「あれって、直樹の召喚竜？」

「ああ、この星にはオレが召喚する生き物を全部放し飼いみたい
にして暮らさせてんだ」

「くくへえ」

「じゃあ具体的な説明に入るぞ？オレたちがいるのはこの星にあ
る4つの大陸の1つ、『ポツケ』だ。急に決まった旅行だったから
案内出来るのはこの大陸だけだけど他に『ココット』、『ジャンボ』
、『ユクモ』って大陸がある」

そう言つと、立体映像の大陸がそれぞれチカチカと光る

「あと1つ言っておくけど、この星は時間の進み方が地球とちよつと違ってな、こつちの1日は地球での半日と同じ時間なんだ」

「それって、つまり…旅行の期間が2倍になるってことだね！」

アリシアが喜んで跳びはねながら言う

「まあ、間違っではないいな。確かに地球の時間で2泊3日の予定だったんだからこつちだと5泊6日したって大丈夫な計算だ」

そう言うとなのはたちは理解したみたいでそれぞれ喜んでる

「それと、シグナムの要望の戦いだけど、旅行の間にオレの召喚竜たちと戦える準備はする。別にシグナムだけじゃなく誰でも参加してくれて構わない」

そう言うつとシグナムはかなり嬉しそうにしていた

「ただ、その戦闘を含めてここでは魔法使用に少しルールがある。全員覚えておいてくれ…」

まず一つ、飛行魔法は極力禁止

これは徹底してくれ。この星では制空権は竜たちにある。オレならともかく見ず知らずのヤツが空を飛んでたら正直何されるかわかんねえ。気をつけてくれ」

ここで区切って全員を見るとみんなオレに頷いてくれた…大丈夫かな

「よし、じゃあ二つ目だ

大威力魔法は絶対禁止

例えば、スターライトブレイカーとかスターライトブレイカーとかスターライトブレイカーとかスターライトブレイカーとか、だな」

「ちよっ！？直樹くん！？ヒドイよ！」

フツ、外野の声は無視だぜ！

「あとはまあ無駄な殺生はしないとか、環境破壊は止めてとか、一般的なマナーを守ってくれたらいいから。オツケー？」

オレの声にみんなはまた頷く

よし、確認することは…大体終わったな

「じゃあ泊まる所に行くから、ついてきてくれよ」

さて、ここにオレ以外の人間が入ったのは初めてだけど…なのは
たちなら大丈夫だろ

きつとこの旅行も無事に終わるだろ…

SIDE：直樹 OUT

SIDE……???

『……スター！マスター！』

…ん？トウードの声が聞こえる…

………「」は、どこだ？

オレは、あの渦に飛び込んで…それから…

…そうだ…渦の回転に巻き込まれて目を回して…気を失ったのか
情けないな……よし、とりあえず、起きるか

「………うん………」

目を開けると、綺麗な青空と太陽が1つ、ボルボロスの顔が見えた

「…は？ボルボロス？」

「ガウ？」

ボルボロスはオレを見て不思議そうに首をかしげる

…とりあえず一言…

…ポルポロス可愛いな、オイ…

S I D E … ? ? ? ?
O U T

EX第二話 PARADISE 楽園 (後書き)

ベ「いや、書きちゃった」

直「コロット、ジャンボ、ポッケ、ユクモ…まあ、大丈夫かな？
そう思うところ、うん」

ベ「しかし、書いてみると思ったより分量が多くなるな」

直「…ってことはまだまだかかるってことか」

ベ「うん。けど、これコラボのはずなのにまだちゃんとコラボ出
来てない…？」

直「お前がさっさと進めればいいんだ！」

ベ「そうだけど…」

直「さっさと続き書けよ？皆さん、感想待ってます！」

ベ・直「」ではまた今度！」「」

EX第三話 1日目 前編(前書き)

大学で再会した中学からの友達に言われて気づいたんですが…

今日、僕の誕生日だったんですよ

いや、全くわかってなかった

正確に言つと今日が6月18日だって知らなかった…？

忙しすぎて時間がたつただかなり早く感じる今日この頃…

では、EX第三話始まります！

EX第三話 1日目 前編

SIDE：直樹

あれからオレたちは広場から森の中の道を通ってこの旅行で泊まる場所に向かって歩いてる

「もう少しで着くから、頑張れよ」

「「「お〜！」「」」

そんなこんなで歩くこと約10分…

「ほい、着いたぞ。この村だ」

そこは、家が何軒も建ち並んでいてさながら宿場町を思わせる村だ…ただ…

「…直樹、私の気のせいか？どの家も2階3階があるのに…少し小さくないか？」

シグナムが不思議そうに尋ねてくる

確かに建っている家はどれもこれも少し小さめだ

この村の3階建ての高さが“人間”感覚での2階建てぐらいの高さだ

「ああ、そりゃそうだ。ここに住んでるヤツらに合わせた高さだからな」

「？人、ではないのか？」

「まあな、呼んだ方が早いな。おーいみんな〜！着いたぞ〜！」

そう叫んだ瞬間、あちこちの家からドタバタと音がして、家々から“アイツら”が出てきた

「ええっ！？これって！」

「…嘘みたい」

「…ネコが…一足歩行で歩いてる…」

ソイツらはオレを見ると一目散に駆けてきた

「「「ご主人様〜！いらっしやいニヤ〜！」「「「

「おうみんな、マックはいるか？」

「ここにおりますニヤ」

オレの声に反応して群れの中から少し年を取ったヤツが出てくる

「おうマック。ちゃんと対面して話すのは久しぶりだな」

「はい、お久しぶりでございますニヤ。そちらがご主人様のご友人の方々ですかニヤ？よくお越しくございましたニヤ」

そう言ってマックは軽くお辞儀する

丁寧な対応になのはたちもあわてて頭を下げる

「マック、準備の方は？」

「粗方は終わってますニヤ。あとはご主人様がするものだけかと…」

「わかった。んじゃ、オレは宿に行くから後はよろしくな？」

「はいですニヤ。ほれ、皆早く戻れ！心配しなくてもご主人様はしばらくここにいらっしやるニヤ」

マックがそう言うと集まっていたヤツらは徐々に解散していった

「ではご主人様、儂もこれにて」

マックが立ち去るとプレシアさんが話しかけてきた

「ねえ直樹？彼らは、ネコなの？」

「少し違いますね。彼らはアイルーっていう種族でして人の言葉を理解するだけでなく話すことも出来るほど知能の高いヤツらですよ。ちなみにさっきのマックがこの村の長老です」

「なるほどね」

「それじゃ宿に行くから、ついてきてくれ」

オレたちは村の入り口から少し歩いて村の中心にきた

そこには…

「…人間サイズの家、だけど…」

「…一軒家じゃないかい！」

ユーノが呟き、アルフが突っ込む

中々の連携だな…じゃなくて…

確かに外観はロッジ風の木造一軒家だけど…

「心配ないから。さっ、入った入った」

オレは後ろから全員を家に押し込む

外観から見れば明らかに定員オーバーだ

“外観から見れば”、だ

全員が入るとオレも入ってドアを閉める

そして目の前に広がるのはぎゅっぎゅっ詰めで苦しんでるのは

たちの姿…ではなく

「…何だコレ!?!」

「すっごくいい!」

「これは…予想以上ですね」

ヴィータ、アリシア、リニスがそれぞれ思ったことを口にする

まあ、そう思つのも無理ないだろう

オレたちがいるのは木造の家の中ではなく、まるで高級ホテルのロビーのような豪華絢爛なエントランスだったからだ

オレはポケットからみんなの荷物を出してからみんなに近づく

「どうだ、心配要らなかっただろ?」

「直樹くん、これもひみつ道具の力なんですか?」

「そうだぞシャマル。四次元ポケットの中の四次元空間の原理を応用した圧縮空間でな、見た目以上の広さが出せるから外観は小さく済むんだよ」

「なるほど」

「さて、ここは客室が6階から上は10階まで各フロア同じような部屋が5部屋ずつある。どこ使ってもいいぞ」

「本当につ！1番上でもいいの？」

「ああ、アリシア。それぞれ部屋が決まったらここに集合してくれ。階段はあっち、エレベーターはあそこに3基あるから。目安としては…15分後ぐらいかな？ちなみにオレは601号室だからそこはよろしく」

そう言った瞬間、なのはとフェイトが自分の荷物を持ってエレベーターに走っていった…どうしたんだ？

「あゝあ、なのはちゃんたちに隣はとられちゃったか。それじゃシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、私たちで1フロア使おか？10階はアリシアちゃんたちが行くみたいやし…私たちは9階や！」

「はい、主はやて」

「ま、あたしははやての近くならどこでもいいや」

「楽しみですねゝ お部屋も広いですかね」

「1フロアということとは…まさか私も1部屋ということですか？」

「そやでゝ。ザフィーラもここに泊まってるときは人型でいとうな」

そう話しながらはやてたちはエレベーターで上がっていった

「じゃあ私たちもお母さん、早く行こう！」

「そうね、10階にするんだったわね」

「私もプレシアたちについていきますよ」

アリシア、プレシアさん、リニスは10階みたいだな

「残ったのはボクたちだけだね。どうしよつか、アルフ？」

「じゃあ…あたしたちは誰もいない7階か8階でいいんじゃないかい？」

「そうだね、じゃあ行こうか」

「ああ」

ユーノたちも上に上がってこれで全員がいなくなった

「よし、じゃあさっそく“くじ”の用意するか！」

オレは四次元ポケットから必要なものを出して用意を始めた…

S I D E : 直 樹 O U T

S I D E : なのは

直樹くんの部屋を聞いてすぐに隣の部屋にしようと思いだんだけど、フェイトちゃんも同じことを考えて隣の部屋を狙ってたの話し合っただけじゃんけんで決めることになったけど…うう、あそこでチヨキを出したら…

結局私は603号室になりました…

それからフェイトちゃんと一緒に1階に下りるともうみんな集まってる。私たちが最後だった

「ごめんごめん、遅れちゃった！」

「いやいや、まだ15分たってないからな。遅刻ってわけじゃない」

「よかった」

そういえば、今日ってこのあと何するんだろ？

「じゃあみんな揃ったところで、今日みんなにはこの大陸の観光に行ってきた欲しいんだ」

「観光？海とかじゃなくて？」

アリシアちゃんが首をかしげながら尋ねる

「海とか山もちろん行くけど、それにはいろいろ準備とかが必要でさ。5日分の準備を今日オレが済ませようと思ってるんだけど、

その間ボウーっと待っというもらうのは悪いからな。コピーロボットのオレに大陸を案内させるよ」

「何やめっちゃ楽しそうやんか。それでどこを回るとかは決まってるん？」

「ああ、大陸は広くて1日で回れる広さじゃない。どこでもドアは今では整備中で使えない。だから…」

そう言いながら直樹くんは後ろにあつたホワイトボードに何か大きな紙を張り付けた…って、ホワイトボードなんてさっきあつたっけ？

「この4カ所の中から公平にくじ引きで選んでもらう」

張られた紙には…

『砂漠』、『火山』、『樹海』、『森丘』の4つが書いてあつた

「…直樹、ここって全部安全なところなんだよね？」

ユーノくんが少し顔をしかめながら直樹くんに聞く

「大丈夫大丈夫。勝手なことしなければ大丈夫だから。んじゃこの箱の中からくじを引いてくれ。順番は…まあ適当で」

「それじゃ私1番！」

アリシアちゃんが箱に向かって走って行ったのをきっかけにみんな箱の前に1列に並んで…っ！

「私も並ばなきゃ！」

結局、私は1番最後に引いたの…

「じゃあ開けてくれ。中に場所が書いてあるから」

・ ・ ・ ・ ・

「それじゃあ、楽しんでいようっ！」

私たちはくじ引きのあと、村のアイルーさんたちからお昼ご飯のお弁当と飲み物をもらってそれぞれの目的地に向けて出発したの

…そういえば、私が行くところには“あの竜”はいるのかな？

S I D E : な の は O U T

S I D E : 直樹

なのはたちを送り出したあとオレも出かける準備をしてた

今日中にいろんなところに行かないといけないからな…どこでもドア、整備のためとはいえバラすんじゃないかな

「よし、行くか。バリー、久しぶりだけどいけるよな？」

『そういえばセットアップは久しぶりでしたね。もちろんですよ』

「オツケー！ブレイバリー、セットアップ！」

『スタンバイレディ セットアップ』

オレはバリーをセットアップしてバリアジャケットを纏い、刀になったバリーを腰に差す

「んじゃ、オレたちも【ピピピ！ピピピ！】…どうした、バリー」

『これは…ユクモ大陸中央の村からの緊急通信です！』

「っ！すぐに繋いでくれ！」

緊急通信は重大な事件が起こったときにだけ使う専用ラインだ

それでかけてくるってことは…

『…繋がりました！』

『…ご主人様！こちらユクモ中央のアレンですニャ！』

アレンはユクモ中央の村の副村長、でもってこつこつという連絡担当でもある

「アレン、何があつたんだ？」

『はい、ユクモ大陸の各地にてご主人様以外の人間の魔力を4つ確認しましたニヤ！』

「何っ！？」

『今はまだ何も起きてませんが、この魔力を察知した方々が何をするか全くわかりませんニヤ！』

ユクモに人間の魔力…侵入者だろうけど、どうやってここに入ってきたんだ？

「…アレン、今からオレもそっちに行く。バリーにそいつらの魔力パターンのデータを転送してくれ」

『わかりましたニヤ！………転送完了ですニヤ！』

『…受信完了…データ確認…っ！！マスター！』

「どうした？何かわかったのか？」

『データの4つの魔力パターンの内、1つが私の記録と一致しました』

「…誰なんだ？」

『…吉谷 吼太さんです』

「…ハア!？」

吼太がこの世界に？ 確かに吼太なら出来そうだけど…

『っ！ ご主人様！ 2つの魔力が移動を開始！このままだと約10分後にその吼太さんと合流しますニヤ!』

マズイって!？ もし吼太がここで戦ったりしたら…

「予想合流地点は!」

『えっと…砂原地方ベースキャンプから西に約3キロの区域ですニヤ!』

「わかった!オレが行くからアレンはそのまま魔力の監視を頼む!」

『了解ですニヤ!』

そう言ってアレンとの通信を終える

けどどうする?今から全速力で行っても10分は無理だ

せめて近くに誰かいれば…

「…ん?…あの辺りは…バリー、 “コジロウ” が今修行してるのっ…」

『…あつ！ちょうどその近くです！』

「すぐに連絡してくれ！」

『はい！………繋がりました！』

バリーから出たスクリーンに黒色のアイルーが映る

『…修行中に連絡は入れるなど何度言えば…っ！お館様！？こちらに来られてたのですか？』

「ああ、修行の邪魔をして済まない。ちょっと緊急事態だ！」

『先程から感じる知らぬ魔力絡みですか？』

「そうだ！コジロウがいるところから少し行ったところでそれが合流しそうなんだ。どんな被害が出るかはわからない。悪いけど…」

『そこに行けばいいんですね？』

「ああ、それと……よし、今送った魔力パターンの持ち主はオレの友達でいいヤツなんだ。仮に戦闘が起こったときはそっちの手助けをしてやってくれ！」

『了解です。ではこれから向かいます』

そう言つとスクリーンは消え通信が切れた

「バリー！オレたちも急ぐぞ！」

『はい!』

「九ツ星神器 花鳥風月セイク!」

オレは大气を利用して空を飛ぶ翼の神器、花鳥風月を発動して空に上がり…

「花鳥風月解除!シン・シュドルク!」

さらに花鳥風月を消して、ガツシユの術のなかで加速系最高位の術の1つ、シン・シュドルクを唱える

するとオレの背中に大きなブースターが2つ装着される

「全速力で飛ぶ!」

オレが体勢を整えるとブースターが勢いよく火を吹き出し、ユクモ大陸目指して全速力で飛んだ

SIDE : 直樹 OUT

EX第三話 1日目 前編(後書き)

ベ「今日19歳の誕生日だったんだって」

直「他人事みたいに言うな」

ベ「あんまり実感なくって…。これでティーンエイジャーでいられるのも残り1年切ったってわけだ」

直「ていうか、お前大学入れてたんだな」

ベ「当然！余裕の合格だぜ！」

直「嘘つくなよ。発表前日ガタガタ震えてたくせに…」

ベ「厳しいな」

直「だって、センターの英語の筆記、お前直樹結局何点だった？」

ベ「…200点中94点…」

直「それでよく国立通ったよな」

ベ「…二次試験の小論文…300点中287点だった…」

直「(。口。)…その文才、小説に回せよ」

ベ「うん、無理」

直「…ハア…」

ベ・直「…ではまた今度！」

EX第四話 1日目 中編(前書き)

さて、いきなりですがここで問題です！

『前回の最後に、リーダーに確認された魔力は4つ。では、それはそれぞれ誰でしょうか？』

制限時間はあなたが本編を読み終わるまで！

そんなわけで、EX第四話始まります！

あと、なっぺさん、リオン・マグナスさん

訂正の注文などはいつでも言ってください！

EX第四話 1日目 中編

直樹がポツケ大陸を飛び立つ約10分前：

SIDE：アニキ

「アニキ…これからどうするんだな？あの提督、きっと追いかけてくると思うんだな…」

「オイラもそう思う…。っていつかさっき向こうの方で感じた魔力、あの提督のじゃ…」

デクとチビが口々に不安を言う

確かにあれはあの提督の魔力だった

…ってことはオレのクロスゲートを通ってきたってことか…

クソッ！ 何でオレはこんな目にあってんだ！

変なヤツの力で転生したのに、“アイツら”に“ベルト”を取られて…“アイツら”の部下にされて…

全部“アイツら”のせいだっ！

こうなったら…

「デク、チビ…離れてろ」

「「えっ？は、はい！」」

デクとチビが離れてからオレはまたクロスゲートを開けるために魔力を溜める

クロスゲートはオレがもらった能力で並行世界に通り道を作る魔法だ

これで、“アイツら”をここに呼んでやる！

「アニキ？また逃げるのか？」

「いや、“阿竜”^{ありゆう}と“吽竜”^{うんりゆう}の2人をここに呼ぶ」

「っ！？大アニキたちを呼ぶのかよ！？」

チビは目を見開くほど驚いている

デクもガタガタ震えている

「安心しろ！アイツらにあの提督を押し付けるんだ。で、オレたちはその間に逃げる。いいな！」

デクとチビはコクコクと頷く

「さあて…座標検索。阿童、岬童の現在位置…捕捉！転送位置は…っ！…この近くだ！転送開始！」

そう言って手を上にあげると握っていた拳から黒い光が上がり、空に消えた

「よし！デク、チビ！すぐに隠れるぞ！」

「隠れるんだな？それに大アニキたちの転送位置もこの近くって…」

「そうだ、何でここにしなかったんだ？」

「…さっき座標を決めるときに気づいたんだが、今あの提督が魔力を解放してるのがわかるか？」

「っ！？本当だ！さっきまでとは比べモンにならねえ！」

「そこでアイツら呼んで、周りに誰もいなくて、遠くに大きな魔力がある…。バトルバカのアイツらはどうするだろうな？」

「…っ！なるほど…」

「そろそろだ！お前ら魔力を限界まで抑えこめ！」

「了解！」

さあて、ちょっとした意趣返しだ…せいぜい戦って潰し合えっ！

S I D E : アニキ O U T

アニキと呼ばれる転生者の立てた算段通りに事は進む…かに見え
たが、この男の計算にはいくつか間違いがあった

1つは、自分たちが今いるこの世界にも転生者がいること

1つは、自分たちに敵対する相手は一般的な力の魔導師1人では
なく転生者だったということ

そして最後に1つ、あの咄嗟に座標を決めたとき、呼ぼうとして
いた2人以外に…“もう1人”呼んでしまったことだ

S I D E : ????

「ヤバイヤバイ…少しやり過ぎた」

僕は今必死に出かける準備をしている

今日は家族であるさくらと出かける約束をしてたんだが、時間に余裕があると思って地下の工房に行ったのが間違이었다…

熱中し過ぎたせいで今は約束の時間ほぼギリギリ

なので、かなり焦ってます！

「シャル、これでいいかな？」

『十分だと思えますよ、坊っちゃん』

僕は念のため自分のデバイスの『シャルティエ』に服の意見を聞いてみる

うん、大丈夫だろ

「それじゃ、早く行かないと！」

僕は急いで玄関まで行き、靴を履いてドアを開け、1歩踏み出し、いきなり出た黒い渦に足を踏み入れた

「えっ！？ちよっ！？」

僕は反応して渦から抜けようとしたけど吸引力が強かったのと油断していたせいであっという間に渦に飲み込まれた…

SIDE:???

OUT

・ ・ ・ ・ ・

一方、こちらは観光組

SIDE：フェイト

コピーの直樹と一緒に村から馬車（見たことのない動物が引つ張ってだから馬車って言うていいのかわからないけど…？）に乗って移動すること約1時間…

「よし、着いたぞ。ここがオレたちの観光する場所…『砂漠』だ」

ようやく私たちの目的地に着いた

「ふう、やっと着いたか」

「やっぱり、砂漠って言うだけあって暑いわね」

ちなみに、砂漠に来たメンバーはコピーの直樹、私、シグナム、母さんです

「んじゃ、ここのベースキャンプがすぐそこだからちよつと歩くぞ」

直樹の案内で私たちは岩場を削って造られた道を歩いてベースキャンプに到着した

「あつ、ご主人様！お久しぶりですニヤ！」

「ああ、問題はないか？」

ベースキャンプにいたのは茶色の毛並みのアイルーだった

「特にないですニヤ。平和そのものですニヤ！」

「そうか、じゃあ説明頼むな」

「はい！では皆さん、テントの中にどうぞニヤ」

アイルーに案内されて私たちはテントの中に入る

「改めまして、僕が今砂漠のベースキャンプに勤めてるナゴとい
いますニヤ！」

そう言つとナゴは大きく頭を下げてお辞儀したのでこっちもお辞
儀を返しておく

「さて、砂漠の観光ということで気をつけて欲しいことがあります
ニヤ！」

まずご主人様が説明したこの世界でのルールはキッチリ守って欲

しいニヤ。

それと砂漠はかなりの暑さなんでバリアジャケットを着用してくださいニヤ。

そして最後に、出発する前にこれを飲んで欲しいニヤ!」

そう言うとナゴは自分の肩から下げていたカバンから何か液体の入ったビンを取り出した

「これは“クーラードリンク”といいまして、飲めば約2時間ほど暑さに強くなりますニヤ!」

「強くなる?それって…副作用は…」

母さんが少し心配そうに聞いてくる

「もちろんそんなのないですニヤ!」

「そう、ならいいわ」

「ではこれを渡しておきますニヤ。楽しんで来てくださいニヤ!」

私たちはクーラードリンクを受け取ってテントから出る

テントの外では直樹が私たちのカバンを準備していた

「よし、そんじゃセットアップして、行くか!」

「うん!」「わかった」「わかったわ」

私たちはそれぞれデバイスをセットアップしてバリアジャケットを身につける

それから私はバルディッシュを、母さんは自分の杖を待機状態に変える

シグナムはレヴァンティンを腰に下げたままだ

直樹はコピーだからセットアップしないみたい

大丈夫なのか聞いてみたけど「中身はロボットだから平気だ!」って言われちゃった

最後に私たちはクーラードリンクを飲む

飲むと身体中がキンって冷えてちよっと身震いしてしちゃった…

とりあえずこれで準備は完了!

「んじゃ、行くぞ!」

そして私たちは直樹について砂漠へと歩いていった…

SIDE:フヘイト OUT

S I D E : アルフ

「これは…予想以上だ…」

「そうですね…まさかここまでとは…？」

あたしは直樹のコピー、ユーノ、シャマルと一緒にここ、『樹海』に観光に来てる…んだけど…

「何で人より10倍以上高い樹の方が多いんだい!？」

ベースキャンプつてところからの方向を見渡してもめっちゃくちゃ高い樹がそびえたっていた

正直、圧倒されるなんてもんじゃないね…

「…よし、準備完了つと。おい、そろそろ行くぞ！」

後ろを振り向くとベースキャンプのテントで何かしてた直樹が戻って来てた

「直樹、何してたの？」

「ん？ああ、本当だったらこのベースキャンプには駐在のアイルがいるんだけどな。今日はたまたま“交代期”だったみたいで誰もいなくてさ。代わりにオレが、ここで観光するって記録をつけてたってわけだ」

「駐在のアイルー？こんなところにもアイルーっているんですか？」

シヤマルが不思議そうに尋ねる

「ああ、アイルーたちにはこの星の管理を任せててな。この樹海もそうなんだけど各地方で駐在する仕事があるんだ。で、交代期つてのは文字通りその駐在の交代時期でな、だいたい半年に1回あるんだ」

「『『へ』』』」

こんなところに半年って、アイルーってのは思ってたよりかなりたくましい種族みたいだね

「それじゃ、行くか？」

「うん」「ああ！」「はい」

あたしたちは直樹について樹海に入っていく

さあて、何に会えるのか楽しみだね！

SIDE：アルフ OUT

SIDE：アリシア

「おおっ！」

村から木造の船に揺られること1時間ちよつと…

やってきましたポツケ大陸『火山』地帯！

ズウウウウン…

「ふえ？直樹くん、今の音って何？」

「ああ、この辺りの火山はほとんどが活火山でな、だいたい5分に1回はどこかで小規模の爆発が起こってるんだ」

「おいおい、大丈夫なのかよそれ？」

「大丈夫だって、な？ジン」

「はい。最近の計測では大きな噴火の予兆はどこからも計測されていない。だから安心しろニヤ」

直樹お兄ちゃんの質問に隣にいた灰色の毛色のアイルー、ジンが説明した

この火山に来ているのは直樹お兄ちゃん、私、なのは、ヴィータ

ヴィータははやと離れちゃった上なのはと一緒だから少し膨れ
気味

なのははそんなこと気にせずワクワクしてるみたいだけどね…？

「さて、それじゃさつき渡したクーラードリンクを飲んで、あとバリアジャケットを着てもらうんだけど、アリシアはまだデバイス持ってないからな。オレのひみつ道具で代用するぞ」

そういうと直樹お兄ちゃんはカバンから緑色の拳銃みたいなものを出した

「これはテキオー灯って言っただけ。ここから出た光に当たった生き物はどんな環境でも生きることができるようになるんだ。ちなみに効き目は24時間だ。まあこれを使うとクーラードリンクが意味無くなるんだけどな」

「ふう〜ん、まあクーラードリンクもどんなのか気になるから飲むよー！」

「オツケー、それじゃ…」

直樹お兄ちゃんは銃口を私に合わせて引き金を引いた

その瞬間、光が溢れて私に浴びると光もだんだん収まった

「よし、これでオツケー。そっちは準備出来てるか？」

「オツケーなの！」

「あたしもオツケーだ」

なのはたちもバリアジャケットに着替えてて準備はできてた

「それじゃ、行きますか！」

直樹お兄ちゃんについて私たちはベースキャンプから出発する

どんな生き物があるんだろ？ 楽しみだな

SIDE：アリシア OUT

SIDE：ザフィーラ

「何や、凄い雄大な景色やな！」

「そうですね、豊かな大地というのはこういうところをいうんでしょうね」

…主はやてとリニスの声が聞こえる…

閉じていた目を開けると馬車の中には誰もいなかった

…ん…そうか、ここに向かう途中の馬車の中で俺は寝てしまったのか…

俺は起き上がると馬車の外に出た

そこには主はやて、リニスがいて、その先には確かに雄大という一言が似合う素晴らしい景色が広がっていた

「ここが目的地なら、ここの名前は確か『森丘』」

来ているのは見えた通り、主はやて、リニス、俺、そして直樹だ

直樹が近くに見えないようだが…

「あつ、ザフィーラ起きたんか？」

「っ！ はい、申し訳ありません主はやて。眠ってしまっ…」

「ええってええって！ここにもさつきついたらばっかりやし、今は直樹くんが何か用意してるみたいやからな。起きるタイミングとしてはバツチリやで！」

「…はい」

本当に…この方は変わった主だ…。今までのどの主よりも、暖かみを感じる

「おつ、ザフィーラ。もういいのか？」

聞こえてきた声に振り向くと直樹が立っていた

「ああ、迷惑をかけてしまったか？」

「いや、今このベースキャンプに報告に行ってたところだ。時間的には無駄なんかないから気にすんなよな?」

「…わかった」

「よし、前準備は終わったからいつでも出発できるんだけど…問題ははやての車椅子だな。ここ、道の舗装とか全くやってないし…」

「それならば問題ない。私の背中に乗ればいい」

「ええんか、ザフィーラ?」

「もちろんです。主を手助けすることも守護獣の役目ですよ」

「…それじゃ、お願いしよかな?」

「はい」

それから、リニスの手を借りて主はやては車椅子から俺の背中に移った

「よし、それじゃ行くか!」

直樹に続いて俺たちも森丘目指して歩いていく

俺としては、主はやてに楽しんでもらえればそれでいい…

SIDE:ザフィーラ OUT

・ ・ ・ ・ ・

他方、こちらはアニキたちが潜んでいる場所から少し離れた岩場
…ここに、2人の人影があった

S I D E : 咩竜

「兄者、兄者！起きてくれ！」

「…うん？咩竜…か？」

「ああ、そうだ。まさか義弟の顔を忘れたか？」

「まさか？ところで…ここはどこだ？」

俺は兄者と一緒に辺りを見回す

「わからない。ただ、俺たちがいた場所とは明らかに違う」

「確かに。仮眠を取ってる間に何かあったってわけか」

「そうらしい…。ん？…兄者、感じるか？あの魔力…」

「ああ…かなりの大きさだな。ムツ、消えた…いや、自分で抑え
たんだな」

「コイツを狩れば金目のものが手に入るかもな」

「ああ、オレとお前、それに…」

「この2本のベルトがあれば俺たちに負けはねえ」

「そのとおり！さあ吽竜よ！方角はわかっている。いざ行かん！」

「ああー！」

さあ、悪いがオレたちの生け贄になってもらうぜ？

S I D E : 吽竜 O U T

S I D E : 吼太

『マスター、いくつか報告があります』

「よし、全部話してくれ」

あれからオレはクロスオーバーフォームだけじゃなくセツトアップまで解除して同じ場所から動かないでいた

あまり動き回っているとロクなことにならないのはお約束だからな

『まず、今いる世界ですが魔導師が人工的に創った星です』

「やっぱりか…」

ボルボロスがいたんだ…自然に存在するモンハンの世界よりも転生者が創った世界の方が当たる確率が高いからな

「で、その魔導師は誰だ？知り合いか？」

『空気中の魔力を私のデータベースと照合した結果、有沢 直樹様の魔力とほぼ一致しました』

「っ！…そうか。てことは、直樹の世界に犯罪者を入れちゃったってことか。悪いことしちまったな」

『今すぐに捕らえれば支障はないかと思われます。……マスター、北に3キロの地点から魔力反応が2つこちらに向かっています。推論ですが、先程リミッターを外した際に漏れた魔力が感づかれた原因かと』

「2つ？アイツらは3人組じゃなかったか？」

『2つとも捕縛対象の3人、及び直樹様とも一致しません。このままだとあと10分ほどで接触します』

「…トワード、現在位置で迎撃する。直樹にコンタクトが取れないか試しといてくれ」

『わかりました』

さて、出来るだけ周りに被害は出さないように、潰すか…

S I D E : 吼太 O U T

・ ・ ・

阿竜、咩竜が飛び立った地点から東に約500メートル

彼もまたここに到着していた

S I D E : 水無月 悠二

「うんっ…」

『大丈夫ですか？坊っちゃん』

「うん、何とか。それより…」

黒い渦に飲まれたあと、やっと外に出たと思ったら地面がすぐ近くだったのは驚いたな…そんなことより…

「ここは…地球、じゃないのか？」

『はい、先程からサーチをかけてますがここは地球とは全く一致しません。恐らくあの黒い渦は転移系の魔法だったのでしょう』

シャルの推測は多分当たってるな…

「シャル、どうすれば帰れるかな？」

『手っ取り早いのはやはり、あの黒い渦を使った者を捕らえることではないでしょうか？幸いにもあの渦の魔力パターンは記録します。術者が魔力を使えばすぐにわかります』

「…よし、ならそれまで魔力は抑えてここで待っておこう。下手に動くのはマズいと思うし…」

『妥当な判断です』

さて、さっさと出てきて欲しいな…

出てきたら、とりあえずボコボコにするか…

SIDE：悠二 OUT

SIDE：直樹

くそっ！最初の2つから後他の魔力も動いたり消えたりし始めてる
さっさと捕まえないと…

『(マスター、どこから向かいますか？やはり吼太さんのところ
ですか？)』

「(いや、吼太なら1人でも負けはないだろ。しかもそこにコジ
ロウまで行かせてんだ。心配はないさ)」

ちなみにオレとバリーが念話で話してる理由は…まあ舌のためっ
て言えばわかるよな？

『(ならどこに…)』

「(吼太のところに最初に動き出したヤツらが元いた場所…その
近くに人の魔力反応がある)」

『(あっ、確かに)』

「（オレたちはそこに行く。ひよつとしたらそいつらは吼太が追
つてる犯罪者だったりするかもしれないしな）」

『（了解しました。ユクモ大陸までこのままならあと12分です
！）』

「（オツケー。さあ、行くぞ！）」

オレはそのまま最高スピードで飛んでいく

さて、鬼が出るか蛇が出るか…

SIDE：直樹 OUT

EX第四話 1日目 中編(後書き)

ベ「…というわけで、前書きのクイズ、答えは『吼太、アニキ、阿竜、吽竜』でした！正解者の中から抽選で…」

直「わかるかああっ！」

ベ「グヘツ！？何すんだいきなり！」

直「どんな無理問だよ！半分は今回初めて出てきたヤツじゃねえか！」

ベ「わかるヤツにはわかる！」

直「…もういい。んなことより、この戦い収まりはつくんだよな？」

ベ「もちろん！頑張って戦わせちゃうゾ」

直「キモいつー！！」

ベ「そんな…マジで突っ込まなくても…」

直「なっぺさん、リオン・マグナスさん。気に入らないところがあつたら遠慮なくコイツに言ってください！それと次回はついにお二方の吼太と悠二がそれぞれ戦います！戦闘描写は…まあ、あんまり期待しないでやってください」

ベ「ちなみに、次回の戦闘に欠かせないワードは…【RIDER】
です！」

ベ・直「ではまた今度！」

EX第五話 1日目 後編 【戦の巻 1】（前書き）

勢いで書いていって自分で読み返して一言…

「今回説明文多い！」

さらに、戦闘回はこの話で終わらせる予定だったんですけど、思ってたより長くなったので2つに分けます

2つ目は出来れば今日中、遅くても明日中には投稿したいです！

ではEX第五話、始めます！

SIDE：吼太

「…来たか」

トウッドが言った方向を見上げていると向こうから2つ何か飛んでくるのが見えてきた

たぶんあれだな…

2つ…いや、2人は真っ直ぐ飛んでくるとオレに気づいたのかオレの近くに降りてきた

1人は全体的に赤を基調とした着物に似た服を着ていて、もう1人は全体的に青を基調とした服で、2人とも肩から黒色のポーチを付けていた

「（確かにアイツらじゃないな…って、コイツらは…トウッド）」

『（はい…確認しました。この2人はあの賊の実際的リーダーとして手配されている阿竜、吽竜の2人で間違いありません）』

やっぱりか…コイツらもあの渦を通ったのか？

「おい、ちょっといいか」

などと考えていると赤い方がオレに声をかけてきた

「この辺りにゴツイ男はいないか？」

…ゴツイ、男？ どういう意味…っ！？ …まさか

「さて兄者、何で“その高い魔力の人間”がゴツイ男だってわかるんだ？」

「そりゃそうだろ？ あんな大きな魔力を持つてんだから歴戦の勇者みたいな貫禄のヤツに決まってるんだ。コイツみたいな“弱い嬢ちゃん”じゃなくてな」

…待て…つまりお前らは、オレの魔力を追ってきてオレに気づかず…オレを…女だと…

「んで嬢ちゃん。見たこ」……だ」…あ？何か言ったか？」

「オレは、男だあああっ！！ トワード、変身っ！」

『Stand by ready Set up&Ar
p u d m』

トワードから電子音が鳴り、オレを光が包み、光が収まるとクロ
スオーバーフォームの鎧を纏った姿に変わっていた

「っ！兄者、どうやらコイツがそうらしいぞ」

「……おおっ！そ、そうか！思ってた通りだ！」

「（ウソつけ…トワード、コイツらの戦闘スタイルについて何か
データは？）」

『（残念ながらありません。ただ、応戦経験のある局員の報告で
は、【見たことのない鎧を使う】とのことですよ）』

「（見たことのない鎧…候補として妥当なのはやっぱり…）」

「行くぞ吽竜！」

「わかっているさ、兄者！」

阿竜と吽竜は肩にかけていたポーチから銀色のベルトを出して腰
に巻く

「さあ、ショータイムだ！」

阿竜と吽竜は空に向かって右手を上げる

すると、どこからともなく赤いカブトムシ型の機械と青いクワガ
タムシ型の機械が飛んできて2人はそれを掴んだ

そして…

「変身っ！」

2人はベルトのバックル部分にさっきのカブトムシ型の機械、『カブトゼクター』とクワガタムシ型の機械、『ガタツクゼクター』をそれぞれ右側からスライドさせて合体させる

『HENSHIN』

ベルトから電子音が鳴り、2人の体は鎧に包まれていく

阿竜の方は銀色と赤色を基調とした姿、『仮面ライダーカブトマスクドフォーム』に…

阿竜の方は銀色と青色を基調とし、両肩にバルカン砲を備えた姿、『仮面ライダーガタツクマスクドフォーム』に変身した

「なるほど、確かにオレの世界では見たことのない鎧って認識にもなるな」

『マスター、どう対処しますか？』

「そっだな」

「さて、さっさと殺られてもらおうか！」

阿竜の掛け声で2人はオレに向かってくる

「やっぱり、ライダーにはライダーだろ」

オレは1枚のカードを取り出し、体の前に掲げる

「変身っ！」

そう言っつて、オレはクロスオーバーフォームの腰についている白いバックル、『ディケイドライダー』にカードを読み込ませる

『KAMEN RIDE 【DECADE】』

その瞬間、オレの体を一瞬で新たな鎧が包み、マゼンタと白色を基調とし顔の部分にはバーコードを模した紋様が入った姿、『仮面ライダーディケイド』へと変身した

「なっ！？ ヤツもオレたちと似た力を！？」

「落ち着け兄者！こちらは2人、まだ勝機は俺たちにある！」

「お、おう！行くぜ！」

阿竜は武器である『カブトクナイガン』を斧型の『アックスモード』で構え、吽竜は肩のバルカン砲をこちらに向ける

「さて、それじゃ…」

そう言いながら左腰につけていたカードホルダー、『ライドブッカー』を手に取り、長剣型の『ソードモード』に変形させ…

「始めるか！」

2人へと剣先を向けた

S I D E : 吼太 O U T

S I D E : 直樹

『(マスター、あと10秒ほどでユクモ大陸に到達します。減速の準備を)』

「(わかった。3…2…1…、シン・シユドルク解除!)」

その瞬間、背中にあったブースターは消える

シン・シユドルクは確かに速いけど、どうしてもそのブースターから出る爆音が周りにうるさいからな…大陸の上では使えないんだよな…

などと思ってる間にオレは慣性の法則に従って前に進みながら重力に引かれ下に落ちている

あれだな…高校の物理でいう水平投射の状態だな…うんうん…

「…って落ち着いてる場合か!九ツ星神器 花鳥風月セイクっ!」

オレは急いで花鳥風月を展開して空中でバランスを取る

「…ふう…危なかった〜っと、そうだ。バリー、オレたちが追いかけてた魔力は今どの辺だ？」

『少し待ってください…：…わかりました。ここから北東に250メートルのところに魔力反応が1つ、生体反応としては3人の人間がいます』

「よし、それじゃさっさと叩きに行くか！」

『はい！』

オレはバリーが見つけた方向へ勢いよく飛んでいく

さて、見つけたらどうしてやるのかな？

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : チビ

「ハア…ハア…ここまで、来たら…もう大丈夫、だろ…」

アニキの声でオイラたちは腰をおろす

「アニキ、これが、ら…どうする、んだな…」

「…ハアア、よし。クロスゲートをまた使うにはあとだいたい7、8分かかるんだ…。それまで誰にも見つからなければ…っ！！」

デクの質問に答えてる途中にアニキはビクツと身震いして空を見上げる

「…マズい、また違う大きな魔力が来た。しかも、こっちに向かって来てる！」

「どどどどうするんだな!？」

…ここは、自分の役割だな…

「…アニキ、オイラとデクで時間を稼ぐ。その間にアニキは逃げてくれ」

「何？」

「オイラたちにはアニキからもらった“ベルト”がある。使い方はまだあんまり覚えてないけど、時間稼ぎぐらいにはなれる。だから…」

「…わかった。ただし、お前らはアイツを倒してこっちに来い！いいいな？」

「おう！デクもそれでいいか？」

「もちろんなんだな。オラもやるんだな！」

「…じゃあ、この先で待ってるからな」

「おうー」「おうー」

アニキは何回もこっちを向きながら徐々に走り去って行った

そのすぐあとだった…

「お前らか、ここに勝手に入ってきたのは…」

背中に翼を生やした子どもが空から降りてきたのは…

S I D E : チビ O U T

S I D E : 直樹

空から探していると開けた岩場に人影を見つけて降りてみると、オレとほぼ同じような身長のと、逆に190センチぐらいのノッポな男の2人がいた

「お前たちか、ここに勝手に入ってきたのは…」

オレは地面に足をつけると花鳥風月を消して2人を見る

魔力を持つてる1人は逃げたみたいだな

「大人しく捕まってくれるなら手荒なことはしない。どうだ?」

「ハッ!何でデメエみたいなガキの言いなりにならなくちゃいけないんだよ!デク、やるぞ!」

「わかつたんだな!チビ!」

ハア、説得してみようてはしたけどやっぱり無理か…

2人は地面に置いていたカバンから何か機械的なベルトを取り出して腰につけ…って、はい?

その後2人はポケットから携帯を取り出し何か番号を打ち…ってちよつと!?

『5 5 STANDING BY』

『9 1 3 STANDING BY』

…冗談だよな?

「行くぜ!」「行くんだな!」

「」「変身っ!」「」

チビと呼ばれたヤツは携帯…いや、折り畳み式携帯型マルチデバ

イス、『ファイズフォン』を右手で上に掲げ腰に巻いたベルト、『ファイズドライバー』のバックル部分に上から挿し込み、そのままそれを左へ倒す

一方デクと呼ばれたヤツも回転式携帯型マルチデバイス、『カイザフォン』を胸の前で斜めに構え、腰のベルト、『カイザドライバー』のバックル部分に斜めに挿し込み同じように左へ倒す

そして…

『『COMPLETE』』

ベルトから電子音が鳴り、チビの体を赤い光が、デクの体を黄色い光が包み、チビは銀色のアーマーにスーツの表面を赤く輝く流体エネルギー、『フォトンブラッド』が流れる『フォトンストリーム』という赤い光の帯がベルトから全身に伸びていて、顔は『（ファイ）』を型どっている『仮面ライダーファイズ』に

デクは薄い黒色のアーマーに黄色いフォトンストリーム、顔は『（カイ）』を型どっている『仮面ライダーカイザ』へと変身した

「……………バリー」

『は、はい？』

「オレが時間稼いで戦うからバリーはその間にあの2つのドライバーをサーチして調べてくれ　オレの記憶を見てくれてもいいから、な？」

『わかりました…マスター、私の気のせいですか？今、マスター

かなりテンションが上がってませんか？』

「…やだな〜バリー　んなわけないだろ〜　それよりも早くサーチよろしく、だいたい5分ぐらいで頼むぞ」

『は、はい…（テンション上がりまくりじゃないですか…？）』

テンションが上がってるかだつて？

上がってるに決まってんじゃない！

目の前にオレの1番好きなライダーの本物の変身ツールがあるんだぞ？

上手くいけば…フッフ

バリーはサーチ中だから使わずに…拳で戦うか！

「さあて、んじややりますか」

SIDE：直樹　　OUT

SIDE：吼太

「せいっ!」

「ぐわあっ!」

ライドブツカーを横一線に振りカブトとガタツクを吹き飛ばす

…やっぱり思った通りだな

コイツら、ライダーの力に振り回されて全く使いこなせてねえ

普通のヤツら相手ならどうにかなるんだろっけどな…

「どうした?もう終わりか?」

「…んなわけないだろ…」

カブトとガタツクはふらつきながらも立ち上がる

やっぱり仮面ライダーの力だけあってタフだな

まあ…次で終わりにするか

オレはライドブツカーを元の『ブツクモード』に戻して中から『ライダーカード』を1枚取り出す

ディケイドの強みはライダーカードを読み込むことで様々なライダーの力を使えることだ

オレはカードをディケイドドライバーに挿し込み、読み込ませる

『KAMEN RIDE【AGITO】』

すると、ディケイドライバーの中心から金色の光が溢れてオレを包み込みその姿を、大地の力をその身に宿した戦士、『仮面ライダーアギト グランドフォーム』へと変えた

「姿が…変わりやがった!？」

「あれがアイツの力か…兄者!こうなれば“アレ”を使うぞ!」

「アレか!アレを使えばオレたちに負けはねえな…行くぞ!」

カブトとガタツクはバックルにあるカブトゼクターとガタツクゼクターの角を模したレバーをそれぞれ立ち上げる

すると、カブトとガタツクの全身にエネルギーが流れて鎧が若干浮き上がる

そして…

「「キャストオフ!」」

その掛け声とともにレバーを完全に反対側に倒すと浮き上がっていた鎧は弾け飛び、下からカブトは真っ赤な、ガタツクは青色の、さっきまでの重装甲とは反対の身軽そうなアーマーが現れる

これがカブトとガタツクの真の姿、『ライダーフォーム』だ

「どうだ?この姿を見てオレたちから逃げれたヤツは1人もいねえ!」

「お前もこれで終わりだ」

そう言いながらカブトはカブトクナイガンの短剣型の『クナイモ
ード』を、ガタツクは両肩のバルカン砲から鎧が取れたことで現れ
た1対の剣、『ガタツクダブルカリバー』をそれぞれ構える

「…ん？トワード、さっき“応戦経験のある局員の話”とかつ
て言っただけだったか？」

『はい、そうですか？』

…てことは、何？ 全員倒した気になってるってことか…何かつ
くづく可哀想なヤツらだな

「どうした？怖くて何も言えないか？」

カブトはひたすらオレを挑発してくる…無視だな

オレはライドブッカーからさらに取り出したカードをドライバー
に読み込ませる

『FORM RIDE【TRINITY】』

その瞬間、バツクルから今度は金、赤、青の3色の光が溢れる

胸の部分はグランドフォームの金色の鎧のままだが両腕が変わっ
ている

右腕はグランドフォームのときよりより尖った肩のアーマーをつ

けた赤色と金色を基調とした腕になり手には鋭い長剣、『フレイムセイバー』を持っている

左腕は逆に丸みを帯びたアーマーをつけた青色と金色を基調とした腕になり、手には両端に薙刀のような刃を持った棒状の武器、『ストームハルバード』を持っている

これが、大地の『グランドフォーム』、炎の『フレイムフォーム』、風の『ストームフォーム』の力を名前通り“三位一体”とした、『仮面ライダーアギト トリニティフォーム』だ

「うおっ！？また変わった!？」

「慌てるな兄者！俺たちの“疾さ”には絶対についてこれねえ！
そうだろ？」

「お、おお！んじゃ…」

そう言ってカブトとガタックはベルトの右側にあるボタンに手を
かけ…

「クロックアップ!」「」

そう叫びながらボタンを押した

その瞬間、2人は“消えた”

正確には常人には到底視ることの出来ない“超高速の世界”で動いている

『クロックアップシステム』：それがこのスピードを可能にしている

この状況を打破するには、普通なら同じクロックアップを使うしかないだろう

普通なら、だ…

「……………ふう」

オレは1度軽く息を吐き、2つの武器を握り直す

…刹那…

ドゴオオオオンッ！

オレはさつきまでとは違い、2つの武器を振り抜いた体勢で止まっている

その武器の向く先には…

「バ、バカ…な…」

「クロック、アップ、を…止める…だと…」

地面がへこむほど激しく叩きつけられ、体のあちこちから火花が散っているカブトとガタツクの姿があった

「何で、止められる…んだよ…」

カブトがふらつきながら立ち上がる

「簡単なことだ。見えるから叩いた…それだけだ」

「……………嘘だろ？」

「本当だつて…さてと、じゃあ止めだ」

「ひいいつ！？ 咩竜！早く、逃げるぞ！」

「あ、ああ…」

カブトはガタツクを引き上げると2人でズルズルと逃げ始める

「本当は弱ってるヤツにオーバーキルってあんま好きじゃないんだけどな。お前らは少しやり過ぎた」

オレはライドブッカーからカードを取り、ドライバーに読み込ませる

『FINAL ATTACK RIDE【AAA AGIT
O】』

オレが武器を脇に置き、構えを取ると頭にある『クロスホーン』という2本の角が6本へと展開され、足元には金色に輝くアギトの紋章が広がる

紋章はやがて両足に収束し、足にエネルギーが溜まる

「行くぞ！」

オレはそのまま飛び上がり、空中で足を抱えて1回転する

「クソッ！何なんだよ…何なんだよお前はっ！」

逃げるのを諦めたのか、カブトとガタツクはこっちを向いていて、ガタツクがオレに向かって叫ぶ

「オレは！通りすがりのチート魔導師だっ！覚えときやがれええっ！」

回ったあとそのまま両足で飛び蹴りをする

これがトリニティフォームの必殺技、『ライダーシュート』だ

「おらあああっ！！！」

ライダーシュートはカブトとガタツクのベルト部分に命中し、ベルトが爆発しながら2人は吹き飛ば

「「ぎゃあああっ！？」」「

ベルトが壊れたことで変身は解け、土煙が晴れるとそこには気絶した阿竜と咩竜が倒れていた

「ふう、終わり終わり」

オレはディケイドの変身を解いて、クロスオーバーフォームに戻る

「さてと、コイツらはバインドで縛るとして…あっそっだ。トワード、直樹とは連絡ついたか？」

『まだです。どうやら直樹様も戦闘中のようにブレイバリーに通信が繋がりません』

「そうか…。んじゃ、こっちから行ってみるか…場所は…よし、見つけた」

オレは2人のベルトの残骸を回収してから、螺旋力で作ったワープゲートを前に開く

そこに阿竜と咩竜を放り込んだあと、オレも入っていった…

S I D E : 吼太 O U T

S I D E : 直樹

「喰らえええっ！」

「レドルクッ！ ハア！」

オレは脚力強化の呪文、『レドルク』を唱えて向かってきたチビ

…いや、ファイズを蹴り飛ばす

…ガツカリだな、コイツら全くドライバーを使いこなせてない…
武器も使わず殴りにきたり蹴りにくるだけ…

何か、戦ってるだけでムカつくって初めてだな

早くバリーのサーチ終わらん」(マスター、終わりました!)」
おっ!

「(結果は!)」

『(は、はい…? マスターの記憶の言葉を借りて説明すると、あの2つのドライバーは「オルフェノクではない普通の人間でも変身可能に改造されたドライバー」とわかりました)』

「(……フッフ)」

『(マ、マスター?)』

「当たれなんだなあ!」

笑うのを我慢しているとデク…もとい、カイザがただの飛び蹴りを仕掛けてくる

「…【1秒を10秒に変える力】、発動」

そう呟いた瞬間、カイザの目にはオレが消えたように見えただろ
うな

「あ、あれ！？どこにいつ「ゴウ・バウレンツ！」ぐげええっ！？」

カイザは突然上に現れたオレから気を溜めた拳で相手を攻撃する術、ゴウ・バウレンをまともに受けて地面に叩きつけられた

今、何をしたのか簡単に言えば【1秒を10秒に変える力】を使って普通の人にとっての1秒を10秒に…要するに10倍速で動いたってことだ

カイザが地面に叩きつけられると、ダメージに耐えられなくなつてカイザの腰からカイザドライバーが吹き飛び、変身が解けてデクに戻る

デクは…気絶したみたいだな

「デ、デクツ！？」

ファイズが慌ててデクに駆け寄ってる間、オレはというと…

「…フフフ」

『マスター、正気に戻ってください！？』

「何言ってるんだよバリー。オレはただな…」

そう言いながらオレは自分の足元まで飛んできていたカイザドライバーを拾い上げ…

「夢が叶うのかと思うとさあ…」

カイザフォンを一旦外してカイザドライバーを腰に巻いてカイザフォンを開く

「嬉しくて嬉しくて…」

『9 1 3 STANDING BY』

コードを入力し、デクと同じように胸の前で斜めに構える

「お、お前っ!?!?」

入力音を聞いてファイズはオレが何をしようとしてるのか気づいたみたいだ

けど、もうオレと止めるなんて無理だぜ!!

「テンションフォルテツシモなだけだ!変身っ!?!」

『(そのワードは違うライダーじゃ!?!?)』

オレはカイザフォンをドライバーに挿し込み、左に倒す

黄色い光がオレを包み、姿をカイザへと変える

「…うおおおおおっ!!来たあああああっ!!」

変身が完了して自分の姿を確認して、オレは嬉しさの余り雄叫びをあげる

「お前っ！そのベルトはオイラたちのだ！返さ！うるせえっ！」
なっ！？」

「ちゃんとした使い方も知らないで…。コイツはこう使うんだよ
！」

オレはベルトの右側から吊り下がっているホルダーからX字型の
武器、『カイザブレイガン』を抜く

それからカイザフォンから表面に装着されている『ミッションメ
モリー』を取り、カイザブレイガンのグリップ部分にあるスロット
にメモリーを挿し込むと、グリップの付け根からフォトンブラッド
の刃が現れる

「最初からクライマックスだ！行くぜ行くぜ行くぜ！」

『（それも違うライダーですよ…？）』

オレはファイズに素早く近づくと勢いよくカイザブレイガンを振る

「うわっ！？ちよっ、ぎゃあっ！？」

ファイズは全く防御出来ず刃は連続でファイズのアーマーを斬り
つける

「おらあっ！」

さらに回し蹴りでファイズを蹴り飛ばし、距離を取る

「さあて、止めだ！」

オレはカイザフォンの上側を少し回転させて文字キーの部分を出すと、変身のときにも数字のあとに押していた『ENTER』ボタンを押す

『EXCEED CHARGE』

ベルトから電子音が鳴り、ドライバーからカイザブレイガンへとフォトンストリームを伝って光の輝きが走り、輝きがカイザブレイガンにたどり着くとフォトンブラッドが刃にチャージされ、刀身が大きくなる

その状態で後部のコッキングレバーを引き、ふらつきながら立ち上がりとしていたファイズ目掛けて引き金を引くと光弾が発射され、命中したファイズは全身に黄色い網のようなものが張り巡らされ動きを止められる

「な、何だよこれ!？」

オレはカイザブレイガンを構え直して一気にファイズへと走り出す

すると徐々にオレの体が光出し、オレ自体がX字の光の矢となってファイズに突進する

そして、すれ違いざまにファイズの体をX字に斬りつける

これがカイザの必殺技の1つ、『カイザスラッシュ』だ

「ぐわあぁあっ!？」

ファイズは斬りつけられたところから小規模の爆発を起こしてそのまま倒れる

その際に変身は解けて、チビからドライバーは外れた

チビも衝撃で気絶してるみたいだ

「……………よし」

オレはチビに近づいて外れていたファイズドライバーを抜き取り…

「ファイズドライバー、獲ったどおおおっ！」

とある有名なフレーズで叫びながら上へと掲げた

・
・
・

それからオレはチビとデク（っていうかこれ本当に名前なのか？）を1ヶ所に纏めてバインドをかけた

「さて、コイツらどうしようかな？」

『1度吼太さんに連絡してみるのはどうですか？おそらくこの人と吼太さんは関係があるのではないでしょうか？』

「そうだな、んじゃバリー。悪いんだけど吼太の魔力を探して…
っ！？」

吼太に連絡しようとしていたそのとき、オレの前にまるで銀河のような形をしたゲートが現れた

慌てて警戒すると中からバインドに縛られた見たことのない男が2人出てきて次に…

「よつと…ん？今度はカイザか？」

「吼太!？」

連絡しようとしていた相手、吉谷 吼太が出てきた

「その声、もしかして直樹か？」

「ん?…あつ、変身したままだった」

オレはカイザフォンをバックルから外して開き、ボタンを1つ押して変身を解いた

「やっぱり直樹か。でもお前、『カイザギア』なんて持ってたのか？」

「いや、コイツらが使ってきたから奪って使ったんだよ。ちなみにファイズギアもゲットだ」

オレは両手でファイズギアとカイザギアを持ち上げる

「奪ってって…? そうだ直樹、謝らせてくれ。その2人とあと1人はオレの世界の犯罪者なんだ。油断してたせいでここに逃げら

れた。すまねえ」

「いいっていいって。そういうわけだったらしょうがないだろ？」

「すまねえ……。出来れば何かお詫びの品でもやりたいんだけど……」

「そんなの別に……。いや、待てよ……。それじゃあさ、この2つこのまま貰っちゃってもいいかな？」

オレは手に持ったままのドライバーをもう1度持ち上げる

「……わかった、いいぞ。本当だったら証拠品として押収しないといけないんだけどな。何とかなるだろ」

「あざあーすっ！」

オレは四次元ポケットに2つともしまう

「そういえば、あと1人いるんだよな？」

「ああ。トワード、見つかりそうか？」

『少し待ってください……。見つけました。ここから北東に約1キロ、魔力による戦闘を確認。魔力反応は2つ。1つはマスターが追っている犯罪者……。もう1つは、水無月 悠二様のものです』

「悠二？アイツもこの世界に来てたのか？」

吼太は目を見開き驚く

「吼太、悠二って…もしかして」

「ああ、オレたちと同じ転生者だ。何でここに…」

何でここにこんなに侵入者が来るんだろうな…北東に約1キロか…えっ？

「トウード、その悠二ってヤツが戦ってるのは本当にここから北東に1キロなのか？」

『はい、間違いありません。直樹様』

…ヤバい…これはかなりヤバいぞ！

「どうしたんだ？何かあるのか？」

「何かどころじゃない！ここから北東に1キロ、そこには「ズウウウウン…」「っ!？」」

話してる途中に大きな地鳴りが聞こえ、慌てて周りを見回すとまさにその北東から大きな土煙が上がっていた

「バリー！」

『はい！…確認しました！あれは巨大な魔力の放出によるものです。マスター、このままじゃ…』

「ああ！吼太、さっきのゲートみたいなのはもう1度出来るか！？」

「出来るけど…そんなにヤバいのか？」

『ここから北東1キロの地点に広がる土地…吼太さんには『大砂漠』といえばわかるでしょうか？』

「大砂漠…まさか!？」

「そのまさかだ!急いでくれ!」

「わかった!」

吼太は振り向くとさっきと同じゲートを作る

頼む、間に合ってくれよ!

SIDE:直樹 OUT

EX第六話 1日目 後編 【戦の巻 2】 (前書き)

…何か急ピッチで書いたせいか仕上がりに納得できない

…うーむ、とりあえずEX第六話、始まります

EX第六話 1日目 後編 【戦の巻 2】

直樹と吼太が会う数分前

SIDE：アニキ

「…ハア…ハア…ハア…、っは、何なんだよここは…」

チビとデクにあの場を任せて逃げたはいいが、ここは何なんだ！？
見渡す限りずっと砂漠が続いてやがる

「くそっ、キリがねえ…。こっとなったら…」

オレは手に魔力を溜めてクロスゲートを開く準備をする

一旦違う並行世界に行つて、そこからチビとデクを回収してまた
逃げる

これで行くしかねえ！

「座標ランダム、クロスゲートオープン！」

オレは手を広げて目の前の地面にクロスゲートを開く

「よし、これで「ザクッ」…何だ？今の音は」

まさに踏み出そうとした瞬間、足元からおかしな音が聞こえてきた
見てみると…

「…剣、か？」

1本の剣が地面に突き刺さっていた

無視して歩き出そうとしたとき、オレは剣が光出したのを見た

マズイ！これはマズイ！

本能的にそう感じ、オレは急いでそこから飛び退く

そのすぐあと…

ドオオオオン！

剣はいきなり爆発した

「なっ！？剣が爆発って、何なんだよ…」

オレが呆然としていると…

「お前か、僕をここに呼んだのは」

後ろから声がして振り向くとそこには、金髪の女が立っていた

女なのに僕って、いわゆるボクッ娘ってヤツか？

などと思っていると…

「答えてもらおう。お前なのか？」

確か、コイツを呼んだのがオレか、って話だったな…

「知らねえな」

「いや、知ってるはずだ。僕を落としたあの黒い渦と同じ魔法、魔力反応も同じだ。お前だろ？」

…なるほどな

ひよっとしたら、阿竜たちを呼ぶときにミスったのかもしれないな…

だが…

「悪いが例えそうだとしても今オレは忙しいんでな。後にしてくれ」

「…なら、悪いが力ずくだ」

そう言うと女はいきなり手に白と黒の双剣を出す

…どうする！？ オレに残ってるベルトはあと1本…

…しょうがない、戦って逃げるか！

オレは持っていたカバンからディケイドライバーを出して腰につけ…

「変身っ！」

カードを読み込ませ『仮面ライダーディケイド』へ変身した

「こっちから行かせてもらっぜ！」

オレはライドブッカーを長剣型のソードモードに変えて女に突っ込む

オレは…こんなところで終わらない！

SIDE：アニキ OUT

SIDE：悠二

僕をここに落とした男は見たことのない鎧をつけると剣を構えて突撃してきた

僕は両手に投影した夫婦剣、黒色の『干将』かんしやうと白色の『莫耶』ばくやを

構えると相手の初撃を2本をクロスさせて受け止める

「（…この剣撃の重さ…、剣の特訓はやってないな）…なら！」

僕は相手の剣を弾くと、剣を構え直し一気に距離を詰め…

「ハアアアアアアッ！」

夫婦剣を素早く振り、連続で斬撃を叩き込む

斬！斬！斬！斬！斬！斬！斬！斬！斬！斬！斬！斬！

「ぐわあああつ！？」

最後の一闪で男は後ろに大きく吹き飛ば

鎧にはいくつもの傷が入っていた

「これで、終わらせる！」

僕はフラフラと立ち上がった男目掛けて手に持っていた干将と莫耶を投擲する

「鶴翼、欠落ヲ不ラズ（しんぎむけつにしてばんしゃく）」

「うおっ！？く、くそっ！」

突然のことに驚きながらも持っていた剣で弾く

「（そっ！）」

その間に僕は飛び上がり、上からさらに投影した夫婦剣を投擲する

「心技、泰山二至り（ちからやまをぬき）」

「心技黄河ヲ渡ル（つるぎみずをわかつ）」

今度は少し余裕をもって2本を弾いた

けど、その余裕が命取りだ！

その男の背後から新たな夫婦剣が男目掛けて飛んでいく

「っ！？ガアアアッ！」

何とか気づいたみたいだけどほぼまともに食らって前に吹き飛ぶ

「唯名別天二納メ（せいめいりきゅうにとどき）」

その間に僕はまた新しく干将と莫耶を投影し、それを背中に生える翼のように背中側で構えて男目掛けて走り出す

「トレスオン
投影強化」

強化した干将と莫耶はまるで翼のような黒と白の長剣へと変わる

「オーバーエッジ」

その間にもどんどん接近していく

相手は苦し紛れに剣を振り下ろしてきたけど…その程度なら！

そして、距離を詰めた瞬間…

「
両雄、共二命ヲ別ツ（われらともにてんをいだかず）ッ
！！」

長剣を振り、X字に大きく斬り裂いた

「ガハッ！？」

男は大きく吹き飛び地面に倒れる

「…止めだ」

その瞬間…

ドオオオオオンッ！！

男の周りにあつた剣が勢いよく爆発した

土煙が収まると男は同じ場所で倒れて動かなかった

妙な鎧にはところどころにヒビが入ってもうボロボロだった

「ふう…このぐらいで十分かな？」

最初の剣の爆発もそうだけど、今使った技は『壊れた幻想 ブロ
ークンファンタズム』

剣に込められた魔力を解放して爆発を起こす技だ

で、さっきの一連の剣技は『鶴翼三連』って言って、干将と莫耶を複数個投影し、様々な角度・タイミングから投擲と斬撃のコンビネーションを叩き込む技だ

ちょっとオーバーキルな気もするけど、まあ大丈夫だろう？

僕は投影してきたものを全部消して男に近づく

もう戦う気力はないだろう…そう思っていた

『FINAL ATTACK RIDE』

その電子音が聞こえるまでは…

「何っ!?!」

僕が驚いた瞬間に男は飛び起き、距離を取る

鎧の顔の部分は半分欠けて中の顔が見えている

「ハア…ハア…、せめて…一撃は、食らわせてやる!」

男が腰の機械を触ると

『DE DE DE DECADE』

また電子音が鳴り、男は上へ飛び上がる

まさか、大技!?!…なら…

そう思いながら僕は『王の財宝 ゲート・オブ・バビロン』から“1振りの剣”を取り出す

ただ、その剣は剣と言うには少し変わった形をしていて、刀身は円柱が3本組み合わさった、まるで突撃槍のような形をしている

僕は剣先を男へ合わせ魔力を込める

男の方も男の前から僕へ目掛けて10枚の灰色のスクリーンのようなものが並ぶ

男はそこを通り抜け加速しながら飛び蹴りを放ってくる

「(こっちも、行くぞ！威力は抑え目で)」

刀身の円柱は回り出し、魔力が収束される

剣の名は『乖離剣エア』

そして、この技は…

「天地乖離す開闢の星 エヌマ・エリシュ ッ！！」

僕はエアを前に突きだし天地乖離す開闢の星を放つ

そのまま進み、ちょうど10枚目をくぐって出てきた男の蹴りと激突する

「ハアアアアアッ！！！！」

しばらく力は拮抗していた

けど…この勝負、僕が勝ちだ！

僕はさらにエアに魔力を込め、力を上げる

そして…

ドゴオオオオオン！！

接触していた場所が爆発し、辺りに黒煙が立ち込める

少しして煙が晴れると…

「……………」

鎧がなくなり、気を失っている男がいた

ふう、これでコイツが起きれば帰れるな…

そう思っで一息つこうとしたとき…

グウウウウン…

いきなり近くに銀河のようなゲートが開き、中から誰かが飛び出してきた

出てきたのは2人でそのうち1人は見覚えがあった

「吼太、か？」

「おう、悠二。直樹、コイツが悠二だ」

「アンタが悠二、か。有沢 直樹。アンタや吼太と同じ、って言えばわかるか？」

「…なるほど」

つまり、転生者ってことが…

「とりあえず言わせてくれ」

その直樹が若干震えながら話してくる

「ん？何だ？」

「…アンタ、何であんなに激しく暴れるんだよ！？ここがどついつとところか理解してから戦えよな！」

な、何でオレは怒られてるんだ？

「…ここで戦ったらいけない理由でもあるのk」「ゴオオオオ…」
「っ！？」

何だ？地面が…揺れてる？

「あーもうっ！ほら、来ちゃっただろ！吼太、そこに倒れてるヤツ拾って逃げてくれ！」

「わかった」

「ほらアンタも動け！」

な、何が来るんだ？

そのとき、少し離れた向こうから砂煙が上がり出し…

「オオオオオオオオ！」

その巨体は姿を現した…

S I D E : 悠二 O U T

S I D E : 直樹

「ジエン・モーランツ!?!」

「叫んでるヒマあったら逃げろっ!」

オレは悠二を急かして空へ上がり、先に上がったた吼太のところへ寄る

「直樹、あれはお前の召喚竜のジエンか?」

「ああ、一応説明しとくとこの星は召喚竜たちを放し飼いにできるように創った星なんだ。で、ここはジエンのために用意した大砂漠だ」

「もしかして…僕のせいで怒ってる？」

「当たり前だっ！今の時期ジエンは砂の中で眠っていることが多いんだ！そんなときに上で騒音出されたらそりゃ怒るだろ！」

「…いや、知らなかったし…」

悠二が少しむくれて呟く

「んで、どうするんだよアレ」

吼太が下を見て言う

そこではジエン・モーランが砂漠で激しく暴れている

自然に止まるには時間がかかりそうだな…

「オレが説得出来ればいいんだ…よし、2人とも手伝ってくれない？」

「まあ、僕のせいでもあるみたいだからな。手伝うよ」

「オレは構わないぞ。友達を助けるのに理由はいらねえだろ」

「ありがとう。それじゃ…」

オレは思いついた連携を2人に伝える

さて、久しぶりに使う術だけど…行けるかな？

・
・
・

「オオオオオオオ！」

ジエンが一直線に砂を泳いでいく

このままだと大砂漠エリアから出ちゃうな

「悠二、初手はお前だ。オレはお前のタイミングに合わせるから」

「わかってるって吼太。んじゃ、行くぞ！」

そう言って悠二は加速してジエンを抜かすと剣を5本ほど投影し、
ジエンの進路に投擲する

剣がジエンの顔に当たるかという距離まで飛んだところで…

「壊れた幻想 ブロークンファンタズム ッ！」

剣をジエンの目の前で爆発させる

「オオオオオツ!？」

ジエンはいきなりの爆発に思わずのけ反り動きが少しの間止まる
そのスキに次の段階だ

「さて、これがチートの力の使いどころ、ってか？ ラウザル
ク！」

吼太はジエンの前に降りると肉体強化呪文、ラウザルクを唱える

吼太に雷が落ち、吼太の体が金色に光る

「スウ…ハア…シッ！」

吼太は1度深呼吸するとジエンの下に潜りこむ

そして…

「せええ…のっ！どりやあああああっ…！」

ジエンを上へと投げ上げた

実際、考えるとすごいことだよな…

約100メートルはある巨大なクジラみたいな竜を投げ上げるんだぞ？

出来るか？ってダメもとで聞いたときにあっさり返されたときはびっくりしたよ…

…っと、呆けてる場合じゃなかった

その間にもジエンはどんどん上がり、100メートルほど上がったところで一旦止まる

「（今だっ！）ミベルナ・マ・ミグロンツッ！！」

呪文を唱えるとオレの身長ほどはある三日月型の飛行体がおおよそ30個ほど現れる

オレはバリーを鞘から抜くと、指揮棒のように見立ててバリーを振り…

「回転ッ！！」

そう指示を出すと、三日月は一斉に回転しながら落ち始めていたジエンの回りへと移動し…

「連結ッ！！」

次の指示で三日月同士が魔力で出来たオレンジ色のヒモで互いに繋いでいき、ジエンを囲む大きな網へと変わる

そして…

「アード…ハーヴェスト収穫ッ！！」

勢いよく三日月が上へと動き、ジエンの落下速度を落としながらジエンを魔力のヒモで固定していく

地面につくころには、ジエンはグルグル巻きにされ砂漠に横たわった

「…ハアアアア…。成功した〜！」

オレはバリーを鞆に収め、ジエンの目の前に降りる

「お〜い！ジエン！オレがわかるか〜？」

ジエンに聞こえるように叫んでいると…

「オオオオオ…」

ジエンが返事を返してくる

大分落ち着いてきたみたいだな…

オレは少し飛んでジエンの逞しい2本の牙の1本に降り、ジエンと目を合わせる

「ジエン、久しぶり！ごめんな、うるさくしちゃって！もう大丈夫だから今日は住み処に戻ってくれないか？また今度ゆっくり会いにくるからさ！」

「オオオオオ！」

ジエンの返事を聞いてオレはジエンから降りてミベルナ・マ・ミグロンを解除する

ジエンはゆっくりと方向転換して、少し進んでから砂の中へ潜っ

ていった

「…さてと。2人のところに行くか」

2人を探すと少し離れたところにいたので、花鳥風月を使って移動する

着いてみると、チビやデク、吼太が捕まえてた2人、悠二が戦ってたヤツ、と2人以外の侵入者が全員いた

さっきの間に連れてきたのか

「ジエンは何か上手くいったみたいだな」

「まあな。2人が手伝ってくれたから早く済んだよ、ありがとう。それと…」

オレはそこで区切り、悠二の方を向く

「さつきはすいません。ちょっと熱くなってつい怒鳴っちゃって…。よく考えたら年上…ですよね？」

「中学生だよ。でも呼び捨てでいい。僕は水無月 悠二、よろしく」

「じゃあオレも改めて、有沢 直樹だ。よろしく、悠二」

オレは悠二と握手を交わす

「…で、2人はこれからどうする？もしよければ今日の宿はすぐ

に用意するけど…」

「いや、僕は自分の世界で待ち合わせがあるから遠慮しとく。吼太は？」

「オレもコイツらの捕縛任務の途中だから帰るわ。悠二、ついでにオレが送っていくけどそれでいいか？」

「ああ」

「そっか。あつ、じゃあ2人もこれお土産にどうぞ」

オレは四次元ポケットから手のひらから少しはみ出るぐらいの箱を2つ出し、2人に1つずつ渡す

「おう、ありがとう…と？」

「…直樹、これは？」

「『動物変身ビスケット 効き目長持ちバージョン』だけど？」

「…何故これ？」

「面白そうだから (ゲッ)」

とりあえずサムズアップしとく

「…まあ、ありがとう」

「嫌な予感がするけどね」

2人はそれぞれしまうところっちを向く

「コール、パラレルモン」

吼太が自分の召喚獣、並行世界を渡る能力を持つデジモン、パラレルモンを呼び2人が帰る準備が整う

「…じゃあ」

「ああ」

「そうだな」

「…「またな!」」

パラレルモンが能力を発動し、2人と捕まっていたヤツらが消えていった

「…バリー、また会えると思うか?」

『会えますよ、きっと』

「そっか…。んじゃ、気を取り直して本来の目的に戻りますか!」

『はい!…あれ?マスター、ゴジロウさんはどうしたんでしょうか?吼太さんから話に出ませんでしたか?』

「そういえばそうだな。通信してみるか…繋いでくれ」

「その必要はないですよ、お館様」

声が出た方を向いてみるといつの間にかコジロウが来ていた

「コジロウ、吼太の手助けには入ったのか？」

「いえ、しようかと思っていたのですが…あの方には必要ないと判断し、何もしなかった次第です」

「そっか…コジロウから見て吼太はどう映った？」

「…不思議、としか言えません（お館様のご友人に“人としては妙な雰囲気”を感じたとは言えないな）ただわかるのは、私のような若輩者とは格の違うお方、ということでしょう」

「おいおい、テオとナナの特斯拉兄妹を1人で相手できるアイルーが若輩者だったらオレは何なんだよ？」

「フフッ、ご謙遜を」

「ハア、まあいつか。じゃあオレは行くな？また今度一緒に稽古しようぜ」

「はい、楽しみにしておきます」

「じゃあな！」

オレは花鳥風月で飛び、一路ポツケ大陸を目指す

そういえば、みんなは楽しんでるかな？

SIDE · 直樹
OUT

EX第六話 1日目 後編 【戦の巻 2】（後書き）

ベ「ようやく戦闘終了〜！」

直「まあ一応お疲れ。ところで何で土産が動物変身ビスケットなんだ？」

ベ「面白そうだから」

直「聞いたオレがバカだった…」

ベ「次回はなのはたちの1日目です。頑張つて書きますんでよろしくお願いします！」

ベ・直「」ではまた今度！」「」

EX第七話 1日目 後編 【楽の巻】（前書き）

注意！このページは前書きです！

「なあ、（ ）にはベルワンの本名が入ります」

「ん？おう、亀田^{かめだ}、どうした？」

7月の初旬、オレは大学の授業のない時間に大学の中庭で小説のプロットを書いていた

するとそこに、高校は別のところに行った中学の時から親友、亀田が声をかけてきた

「 、今“ドル”って安いよな？」

「 ……はい？」

「ドルだよドル！オレたちが中学の時は1ドル1000円越えてたのにさ、今は80円切ってるんだぞ！」

「そ、そうだな……」

「 ……チャンスだ」

「 ……？ 」

「…アメリカに行こう！」

「ハアアアツ！？」

いきなり何言い出すんだコイツは！？

「今から準備始めたら15、6日ぐらいには出発出来るだろ？」

「…いや、オレ英語できん」「よし、決定な！他のメンツにも参加、って言うてくるわ！んじゃ後で！」…おゝい…」

あつという間に走り去る亀田、呆然とするオレ…

「…ま、まあ…本当に行くわけ…ないよな？」

そして7月15日…オレたちは関西国際空港にいた…

…以上が7月ずっと更新できなかったわけです

結局本当に僕と亀田、その他合わせ男3人女3人でアメリカに七泊八日してきました

…エイゴコワイ…（泣）

けど、もっと怖かったのは…なでしこジャパンが勝った後の24時間でした…

まあ、振り返りはこの辺にして

では久しぶりに、EX第七話始まります！

SIDE：プレシア

ベースキャンプから出発した私たちは砂漠の中を歩いていた

けど、本当に広い砂漠…直樹の話だとまだまだ広いところがあるらしいのよね

「直樹、あれは何なんだ？」

シグナムの指指す方を見てみると、砂埃を上げて砂漠の砂をまるで海のように泳いでいる何かがいた

ときどき飛び跳ねてるけど…魚、かしら？

「ああ、アイツらはガレオスっていう魚竜種に属する竜だな、ああやって砂漠を群れで遊泳してるんだ。で…」

そっついながら直樹は指を口にくわえて…

ピュ〜イ

指笛を吹いた…上手いものね

するとガレオスの群れの先頭から大きめの砂埃がこっちに向かって進み、私たちの手前で砂から体を現した

「コイツが群れのリーダーでガレオスの成体でもあるドスガレオスだ。久しぶり、元気だったか？」

「グウウウウ……」

ドスガレオスと呼ばれたその竜は唸りながら頷くと頭を直樹にすり寄せる

「直樹、なつかれてるんだね」

「まあな、コイツとはコイツがガレオスのときからちよくちよく遊んでたからな」

ドスガレオスはしばらくじゃれていてと一鳴きしてまた砂漠の中に戻っていった

「さてと、次は……おっ、珍しいな」

直樹は少し離れた砂漠を見るとそっちを目指して歩き出した

私たちも追いかけて歩くと、直樹は砂漠にポツンとあった“あるもの”の前で止まった

「これは、骨？」

そこには頑丈そうな一本角を生やした竜の頭の骨があった

頭だけで私たちより大きいってことは、かなり大きい竜だったってことね

……あら？この骨、少しおかしい？

「直樹、これは竜が死んだ跡なの？胴体の骨が全く無いんだけど……」

「いいところに気がつきましたね、プレシアさん。確かにこれは竜の死骸じゃありません。これは『ガンガン！』ってフェイト！叩くのは止める！」

「ふえ？」

フェイトが叩くのを止めてこっちを振り向いてると骨は小刻みに震えだし、勢いよく動き出した

「きゃっ！？」

フェイトはいきなりすることに驚いて倒れそうになるけど、直樹が素早くフェイトを受け止める

ああいうことがさりげなく出来るからモテるのね……

何て思っていると、骨は地面から浮き上がって骨の下には赤い体が見える……これって……

「蟹……かしら？」

「はい、甲殻種のダイミョウザザミっていうヤツです。地球にもいるヤドカリっている蟹と同じでコイツは大きめの貝やこういう竜の頭骨を背負って生活するんです。普段はもう少し奥の砂漠で住んでるんですけど…」

…シンシン…

「ん?」「あら?」

直樹と話しているとダイミョウザザミが直樹の背中をつつく

振り向くとダイミョウザザミは自分のハサミを振って何かを伝えようとしている

「シグナム、何て言ってるかわかりますか?」

「いや、わからん。プレシアさん、貴女は?」

「私もわからないわね、というよりわかる人っているのかしら?」

「なるほどな」

「「「いた!?!」「」」

「みんな、今から今日のメインに紹介しようと思ったヤツのところにいきたいんだけど、いいか?」

「私はいいよ?」

「私も構わん」

「私も反対する理由がないわ」

「よし、じゃあまた少し移動するぞ」

それから15分ほど歩き、さっきまでとは別の砂漠まで来た

そこには…

「ガオオオオツ！」

「グウウウウ…」

巨大な体、ハンマーを思わせる尻尾、そしてダイミヨウザミが背負っていた頭骨の竜と違い、頭に2本の角を生やした竜が2頭いて、勝負…というより1頭がもう1頭を痛めつけてる、って言った方がいいのかしら？

「直樹、アイツらは…」

「…名前はディアブロス。この砂漠地方で強さ順だと上から数えた方がすぐに出てくるヤツだ。ただ、あそこにいるアイツらは少し問題があつてな」

「問題？何なの？」

「アイツらは雄雌のつがいないんだけど…雌の方が嫉妬深いんだ」

「…はい？」

竜が…嫉妬深い？

「雄の方が少しでも他の雌と一緒にいたらああやってボコボコにしちゃうんだ。だから間に入って止めてやらないといけないんだよ」

「…もしかしてさっきのダイミョウザザミは…」

「はい、この辺りが本当の生息域なんです。ただ、アイツらの喧嘩に巻き込まれるのがイヤでさっきのところまで逃げてきたそうです」

「なるほどね、じゃあさっさと止めないと」

「はい、ていうわけでちょっとオレが「その必要はないぞ、直樹」…はい？」

直樹と一緒に後ろを振り返ると、そこにはレヴァンティンを鞘から抜き素振りを始めているシグナムがいた

「ちよっ！？シグナム、何考えてんだ！？」

「ん？ アイツらは強いのだろうか？ そんなヤツと今から戦…もとい、止めるのは私にやらせてもらおう！」

「いやいや！今戦うって言おうとしたよな？戦うのはまだ先だから今は我慢「シグナム！」おっ、フェイト。お前から言ってるやれ、今はダメだって」

そう言いながら直樹がフェイトの方を向くと…

「シグナムだけズルいです！私も戦…じゃなくて、止めたいです！」

バルディツシユをもうサイズフォームまで展開させて準備万端のフェイトがいた

「何でだよ!?!」

直樹はさつきから口をあんどりと開けて驚きっぱなし…こういう直樹もいいわね

「「というわけで、いつてくる(きます)！」！」

シグナムとフェイトはそれぞれレヴァンティンとバルディツシユを構えるとディアブロス目掛けて走り出した

「…「こらあああつ!!!」」

直樹はそのあとから怒りながら追いかけていく

「…ハア…全く」

遠目から見てもかなり大きいのに…あれがバトルマニアっていうものかしら?

けど…

私は走っていくフェイトが振り返る度に見せる笑顔を眺める

あの子、もうあんなに笑えるのね…こんな日がまた来るなんて…
今のこの気持ちか、“幸せ”なんだと改めて思いながら私は3人
をゆっくり追いかけた…

S I D E : プレシア O U T

S I D E : ユーノ

「…ハア…ハア…ツハア、みんな、どこだろう？」

辺りを見回してもそびえ立つ木々が見えるだけで直樹、アルフ、
シヤマルさんの姿はどこにもなかった

「…どうしょ？」

樹海を歩き始めて少しした頃、いきなりボクたち…というより直
樹目掛けイノシシの群れが突進してきてボクたちは散り散りになっ
ちやっただ

「…迷ったときはその場を動かない方がいいらしいけど…」

これからどうしようか悩んでいたとき…

ガサガサ…

「ん？何だろ？」

上から何か動く音が聞こえて、ふと見上げてみると…空まで伸びてるかと思わせる樹の幹とその枝葉、それにこっち目掛け落ちてくる黒いカタマリだった…って!？

「ええっ!？」

ボクは咄嗟に横に大きく跳んで落ちてきたソレを何とか避ける…直樹と一緒にトレーニングしといて良かったーっ!

「…あれ？キミは確か…」

落ちてきたものをよく見てみると、それはモノではなく、黒い体毛と鋭い刃のような翼を持った竜…名前は…

「ナルガクルガ、だったよね？」

「ガウ」

ナルガクルガはボクを見ると小さく頷く

人の言葉が分かるんだ…かなり知能が高いんだな…

ナルガクルガはボクの方へ体を全部向けると体を屈めて地面に伏せ軽く背中を揺らす

「もしかして、乗れってことかな？」

「ガウ」

小さく一鳴きしたからその通りみたいだ…直樹の召喚竜だし、大丈夫なはず…

「…よいしょっと…、えっと…この後はどうすればああああっ！
!？」

ボクが跨がってナルガクルガの背中に手をついた瞬間、翼がある前足の筋肉が一瞬膨らみ、次の瞬間にはナルガクルガは上へと跳んでいた

たった一度の跳躍であの大きな樹々の上まで跳び、そこから翼を広げて滑空し始めた

ボクは落ちないように必死にナルガクルガにしがみついていた

「…い…」

しばらく飛んでいると聞いたことのある声が聞こえてきた

恐る恐る目を開けて、ナルガクルガが飛んで行ってる方向を見てみると…

「おーいつ！ここだぞーっ！」

少し開けた場所が見え、そこに声を出して手を振ってる直樹とその後ろにアルフとシャマルさんがいた

ナルガクルガはその声に反応してそこへゆっくりと着地する

「ナルガ、助かったよ。ユーノ、大丈夫だったか？」

「何とかね。ありがとう、ナルガクルガ」

「ガウウ！」

ナルガクルガは一度泣くとまた跳び上がって飛んでいった

「ごめんな、みんな。ファンゴ…ああ、あのイノシシのことなんだけど、アイツらのあの突進はまあ一種の愛情表現みたいなモノだな。まさかペースキャンピング近くまで来てたなんて…」

「まあそれだけ直樹のことが好きなんだろ？ いいじゃないか？」

「そうですね、私たち全員無事だったんだから万事オツケーです」

「ボクもそう思うよ、直樹」

「すまねえな……よし！ そんじゃ改めて出発するか！」

「……おーっ！」「」

ボクたちはまた樹海の中に入っていく

何に会えるかはわからないけど、一つだけ願うなら…もうファンゴの群れには会いたくないかな？

S I D E : ユーノ O U T

S I D E : ヴィータ

「…しっかし、随分と危なっかしいとこだな、ここは」

アタシは思わず思ったたことを口に出してしまっ

だっしょうがないだろ？

すぐ横を溶岩の川が流れてるんだぞ？

「この地形を参考にした場所があつたさ、そこもこんな感じに溶岩が流れてるんだ」

「へえ、なるほどな」

「ねえ直樹くん、まだ着かないの？」

「そっだよ、まだ誰にも会ってないよ！..」

なぬはとアリシアがブーブー文句を言う

全く、お子ちゃまだな

「…む、ヴィータちゃん、今私の名前間違えて言ったでしょ！」

「っ！？ んなワケねえだろ！」

「むぐ、でも「着いたぞー！」…まあ、いいや」

…アイツはエスパーか何かなのか！？

アタシは驚きながらも3人のあとに続いた

直樹に案内されて着いたのは岩場のだいたい半周ぐらいを溶岩が
囲んでるところだった

岩場には大小たくさん岩が転がってた

「直樹お兄ちゃん、ここには誰がいるの？」

「ああ、もちろん。そこにな」

そう言っつて直樹が指を指した方を見たけど…

「…直樹くん、何もいないけど？」

そこに見えるのは岩しかなかった

からかってんのか？

「確かにパツと見ただけじゃそうなるよな？けど、よく見ると…
おーいっ！バサルモス、出てきてくれ！」

直樹がそう言った瞬間、岩場の中央辺りにあった岩が縦に3つ並んだような岩がグラグラと動き出す

「もしかして…アレがそうなのか？」

「そうだ、あそこでモゾモゾ動いて…」

ドオオオンッ！

「今出てきたのが、岩竜 バサルモスだ」

「グオオオオオ…」

直樹の声に反応して出てきた竜は背中にいくつもの岩を背負って、見るからに固そうな体を持っていた

「バサルモスとはある竜の幼体に当たる竜なんだ。見た通り翼はあるけど少しの間宙に浮いてるぐらいしかできない」

へえ、あの大きさを幼体…じゃあ成体はどれぐらいだ？

「…やっぱり似てる…直樹くん、あのバサルモスが成長した竜って…ここにいるの？」

「ああ、そうだけど…そうか、なのは一度見たことあったな。もうすぐ来ると思うぞ」「ガオオオオオ！」ほら、来た」

大きな咆哮が聞こえ、そっちな方を向くと溶岩を体で掻き分けながらこっちに悠然と歩いてくる一頭の竜が見えた

その体はバサルモスの軽く二倍以上はあって、バサルモスより遙かに固そうな甲殻に覆われてた

「コイツがバサルモスの成体、鎧竜 グラビモスだ。全長の大きさはこの星にいる生き物の中でも大きい方に入る」

「すご〜いつ！大きいね〜」

アリシアは近づいてグラビモスを見上げてる

アタシも近づいてグラビモスの体に触ってみる

…この固さ、アタシとアイゼンでも簡単には碎けそうにねえな…

その時、視界の端で白いものが動くのが見えてアタシはふと見てみた

そしたら、なぬはがトテトテとグラビモスの前に移動してるのが見えた

アイツ、何してんだ？

「ん？どうかしたか、なのは？」

直樹も気づいたのか、なぬはに声をかける

けど、なぬはは応えずジツとグラビモスを見ていたかと思つと…

「グラビモス…いえ、お師匠様！どうか私にもう一度お師匠様の

砲撃を見せてください！」

…何か意味不明なことを言い出した

「…グウ？」

ほら、グラビモスも首傾げてんぞ…

「直樹くんお願い！お師匠様の砲撃を見せて！」

今度は直樹にも頼んでやがる…グラビモスの、砲撃？そんなのあののか？

「グラビモスの砲撃…ああ！あれは砲撃じゃないんだけど、まあいいか。グラビモス、頼めるか？」

「グオオオ！」

直樹が何かに納得してグラビモスに声をかけるとグラビモスは一鳴きして動き始める

「よし、じゃあめは…前方20メートル先のあの岩だ。タイミングはお前に任せる。みんな、少し離れるぞ」

直樹は指示を出してからアタシたちを誘導する

20メートル先の岩って…、もしかしてあれか？かなりでかいな…高さはだいたいグラビモスと同じくらいか？

すると、グラビモスは両脚を適度に開くと翼を広げ体を空を見上

げるように反らす

その間に、グラビモスの首筋がだんだん赤くなっていくのが見えた
そして…

「ガアアアアツ!!」

一気に頭を岩へ向けたかと思うと口から口から光線…いや、熱線
が放たれた

熱線は真っ直ぐ岩へ飛んでいき、着弾するとすぐに岩を貫通しな
がらドロドロに溶かした

「すごいっ!」

「さすがお師匠様!」

「確かにこりゃスゲー…」

まさかここまでの攻撃力だなんて…

「グラビモスはその体の堅牢さのせいで体の熱を上手く排熱でき
ないんだ。この火山地帯で住んでるから体温はほっといたら上がり
っぱなしになる。だから適度に自分で排熱する必要があつてな、あ
の熱線はその排熱を攻撃に転用した攻撃方法なんだ」

「案外賢いんだな」

…ここに住んでるヤツらはコイツみたいに強いヤツらばかりなの

かもな…

シグナムほどじゃねえけど…アタシも戦ってみたくなってきたな…

「さてと、そろそろ次の場所に…あれ？アリシアは？」

「ああ？」

「ふえ？あ、本当だ！アリシアちゃんがないよ！」

近くを見てもあの金髪は目に入らない

どこに行ったのか見回していると離れたところの洞窟からアリシアが走ってこっちに来た

「アリシア！単独行動は禁「直樹お兄ちゃん！」止…だ？どうしたアリシア？」

「よ…よよよ」

よ？ 何なんだ？

「よ、溶岩の中をデツカイ魚が泳いでた！」

「「………魚？」」

「アリシアちゃん、嘘はいけないよ」

「そうだ、溶岩の中を魚が泳ぐワケねえだろ？」

「で、でも向こうにいたもん！」

「そうか、先に会っちゃったか」

「「いるの（かよ）っ!?!」」

「ああ、次に会いに行くヤツだ。ヴォルガノスって行ってな…」

アタシたちは直樹の説明を聞きながらアリシアが出てきた洞窟へ入っていった

本当に、ここは何でもアリだな…

S I D E : ヴィータ O U T

S I D E : ザフィーラ

「ほ、ホンマにええんか!?!」

「ああ、リオレウスも乗り気みたいだし。いいよな?」

「ガアアア!」

直樹に声をかけられた“火竜 リオレウス”は一度吼えると体を

屈める

ここ、森丘を散策していると空をリオレウスが飛んでいるのを見つけた、直樹に「乗りたい！」と頼んだところ、今に至っている

「では主はやて、上げますよ?」

「うん、お願いなザフィーラ」

俺は主はやてを車椅子から抱え上げるとリオレウスの背中へ乗せるために運ぶ

今の俺は人型に戻っている

リオレウスの背中ではリオレウスが屈んでいてもその巨体ゆえにそれなりの高さがある

直樹が運んでもいいと思っていたが、念のために身長の高い俺が運ぶことになったからだ

俺が主はやてを直樹に教えられたスペースに座らせると直樹も主はやての後ろに乗り、リオレウスはゆっくりと立ち上がった

「はやて、一応リオレウスには安全飛行するように頼んでるけど、念のためにオレにもたれかかってくれないか?」

「え?えつと...こうか?」

「そうそう (ギョッ) (ギョッ)」

「な、直樹くんっ!？」

主はやては驚いて後ろを振り返る

まあ、いきなり腰に手を回されたら無理もない…

「嫌だったか？念のためにしとこうと思ったんだけど…」

「そ、そんなことないで!? 是非お願いしますう!／／／」

「…んじゃ失礼して、と。よし、リオレウスいいぞ」

直樹の声を聞き、リオレウスは翼を広げて飛び上がる体勢になる

「ザフィーラとリニスは悪いけどこの近くで散策しといてくれ！
20分ぐらいで戻ってくるから！」

「わかった、主はやてを頼んだぞ」

「いつてらっしやい、直樹くん、はやてちゃん」

「…いつてきます!」「」

リオレウスは翼を羽ばたかせるとすぐに空中へ飛び上がり、ゆっくりと飛んでいった

「さて、それじゃあ私たちはどうします?」

「直樹はああ言ったが、直樹無しではこの世界は少し危険だ。ここはこの場で待っているべきだろう」

「そうですね、それじゃ…あの木のそばにいきましょうか」

リニスが指指した方には少し大きめの木が一本生えていて待つて
いるにはよさそうな木陰が出来ていた

断る理由などなかったので、俺はリニスと共に移動し木陰に座った

「うーんっ！気持ちのいい風が吹きますね。自然も豊かですし、
本当にいいところですね」

「ああ、このような素晴らしい自然をゆっくりと見るのは…久しぶりだ」

「やっぱり、そんな暇はありませんでしたか？」

「そうだな…戦乱のベルカの時代を始めとした我らヴォルケンリ
ッターと闇の書の主を求める旅。今を除けば…戦わないときなどな
かった」

「……………」

「今でこそああして感情を出しているが、シグナムやヴィータ、
もちろんシャマルもだ…皆、無感情のまま過ごす日々だった」

「……………」

「我らは…表には出さないが、恐れている。この安らぎを知って
しまった今、またあの戦いだけの日々に戻ってしまうかもしれない
と…」

そこまで話したところで俺は気づく

…しまった、暗い話をし過ぎたか…

俺は俺の右側に座っていたリニスの方を向こうとした

「…大丈夫ですよ」

「…何？」

そのリニスの声に俺は改めてリニスの方を向く

「確かにあなたたちは長い間苦しんできた。だからこそ私たちに
とって何気ないことにも幸せを感じることが出来る。それを失うの
は怖いはずですよ」

そこで一度区切ってリニスは俺の方を見る

「でも、考えてみてください。ここには、あなたたちを必要とする
“仲間”がいます…あなたたちを必要とする“友”がいます。そ
して…あなたたちを必要とする、“優しい主”がいるじゃないです
か」

リニスは微笑みながら俺に語りかける

まるで、俺の不安を拭いさるかのように、ゆっくりと…

「だから、安心してください。あなたたちが恐れる結末にはなり
ません。そうなるうとしても、私たちがさせません！」

「ね？」と笑いかけながらリニスは言い切った

…そうか、俺は誰かに言っていて欲しかったんだ…

…大丈夫だ、と…

「…礼を言うぞ、リニス」

「！……フフツ、はい」

リニスは少し驚いたようだが、すぐにまた笑って返す

そのときはまだ気づいてなかった…

いつの間にか、主だけでなく…この笑顔も守りたいと思っていた
イヤ…

SIDE：ザフィーラ OUT

EX第七話 1日目 後編 【楽の巻】（後書き）

ベ「というわけで、皆様お久しぶりです！」

直「ていうか、1日目終わるのにずいぶん時間かかったな」

ベ「いや、あと1話あるぞ？」

直「長いわっ！」

ベ「とにかく！これからも頑張って更新していきたいと思っ
「！」

ベ・直「」ではまた今度！」

EX第八話 1日目の終わり（前書き）

何か実感ないんですが…今日でこの小説が一周年を迎えるみたい
です！

応援してくださった読者の皆さん、ありがとうございました！

今はちょっと忙しいので一周年記念とかは難しいかもしれませんが…何とか頑張ってみます！

では、EX第八話始まります！

EX第八話 1日目の終わり

SIDE：直樹

…ふう、とりあえずこのぐらいにしとくか

オレは手に持っていた工具を工具台に戻して、かけていた減光ゴーグルを外す

今はだいたい深夜の2時頃…

吼太、悠二の2人と別れた後オレはポツケ大陸に戻り、予定していた用事を済ませた

その後、夕方にみんなと合流

ホテルの食堂で夕食をとった後、各自温泉に入って自由時間となった

え？また時間が飛びすぎ？

…ノータッチで頼む…

ちなみに、このホテルの詳しい説明をしとくと…

1 F エントランス

2 F 食堂（一般的に高級レストランと言われるレストランと同レベルの内装、料理は格式ある豪華なものから一般的な家庭料理まで約1000種類ある。500種類の飲み物の自動販売機もあり）

3 F アミューズメント（ボーリング、カラオケ、ゲームセンター、映画館……などだいたい娯楽施設が揃ったフロア。ただ、このフロアの床面積はおかしい…東京ドームぐらいスッポリという具合に）

4 F 温泉スパ（風呂の種類が100ほどある大規模な温泉。フロアの中央には火山をあしらったモニュメントがある。洗濯機類の機械は全部ここ）

5 F 研究所（基本的にオレしか入れないフロア。この星の生態系の現状を各地方から定期的に送られてくるデータを纏めたり、機械弄りをする場所。）

6～10 F（各フロアに5部屋ずつ、計25部屋の客室。家具の配置は全部屋同じ。客室はそこまで広くはない）

…とまあこんな感じだ

もう時間が時間だしみんな寝てるだろうな

オレは風呂に入った後、研究所ですつと作業をしていた

やってたのは、今日異世界のヤツらから奪^もったファイズドライバ
ーとカイザドライバの改造兼研究だ

聞くところによると、転生者が使うライダーツールは普通のツールよりかなり強いらしい

へえ、そうなんだ〜 じゃあオレもやろう！

…というノリで弄ってたわけだ

さらに、2本のドライバーのエネルギーであるフォトンブラッドという原子力より危険度の高いエネルギー…これをどうにか別の戦闘方法で使えないか？とか考えてたらいつの間にかこんな時間だった

「そろそろ寝るか〜…バリー、この作業のデータのバックアップ取っとしてくれ」

『了解です』

オレは研究所のサーバーにデータを保存しながらバリーに頼み、つけてたモニターを全部消した

「さてと、部屋に戻るか…」

オレはもう一度研究所を見回した後、研究所を後にして1つ上の階にある自分の部屋、『601号室』に入っていた

S I D E : 直 樹 O U T

SIDE：なのは

「晩ごはんの後、直樹くんは「やりたいことがある」って言うのでここに行っちゃったの

残った私たちは温泉に入ったり、ホテルの施設で遊んだり、思い思い時間を過ごしたんだ

その後寝ることになったんだけど…出来れば直樹くんと一緒に寝たい！

そう思って私はパジャマに着替えて髪を縛ってるリボンを解いて準備完了！

ゆっくりとドアを開けて静かになった廊下に出ると…

「…なのは？」

「えっ？フェイトちゃん？」

同じようにパジャマに着替えて髪をおろしたフェイトちゃんが自分の部屋から出てきたところだった

「フ、フェイトちゃん、どうしたの？」

「な、なのは、こそどうしたの？」

「わ、私？私はちょっと…そう！廊下の空気が吸いたかったの！」

「き、奇遇だね！？私もそうなんだ！」

…違う、フェイトちゃんもきつと直樹くんの部屋に行こうとして
たんだ…

ううう、やっぱりライバルが多いな…

「じ、じゃあ私は部屋に戻るね！」

「そ、そう？じゃあ私も…」

「「お、おやすみ」」

私はフェイトちゃんと挨拶をして部屋の中に戻る

ううん、またすぐに出たらフェイトちゃんと会いそうなんだよね

ちょっと待ってみようかな？

私はベッドに腰かけるとボタンと倒れ込んだ

「今日はいっぱい楽しんだな。明日からも今日みたいに楽しい
かな？」

私は今日見たものを頭の中で思い出す

きつとこの旅行は楽しいことばかりだろうな、と思っていると
だんだんと瞼が重くなってるのに気がついた

…しょうがないか、今日は直樹くんと寝るのは我慢しよ…

私はベッドにちゃんと入るとゆっくりと瞼を閉じた

余談だけど、次の日の朝フェイトちゃんに聞いてみると、フェイトちゃんも結局自分の部屋で寝ちゃったらしいの

まあ、セーフってことかな？誰も直樹くんの部屋には行ってないはずだからね

S I D E : な の は O U T

S I D E : ヴ ィ ー タ

「…あゝ、眠い…」

アタシは今、眠さにふらつきながら食堂まで来てる

部屋で寝てると急に喉が乾いて何か飲みたいと思った

その時、直樹が晩飯のときに言った「いつでも無料で使える食

堂の自動販売機」を思い出したアタシはフラフラしながらここまで降りてきたってワケだ

アタシは自動販売機の群れ（？）の近くまで来ると、何かがあるかよく見てみた

見たことのない飲み物が多かったけど、その中でミネラルウォーターを見つけてボタンを押す

出てきたミネラルウォーターのペットボトルの蓋を開けるとすぐに飲む

乾いた喉に水が染み渡っていくのがわかり、少し気持ちよかった

「……さてと、戻るか……」

まだかなり眠かったからアタシはミネラルウォーターを飲み干してペットボトルを捨てるとまたエレベーターへ向かった

「……えつと……」

エレベーターに入るとアタシはぼやけた目で何とかボタンを見て『9』を押す

エレベーターが上に上がって『9』階に着くとアタシはまたフラフラと歩き自分の部屋、『901号室』に入ってベッドにモゾモゾ入っていった

この時、ちゃんと目を覚ましておけばよかったって後からかなり後悔した

そしたら、アタシが押したボタンが『9』じゃなくて『6』だったことも…

アタシが入ったベッドに“もう誰かいた”ことも気づけたからな…

SIDE: ヴィータ OUT

SIDE: 直樹

「……………うん……………」

目が覚めてオレはゆっくりと伸びをしながら体を起こしていく

ベッドの右側の棚にある時計を頭だけ回して見る

「…6時か…少し寝すぎだな…」

昨日みんなに言った朝食の集合時間は7時半

今日の朝の特訓は短めにしないとなー、とか考えていると時間も
経ちだんだん頭も冴えてくる

…そして、“違和感”に気づく

「…動けない？」

…というよりは、何か動くのを邪魔してる？

オレは頭を起こして自分の体を見ってみる

すると、ベッドの中に明らかにおかしな“膨らみ”があった

「ハア、またなのはか？おーい、なのは。悪いんだけどい…て
…」

オレは喋りながら布団を捲った、が…そこにいたのはなのはじゃ
なかった

「…んう…」

オレの腰に手を回してぐっすり寝ていたのは、ヴィータだった

何で？とか、どうして？とかいろいろ浮かんだけど、とりあえず
は…

「おーい、ヴィータ〜。朝だぞ〜」

起こすことにした

きつと何かワケがあるんだろう

「…ん〜…あと5分…」

「ベタな寝言はいいから。ほら起きろ〜!」

ヴィータの肩に手を当ててユサユサ揺らす

「…ん…わかったよ〜、おはよう〜…はや…て?」

ヴィータは目を開けてこっちをボンヤリ見ていたけど、だんだん焦点が合っていくのがわかった

「……………。っ!?!なっ…なっ…なっ…//」

「えっと…おはようヴィータ」

「%#&* 〒 !?」

その後何があったかは言わないでおく

一つ言えるとしたら、朝食のときオレは頭にマンガのような大きなタンコブを作っていて、ヴィータはしばらく顔を真っ赤にしていた…それだけ怒ってたんだな…

SIDE : 直樹 OUT

EX第九話 2日目 海でやることと言えば？（前書き）

よ、ようやく書き終えた〜（泣）

意味不明なぐらい忙しい最近の大学生活…

授業受け、サークル出て、文化祭の準備して、バイトに出て…

しんどいよ…！

けど、あと一週間と少しで文化祭

それが終われば時間は出来るんです！

頑張つて更新していきます！

あと、僕がお気に入り登録させて頂いている作品にここ一ヶ月感想を全く書いてませんでした！

本当にすいません！

短いですが、EX第九話始まります！

EX第九話 2日目 海でやることと言えば？

SIDE：直樹

「ほい、着いたぞーっ！」

目的地に着き、オレの声を聞いてみんなは荷車から降りてきた

「うわっ！とつても綺麗〜！」

アリシアが声を上げると、それぞれ感嘆の声を出す

ここは拠点の村から南にある『密林』地方を抜けたところにある
海岸だ

この星どは人間による環境破壊なんてものはない訳で、当然の如く海は透き通っていてかなり綺麗だった

「んじゃさっさと着替えるか。女用のテントは右側、男用のテントは左側な」

オレの案内を聞いてからみんなはテントに入っていく

ちなみに言っておくと、ここはあくまでも竜を始めとした生き物たちの生息圏だ

なので、テントつてのも昨日のうちに建てておいた簡易式のテントだ（まあ、普通の一軒家ぐらいの広さはあるテントだけど…）

男のオレ、ユーノ、ザフィーラはすぐに着替え終わって外に出てきた、が…

「…遅いな」

「まあ、女の方は着替えるのに時間がかかるって聞くしさ」

「その内出てくるだろう…む？噂をすれば、というやつか」

ザフィーラの声を聞いてテントの方を向くと残りのみんなが出てきていた

一人ずつの水着の特徴や感想を言いたいところだけど…「作者の知識不足」っていう縛りがあるから読者の方のご想像にお任せする！

・
・
・

「…という訳で、みんな似合ってるよ」

「…なあ、はやて。何か素直に喜べねえんだけど…」

「気にしちゃあかんでヴィータ。気にしたら負けや」

ちなみにはやては車椅子が砂浜に入れないのでシグナムに抱き抱

えられている

「さてと、それじゃ私はシートとパラソルの準備をしてくるわね」

「あつ、プレシア！その量を一人は無理ですよ。私も行きます」

「じゃあ私も。シグナム、はやてちゃんも連れていくわ」

「そうだな、頼む」

そうして、休憩場を作るためにプレシアさん、リニス、シャマル、そしてはやてが移動した

「残ったのは…九人か…」

「何しよっか？やっぱりまず泳ぐ？」

「何言ってるの、なのは？」

「まずやると言えば決まってるでしょ！」

「ふえ？…何だろ？」

フェイトとアリシアがなのはに言う…ていうか二人とも、フッフッって笑うと悪役っぽいぞ？

「それは、SAND ART!!」

「はい？」

オレ、なのは、ユーノ、ヴィータは思わず声を出してしまう

SAND ART? … ああ、砂で何かを作るアレか…ん?

アルフのリアクションが小さいな…

「アルフ、もしかしてフェイトたちがこれを言い出すってわかってたのか？」

「まあね、旅行の相談をした夜だったかな？ テレビでその選手権の特番がやっててさ。そしたらフェイトたち、「これだ！」って叫んでたからね。予想はついてたよ」

なるほどな… 確かにやってた気が「それじゃチームを発表します！」話が凄い進んでる!?

「…じゃあ、お題は『最近テレビで見たもの』。審査員は直樹。一番のチームは直樹から何かプレゼントだよ！」

「えっ、オレ？ まあいいけど」

オレが入ると勝負にならないらしいのでオレは審査員ってことになった… まあ奇数だったし丁度いいか

「それじゃみんな、準備はいいかな？」

「……」
「……」
「……」
「……」

みんなすごいやる気だな…

「それじゃ、スタート!」

アリシアの掛け声にみんなはそれぞれ決められたコートに入る

ちなみに、砂はこの辺りでかき集めると時間がかかるので、呼んだものを四次元空間を通して取り寄せる「取り寄せバック」で砂漠から出したものを使う

チームはそれぞれ…

なのは、ユーノチーム

フェイト、シグナムチーム

ヴィータ、ザフィーラチーム

アリシア、アルフチームの4チームだ

「じゃあボクが水を汲んでくるけど、本当にアレって出来るの?」

「心配ないよユーノくん!私にドンと任せて!」

「さて、私たちはどうするフェイト?」

「目立たせないと多分勝ちはありません。ですから…」

「…確かに、出来れば勝ちは掴めるかもしれんが…出来るのか？」

「当然！実はこうというのが得意だって見せてやるよ！」

「鍵はこないだの金曜　ードショーだよ！」

「…いやいや！無理だろ！？バランス取れないって！」

みんな張り切ってるな…

暇になりそうだし、オレもプレシアさんたちのもとに行くとか

（20分後）

「出来た！」「出来た！」

なのはたちの声が聞こえてオレはプレシアさん、リニス、はやて、

シヤマルとみんなのところに行く

4つの作品はそれぞれ幕に囲われていて今は見れない

「さて、それじゃ発表といきますか。あと、判定はせつかくなんでプレシアさん、リニス、はやて、シヤマルも加えた5人でやるぞ。んじゃ、まずなのは、ユーノチームから」

「オツケー、ユーノくん！」

「よいしょっと！」

ユーノが幕を下ろすとそこには…

まず1メートルほどの高さの人型が見えた

鳥を模したような頭、右腕と左腕についた3本の爪、特徴的な形の脚…

…うん、色がついてたら赤、黄、緑かな

「…なのは、タイトルは？」

「800年前の欲望の王様の鎧、だよ！レイジングハート、お願いー！」

レイジングハート？

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！』

おお、見事な変身音…じゃなくて！

「ちょっと待て！今のは何だ！」

『ネットからダウンロードしました』

「…そうか…。えっと、次フェイト、シグナムチーム」

「ふっ！」

シグナムが勢いよく幕を取る

見えてきたのは機械的な人型

手に剣を持っていたり、両肩に特徴的な動力源があったり、背中に
これまた特徴的な戦闘機をつけてたり…

…粒子は見えないな…

「…タイトルは？」

「ダ ルオー イザーだよ！」

フェイトが若干ドヤ顔で言う

言い換える気はないのか！？

『俺たちは…変わるんだっ！！』

見事な宮野ボイス…バルディッシュ、お前もか！

「…次、ヴィータ、ザファイラチーム」

「おう、ザファイラ！」

「わかった」

ヴィータに言われてザファイラが幕を取り払う

そこには…やっぱり人型で、頭はロケットのような形で体はまるで宇宙服、腰には特徴的なベルトがある

「タイトルは？」

「ニューヒーローだ！」

…なるほどな…、だけど、アイゼンはアームドデバイス、ザファイラはデバイスはない

今回は音声は無『宇宙キターー！！』…何でだ？

「何してんだ？バリー」

『いえ、やらないといけない気がする…。それにこうでもしないと出番が…』

「…よし、次だ。アリシア、アルフチーム」

「はいよー」

アルフが幕を取る

そこには…やっぱり人型、頭には角があり、口は大きく開きまさに吠えてるような顔、体中に拘束具がついているそれは…

「…タイトル」

「汎用人型決戦兵器だよ」

…デスヨネー

「アルフ！」

「ウウオオオオオオンッ！！」

いつの間にか狼モードになっていたアルフがエアの真似で吠える…って、結構似てる！？

「へへッ！完璧だね」

「…ケホッ…久しぶりに吠えたから喉痛いよ…」

「えつと…全作品が出たところで、一言言わせてくれ…クオリティ高っ！？」

何でどれもこれもフィギュアです、って言ってもおかしくない出来映えなんだ！？

砂だよな、これ？

「とりあえず、結果を発表しましょうか」

プレシアさん、ツッコミはなしですか…

「私たち五人がチーム名を書いたプラカードを上げて、一番票数の多いチームが勝利よ。家族だから、とかの理由で投票は無しだから。…いいかしら？それじゃ…それじゃ、せーの！」

プレシアさん ヴィータ、ザファイラチーム

「パーツのスイッチは全部で40個あるらしいわ。覚えるのが大変そうね」

プレシアさん、それは作品の感想じゃないよ？

リニスなのは、ユーノチーム

「個人的にはシャウタが好きですよ」

リニス、それは作者の感想だ

はやて アリシア、アルフチーム

「一年後が楽しみやな」

…ああ、『Q』か…そりゃ楽しみだけどさ

シャマル フェイト、シグナムチーム

「こないだ劇場版のDVDを見ましたから」

…全員理由がメタだ…（泣）

直樹 ????

「あら？直樹、あなたまだ選んでないの？」

「あつ、はい。迷っちゃいました…」

…正直ここまでハイレベルの闘いになるとは思ってたからな…決められないな

「オレの中では全部同点一位だから…しょうがない。この四枚のプラカードを上に入れて、一番早く落ちてきたカードのチームに投票する。それでいいか？」

見回すと参加者全員が頷く

「それじゃ…セーのっ！」

オレは四枚を縦回転で投げ上げる

ある程度上がったところで横になってスピードを落とす中…なぜか縦回転のまま落ちてくるカードが一枚

そのカードはそのままオレの前の砂浜に突き刺さった

それから残りの三枚が落ちてから全部拾い上げ、一番のプラカードを見る

「よし、決まりだな。オレが投票するのは……なのは、ユーノチームだ！」

「…やったあああつ！！！」

「そ、そんな…」

「くそ、ドリルをつけとくべきだった！」

「あゝあ、まあしょうがないか」

なのはたちに優勝が決まったあとはみんなで泳いだり、ビーチバレーをしたりとそこそこ楽しめた

明日は…いよいよ“あの日”か…無事に済めばいいけど…

SIDE：直樹 OUT

EX第十話 3日目 立ち上がり、狩人よ 前編（前書き）

今回は前編と中編を同時に投稿します！

EX第十話 3日目 立ち上がり、狩人よ 前編

SIDE：なのは

今日は旅行三日目！

今は朝ごはんをみんなで食べてるところなの

もう何回も食べてるけど…この料理っておいしいんだよね

「さてと…みんな、少し聞いてくれるか？」

朝ごはんも終わりがけの頃、直樹くんが椅子から立って話し始めた

「今日の予定なんだけど、今日はシグナムの要望を叶えるつもりなんだ」

「な、何だと！？ではついにあの竜たちと戦えるのか！」

シグナムさんが興奮しながら立ち上がる

「シグナム、直樹くんがまだ話してる途中やねんからちよう静かにしとこな？」

「す、すみません、主はやて」

シグナムさんははやてちゃんに言われて椅子に座り直す

「で、戦う相手なんだけど…このメンバーと戦って勝負になって、尚且つやる気のあるヤツを探したら都合がいいのが二頭だけだったんだ。だから今回の戦いに参加できるのは最大で四人だ。シグナムは決まりとして、あと行きたいヤツはいるか？」

直樹くんがそう聞いて、私はキョロキョロみんなを見回している
と…

「私、行きたいな」

フェイトちゃんがゆっくりと手を挙げた

「フェイト決定、っと。あとはどうする？このまま二人でもいいし、何ならシグナムとフェイトが選んでもいいぞ」

「…それでは（それじゃあ）」「」

そう言うとシグナムさんはヴィータちゃんの方を、フェイトちゃんは私の方を見てきた

…もしかして…？

「ヴィータ、行くぞ！」

「なのは、行くぞよ！」

やっぱり…まあ、興味はあったし…いいかな？

「うん、私はいいよ」

「なのも決定。ヴィータはどうする？」

「…アタシも行く。ここのヤツらがどれくらい強いのか知りたかったからな」

「よし、これで四人決定だな。四人にはこのあと説明しないといけないことがあるからここに残つといてくれ。あとのみんなは解散して自由に過ごしてくれていいぞ」

直樹くんのその言葉のあと、私たちは朝ごはんを終わらせて私たち四人以外はお昼まで自由に過ごすことになったの…

・
・
・

「さてと、今からいろいろ説明しておかないとマズイことを順を追って説明していくぞ。疑問に思ったらすぐに質問してもらっていいからな」

私たちは食堂の長テーブルの角に四人固まって座ってて、直樹くんは私たちの前に立って話している

「まず今日のスケジュールについてだ」

そう言つと直樹くんは大きな空中モニターを出す

「まず今の説明が終わつたあと午前中は自由だ。そのあと昼ごはん

んを食べてなのはたちには…ここに行ってもらおう」

直樹くんがモニターを指差すとモニターに大きな雪山が映る

「これはもしや…この村から小さく見えるあの山か？」

「シグナム正解だ。シグナムの言った通りの山が戦いの舞台になる。環境適応については向こうで駐在してるアイルーに詳しく聞いてくれ。次に…」

モニターの映像が変わって次に映ったのは…時計だった

「昼ごはんを食べるのは正午。そこから準備の時間も入れて、ここを出発するのは予定では午後1時にしてる。向こうに到着はそれから約一時間後。ここまでいいか？」

私たちは直樹くんの質問に頷く

「到着してから開始のタイミングはなのはたちに任せる。ただ、タイムリミットを設けさせてもらう。リミットは日没、太陽が地平線に完全に沈むまでにする」

「何で日が暮れるまでに終わるんだよ。夜もやりゃいいだろ」

「一つの理由は向こうに行けばわかる。もう一つの理由は、単純に危ないからだ。雪山では一部の場所以外は夜になると真っ暗になる、下手したら遭難なんてこともあり得るからな」

「なるほど…」

「じゃあ次だ。今回の戦いは生き物との戦いだ。明確な勝敗が決めにくいし、最悪召喚獣が死んだりするのは困る」

「私たちは、死んだりしないよね？」

フェイトちゃんがちょっと不安そうに聞く

「それは大丈夫だ。ちゃんと加減ができる賢いやつらが相手だからな。で、こつち側の勝利条件だけ…」

そう言って直樹くんが手を出したと思ったら、手のひらから魔力でできたスフィアが出てきた

「オレが組んだこのスフィアを雪山にいる相手全員の頭の上に浮かばせてるんだ。今は青色だけど、ソイツがダメージをどんどん受けていくと…」

青色だったスフィアは黄色に変わって、最後に赤色に変わった

「こんな感じで相手の体力の目安になってるんだ。勝利条件はこのスフィアを赤色にすることだ」

「…要するに、赤くなるまで攻撃すればいいんだね？」

「そういうことだ、なのは。で、最後に一つ」

そう言って直樹くんはモニターを消すとこつちに来たの

「なのは、フェイト。レイジングハートとバルディッシュを貸してくれ」

「？ 何かするの？」

「雪山にいる召喚獣に関するデータファイルがあるんだけどな、インテリジェントデバイスに読み込ませた方が効率がいいやつでさ。出発までにはインストールしとくから」

「うん、じゃあお願いね。直樹くん」

私とフェイトちゃんはレイジングハートとバルディッシュを直樹くんに渡す

「んじゃ、説明はこのぐらいで終わりだ。あとは…そうだな。四人で回つてると時間が足りないと思うからな、ペアを決めといた方がいいと思うぞ。けど、レイジングハートとバルディッシュにデータを入れるからなのはとフェイトは別れて組めよ。じゃあ、解散！」

そう言っつて直樹くんは食堂から出ていったの

…えっと…どうしょ？

シグナムさんはもうフェイトちゃんと組む気みたいだし…

さっきからヴィータちゃんが睨んでるよ（泣）

SIDE:なのは OUT

S I D E : 直樹

「…よし、データ送信完了！ レイジングハート、バルディッシュ、
ユ、どうだ？」

『こちらでデータ受信完了です』

『内容確認…正常に作動します』

「よしよしそれじゃ……そうだ！ レイジングハート、バルディッシュ。お前たちの容量ってまだ余裕あるか？」

『あります』

『こちらでも同じく』

「そうか！ それじゃ悪いんだけどさ、今から送るデータを読み込んでいてくれないか？」

『何のデータですか？』

「今は詳しくは言えないけど、お前たちに“ある機能”を作るために必要なデータだ。それに、これは必ずなのはとフェイトのためになる」

『なら、お願いします。私はマスターのためにも強くなりたいで

す
『

『私もサーのためになるのなら』

「ありがとうな。よし、じゃあ始めるか!」

・
・
・

あれからレイジングハートとバルディッシュにデータを送って二機はスリープモードに入っている

オレはというと…

「…やっぱりモンハン風にしてくか」

今回の戦いの登録データを作っていた

「…こんな感じか?」

PLAYER 1 SIGNUM

タイプ：剣士

武器：炎の魔剣 レヴァンティン

PLAYER 2 FATE

タイプ：剣士

武器：閃光の戦斧 バルディッシュ

PLAYER 3 NANOHA

タイプ：ガンナー

武器：魔導師の杖 レイジングハート

PLAYER 4 VITA

タイプ：剣士

武器：鉄の伯爵 グラーファイゼン

「よしオツケー！あとは終わったあとにしか出来ないから保存、
っつと」

『マスター、そろそろ昼ごはんの時間ですよ？』

バリーに呼び掛けられて、オレは手首から外してたバリーを取っ
てまた着ける

「了〱解〱：あつ、バリー。ここのシステムにアクセスして映画館の準備しといてくれないか？」

『そう言われると思ってさっきやっておきました。ちなみに、カメラも発進済みです』

「ハハツ、さすがにすごいデバイスだよ、お前は。ありがとうな」

『マスターの役に立つことが幸せですから。さあ、早く行かないと遅れますよ？』

「そうだった！」

オレはレイジングハートとバルディッシュを手を持って研究所から食堂へ降りていった…

S I D E : 直 樹 O U T

EX第十一話 3日目 立ち上がり、狩人よ 中編(前書き)

今回は前編と中編を同時に投稿します！

EX第十一話 3日目 立ち上がり、狩人よ 中編

SIDE：フェイト

『それじゃ、今から日暮れまで頑張れ。お前たちならきつと勝てる』

「当然だ」

「当たり前だ！」

「が、頑張るよ」

「絶対に勝つの！」

ここは戦いの舞台になる雪山、その麓にあるベースキャンプのテントの中だ

あれからお昼ごはんを食べて移動してきた、今は直樹との通信で最後の確認をしているところ

直樹はホテルに残って母さんたちと中継で私たちの戦いを見ているらしいんだ…

これは、絶対に負けられないね

『じゃあ通信を終わるぞ？ペスター、あとは頼んだ』

「了解ですニャー！」

直樹との通信モニターが消えて、ベースキャンプの駐在アイル
のペスターが私たちの方を向く

ちなみに、私たちはテントの中でテーブルの周りで椅子に腰かけ
ている

「では、急がれると思いますのでこちらからの説明は簡略化して
お伝えしますニャ。まず、あなた方には…」

そう言いながらペスターはテーブルの上にあった木の箱から四本
のピンを出して私たちの前に一本ずつ置く

「このホットドリンクを飲んで頂きますニャ。ご主人様からあな
た方はもうクーラードリンクは飲んだことがあると聞いてますニャ。
ホットドリンクはクーラードリンクとは逆で、体を温めて寒さに強
くなる事が出来るものになりますニャ」

そっか、そのままだと寒そうだもんね

「効果は今飲むとだいたい日没ぐらいまでは持ちますニャ。これ
が今回のタイムリミットの理由でもありますニャー！」

「なるほどな…、もう注意すべきことはないか？」

「これで最後ですニャ。では皆さん、ドリンクを飲んで出発して

「くださいニヤ！」

「それでは……」

「何かやけに赤いな……」

「飲んででも大丈夫だよな？」

「早く飲もうよ！」

「私たちはビンのフタを外して一気に飲み干す……あっ、結構おいしい……あれ？」

「あっ、一つ言い忘れてましたニヤ。そのホットドリンクは効果の持続時間を延ばすための特別配合になってまして、普通のホットドリンクより少し……」

「」「」「辛っ！」「」「」

ひ、舌^{ひは}がヒリヒリふる〜（泣）

SIDE：フェイト OUT

SIDE：はやて

「うわーっ！広いな〜！」

シグナムたちが出発して少ししてから、残ってた私らは直樹くんと呼ばれて三階のアミューズメントフロア、その中の映画館に集まっていた

予想はしてたけど、この映画館がまた広い広い！

俳優さんが舞台挨拶するような大きい映画館よりまだ一回り大きいぐらいや

『おーい、みんな揃ってるか？』

入り口で止まってる、スクリーンの近くのドアから直樹くんが入ってきた

スピーカーから声が聞こえてきたってことはあの手持っているのはたぶんマイクやな

『みんなスクリーンの見えやすいところに好きに座ってくれ。もうすぐ始まるぞ』

「始まるって、映画でも見るのかい？」

『いやいや、違うぞアルフ。今から見るのはなのはたちの戦いの生中継だ』

「生中継って、カメラはあるんですか？」

『もちろんだシヤマル。全自動の中継カメラ50台がもう起動済みだ。あとはこのスクリーンに映すだけだ。そろそろなのはたちが出発するみたいだから早く席に座ってくれ』

私たちは直樹くんに言われて、スクリーンが見やすい席に思い思い座った

直樹くんはマイクをしまったあと私たちの近くに座った

「さてと、それじゃあ映すぞー」

直樹くんがそう言って手に持ってたリモコンのスイッチを押すと照明が落ちてスクリーンが明るくなり始めた

シグナム、ヴィータ…それになのはちゃんとフェイトちゃん…頑張ってや

SIDE:はやて OUT

SIDE:ヴィータ

ベースキャンプから出発して山道を登って、最初の二股に別れる道でアタシたちは決めてた二組に別れた

直樹の話だと対象の二頭は合流したりしないらしい…

なら最初から別れておこう、ってのが戦闘マニアなおっぱい魔神の提案だ

それ自体はいいんだ、うん…けどよ…

…何でアタシは…

「ヴィータちゃん、どうしたの？先行くよ？」

コイツとペアなんだよ！

「うるせえ！先に行くんじゃないやねえよ！行くぞ！」

「あつ、ちよつとヴィータちゃん！待ってよ！」

なの…なぬはがごちゃごちゃ言ってるのを無視してアタシは早歩きで進む

…ったく、何であんなにアタシに構うんだよ…

アタシなんかと仲良くなつて…何がいいんだよ

そのまま道なりに進んでいくと、かなり広く開けてるところに出た

周りはゴツゴツして雪を被った岩肌や下に続く崖で囲まれてて、今アタシたちが来た道とここを通り抜けた反対側に見える似たような道ぐらいした通れるところは見当たらなかった

「…とつとと抜けるぞ」

「う、うん…」

アタシたちは周りを警戒しながら進んでいく

そして、半分…つまり、広場の中央辺りまで来た時…

『マスター、大型の魔力反応を感知。こちらに向かって来ます』

なの…なぬはのデバイスの警告を聞いてアタシとなぬははデバイスを構える

その時…

「オオオオオオツ!!」

ヒトではあり得ない叫び声が上がら聞こえてアタシは咄嗟に上を向く

そこに何かいたかと思うと、ソイツは跳び上がってアタシの4、5メートル前目掛けて落ちてきた

一瞬地面から舞った雪に顔をしかめながらアタシは落ちてきたヤツを確認する

大きすぎるからか口からはでっかい牙が二本飛び出して生えてて、オレンジ色の鬃が二本、雪のような真っ白い毛皮の…サルだった

「サルかよ!?!」

「サル…かな？レイジングハート、何かわかる？」

『…データ照合完了。あの召喚獣の名前は“ドドブランゴ”。雪山での実力は上位に位置し、“雪獅子”の異名を持っているそうです。雄叫びで自身の子分である“ブランゴ”の群れを呼ぶそうなので注意が必要かと』

「なるほど…ヴィータちゃん、聞こえてた？」

「…おう」

アタシは振り向かずに応える

今の声でわかったけど、な…なぬははアタシのすぐ後ろまで来てるみたいだ…

アタシたちとドドブランゴはお互いに動かずに構えたままだったけど、その状態はすぐに破られた

「ガアアアツ！！」

ドドブランゴは一度吠えるとアタシたち目掛けてまっすぐ駆けてきた

「ヴィータちゃんっ！！」

「わかってるっ！！」

アタシは右に、な、なぬはは左に跳んで突進を避ける

「レイジングハート！シューター！」

『デイベインシューター』

なぬはに言われてアイツのデバイスが誘導弾を四発生成する

「シュートッ！」

誘導弾はこつちを振り向こうとしてるドドブランゴの背中へ勢いよく飛んでいく

あれなら当たるな…そう思ったた…

ドドブランゴは頭だけ振り返って誘導弾を少し見たと思うと、誘導弾に背を向けたまま上に跳び上がってそれを避けた

「こつ！？」

ドドブランゴはそのまま横の崖に一度脚をついて、そこから勢いをつけてこつちに飛びかかってきた

狙いは…な、なぬはか！

あの速さじゃ避けるヒマはねえか！

ドドブランゴは近づきながら筋肉を膨らました太いを腕でなぬはに殴りかかる

「こつ！レイジングハート！」

『プロテクション』

なぬはが構えたデバイスから防御魔法が展開されて、同時にドドブランゴのパンチを受け止める

けど、パンチの威力はかなりのものみたいでなぬはは防御魔法ごと後ろに少し押される

「うっ…行っけええっ！」

なぬはが声を出すとドドブランゴの背中にさっきの誘導弾が命中する

あれだけのパンチを受け止めながらまだ誘導弾をコントロール出来たのか！？

なかなかやるじゃねえか

ドドブランゴは後ろからの攻撃に怯んでなぬはへの攻撃を止めた

なんにしても…

「アイゼン！」

『エクスプロージョン ラケーテンフォーム』

今がチャンスだ！

「ラケーテン…ハンマアアッ！！」

勢いをつけて突っ込んだアタシの攻撃は狙い通りドドブランゴに
当たるはずだった…けど…

ガシッ！

「なっ！？」 「ふえ！？」

なぬはも決まったと思ってたのか今の状態にかなり驚いてるみた
いだ

まさか…ラケーテンハンマーを片腕で受け止めるだ！？

「ガアアアッ！」

「うわああっ！？」

アタシはそのままアイゼンごと上に投げ上げられた

くそっ、空さえ飛べたらどっつてことねえのに…

とりあえず体勢を直して上手く着地し「ヴィータちゃん！危ない
っ！」「へっ？

なぬはの声が聞こえて下を向いたときにアタシに見えたのは、ア
タシの体より大きい雪玉がすぐそばまで迫っているとこだった…

S I D E : ヴィータ O U T

S I D E : フェイト

「ハアアアツ！」

私とシグナムは前にいる竜へ同時に斬り込む

けど、バルディッシュの魔力刃とレヴァンティンが当たる直前に
竜はバックステップで後ろに下がって避ける

しかも避けるだけじゃなくて、少し下がってからその勢いを殺さ
ずに片方の前脚を軸にして尻尾を回して振ってきた

「なっ!?!」「くっ!?!」

シグナムは何とか避けられたけど、私はマントに尻尾が少し当た
って破られた

私たちはそのまま下がって竜と距離を取った

「…強いな、相手にとって不足などあるはずがない」

「前に見たときはもう少し速かったと思います。たぶんあれでも
まだ本気じゃないです…」

…そう、今戦ってる竜を私は見たことがある

時の庭園でプロキオンの機巧人形相手に無双してた竜の内の一頭

「ギヤアアアアッ!!」

轟竜、ティガレックス…

「どうしますか?」

戦い始めてもうだいぶ時間は経ってる

太陽も結構傾いてきてる

「…フム、私に少し思う節がある。フェイト、頼まれてくれるか?」

「は、はい!何をすれば…」

「それはな……」

シグナムの策は上手くいけば私たちが十分勝てる作戦だった…けど…

「………というものだ。出来るか?」

「出来る出来ないで言えば、出来ます。けど、あまり得意分野ではないですよ?」

「構わない。もし無理ならまた策を練ればいい…来るぞ！」

「っ！」

シグナムの声を聞いてティガレックスに意識を戻すと…

「ギヤアアアアッ！！」

ティガレックスは一度大きく吠えると私たち目掛けてかなりの速さで突進してきた

「いくぞ、フェイト！」

「はい、シグナム！」

S I D E : フ ェ イ ト O U T

S I D E : ヴ ィ ー タ

…ん？…アタシ、どうなったんだ？

…確か、ドドブランゴに投げられたあと……雪玉を食らって…っ！
？ドドブランゴは…？

「っ！？ イテテ…」

ちよつと頭打ったみてえだな…それより、ドドブ「シユウウトツ
！！」今の声…っ！あれは！

アタシが目にしたもの、それは…

「レイジングハート！もう一回バインド！」

たった一人でドドブランゴを相手してるアイツの姿だった

あんなに離れたところで戦って…まさか、気絶してたアタシから
遠ざけるため？

『レストリクトロック』

その瞬間、ドドブランゴの体、手足にいくつもの桜色のバインド
がかかる

「ガアアツ！？ グウウウ…」

「デイバインバスター！チャージ短縮で！」

『オーライ。シユーテイングモード』

アイツのデバイスが変形してすぐに魔力が収束する…砲撃か！

『デイバイン』

「バスターツ…！」

桜色の砲撃はまっすぐドドブランゴに命中してドドブランゴは怯んで後ろに下がった

ピコン

その時、変な音が響いたと思ったらドドブランゴの頭の上のスイアが青色から黄色に変わった

アイツ…アタシが気絶してる間にどんだけ頑張ったんだよ

「さあ、ドドブランゴさん！まだまだ行くよ！ウィーちゃんの方もまとめて返すんだから！」

アイツはデバイスをドドブランゴに向けて叫ぶ

…何でだよ？

何でアタシなんかのためにそこまで出来んだよ？

もうヘトヘトじゃねえか…ここからでもわかるぞ…

…何で…

「オオオオオ…！」

…ん？ ドドブランゴの叫び声が変わった？

何でだ……っ！？

『雄叫びで自身の子分である“ブランゴ”の群れを呼ぶそうなので注意が必要かと』

まさか…まさかっ！？

アタシは咄嗟にアイツの後ろ側にある傾斜の大きい坂を見上げる目に映ったのは、雪の上をアイツ目掛けて駆け降りていく小型のサルみたいなヤツらだった…

アイツは気づいてない…いや、アイツのデバイスなら気づくだろうけど、今のアイツだと…避けられない

どっしするっ…どっしするっ…どっしするどっしするどっしするどっしする！？
どうやってたらアイツを助けられる！？……助ける？

何で…アタシはアイツを助けたいんだ？

アイツは…

『ヴェータちゃん』

…あっ…そう、か…

アタシは何を“迷って”たんだ…

アタシは…どうしていいか、わからなかったんだ

戦いばかりの記憶の中、始めて…“友達になるっ”、って言われ
たから…

「アイゼン！」

『ヤー』

アタシは…本当は、変わりたかったんだ！

「うおおおおっ！…！」

アタシはアイゼンの推進力で一気にドドブランゴの方に近づいてく

「伏せるおっ！“なのは”っ！…！」

「っ！」

なのははアタシの声を聞いてすぐに体を地面に伏せる

「行っけえええっ！！！」

そのままなのはのすぐ上を通り過ぎてブランゴの群れに突っ込んでひたすらアイゼンを振り回した

20秒ぐらいで攻撃を止めると、周りには赤色のスフィアを浮かべたブランゴしかいなかった

アタシは坂から飛び降りてなのはの隣に着地した

「悪かった、もう戦える」

「うん…やっと、名前を呼んでくれたね」

「…ああ」

なのはは嬉しそうに笑う

話したいことは結構あるけど、まずは…

「…サクッと決めるぞ！高町なのは！」

「うん！ヴィータちゃん！」

コイツにアタシたち二人で勝たねえとな！

S I D E : ヴ ィ ィ タ
O U T

EX第十二話 3日目 立ち上がれ、狩人よ 後編(前書き)

ようやく書き終わりました！

ではEX第十二話、始まります！

EX第十二話 3日目 立ち上がれ、狩人よ 後編

SIDE：フェイト

「ガアアアアッ！」

ティガレックスが右前脚を振り上げて勢いよく私たちに振ってくる

「ハアアアアアッ！」

それを避けてからシグナムが声をあげてティガレックスの脚に斬りかかる

けど、ティガレックスはシグナムのレヴァンティンを脚で受け止めて攻撃をかわした

「…フッ、やれ！フェイト！」

『フォトンランサー』

「ファイアッ！」

その瞬間、ティガレックスの周りにセットしていた八発のフォトンランサーを一気に発射する

さすがにシグナムと組み合っただら機動力じゃ避けられないよね

「グアウウウ!?!」

ティガレックスはジタバタともがいて暴れる

その間に頭の上のスフィアが黄色に変わった

っ! 効いてる! やっぱり、シグナムの仮定は正しいのかも…

「今まで戦ってきて、アイツの弱点に一つ仮定を立ててみた。私の斬撃、お前の斬撃にはそこまで大きな効果は見られなかった。だが、お前の射撃魔法…あれにだけは微かにだが違う反応を見せた。あれは電気魔法の射撃だったな? ならば、弱点として考えられるのは…」

…ティガレックスの弱点は…電気…

私はティガレックスから距離を取って戻ってきたシグナムの方を一度見る

シグナムもちょうどこっちを見ていた

「……………(コクッ)」

私たちは一度頷くと相談していた作戦に入ることにした

作戦と言っても大したものじゃない

「行くぞ！レヴァンティン、カートリッジロード！」

『エクスプロージョン』

シグナムの声に反応してレヴァンティンから薬莖が飛び出し、レヴァンティンの刀身を炎が包んだ

「ハアアツ！」

シグナムが近づいて…

「紫電…一閃っ！！！」

強い攻撃でティガレックスに当たり、ティガレックスのバランスを崩す

「バルディツシュ！」

『ソニックムーブ』

そこに出来たスキに私が素早く滑り込んで、私が決める！

「ガアツ…ギャアアアアアツ！！！」

けど、そこで予想外のこと起きた

シグナムの紫電一閃で頭を下から上に叩き上げられたティガレックスが必死の抵抗とばかりに、身のすくむような大きな咆哮を上げた

そのせいともう一撃入れようとしていたシグナムがティガレックス

スから吹き飛ばされた

もしかして…音圧で吹き飛ばしたの!?

このままただ接近するだけじゃティガレックスに避けられるかも…

…それじゃ、ダメだ!

シグナムが作ってくれたこのチャンス、無駄になんかしない!

「っ!ライトニングバインド!」

ソニックムーブを維持して突っ込みながら私はまだ体勢を崩したままのティガレックスの首と片腕にバインドをかける

こうすることでティガレックスは頭を上に向け、片腕はバンザイをした不自然な形で固定される

けど、ソニックムーブをしながら組んだバインドな上に捕まえてるのはティガレックスの巨体…

たぶん持つてあと1、2秒…それで十分!

私はティガレックスの下に潜り込むと同時にティガレックスに向けて魔法陣を展開する

そして私がバルディッシュを構え直すと同時にライトニングバインドが碎けた

予想より少し早い…それだけティガレックスが強いのかな?

でも…タツチの差で私の勝ちだよ

「貫け轟雷！サンダアアスマツシャアアツ！！」

魔法陣にバルディッシュをスイングしてぶつけ、魔法陣から雷の砲撃が放たれてすぐにティガレックスのお腹に命中する

砲撃はなのはみたいに得意じゃないけど…至近距離での弱点の砲撃なら！

「ガアツ！？　グオオオアアアツ！？」

ティガレックスは砲撃の圧力にだんだん押され始めて後ろに滑っていく

あと一押しっ！！

「行っけえええっ！！」

私が更に魔力を込め、サンダースマツシャーは一回り太くなってティガレックスに当たる

そして…

「ギヤアアアツ！？」

ティガレックスの手足が地面から離れてその巨体は宙を舞って少し後ろにあった崖に叩きつけられた

「…………グウウ…………」

ティガレックスはそのまま地面に倒れ込んで目を閉じた

それと同時にスフィアの色は赤色に変わった

「か、勝った…あう…」

「大丈夫か？」

勝ったのがわかった瞬間、疲れがドツと出てきて倒れそうになっただけで隣まで来ていたシグナムに抱えられて倒れずに済んだ

「すみません…シグナム」

「気にするな。見事な戦いだっただ、お前もティガレックスもな」

「そうだ、ティガレックス！生きてますか？」

「心配するな。目を閉じてはいるが呼吸はしている。おそらく、スフィアが赤色になると強制的に睡眠に入るようだ」

「そうですか」

「…さて、そろそろ行くか。もうすぐ夕暮れだ、ヴィータたちもそろそろ終わっているだろう」

「そうですね…えっと、あっちの道でしたか？」

私はここに来るときに通ってきた道とは別の道を指差した

「あれしか道がないからな。あれで合流出来ればいいが…」

私たちは少し不安になりながら細い道に入っていった…

私たちの戦いを見ていたものがいたのに気づかず…

『…ほう、炎を操る剣士に雷の斧使いか…』

S I D E : フ ェ イ ト O U T

S I D E : ヴ ィ ー タ

「アタシとお前、連携すればアイツぐらい瞬殺できるはずだ。さつき言った通りとどめはお前だ。行くぞ！」

「うん！」

アタシはアイゼンを基本のハンマーフォームに戻してドドブラン

ゴに一気に迫る

ドドブランゴはアタシの打撃を警戒してかまた受け止めようと構えた

…へっ、残念だったな

アタシが今叩くのは…お前じゃねえ！

「フランメシユラークッ！」

アタシはカートリッジを使ってドドブランゴの前の地面を思い切り叩く

その瞬間…

ゴオオオオオオッ！！

ドドブランゴの周りを囲むように赤々と燃える火の海が出来た

フランメシユラークは魔力を込めた打撃で着弾点を燃やす技だ

生き物なら火がいきなり出たら動揺するだろ

「グオオアッ!？」

ドドブランゴは驚いて中でジタバタ暴れる

もしかしたら、元々火が苦手なのかもな

さてと、それじゃこれで…終わりだ！

アタシは火の海の一部を叩いて火を途切れさせる

ドドブランゴはその火の切れ目に気づいたのか一目散に駆けて出ていく

確かにそれで火からは逃げれたな

けどな、その先は…

『デイバインバスター フルパワー』

…行き止まりだ

「デイバイイイン…バスターアアツ！！」

火から飛び出したドドブランゴを横から桜色の砲撃が飲み込む

あの砲撃って…あそこまで威力があつたのか…？

砲撃が止んで見えてきたのは、全身からプスプスって煙を出すドドブランゴと…赤色のスフィアだった

「…や、やった…勝ったよ！ヴィータちゃん！」

なのははこっちに駆け寄ってきて嬉しそうに笑う

「ああ、そうだな……あのさ……その、何だ……助けてくれてありがとう
な……なのは」

「……えっ!? ヴィータちゃん、今何て言ったの!?!」

「う、うるせえ! 一度しか言わねえ! ほら、行くぞ!」

もう一度なんて言えるかよ……恥ずかしい……//

アタシは後ろでブーブー言ってるなのはを無視してさっさと歩いていく

もうすぐ夕暮れだし、シグナムたちと合流しないと……

アタシたちは来たときとは違う方の道に入ってしまった

『槌使いに魔力砲撃重視の者、か……こちらもちちらで面白い……
よし、決めた』

S I D E : ヴィータ O U T

SIDE：直樹

「いや、凄かったね！そうだろ、ユーノ？」

「うん、どっちも凄い戦いだっただよ」

「全く、フェイトったらあんな無茶なことをして…」

「まあそれだけ勝ちたかったってことですよ、プレシア」

「そっだよお母さん」

「ヴィータちゃんが…デレた…。後でからかおうかしら」

「止めておけシャル。お前が痛い目を見るだけだ」

「まあとにかく、ヴィータがなのはちゃんと仲良くなってよかったわ。直樹くん、これで終わりなんかな？」

「ああ、後はオレが迎えに行つて終わりだ。もうすぐ合流しそっだしそろそろ『PPPP…』ん？これは…外からの通信？」

するとスクリーンにディスプレイが出て、「SOUND ONLY」の文字が浮かんだ

「音声通信？フェイトたちからかしら？」

「いえ、フェイトたちにはこの通信コードを教えてません。ここに通信できるのは今のところこの星に住んでるヤツらです。バリー、アイルーの誰かから報告か？」

『いえ、それが…その』

その時、スピーカーから通信相手の声が聞こえ始めた

『主よ、聞こえているか？』

「っ！？ちよっお前、何で今通信してきてんだよ！」

『いや、ただ主に“戦闘許可”をもらおうと思ってな。早速で悪いが許可してもらえるか？』

「誰と戦うんだ？…ってのは聞くまでもないか。なのはたちだな」

『左様。あの者たちの戦いは中々見事だった…あの者たちなら我の心を躍らせることが出来るかも知れん』

「…わかった、許可する。けど、無茶をしたときは…覚悟しとけ」

『ふっ、当然』

その声を最後に通信は途切れた

「…バリー、なのはたち四人の残存魔力量をスクリーンに表示してくれ」

『了解です』

すぐにスクリーンに四つの枠が出て、四人のデータが出る

S I G N U M 4 8 %

F A T E 4 7 %

N A N O H A 3 1 %

V I T A 4 2 %

「……………」

「直樹、説明してくれるかな？」

「詳しくは説明してる暇がない。ただ、迎えはオレ一人じゃ確実に足りなくなる」

「それって、今からなのはたちが…負けるってこと？」

「そうだ」

「……………っ！？」

「…始まるぞ」

みんながスクリーンに目を戻すと、合流したなのはたちの前に…

“アイツ”が現れていた…

S I D E : 直樹 O U T

S I D E : なのは

「あつ、フェイトちゃん！」

「なのはっ！」

ドドブランゴを倒してから、また雪道を歩いて登ってを繰り返して…ようやく開けたところに出たかと思うと反対側からフェイトちゃんとシグナムさんが登ってきたの

「なのはたちはどうだった？」

「もちろん、勝ったよ！」

「やったね！こっちはね、時の庭園で見たティガレックスが相手だったんだ」

「ふえ〜！あの恐竜みたいな顔をした竜！？」

「ヴィータ、そちらはどうだった？」

「へっ、こつちもドドブランゴとかっていうサルをぶっ飛ばしてきたぜ！」

「サル、か？」

「た、ただのサルじゃねえぞ！えっ…と、そうだ！雪…何とかって言う異名持ちだ！」

「雪獅子だよ、ヴィータちゃん…？」

なんて話していると、キラリと太陽の光が目に入る

そつちを見るとまさに太陽が沈もうと、地平線に触れ始めてるところだった

「わあ〜！綺麗だね〜！」

「うん、確かに」

「見事なものだな」

「まあ…そうだな」

直樹くんの言った時間までに終わったから、成功なんだよね？

直樹くん、早く来ないかな？

「…………あれ？」

「？ どうしたの、フェイトちゃん？」

「うん、何だか…だんだん風が強くなってきてない？」

「…そう言われれば、確かに。雲も少し出てきたようだな。山の天気は変わりやすいと言うが…随分急だな」

シグナムさんに言われて周りを見つめるとだんだんと雲が出てきて、太陽も少し見づらくなってきたの

「…っ！おい！これ、少してレベルか！？吹雪いてきたぞ！？」

なんてのんびりしてたら風はどんどん強くなってきて、とうとう雪まで降りだした

辛うじて見える太陽のおかげで周りが見えるけど…これってかなり危ない！？

「どこかやり過ぎせそうなところは…無さそうだな」

「くそっ！直樹はまだかよ！」

ヴィータちゃんの言う通りだよ！ 直樹くん早く来てーっ！

『すまないが、主はまだしばらくは来ない』

「……っ!?」「……」

私たちの周り…ううん、“上から”突然声がした

「私たちが上を見上げると…」

『突然の悪天候は詫びよう。我がいる場所はこうなってしまうのでな』

雲を掻き分けて、一頭の竜が羽ばたきながら降りてくる

私たちの数倍も大きな身体、大きく広がった翼、鈍く光る鋭い爪、波打つ尻尾…そして、身体中を覆う鋼色の鱗

竜は地面に着地すると、その視線を私たちに向けた

『まずは自己紹介か？ 我が名は“クシャルダオラ”。このポツケ大陸で上位に位置する者だ』

「っ！ やっぱり、竜が喋ってるの!？」

「大陸で上位…となるとかなりの強さということか」

竜…クシャルダオラは私たちを見たまま話を続ける

『お前たちの戦いは見せてもらった。中々の強者たちのようだ…
そこで一つ。お前たち、今から我と戦わないか？』

「あなたと…戦う？」

「そんなことして何になるんだよ！」

「フェイトちゃんとヴィータちゃんが尋ねる

『ふむ、理由の大部分は我の都合だ。我の心を奮わせるような戦いがしたいのだ。あとは…そうだな。自分で言うことではないが、我の力はこの大陸で十の指に入る…戦ってみたくはないか？炎の剣士よ』

炎の剣士って…シグナムさん？何でシグナムさんに「面白い！その勝負、受けて立とう！」そういうことか！

「少し時間をくれ。準備をする」

『よかるっ』

私たちはシグナムさんに手招きされてシグナムさんのところに集まった

「おいシグナム！」

「大丈夫ですか？私たち、さっきまでの戦いでかなり消耗してますよ」

「そうですねよシグナムさん！」

「…いや、何も考えがなく挑む訳ではない。いかに強者といえどやはり生き物…スキはあるはず。短期決戦に持ち込めば十分勝ち目

はあるはずだ」

「…わかった。しょうがないから乗ってやる。けどな、やるからには勝つぞ！」

「私も、やります」

「なら私も！」

「…決まりだな」

私たちは別れて横一列に並ぶとそれぞれデバイスを構える

『決まったようだ。だがお前たちのリミットが近いようだ。お前たちの時間で言うと…あと約五分、といったところか。それまでには終わらせよう』

「随分と舐めてくれるじゃねえか」

「そんなに簡単には、終わらない」

『フツ…ギヤアアアツ！』

クシャルダオラの咆哮を合図に私たちは動き出す

「ダイバインシューター！」

「フォトンランサー！」

「シュワルベフリーゲン！」

私がシューターで正面、フェイトちゃんがフォトンランサーで上、ヴィータちゃんがシュワルベフリーゲンで左側の三方向からクシャルダオラを狙う

けど、クシャルダオラは余裕だからか一步も動かない

なら！ すぐに決める！

「シュートッ！」 「ファイアッ！」 「行けえっ！」

三方向からの魔法弾は真っ直ぐにクシャルダオラへ向かって……
当たる直前に“曲がった”

「……っ!?」「……」

曲がった魔法弾はデタラメな軌道で辺りに散って、何発かは私たちを狙ってきた

「何で当たらなかったの!?!」

「……っ！ 見る！ 奴の周りを強い風が巡っている！ あれで防いだんだ！」

シグナムさん、そんなすぐに分かるなんて……

シグナムさんに言われて気づいたけど、クシャルダオラの周りを風がグルグルと回ってるみたい……これじゃまるで、鎧だよ……

「射撃がダメなら……シグナム！」

「ああ！ヴィータ！」

「おう！なのは、お前は最後だ！」

「っ！そっか、了解！」

私がバックで下がると同時にシグナムさんとヴィータちゃんが
気にクシャルダオラに迫る

『『エクスプロージョン』』

「紫電…一閃っ！！」

「ラケーテン…ハンマアアツ！！」

シグナムさんとヴィータちゃんの攻撃が風に流されそうになりな
がらくシャルダオラに命中する

そこにさらに…

『ソニックムーブ』

ソニックムーブで加速した勢いでクシャルダオラの背中の上に飛
び上がったフェイトちゃんがそのまま空中でクシャルダオラにバル
ディッシュを構える

「（今だっ！）」

私はシグナムさんとヴィータちゃんの間に来た隙間に狙いを定
めて、チャージの終わってるレイジングハートを構える

「貫け轟雷！サンダー…」

「デイバイン…」

これが上手く行けば、少なからずダメージを与えられるはず…
そう思った

けど同時に…クシャルダオラがまるで、笑ったように見えた…

『

ツ！…！』

その瞬間、さっきとは比べ物にならない咆哮が聞こえて、強い風の壁が私たちに向かって広がった…

「……………んう…あ、れ？」

私、どうなったんだろ？

確か、クシャルダオラの風を受けて飛ばされて…っ！

目をゆっくり開けて見ると、まだ最初のところにいるクシャルダオラ、それに周りに倒れてるフェイトちゃんたちが見えた

フェイトちゃんたちは…気絶してるみたい…

『ほう？まだ立てるとはな。どうする？諦めるなら我がすぐに主を呼ぶが？』

諦める？…そんな、の…決まってるよ…

「残念ですけど、私…諦めが悪いんです」

私は震える手でレイジングハートを構える

『…よからう。ただ、その身体では撃ててあと一撃だろう。お前の一番で来い。まさか、ドドブランゴに見せた砲撃が一番では有るまい？』

私の…一番？ でも、直樹くんが使うなって…

……よし、直樹くんにあとでたくさん謝ろう

「レイジングハート…行けるよね？」

『オーライ、マイマスター』

私の声に合わせて魔法陣が展開され、魔力収束が始まる

私の魔力はもうあんまり残ってないけど…魔力が満ちてるここなら！

『スターライトブレイカー』

負けたくない…負けたくないんだ！

勝ちたいんだ！

私の前に浮かぶ収束した魔力目掛けてレイジングハートを振り下ろす

「スターライト…ブレイカアアッ！！！」

解き放った収束砲は真っ直ぐクシャルダオラに向かい、風の壁を突き抜けてその身体に命中する

「…あ…あう…」

撃ち続けて少しして、雪煙でクシャルダオラが見えなくなると、私はもう立っていられなくなって雪の上に倒れこんだ

確認できないけど…私は分かる

この勝負…私たちの…

…負け…

S I D E : : な の は O U T

S I D E : : 直 樹

なのはが倒れたのをカメラで見てすぐにどこでもドアを出してなのはたちのところに行った

「ユーノはなのはを！アルフはフェイト！シャマルはヴィータ！ザフィーラはシグナムだ！デバイスも落とすなよ！」

ユーノたちがなのはたちを連れていってる間にオレはジッとただずんでしたヤツに声をかける

「おうクシャル、どうだった？無理矢理戦った感想は？」

『…万全でないというのに、臆さず立ち向かってきた。見所のある者たちだ…特に、あの砲撃の少女。最後の砲撃でかなり動かされた』

そう言っ下を見たクシャルに合わせて見てみると、引きずったような跡が残っていた

『あの少女はいずれ大物になるだろう。ただ…』

「ただ？」

『あの者の奥底に垣間見たのだ。…黒い、闇がな』

「闇？なのはにか？」

『うむ…。まあ、あまり気にしないでほしい。では主、またいつか』

そう言ってクシャルは空へ飛んでいった

なのはに…闇？ どういうことだ？

「直樹！終わったよ！早く帰ろう！」

「っ！ああ、今いく！」

ユーノに呼ばれてオレは急いでどこでもドアをくぐった

オレがこの時のクシャルの言葉を思い出すのは、もう少し先のことだ…

S I D E · 直樹

O U T

EX第十二話 3日目 立ち上がれ、狩人よ 後編(後書き)

次回でいよいよ、EX編ラストです！

EX最終話 5日目 夢幻(前書き)

今回でとうとうEX編は終了です！

あっ、タイトルは間違いじゃないですよ？

ちなみに今回、SIDE:~は入ってません

まあ、読んでもらえれば理由はすぐにわかります

では、EX最終話始まります！

EX最終話 5日目 夢幻

「あつ、フェイト様だニヤ！」

「こんにちはですニヤ！」

「あ、うん。こんにちは」

どうも、フェイトニテスタロッサです

今日は旅行の五日目…えっ？ 四日目はどうしたって？

実は…私になのは、シグナムにヴィータの雪山に行った組はケガとか疲れのせいで大事を取って昨日はホテルで一日ゆっくりしてたんだ

ちなみにその間にお見舞いに来てくれたのはアリシアとはやての二人

あとの直樹に母さん、リニス、ユーノ、アルフ、ザフィーラ、シヤマルさんは朝からどこかに行っちゃったんだ

何だかいろいろさかったのは覚えてるんだ

「ご主人様！ラオシャンロンのお爺がまた皆に！」とか「これから防衛戦だ！」とかって聞こえたんだけど…何だったんだろ？

夕方頃にみんなボロボロになって帰ってきたから、大変だったのは解ったんだけどね

それで今日は自由にできる最後の日だから各自自由行動ってことになったんだ

直樹は母さんとアリシアを誘って昨日行ったところにまた行くみたい

「爺さんの説得」って言ってたけど…

で、直樹がいくつか行ってもいい候補地を挙げてくれて、またくじ引きってことになって引いたら…

なのは、ヴィータ 火山

はやて、シグナム、シャマル 密林

ザフィーラ、リニス 樹海

ユーノ、アルフ 沼地

フェイト ハズレ

……ハズレって何!?

ビックリしたよ!まさかハズレがあるなんて!

まあ、そういう訳で私は村で絶賛居残り中です（泣）

でも、村に残って気づいたんだけど…何故かいるんなアイルーから声をかけられるんだ…何でだろ？

・
・
・

「それは簡単ですニヤ。フェイト様方がティガレックス様とドドブランゴ様に勝たれたからですニヤ」

私は気になったのでとりあえず長老のマツクに聞きにきた

都合よくマツクは理由を知ってるみたいだけど…

「ティガレックスたちに勝ったから…それでみんなが私のことを知ってるのに繋がるんですか？」

「実は、儂らこの村に住むアイルーたちもフェイト様方の戦いを見させて頂いていたのです。ティガレックス様にドドブランゴ様、いずれも儂らの中では“絶対強者”とされていた方々ですニヤ。そんな方々を打ち破ったあなた方が有名にならないはずがないですニヤ」

マツクはうんうんと頷きながら話してくれた

そっか、やっぱりティガレックスたちってそんなに強かったんだ…夢中だったからあんまり意識してなかった…

その時…

「長老、少しよろしいですかニヤ？」

長老のところに一匹のアイルーが来た…あれ？このアイルーって…

「あつ、もしかしてペスター？」

「はい？…フェイト様！？失礼しました、出直しますニヤ」

やっぱり、雪山のベースキャンプにいたペスターだ

「あつ、そんな気を使わないで！用事があつて来たんだよね？今
言えばいいよ」

「ペスター、フェイト様がこう言ってくださってるのじゃ。話し
なさい」

「…分かりましたニヤ。実は、そろそろ雪山草のストックが切れ
そうなので採集に行きたいのですが、募集しても中々人数が集まら
なくて…どうすればいいですかニヤ？」

「フム…、この時期は例年村の仕事が忙しくなる時期な上にご主
人様方を迎えるのに更に更に人手を割いているからう。手透きの者は
…」

マックとペスターが唸りながら頭を捻る

…うん、ちょうどいいよね

「ねえペスター」

「えっ？何ですかニヤ？」

「その採集つて難しい作業なの？」

「いえ、雪山草を見つけて摘むだけですから…まさか」

「うん、私が手伝ったらダメかな？」

「い、いけませんニヤ！万が一フェイト様に危険なことが起こりでもしたら…」

「大丈夫だよ。私、強いから！それに、今日はやる事が無くて暇なんだ。だからお願い！」

マツクとペスターはうーんと唸りながら考える

やっぱり、ダメかな？

「…分かりましたニヤ。ペスター、フェイト様と一緒に行きなさい」

「っ！長老！本気ですかニヤ！？」

「フェイト様はティガレックス様にも勝てるだけの力をお持ちじや。それにバリアジャケットを着ておけば大抵の事故ではケガはしないはずじゃ」

「…了解ですニヤ。それではフェイト様、今すぐお願いしてもいいですかニヤ？体感されたかと思いますが、雪山での夕暮れは早く訪れますニヤ。今はもう真昼を過ぎてますニヤ。今すぐ出発した方がいいですニヤ」

「うん、昼ご飯はもう食べてるし、バルディッシュも持ってる。もう準備はオツケーだよ」

「では、竜車を用意しますので村の出口で待っててくださいニヤ」
「！」

「フェイト様、どうか無理はなさらぬようお気をつけを」

「はい、いつてきます！」

私はマツクに挨拶してから一昨日と同じ村の出口に向かった

・
・
・

「それで、雪山草ってどの辺りに生えてるのかな？」

ベースキャンプでホットドリンクを飲んで、籠を背負って前と同じ山道を登つてるときにペスターに聞いてみた

「えつとですね、生えている場所といえはこの山全域になりますニヤ。ただそれだと時間がかかるので、今日は山頂近くにある群生地に向かっていますニヤ。場所ですとだいたいフェイト様方があのクシャルダオラ様と戦った場所の近くですニヤ」

なるほど…だから昨日と同じルートで登ってるんだ

その後もペスターといろんな話題で話をした

直樹について、他のアイルーについて、この山について…

その中でも少し印象に残ったのは…

「孤高の雷？」
いかすち

「はい。ベースキャンプの駐在の役目がローテーションで回っているのはご存じでしょうかニヤ？」

「うん、直樹から聞いたよ」

「駐在アイルーの役目はその地域の見回り、そこに住む方々とアイルーの橋渡し等が大きな役目ですニヤ。そのため、その地域のほとんどの方々と知り合いになりますニヤ。ティガレックス様、ドドブランゴ様もそうですし、あのクシャルダオラ様もそうですニヤ」

「へえ、駐在アイルーって凄いなだね！」

「それほどでもないですニヤ…／＼／＼ あつ、話を戻しますが、駐在アイルーはほとんどの方々と知り合いになりますニヤ。ただ…」

「ただ？」

「ご主人様がこの世界をお創りになり、制度を作り上げてから今日までの十年間…どの駐在アイルーとも、誰とも関わろうとしな

った方が一方いらつしやいますニヤ」

「それが…孤高の雷？」

「はい、孤高の雷とはもちろん異名ですニヤ。その身に纏った蒼白い雷からついたのですニヤ。名前は申し訳ないですが、教えられないのですニヤ」

「？ どうして？」

「ご主人様からの指示で、あの方から許可が出るまではその名を無闇に言わないように、とのことすニヤ。なので、名前を知っているのは私のような初期からいる古参のアイル―とご主人様だけですニヤ」

「そうなんだ…」

「最近ではご主人様との折り合いも悪いと噂で聞きますニヤ。あつ、そろそろ到着ですニヤ！」

話に夢中で気づかなかったけど、いつの間にか目的地まで来てたみたいだ

でも…孤高の雷、か…

少し前の私も…そうだったな

なのはが、直樹が、ユーノが、クロノが、エイミイが、リンディ提督がいてくれたから…私は、私たち家族は救われた…

名前を呼ぶ…そうだったよね？　なのは…

異名だけで呼ぶ…それで、本当に正しいのかな？　直樹…

・
・
・

「では、私は向こうの方で摘んで来ますのでフェイト様はこの辺りでお願いますニヤ。夕方頃に落ち合いましょう」

「うん、了解」

ペスターはそう言うと、箆を抱えてちよつと離れたところまで移動した

よし、頑張るぞ〜！

それからしばらくの間、私は黙々と雪山草を摘んでいった

群生地って言うだけあってペスターが言っていた形の草はたくさん生えてて、もうすぐ箆がいっぱいになりそうだった

「ふう〜、だいぶ採れたかな？あとは…あつ！見つけた」

もう取り尽くして無いかと思って念のため見回すと視界の端に風に靡く雪山草が見えた

私は抱えてた箆を置いて取りにいった…けど、この時の私はもう少し確認するべきだった

そしたら、その雪山草が生えてる場所が崖の縁だったことに…

地面だと思ってたところがただ雪が深雪して固まったただけのところだったことに気づけたかも知れない

けど…

バゴオオオンツ！！

結果私は…その雪に足を置いた

次の瞬間には、私の体重を支えられなかった雪は一気に崩れ、私は崖の中に投げ出された

「っ！バルディッシュュッ！」

悲鳴を上げてる暇なんてない！

私は急いでバルディッシュュをデバイスモードに起動させた

空は飛んじゃダメだって直樹が言ってたけど、緊急事態だからいいよね！

けど、今日の私はとことん運命の女神様に見放されてるみたいだ

「よし…っ！？が…あ？」

バルディッシュュを出して飛ばうとした瞬間、頭に何か固いものが当たった

意識が朦朧としながら見えたのは拳ぐらいの大きさの石

「（…本当に…今日は、ついてない、な…）」

そんなことを思いながら私は意識を失い、崖の下の暗闇へ飲まれていった…

・ ・ ・ ・ ・

「……………ん…う…あ、れ？」

私…崖から落ちた、んだよね…

…生きてる、の？

背中が冷たい…雪かな？

ボウ…つと上を見ていると、上の方に小さな光の帯が見えた

もしかして、あれが崖の縁かな？

「…気がついた？」

「っ!?!」

まさか、崖の底で誰かの声を聞くとは思ってなかったから、私はかなり驚いて身体を起こした…

「つつっ!?!」

…けど、身体には痛みが走って思わず顔をしかめる

「あなたバカ?そんなに勢いつけて起きたら痛いに決まってるでしょ?」

聞こえてくる声は足音と一緒に近づいてくる

そして、見えてきたのは…

「一応は…元気そうね。さっさと帰って。ここはあなたのいるべき場所じゃないから」

一人の女の子だった

透き通ったみたいないない肌と水色のワンピースにコバルトブルーのセミロングぐらいの髪と眼が映えていて、とっても綺麗だ

「…何?ジロジロ見ないで」

「あっ、ごめんなさい」

女の子はフンッとそっぽを向く

身長は…私と同じぐらいかな？

「で、ケガはどうなの？」

「えっと…まだちょっと痛いけど、何とかかなりそう」

「あっそ、じゃあね」

そう言つと女の子は踵を返して離れていこうとする

バチッ

「えっ？」

見間違えかな？今、あの子の髪が揺れたときに髪に蒼い光が走つたような…

あれ？ 蒼い光…蒼白い雷？ ……っ！そうかつ！

「ちよつと待ってっ！」

「…何？」

女の子は立ち止まってこっちを向く

「あなたは、もしかして…孤高の雷、なの？」

「っ！？ ……何でそんなことを思つたの？私、どう見たって人間だよ」

「直樹はこの星には人間は一人もいないって言ってた。それに、ここは雪山なのにその薄着で全然寒そうじゃない」

「っ！？それは…」

そう、彼女は確かに綺麗だけど、この場には不自然な格好をしてる
着てる服はワンピース一枚だけ、しかも裸足だ

「それに、さっき振り返ったときに蒼い光が走ってたよ。あれは雷じゃないかな？」

「……………」

「最後に、あなたはさっき人間だってアピールしたよね？でも…私、一度も孤高の雷が召喚獣だって言っていないよ？」

「……………」

彼女はしばらく俯いたまま黙っていた

「…崖から落ちてくるぐらいだから、バカだと思ってたけど…案外賢かったんだね」

彼女は顔を上げると私を真っ直ぐ見据える

「そう、私は確かに孤高の雷って呼ばれてる。だから何？」

「…あなたは、アイルーたちだけじゃなく直樹とも最近は上手く

いってないって聞いたよ。何か理由があるの？」

「別に…。ただアイツらが嫌いなだけ…もういい？とっとと帰って」

そう言つと彼女はまた歩き出す

「ま、待って！」

まだ話したいことがある、そう思って私は咄嗟に彼女の右手を掴んだ

バチッ！

「痛っ！？」

その瞬間、彼女から蒼白い雷が私の手に走って思わず手を放してしまう

「あっ……。ふ、ふん。しつこいからちょっと痛めつけてやったわ。まだ関わるならもっと酷くするわよ！」

彼女が怒ると、彼女の身体からバチバチと雷が放たれて崖の岩を砕く

一見脅してるようにしか見えない

けど、私にはそうは見えない

さっき、「ちゃんと見たから」…

「…嘘だね」

私はそう言って一歩ずつまた彼女に近づく

「なっ！？来ないで！早く帰って！」

「ううん、それは出来ないよ」

まだちゃんと、話を聞けてないから…

一歩、また一歩…彼女の雷が迫ってくる中、ゆっくり近づく

「何で…何でくるの！？…お願い…私に、もう“傷つけさせないで”っ！…」

「大丈夫だよ」

「えっ……あ……ダメッ……」

私はしっかりと彼女を抱き締める

「っ……大丈夫、だよ」

その間にも彼女から放たれる雷が私の身体を焼いて、バリアジャ
ケットを焦がす

「何で……何でっ!？何「私もね……同じだった」……え?」

「魔法を勉強……し始めた頃ね……魔力が暴走して……よく家族を、傷
つけた……“もう傷つけないから”家族から離れようともした……
……けどね?」

私は力を少し緩めて彼女の顔をしっかりと前から見る

「それじゃ、ダメなんだよ……一人きりじゃ、絶対に上手くないか
ない……守りたい人がいて、初めて上手くいくんだって……わかったん
だ」

「……私には、そんな人……」

「なら、私を守って?」

「えっ?」

「あなたは私を守って……。私は……あなたを守るから」

そこまで言って、限界がきたのか私はゆっくりと後ろに倒れ込んだ

「ちよつと！大丈夫なの！」

「へへへ…ちよつと頑張り過ぎた、かな？」

「…バカだよ…本当に、バカ」

彼女は私の隣にしゃがんで私を見る

その目からは涙が溢れていた

「でも…バカはバカでも…実りのあるバカだから…いいんじゃないかな
いかな？」

「えっ？」

「雷…もう出てないよ？」

そう言って私は彼女の脚に手を置く

けど、さっきみたいに雷は出なかった

「……その、えつと……」

「認めて…くれたのかな？」

彼女は私の問いにゆっくりと頷いた

「…ねえ、あなたは「フェイト」…えっ？」

私は身体を起こして彼女と向き合う

「私の名前は、フェイト」テストロッサ。フェイトだよ」

「えつと…」

「私の初めての友達が言ってたんだ。友達になるには、名前を呼ぶばいいんだって」

「…フェイト？」

「うん」

「フェイト」

「うん！」

「…私と…友達になって、くれる？」

「もちろん！」

「…うう…ぐすっ」

やっぱり…泣きやすい子なのかな？

「フェイト…私の名前は、“鳴”だよ。よろしくね？」

「うん。よろしく、鳴」

・ ・ ・

それからしばらく、私と鳴はいろんなことを話した

アイルーや直樹に近づこうとしなかったのはやっぱり自分の力で傷つけたくなかったからみたいだ

鳴は同族の中でも特に強い力を生まれつき持ってたみたいで、徐々にはコントロール出来始めていたけど、さっきまで完璧には出来なかったみたい

「何でだろうね？フェイトに会った途端出来るなんて」

「相性が良かった…なんてものじゃないだろうし…」

私も必死だったからよくわからないけど、今考えると無茶苦茶なこと言っただな〜？

「あっ…」

「どうしたの、鳴？」

「ほら、上」

「上？」

鳴に言われて上を見ると、小さく見えていた光がオレンジ色

になっていた…ってことは…

「もう夕方！？帰らなきゃ！」

「…そう、だよね」

鳴は少し俯いて呟いた

あつ、そうだよね…私もなのはと別れるとき、そうだったもん…
そうだ！

「鳴、これあげるよ」

そう言っつて私は髪をツインテールに縛つてた黒のリボンをほどいて鳴に差し出す

「友達の証に受け取って？私たちは、離れても通じ合ってるって証」

「…ありがとう！」

鳴は私からリボンを受けとるとそれを使って私と同じようにツインテールにした

「似合ってるよ」

「あ、ありがとう／＼／＼　そうだ！私も…フェイト、ちょっと下がってて」

「？　うん」

私が少し離れると、鳴は静かに目を閉じた

その瞬間、鳴を光が包んでゆっくりと姿を変えていった

そして光が収まると、鳴がいた場所には白いたてがみ、蒼い角を生やした真っ白な馬のような生き物がいた

『驚いた？これが私の本当の姿。キリンっていうんだ』

「…凄いね。でも、何だかカッコいいよ」

『そうかな…あつ、そうだ。フェイト、手を出して？』

私は言われた通り両手を前に出した

すると、鳴の角から雷が出て私の前で光の筋が纏まったかと思うと、光が収まって雷のデザインをした蒼色のクリスタルのペンダントが私の手に落ちてきた

『それは私の雷の結晶。それを私だと思って持っておいて？』

「うん、ありがとう！」

『もし、私の助けが必要な時はその結晶に願って？そしたら、私はどんな次元を越えてでも、フェイトを助けに行く』

「うん、その時はお願い。じゃあ、私…帰るね」

私は鳴の首にしっかりと抱きついて挨拶する

「きつと、また会いにくるよ。この世界に来たら一番に会いに来る…だから」

『うん。フェイトも…元気でね』

私は鳴から離れるとスタンバイフォームに戻してたバルディッシュを起動して、ゆっくり飛び始めた

「鳴！私以外にも友達作ってね！約束だよ！」

『努力はするよ！バイバイ、フェイト！』

私は手を大きく振ると外へ向けて一気に飛び上がった…

・
・
・

「よつと…あつ、箆は無事みたい。雪山草も…うん、オツケー」

チェックし終わって箆を抱えた時…

「フェイト様」

声にした方を向くとペスターが斜面を降りてくるのが見えて、私は手を振った

「…あつ、ケガ…どうしょ？」

今更思い出したけど、鳴の雷でバリアジャケットはボロボロ、身体は傷だらけ…どうしょ？

「やっぱり…今日は運が悪いのかな？」

でも、運が悪かったからその分新しい友達に会えた、って思っておけばいいか

私は直樹や母さんへの言い訳を考えながらペスターに近づいていた

EX最終話 5日目 夢幻（後書き）

ベ「とうとう終わった〜！」

直「長かったな〜。書き出したのは六月で、終わりは夏、秋を通り越して冬の始めかよ…？」

ベ「申し訳ない…。大学があまりにも忙しくて…。でも、A・S編は本番は冬だしちょうどいいかな〜、なんて」

直「また時間かかって冬が終わらなければいいな」

ベ「おっしやる通りで。さて、次回からA・S編…といきたいところですが、僕のワガママで一話挟んでのA・S編となります！」

直「EX編は終わったよな？」

ベ「そうだよ〜。まあ、内容は秘密！楽しみにしてもらえると嬉しいです〜！」

直「これからもよろしくお願いします！」

とある男の生活記録（ダイアリー）（前書き）

さて、タイトルの男とは一体誰か？

まあ、すぐにわかつちやうかな？（笑）

ちなみにこの話だけでかなりの独自解釈、独自設定… e t c …が
ありますが、どうか寛大な心でお願いします！

では、始めます！

とある男の生活記録（ダイアリー）

新暦50年 6月2日

今日から日記というものを付けてみようと思う

今日は普通の人でいう私の誕生日らしい

しかし、“彼ら”に造られた私では…どうにも祝う気にはならな
いね

“彼ら”については明記しないでおう

万が一この日記を見た人が“彼ら”に消されないようにね

そうだ、今日は私の生い立ちを書いておうか

“彼ら”に造られてもう約…止めておう、この年齢でこの肉体

というのはやはり奇妙なものだからね

とにかく、“彼ら”に造られてずいぶんと時が過ぎた

様々なことがあった

“彼ら”に従うのを拒否して逃走したり、逃走している間に“彼ら”がでっ上げた罪で一躍“次元世界一の犯罪者”になったり、身分を偽って様々な研究機関で働いたり…

いやはや、ロクな人生ではないね

まあ、その中でも…彼女の下で働いた時は、楽しかった

名誉のためにも彼女の名前は出さないでおこう

彼女と共に働く内に彼女に惚れている自分に気づいた時は驚いたよ

迷惑をかけないためにも開発途中で辞めさせてもらったが、彼女に泣いて引き止められた時は素直に嬉しかった

その後すぐに“彼ら”に見つかり、今に至るまでこの研究所に押し込まれているのさ

“彼ら”が彼女のプロジェクトを潰したと知った時は本気で反逆してやるうかと思っただがね

あのプロジェクト……“ヒュードラ”は素晴らしかった

さて、とりあえず今日はこのぐらいにしておこうか

新暦50年 6月3日

今日はこの日記を付ける理由について書こうか

先日、“彼ら”からついにあの任務が言い渡された

“彼ら”のための永遠の肉体の研究だ

全く、永遠に生きて何がしたいんだろうね…理解に苦しむ

人はその限られた一生の間で出来ることをする…そうではないだろうか？

とにかく、そんな“彼ら”が提案してきたのは、人体と機械を極限にまで融合させた存在、“機人”だった

発想としては間違いではない

しかし、どれだけ大変なことかわかって…いる訳がないな

“彼ら”は2、3年での完成を要求してきたが私はすぐに拒否した

確かにその年月で完成させることはできるだろう…

しかし、そのためには膨大な量の生体実験が必要だ

悪いが、私はそんなことはしたくないのでね

これから何年かかっても必要最低限の実験だけで完成させてみ
せるぞ

その研究過程を記録していくための日記、という訳だよ

では、今日のところはこのぐらいにしておこう

~~~~~中略~~~~~

新暦58年 8月15日

“彼ら”に命じられて8年以上の時間がかかったが、とうとう今日その成果が実を結びそうだ

しかし、途中で“彼ら”から送られてきた“タイプゼロ”と書かれた設計図…

確かに私が欲しかった情報は手に入ったが…私は確信している

あれほどの情報は“あの通り”一度造らないとわからないものばかりだ

おそらく、どこかにこの設計図通りに造られた子達がいるはずだ

無事だといいが…

“彼ら”の注文通り試験的にISインヒューレントスキルという先天固有技能を発生させるために更に時間がかかってしまった

だが、そんなものを付けてしまえば本当にこの子達は戦う兵器、“戦闘機人”になってしまう

ああ、

この子達というのは今まさに稼働待ちの3人のことだ

まず始めということでは3人にしておいたが…多かつたか？

1人は“彼ら”から流されてきた遺伝子から培養…所謂クローン培養という方法で誕生した子だ

後の2人は人為的に受精させた受精卵から培養する純粋培養と呼ばれる方法で誕生した

この3人の子達なんだが…運に任せていると不思議なことに3人とも女の子に育ったんだ

1人はクローンだからまだわかるが…まあいい

で、その子達なんだが…可愛いんだよ！

まだポッドの中にいるのだがこれがもう3人とも可愛くて！

これは噂に聞く子煩悩というものなのか？

とにかく、今から彼女達とちゃんと会うのが楽しみだよ

新暦58年 8月16日

今日は私の人生で1、2を争う素晴らしい日かもしれない！

今からだいたい3時間程前に彼女たちをポッドから出して覚醒させたんだ

彼女たちは無事にその目を開いてくれたよ

すると、驚くべきことが起こったんだ

彼女たちが呼び名に差はあれど、私のことを「お父さん」と呼んで笑ってくれたんだよ！

何よりも、嬉しかった

こんな私が父と呼ばれるなんて…

思わず泣いてしまつところだったよ

その時私は心から誓つた

この子達を絶対に“彼ら”の思惑の生け贄などにさせはしない  
そして、いつか必ず“彼ら”を倒し、この子達と平和に暮らそう  
と…

彼女たちは今は作っておいたベッドでぐっすり寝ているところだ

だが、困つたのは…彼女たちの名前だ

あまりにも普通の女の子のような名前をつければ“彼ら”に怪しまれてしまつ

あくまでも表向きは彼女たちを道具のように考えているように見られなければ…

やはり、通し番号で名付けるのが一番怪しまれないか？

心苦しいが…彼女たちを守るためだ、諦めよう  
ではまず…最初は…

“ウーノ”、かな？

とある男の生活記録（ダイアリー）（後書き）

さて、いよいよ次回からA・S編です

いや〜、ここまで長かった…

これからも頑張って更新していくのでよろしくお願いします！



## 第四十三話 夢見（前書き）

久しぶりに連日投稿です！

さあいよいよ始まったA・S編…と書いたんですが、今日は100%オリジナルです…というよりはこの小説のA・S編はオリジナル六割、原作四割の割合でお送りします！

では、第四十三話始まります！

## 第四十三話 夢見

SIDE：なのは

「あつ、ヴィータちゃんっ!」

少し寒くなってきた10月の朝、私がいつもの訓練をしている公園につくと誰かがもう来てベンチに座ってた

あの後ろ姿は…ヴィータちゃんだ!

一番乗りかと思ってたのに…

「ヴィータちゃん早いね」

「……………」

「…ヴィータちゃん?」

「……………」

「ねえ、ヴィータちゃんってば!」

あまりにもヴィータちゃんが返事をしてくれなかったから私はヴィータちゃんの肩に手を置いて揺さぶった

グラッ…ドサッ…

「……………えっ?」

私が揺さぶるとヴィータちゃんはそのままベンチから転げ落ちて地面に倒れた

「…も、もう〜ヴィータちゃん、悪ふざけが過ぎるよ?早く…起き…て…」

ヴィータちゃんを起こそうとヴィータちゃんの前に回って…私は見た

開ききつたまま動かない虚ろな目、お腹からたくさん流れ出ている真っ赤な…血

「い…いやあああつ!!?!?ヴィータちゃん!?!?しっかりしてヴィータちゃんっ!?!?」

けど…いくら呼び掛けても…冷たくなったヴィータちゃんの体は…動かない

「そんな…ヴィータ、ちゃん…」

『ドウダ？シタシイモノガシンダキブンハ？』

「っ！？誰っ！？」

私は声がした方に振り向いた

そこにいたのは…

『ハジメマシテ…トイウノハヘンナハナシダナ』

人間じゃなかった…言い表すとしたら…黒い霧が人の形をして喋  
ってる…そんな感じだ

「あなたは…誰？」

『……………』

「あなたが、ヴィータちゃんを？」

『……………フッ』

「っ！何で！何でこんな『ノゾミダ』…えっ？」

『コレハスベテ…オマエガノゾンダコトダ！』

そう言って、黒い霧は手を振りかざす

すると、今まで気付かなかったけど…黒い霧の後ろにも誰かが横たわってるのが見えた

それは…

「…フ、フェイト…ちゃん？」

血塗れになって倒れているフェイトちゃんだった…

うっん…フェイトちゃんだけじゃない…

ユーノくん…はやてちゃん…シグナムさん…シャマルさん…ザフイーラさん…プレシアさん…リニスさん…アルフさん…アリシアちゃん…クロノくん…リンディさん…エイミィさん…そして…

「…なお、き…くん…」

直樹くんも…みんな、死んでる…

『コイツラヲヤツタノハタシカニオレダ！ケドナ、モウイチドイ  
ウガ、コレハオマエガノゾンダコトダ！』

…嘘だ…嘘だ…嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ  
嘘だ嘘だ嘘だうそだうそだうそだうそだうそだうそだうそだうそだ  
ウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダ…嘘だっ！！  
！！

そんなの、嘘に決まってる！

「あなたは、何なのっ!?!」

『ハハッ、オレハナ…オマエダヨ!』

「っ!?!」

あれが…私？ あれが…私の望んだこと？ みんなを…殺すこと  
が？

『オレハオマエノナカニアル、サツジンガンボウダ!』

「殺人…願望?」

そんなの…嘘だよ…私は…誰も…殺したくなんか…

『ミトメロ…オレヲウケイレロ。ソウスレバ…クルシマナクテス  
ムゾ?』

…いや…いや、だ…よ…

私はだんだん目の前が真っ暗になりながらも、最後まで拒み続け  
た…

「…ハッ！？…ハア…ハア…ハア…」

目を開けて飛び起きると、そこは私の部屋だった

時計を見ると時間は五時…最近起きる時間より少し早い時間なの…

「……………」

私は視線を下に下ろしてまだ震えてる手を見る

『コレハオマエガノゾンダコトダ！』

「っ！……………うっ…うっ…ひっく…」

気がついたら、涙が止まらなかった

あれが、私の望み？

…人を…殺したい、の？

…いやだよ…怖い、よ…

「ゴッ！　ゴッ！」

その時、庭から何かを振る音が聞こえてきた

これって…

私はそれが何なのかかわかると…着替えもしないで部屋から出ていった…

S I D E : な の は      O U T

S I D E : 直樹

いつも通りの時間に起きてオレは竹刀で素振りをしていた

今は10月の終わり…原作でなのはたちとシグナムたちがぶつかったのは12月の頭あたり…

シグナムたちが動き出したのは10月の半ばだったはずだから…もしかしたらもうすぐはやてが倒れるかもしれない…

この世界ではオレっていうイレギュラーが入ったせいか、それとも世界自体が狂ってるのか…どちらにしるなのはたちは出会って仲



間になつてる…

ってことはだ、もし事件が起こるとしたら…それは全部予測不能なものになるってことだ

一番気になるのはやっぱり…プロキオンだ

アイツはオレと同じく完全なイレギュラーだからな…アイツが絡んでくると厄介だな

「ふう、このぐらいにしとくか。すぐになのはたちとの特訓でまた体動かすし」

オレはある程度のところで素振りを切り上げて、特訓に行くための準備をしようと部屋に戻ろうとした

けどそこに…

「…直樹、くん…」

「ん？おはようなのは、今日は早…どうしたんだ!？」

縁側からなのはの声がして挨拶ついでに振り向くと…そこには、なのはが着替えずにパジャマのまま目を真っ赤に腫らしていた

「おいなのは!？どうしたんだよ？」

「…直樹くん…うわああんっ!?!？」

「おっと!?!…なのは」

慌てて近寄ったオレになのはは縁側から飛び降り、裸足のままこ  
つちに来てオレに抱きついた

オレは転ばないようにしっかり受け止めたけど、その時になのは  
の体が震えてるのに気づいた

この震え方：「寒さ」からの震えじゃない：「恐怖」からの震え  
だ…

何があつたかはわからない…けど、オレはなのはをゆっくりと抱  
き返した

「…うう…ひつく…直樹…くん」

「…何だ？」

「…直樹くん…は、生きてる、よね？」

「…ああ、生きてるさ。心配するな…オレは生きてる」

震えてるなのはの背中を何度も擦る…なのはが、落ち着くように  
と願いながら…

・  
・  
・  
・  
・

「そうか、そんな夢を…」

「うん……ごめんね、直樹くん。朝練の邪魔しちゃったよね？」

「いや、ちょうど切り上げたところだったから気にするな。それに、何でも一人で溜め込もうとするのはなのはの悪いクセだからな。もっとオレや周りの友達を頼ってくれ」

「…うん」

なのははだいぶ落ち着いたのが、小さくだけ笑ってくれた

にしても…まさかそんな夢を見るなんてな…

何もなければいいけど…

「直樹くん…私は、望んでるのかな？」

「ん？」

「本当に…人を…「そんな訳ないだろ？」…でも…」

「夢に出てくる望みつてのは結局、その人の取り方次第で現実にも理想のままにもなる。だからな、有り体な助言でしかないけど…気にするな！それしかねえ！」

「…うん、そうかもしれないね……直樹くん」

「ん？」

「もし…私が誰かを殺そうとしたら…私を…」止める、絶対に  
な「……ありがとう」

「よしっ、それじゃ準備して公園に行くか」

「…うんっ！」

SIDE：直樹      OUT

SIDE：ザフィーラ

「さてと、そろそろか」

「本当にそのケガで戦場に出るのか？」

「当然！オレが戦わないとこの国の民の悲しみが増える。それだけは見過ごせないからな」

「だが…」

「心配するなってザフィーラ！人間の敵の多い東側と南側はシグナムとヴィータが、西側はシャマルが軍と一緒に戦ってくれてる。あとはオレとお前の二人で北側から来るアイツを倒せば…やっこの国は平和になる」

「だが、アイツはお前がそのケガを負ってようやく倒した“ガドル”より数段上の強さと聞く…。いくらお前でも…」

「大丈夫だ。オレは…必ず勝つ。勝って、お前らに今までの恩返ししたいからな！」

「…ああ、必ず勝とう。最も主らしくない夜天の主からの恩返し…楽しみにしている」

「ああ。行くぞ」

・  
・  
・

「…来たな」

北側の荒れた大地を一步、また一步ゆっくり歩いてくる人影

だがそれは人ならざる者

白い肉体、金色の鎧、角…

それら全てが今までこの国を襲ってきたヤツらの王であることを示す

ヤツの名は…“ダグバ”

「それじゃ、援護は任せたぞ？」

「ああ、全力で行け！」

「もちろんだ

じゃあ、見ててくれ…

オレの “ ” 「

「……………む…。夢、か…」

随分と…懐かしい夢だった…

主はやてもまた主らしくない夜天の主

だが、アイツの方がより変かもしれない

俺たちに敬語を禁じたり、友であろうとしたり…

それでも…アイツは勇敢だった…

「おいザフィーラ！起きてるか！」

「…ヴィータか。起きてるぞ」

「おう。そろそろ直樹たちとの約束の…お前、泣いてたのか？」

「む？……っ！」

ヴィータに言われて目元を触ると確かに濡れていた

「大丈夫かよ？」

「…ああ、少し…昔を思い出していただけだ」

SIDE：ザフィーラ      OUT

第四十三話 夢見（後書き）

今回は連日投稿なので後書きは書きません！



第四十四話 日常…それは、非日常へのスタートライン（前書き）

何だかあまり納得のいく出来じゃないですが、とりあえず投稿します！

では、第四十四話始まります！

第四十四話 日常…それは、非日常へのスタートライン

SIDE：直樹

なのはが悪夢を見てからまた一月が経ち、今は11月が終わろうとしてる頃…

結局、この間はやてが倒れたり、敵が現れたりはなく、逆に不気味に思ってしまうほど静かに、平和に時は過ぎた

今日も朝から集まって特訓中

今は模擬戦の最中だ

「レヴァンティン！カートリッジロード！」

『エクスプロージョン シュランゲフォーム』

「ハアアアアツ！！」

一人はシグナムだ

レヴァンティンがカートリッジを使って刀身を蛇腹状に変える第二形態、シュランゲフォームに変え、そのまま軌道を複雑に変化さ

せながら相手へ斬りかかる

「…そこだ！ストラグルバインドッ！」

そして、シグナムの対戦相手が意外や意外…ユーノだ

ユーノが放った四本の縄状のバインド、ストラグルバインドは迫ってくるレヴァンティンにそれぞれ絡みつく

「くっ…これは…」

「へえ…」

立ち会いとして見てたオレも思わず感心してしまう

ストラグルバインドは一見無作為に放たれたように見えるけど、よく見れば一本一本がシュランゲフォルムの剣の軌道で剣と剣がお互いに重なってる箇所を的確にバインドで縛ってる

そのせいでレヴァンティンの動きは空中で完全に止まった

「っ…ならば！レヴァンティン！」

『シュベルトフォルム』

「ぬう…ハアッ！」

「わあっ!?!」

シグナムはストラグルバインドをレヴァンティンのフォルムチエ

ンジで無理矢理引きちぎった

そのままレヴァンティンは通常の剣の形態、シュベルトフォルムに戻る

一方ユーノはストラグルバインドがちぎれた反動でバランスを崩す

「もらった！」

シグナムはそこに好機だとばかりに勢いよく斬りかかる

ユーノの絶対的ピンチ…に見えるけど、オレには見えた

ユーノのまだ勝負を捨ててない顔を…

「今だ…やあぁっ！」

ユーノは崩れかけてた体を一回転させてバランスを取る

しかも、その際にまだ出していたちぎれたストラグルバインドを回し、まるで編むかのように捻って四本のストラグルバインドを一本の太い綱へ変えた

「ストラグルバインド・ウィップッ！！」

そのままそれを自分の回転に合わせてシグナムへ向け横薙ぎに振った

まさかこんな形で攻撃に移るなんてな

けどユーノ…これで終わりだったらお前の負けだぞ？

「っ！甘いっ！」

シグナムは迫ってくるストラグルバインド・ウィップをレヴァンティンで受け止めると、受け止めたままユーノに向かって進む

ストラグルバインドからはレヴァンティンとの競り合いで火花が散って、だんだん綱の形からほどけ出した…そうか！

「（よしっ…）ロックッ！」

「なっ！？」

ユーノがほどけ出したストラグルバインドを振り回すと、ほどけ出した部分からシグナムを捕まえ、何重にも巻いて拘束した

「ハアアアアッ！」

そして、今度はユーノが右手に30センチ程の小太刀のような魔力刃を作り出してシグナムとの距離を一気に詰めた

うん、この勝負…決着はついたな

S I D E : 直 樹      O U T

S I D E : ユーノ

「そこまで！」

直樹の声が聞こえて、ボクはシグナムさんに近づけようとしていた魔力刃を止めた

「この勝負…シグナムの勝ちだ」

「ええっ！？何でだい！？ユーノが優勢じゃないか！」

直樹の隣で見ていたアルフが直樹に文句を言う

「確かにパツと見たらユーノの勝ちに見えるけど…違っただろ、ユーノ？」

「うん、そろそろ…限界かな？」

そうやってボクはバインドと魔力刃、つまり展開していた魔法を全部消してそのまま尻餅をついた

シグナムさんはバインドが外れたことを確認してレヴァンティンを鞘に収めた

「アルフ、ボクの魔力はシグナムさんを捕まえた時にほとんど切れてたんだよ。最後の魔力刃はほとんど形だけなんだ。シグナムさん…負けました」

「いや、見事だったぞユーノ。まさかここまで出来るようになるとは…ここ数ヶ月の特訓は無駄ではなかったようだな」

「いえ、まだまだです。シグナムさんも本気の半分ぐらいしか力を出してなかったし、やっぱりボクは攻め手がかなり少ない…。これじゃ、みんなと一緒に戦えない…」

「そんなことないって。現に今の模擬戦だってお前の言う通りシグナムは本気の半分だったかも知れないけど、そのシグナムと20分以上戦えたんだ。お前は十分強くなってるよ」

「そうだよユーノ！自信持ちなよ！」

「…ありがとう」

「立てるか？」

「うん…よつと」

ボクは直樹が差し出してくれた手に掴まって立ち上がる

「それじゃ、今日の特訓は終わりだな」

「時間的にもそうだろう。私はヴィータたちを呼んでこよう」

「あつ、アタシも行くよ」

レヴァンティンを待機形態に戻したシグナムさんとアルフがなのはたちを呼びに行く

ボクとシグナムさんが模擬戦をするスペースを空けるために少し離れたところで練習してるらしい

「そういえば、今日はいつもより参加人数が少ないね。何かあったの？」

ちなみに参加者は直樹、ボク、アルフ、シグナムさん、なのは、ヴィータ、フェイトだ

「ああ、プレシアさんとはやては朝ごはんの支度をするから来ないらしい。シャマルとザフィーラははやての手伝いだ」

「？ リニスさんとアリシアは？」

「あの2人は…昨日の夜からパラダイスに行ってる」

「えっ！？何で!?!」

「後のお楽しみだ。ほら、行くぞ」

直樹がさっさと歩き出したからついていくと、向こうでなのはが手を振ってるのが見えた

けど…2人は何のためにパラダイスに？

S I D E : ユーノ      O U T



SIDE：アリシア

「ラストオ！！」

ドゴオオオオン！！

大きな爆発音が辺りに鳴り響き、私のだいたい5、6メートル前には黒い煙が広がる

それからすぐに煙から出てきたのは：頭の上に赤色のスフィアを浮かべた一頭の竜…

大きな翼と赤い身体を持つ、“火竜”リオレウスだった

「やったーっ！私の勝ちだよね！」

私は思わず跳び跳ねて喜ぶ

直樹お兄ちゃんは「まだ試作品だ」って言ってたけど、もう十分完成していると思うけどな

・  
・  
・

「アリシア、お疲れ様です」

「よくやったな、アリシア」

戦いが終わって私がいた森丘地方から村に戻ってくると、リニスと直樹お兄ちゃんが出迎えてくれた

あっ、この直樹お兄ちゃんはコピーロボットの直樹お兄ちゃんなんだって

「アリシア、すぐで悪いんだけど」をこっちに渡してくれ

「はいはい」

私はまだセットアップしたままだった”を“腰から外して”直樹お兄ちゃんに渡す

ちなみに、まだ試作品だからバリアジャケットはない

さっきの戦いでは体の周りに魔力を薄く纏わせてバリアジャケットの代わりをさせてたんだ

「ねえ直樹お兄ちゃん。もうここまで出来るんだから完成でいいんじゃない？」

「ダメダメ。このデバイスは既存のデバイスとは全くシステムが違うデバイスなんだ。最低でもあと二段階は調整と実験を繰り返さない」と

「ええ〜！いつまでかかるの？」

「そうだな…アリシアが“答えを出す者”を使って手伝ってくれたとしても…クリスマス近くぐらいになるかな？」

「そ、そんな…」

私は思わず手について座り込んでしまう

まさか、まだそんなにかかるとは思わなかった…

直樹お兄ちゃんとの訓練で偶然見つけた直樹お兄ちゃんの発明品

それに惚れ込んで、デバイスの案を全部白紙にして、それ主体のデバイスに変え、時間が経つこと早3ヶ月弱…

まだ…まだ…まだかかるの…（泣）

「まあ、代わりつてのは変だけど“フォン”は持つといってくれ。

“ギア”は“フォン”に魔力を込めたら自動展開するように改造したから」

「ううゝ…了ゝ解…」

直樹お兄ちゃんから“フォン”を受け取ってズボンのポケットにしまう

そりゃ、こっちも好きだけど…やっぱりデバイスがいいよ

「はい、リニスも。調整は終わったぞ」

「あっ、ありがとうございます」

そう言ってるニスは直樹お兄ちゃんから“携帯電話”を受けとる  
…普通の携帯じゃないけどね？

「それじゃホテルにもどるか。ご飯は用意してあるから。その後、  
調整に入るう」

「私も手伝うよ!？」

「ああ、頼むよ」

「うん」

私が直樹お兄ちゃんが思ってるよりたくさん働けばその分早く完  
成するよね？

よし、頑張るぞー！

SIDE:アリシア      OUT

SIDE:なのは

今日は日曜日だから学校はなし

昼ごはんを食べて今はユーノくん（フェレットモード）とリビングで微睡んでるところなの

「ふわ〜…暇だね〜」

「そうだね」

「…訓練したいな〜」

「直樹にダメだって言われたでしょ？我慢しようよ」

「う〜…ユーノくんは平気なの？訓練出来なくて」

「う〜ん、確かにしたいけど…直樹が言ってた無理を続けたらいつか潰れるっていうのも頷ける話だから」

「そうなんだよね〜」

朝の特訓を始めた頃に直樹くんと立てた約束…

無理な特訓は絶対に続けないうって約束したんだ

まだまだ行けるんだけどな〜

「そういえばなのは。囑託魔導師のこと、考えた？」

「うん…けど、まだ決まらないんだよね」

「ひよっとしたら一生関わってくることになるかもしれないから、まだ迷ってもいいんじゃないかな？」

「…そうだね。…でもやっぱり、暇だね」

「なのは、今ので10回目の「暇だね」だよ」

「数えないですよ」

「それぐらいボクも暇なんだよ」

「「ハア」」

「何やってんだよ、お前ら」

「あつ、直樹くんどうしたの？」

そうしてるうちにいつの間にか自分の部屋にいたはずの直樹くんが降りてきてた

「ちょっと飲み物を取りにな。また戻るさ」

「何してるの？」

「ん？バリーのプログラムの更新だよ。バリアジャケットのデザインとか、モードチェンジの形態とか…」

「ずるいよ直樹くん！自分はそんなことして！」

「ずるいつて…？ いいか？一応オレはお前のためを」Prrrr  
「rrrr…』おっと、電話か」

直樹くんはパタパタとスリッパを鳴らして電話の方へ行く

「…よつと。はい、高町です。…何だシグナムか。どうしたんだ？そんなに慌てて…何っ!？」

直樹くんの声がいきなり緊張した声色に変わる

相手はシグナムさんみたいだけど…

「…病院は?……わかった!すぐに行く。プレシアさんには?…そっか…それじゃ!」

直樹くんは少し乱暴に受話器を置くとすぐにこっちに来た

「なのは!ユーノ!すぐに出かける準備だ!」

「ど、どうしたの直樹?何か問題?」

「…はやてが病院に運ばれたらしい。今は意識不明みたいだ」

「「っ!?!?」「」

そんな、はやてちゃんが!?

「わかったよ、ジャンパー取ってくる!」

はやてちゃん…大丈夫だよな?

S I D E : な の は      O U T

S I D E : フェイト

はやてが病院に運ばれたって電話がかかってきて母さんとアルフと一緒にシグナムに教えられた海鳴大学病院まで来た

病院の前で一緒になった直樹、なのは、ユーノも加えてはやての病室を目指す

. . .

「失礼します」

母さんを先頭に静かに病室に入ると、個室の病室のベッドにはやてが寝ていて、周りにシグナムたちが立っていた

「はやてちゃんの容態は？」

「今は落ち着いています。石田先生の話ではもうじき目を覚ますそうです。ただ…」

そこまで言ってシャルマルさんは俯く



「主はやては…どうやら少し前から痛みを我慢していたらしい。足の麻痺が徐々に上へ上がって来ていて、いずれは内臓、果ては心臓にまで麻痺は進行するそうだ」

シグナムはきつく握りこぶしを握りながら悔しそうに言った

「そんな！？…助かる方法はないんですか！？」

「はやてちゃんの麻痺は、闇の書の膨大な魔力がはやてちゃんの体に負荷をかけてるのが原因なの。それに、闇の書が覚醒して私たち守護騎士プログラムが動き出したことではやてちゃんへの負荷はますます増えた。それを無くすには…」

「闇の書を完成させて…はやてが真の夜天の主になるしかねえ」

「だが、それは主はやての意思に反することだ…私たちは…」

ヴィータとザフィーラも俯いて顔を上げない

4人の気持ちが痛いほどよくわかってしまう

はやてを助きたい…けど、助けるためにははやてとの約束を破らないといけない

それに…もしシグナムたちが闇の書を完成させようとするならば…  
私たちはどうすれば…

「…仕方がないわ。こうなった以上今優先すべきははやてさんのこれからのお世話のことだわ。私がついているからシグナムたちは一度家に戻ってはやてさんの着替えや入院に必要なものを用意して

きなさい」

母さんの一声で黙ったままの状態からは動き出して、シグナムたち4人は頷いて病室から出ていった

「さて…直樹、わかってるかしら？」

「もちろんです。ユーノ、アルフは残っててくれ。なのは、フェイト…シグナムたちが戻ってきて、もしもう一回出ていったらオレたちも行くぞ」

「行くって…どこに行くの？」

「シグナムたちを尾行する。アイツら、はやてのためなら下手したら犯罪者にだってなるかもしれない」

「そ、そんな!？」

なのはは信じられないと驚く

でも、私は何となくわかる

ジュエルシード事件がまさにそうだったから…

「下手したらシグナムたちと戦うことになるかもしれない…覚悟はしとけよ」

SIDE:フェイト OUT

SIDE：シグナム

主はやての荷物を届けに戻ると病室にはプレシアさん、ユーノ、アルフしかいなかった

「…直樹たちはどこに？」

「ああ、あの子達には食べ物を買いつけてもらってるわ。今日は私が一晩いるつもりだから」

「そうですか…すみません」

「構わないわよ。そういえば…ヴィータたちはどうしたの？」

「…荷物を届けるだけなら私一人で十分だったのでヴィータたちは家です。プレシアさん、今日一晩主はやてを頼めますか？」

「だから、そのつもりよ。あなたは安心して帰りなさい」

「…はい」

私は荷物を置いて病室から出ていく

…主はやて…やはり、我らはあなたの願いを…破ることになるかもしれない…

・ ・ ・

日も落ちて、辺りが薄暗くなった頃…私たちは特訓に使う公園にいた

「ザフィーラ、辺りには誰もいないな？」

「ああ、匂いは感じない」

「シャマル、直樹たちの魔力反応は？」

「大丈夫。みんなここから遠くにいるわ。気づいても間に合わない」

「ヴィータ、闇の書は？」

「持ってきた…なあ、シグナム」

「何だ？」

「本当に…これしか方法はないんだよな？」

「残念ながらも…主はやてを助けるには、最早蒐集以外に方法はない」

「…わかった」

ヴィータはそう呟くと、覚悟をきめたのか強い目付きになる

「では行くぞ…主はやて、我らあなたのためにあなたとの約束を破ります!」

「ちょっとその結論は早すぎるんじゃないか？」

「……っ!?」「」「」

レヴァンティンを掴もうとした瞬間、後ろからよく知った声が聞こえ、あわてて振り返る

そこには…桃色のドア、どこでもドアとそれをくぐってきた直樹、なのは、フェイトの姿があった

「…そうか。お前には距離は関係なかったな」

「まあな…4人とも、考え直してくれないか？お前たちが蒐集を始めたら最悪お前たちが犯罪者になる可能性だってあるんだぞ？」

「わかっているさ。だが、何もしなければ主はやては死んでしまう。ならば、犯罪者という汚名ぐらいよろこんで着よう」

「でもシグナムさん!はやてちゃんはそんなこと望んでないはずです!」

「そんなの当たり前だろ!」

「っ! ヴィータちゃん…」

「わかってんだよそんなこと！こんなことしてもはやては喜ばない…けどよ！じゃあどうしたらいいんだよ！？」

ヴィータの悲痛な叫びが響き、誰も声を出せなかった

私たちと直樹たちの間を風が弱く吹く…

このままお互いの意見は平行線を辿るかと思われた

しかし、実際はそうはならなかった…

「じゃあさ、私にその本を渡すって言うのはどうかな」

「……………っ!?」「……………」

誰もが予想すらしなかった、最悪のシナリオが始まりを告げたからだ…

S I D E : シグナム  
O U T

第四十四話 日常…それは、非日常へのスタートライン（後書き）

次回のキーワードは！

『  
Open Your Eyes For The Next  
』  
『S』

お楽しみに！



第四十五話 災厄招来（前書き）

ううん、やっぱり何か上手く書けない…

まあ、とりあえず投稿します

では、第四十五話始まります！

## 第四十五話 災厄招来

SIDE：直樹

「じゃあさ、私にその本を渡すって言うのはどうかな」

「「「「「「「つ!?」「「「「「「」

突然聞こえてきた聞いたことのない声にオレたちはにらみ合いを止めてそっちを向く

けど、見えるのは公園の電灯ぐらいで人どころか生き物すら見えない

「どこ見てるの?こっちだよこっち」

すると今度は全く反対側から聞こえてきてまた振り返る

今度は、一人の少女がいた

身長はなのはほとんど同じぐらい、藍色の髪、青色のドレスのような服を着ていて、右手には片方の先端が十字架のように十字型をした杖を持っていて、左腕には長方形を二つ重ねて一つを回転し

てスライドさせたようなデザインの機械があった

何も知らないヤツが見れば変な機械で終わるだろうけど、オレは全く同じものを見たことがある…あれは…

「（ラウズアブゾーバー、だと！？仮面ライダーの道具がどうして！？）」

そう、あれは“仮面ライダーブレイド”の強化アイテム、“ラウズアブゾーバー”と全く同じだ

「さっきも言ったけどさ、その本私に頂戴」

「ふざけんな！誰がテメエなんかに「テメエなんかに、何？」なっ！？」

一瞬だった：ヴィータが怒鳴ってる間にもうオレたちとシグナムたちの間に来ていた

速いなんてレベルじゃない…まるで、瞬間移動…

「まあとりあえず、これは貰うよ」

そう言って少女が見せてきたのは、ヴィータが持つてゐるはずの闇の書だった

「ウソだろっ！？」

「いつの間に獲ったの！？」

「くそっ！返」どっち向いてるの〜？」「くそっ、またか！」

また少女は瞬間移動したかのようにオレたちから少し離れたところに立っていた

「おのれ！レヴァンティン！」

シグナムがレヴァンティンをセットアップしようとする

けど…

「悪いのう。少しの間静かにしといてくれ」

また違う声が聞こえたかと思うと、いきなりオレたちは全員一ヶ所に引き寄せられてドーム型の壁に囲まれた

「これは…結界か！」

「狭くて、上手く動けないよ〜」

結界のサイズはギリギリオレたちが入れるぐらいのきさであまりの狭さに身動きが取れなかった

そうしてる間に少女の隣に人が一人降り立った

190センチはありそうな長身、白い長髪と顎髭、灰色の甲冑と黒いマントを纏っていて、背中にはその身の丈ほどはある巨大な矛があった

「もう終わったのかの？」

「ううん、まだだよ。ちょっと遊びすぎちゃって」

「全く…儂より先に来たんじゃから出来れば終わらせておいて欲しかったのう」

「ごめんねお爺ちゃん。すぐに終わらせるから」

そう言うと少女は左手に持ってた闇の書を空に向けて放り投げた

その後、杖を左手に持ち替え右手を胸の前に持っていたかと思うと、右手が光り、光の中から一枚のカードを取り出した

少女は取り出したカードを杖の十字の部分に近づける

よく見ると十字の縦方向には真っ直ぐの溝が刻んであった

少女は溝に合わせてカードを置くと、勢いよく下に引き下ろした

まるでカードをカードリーダーで読み込むように…

『COPY』

引き下ろした後カードは消えて杖からは機械音が鳴り、少女の後ろにはオウムのような鳥が描かれた青いスクリーンが現れた

スクリーンは回転しながら少女の杖に吸い込まれると杖の十字と反対側に白い光が灯り、そこから光線が放たれる

光線は途中で二股に別れ、一つは空中を舞う闇の書に、もう一つ

は…

「えっ？きゃあっ！」

オレたちが閉じ込められてる結界…それを突き抜け、中にいた一人、  
シャマルの手に命中する

闇の書とシャマルの手は激しく光り出し、目を開けていられない  
ほどの眩しい光が辺りを包んだ

光は数秒で収まって、急いで周りを見渡したが大きな変化は一見  
見当たらなかった

「うん、成功成功 お爺ちゃん、結界はもういいよ」

「うむ…ハッ！」

老人が手をこっちに翳すと結界が一瞬にして消え、オレたちはバ  
ランスを崩して倒れてしまう

けど、成功ってどういうことだ？ 何も変わってない気がするが…

「さて、“こっち”はもういらないや。はい、返すよ」

そう言うと少女は持っていた闇の書をこっちに投げた

「テメエ！……っ！？何だよそれは！？」

ヴィータが慌てて闇の書を拾いにいき、少女を睨んだときにヴィ  
ータは何か気づいたみたいだ

ヴィータが怒鳴ってからオレたちもようやく気づく

何で気づかなかったんだ？…いや、あまりにもあり得ないことだから気づけなかったのか？

「闇の書が…もう一冊!？」

そう、ヴィータが拾った闇の書…そして、まだ少女の手元には“もう一冊の闇の書”があった

「あつ、やっと気づいた?あと、これもなんだけどね」

「えっ!? クラールヴィンド!？」

シヤマルの驚いた声が響く

それもそうだろう…少女がこっちに見えるように見せた左手の指にはシヤマルのデバイス、クラールヴィンドの待機状態の指輪が嵌まっていたからだ

二つに増えた、闇の書とクラールヴィンド…

…共通点…ラウズアブゾーバー…カード…っ!!

「…そういうことか!」

「直樹、何かわかったのか?」

「ああ、その闇の書とクリアールヴィンドは精巧なコピー。さっきのカードの力で造ったんだろ？」

「ど、どづいことなの？直樹くん」

「オレはアイツが使ってるカードと似た力を知ってる。オレが知ってる力はカードに封じられた力をスキャンすることでその力を使うってヤツだ。ちょうど今みたいにな」

「フフツ、正解だよ この力は私の稀少技能<sup>レアスキル</sup>、“スキルカード”って呼んでるよ。ちなみに、今のはエクストラナンバーの一枚【COPY】のカードで複製を造ったんだ まあ、複製って言っても本物と全く同じものなんだけどね」

「レアスキル、か…エクストラナンバーってのは何だ？」

「質問が多いな。答えてあげるけどね。私のカードは通常のが13枚とその上のレアの能力、エクストラナンバー4枚があるんだよ」

「…質問しといて聞くのもなんだが…何で素直に答えてくれるんだ？」

「決まってるじゃん このぐらいハンデをあげないと勝負にならないでしょ？」

「んだとテメエ！アイゼン！」

ヴィータが今の発言で我慢の限界だったみたいだ



けど、まだ暴れてもらったら困る！

「待ってくれヴィータ！」

「止めるな直樹！アイツをぶっ飛ばしてあの闇の書も取り返す！」

「そうしていいから少し待て！おい！最後に一つ、お前のカードをプロキオンってヤツが使ってた！仲間なのか？」

「…ああ、あのわからず屋？認めたくないけど確かに仲間だよ。私とお爺ちゃん、わからず屋は同じ組織にいるからね」

「む？そういえば、さつきからお前だのアイツだのが多いと思えば、まだ自己紹介をしてなかったの…僕は私設組織“ラグナロク”の幹部、“シリウス”じゃ。以後よろしく頼む」

「同じく！“ラグナロク”幹部の“デネブ”だよ よつろしく〜！」

やっぱりそうだったか…プロキオンがプレシアさんの洗脳に使ったあのカード、今ならよくわかる

あの柄はデネブが使ったカードの柄、更には仮面ライダーブレイドのラウズカードの裏の柄と同じだ

ラグナロク…またイレギュラーが一つ増えたか…

「本当は目的は果たしたから帰りたいんだけど…まあ帰してくれ

ないよね？」

「当たり前だ！」

「その間の書、置いていってもらおう」

「クラーウルヴィンドもです！」

「プロキオンと仲間なら…全力でいくよ！」

「母さんを泣かせたアイツの仲間…悪いけど、ここで倒す」

オレとザフィーラ以外の全員がセットアップして臨戦態勢になる

よしオレも……？ あれ？バリーは？

……… あっ、そっか……

調整中にはやてのことがあつて置いたまま出てきて…そのままか  
…やばいな、いろいろバラしたままだから“取り寄せバック”とか  
で出しても無駄だよな…

「ふえ？直樹くん、セットアップしないの？」

「…バリー忘れた」

「ええっ！？」

「だ、大丈夫だ！四次元ポケットがあるからな。他のもので戦う  
さ」

とりあえず何かないか漁ってみるか

「じゃあね、私はこっちの女の子二人と男の子とやるからお爺ちゃんはそっちの四人お願いね？」

「了解じゃ。10分程度で切り上げるからの」

「オツケー」

「ではその四人、ついてくるのじゃ」

そう言うとシリウスは地面を蹴って空に上がった

シグナムたちヴォルケンリッターも追いかけて空へ上がった

「さて、それじゃ…あ、そっか………ねえ、闇の書が魔力を蒐集してページを増やすっていうのは知ってるよね？」

「…ああ」

「ならば、主が変わったとき、闇の書にあった魔法、魔力はどうなるか知ってる？」

「…リセットされてゼロになる、か？」

「正解でもあるし、間違いでもあるね、確かにほとんどの魔法

は消えてしまっ…けどね？」

そう言っつてデネブが翳した右手が光って、光が消えるとまたカードを一枚もっていた

「中には消えずに残るものもあるんだよ。闇の書の奥底には普通ではあり得ないような力を持った存在から蒐集した魔力がずっと眠ってるんだよ」

デネブは闇の書を適当に開いて空中に浮かせると、さっき取り出したカードを杖でスキャンした

『REMOTE』

「例えば、超古代の怪人とかね！さあ、エクストラナンバー二枚目のお披露目だよ！」

デネブの背後にヤクのような動物が描かれたスクリーンが現れ、すぐにデネブの右手に吸い込まれると右手が青く光り出した

その手を闇の書に翳すと、闇の書がドス黒く光って三つの黒い光が落ちてきた

光は地面に着く寸前で弾けて、中から三人の人型が現れる

けど、ソレらは人じゃない…

「（嘘…だろ？ この世界に…“グロンギ”が！？）」

一体はクモの能力を持つ“クモ種怪人 ズ・グムン・バ”

一体はヒヨウの能力を持つ“ヒヨウ種怪人 ズ・メビオ・ダ”

そして最後の一体はサイの能力を持つ“サイ種怪人 ズ・ザイン・ダ”だ

コイツらは全員“グロンギ”っていう“仮面ライダークウガ”に出てくる怪人集団の中の怪人たちだ

まさか、本物と会うことになるなんてな…

「うんうん、上手くいった　じゃあお前たち、あの男の子と戦ってね」

くそっ！　狙いはオレかよ…ここで戦ったらなのはたちが危ない

「なのは！フェイト！オレはこの怪人たちを相手する！二人はデネブを頼む！」

「わ、わかったよ！」

「任せて！」

二人の返事を聞いてオレはなのはたちから離れたスペースを目指して走り出した

足音でアイツらがついてきているのがわかる

…確か“ベルト”は四次元ポケットにあったはず…

やっつけてやるさ、どんなヤツが相手だつてな！

「（あの子は“転生者”ってヤツだったよね？…“試し撃ち”にはちょつどいい相手かな？）」

SIDE：直樹      OUT

SIDE：ザフィーラ

「でりやあぁっ！」

ヴィータのアイゼンでの本気の一撃がシリウスに迫る

並の相手ならばかわすのも受けるのも苦勞する攻撃だ

しかし…

ガキイイイン…

「ホツホツ、軽いの」

「なっ!?!」

シリウスは矛を縦にして持ち手の部分で簡単に受けきってしまう

「まだ甘いの…お主もな」

「っ!?!?バカな!」

そう言いながらシリウスはヴィータの攻撃を受けながら背中側に左手を回すと、あと少しで当たろうとしていたシグナムのレヴァンティンを左手だけで白刃取りしてしまった

だがこれで、両手は塞がった!

俺は素早く移動してちょうどシグナムで見えなくなっている死角から一気に拳を振るった

決まった…俺も、シグナムも、ヴィータも、シャマルもそう思ったはずだ…だが…

「ふむ、いい手じゃな。だが悲しいことじゃ…。まだまだ決めきる実力が無い」

そうはいかなかった…

「せいやあっ!」

シリウスはレヴァンティンを掴んだままのシグナムごと振り回し、

俺目掛けて投げ飛ばしてきた

俺は咄嗟に体を捻ってシグナムを避けたが、そのせいで攻撃の到達が僅かに遅れる

その間にシリウスはヴィータとアイゼンを弾き、自分を中心に矛を思い切り一回り振った

ただ振っただけの、魔力も込もっていなかった“ただの斬撃”に我らヴォルケンリッターは全員吹き飛ばされた…

まさか、ここまでの差があるとは…

俺たちは何とか空中で体勢を立て直したが一番近くで受けたヴィータは少し肩で息をし出してる

その時、下の公園を誰かが通っていくのが見えた

あれは…直樹か？

直樹を追いかけているのは…っ！？ バカな！？なぜヤツらがここにいる！

「余所見をしている場合かのか？」

「なっ！？ぐわあっ！？」

ヤツらに気をとられてシリウスの接近に気がつかなかった

ギリギリで手甲で受けたがそのせいで手甲に大きくヒビが入った



くそっ、ヤツらは後回しだ…今は目の前の敵に集中する

俺は拳を握り直し、シグナムたちと斬りあっているシリウスへと向かった

S I D E : ザフィーラ      O U T

S I D E : 直樹

「…ここまで来ればいいか」

公園の端の方まで移動してオレはアイツらの方を振り向く

三体ともだいたい6メートル程離れて、いつでも戦えるよう構えたままだった

「まさか、本当に怪人と仮面ライダーで戦うなんてな」

オレは四次元ポケットから“ファイズフォン”を取り出してすぐに開く

『 5 5 5      S t a n d i n g   b y   『

コードを入力しながら魔力を込めると、腰に“ファイズドライバ―”が展開されて巻き付く

いちいちベルトを巻くのが面倒だったから、“答えを出す者”で改造してベルトを粒子展開出来るようにした

そのおかげで持ち運びは“ファイズフォン”だけでよくなった

「さあ、行くぞ！変身っ！」

『Complete』

“ファイズフォン”をベルトのバックル部分に挿し込み、ベルトから全身にフォトンブラッドの赤いラインが駆け巡る

そして一瞬赤い光が全身を纏い、オレは“仮面ライダーファイズ”に変身した

「ク、クウガ!?!」

「お生憎様、ライダー違いだ！」

一気に間合いを詰めて三体の真ん中にいたズ・ザイン・ダに殴りかかる

「フツ！ハツ、ハアツ！」

何度も殴る、蹴るを繰り返し三体を追い込んでいく

けど、やっぱり数の差があるからかだんだんとこっちも攻撃を食

らい出す

ズ・メビオ・ダの俊足を生かした攻撃を避けようとするがその度にズ・グムン・バがクモの糸で動きを封じようとしてくる

そんな具合に二体に翻弄されているところにズ・ザイン・ダが突進を繰り出し、避けられずに食らってしまっ

「ぐあっ！？（くそっ、やっぱりバカに出来ない強さだな…早くなのはたちの助けにいきたいのに…）こっとなったら…」

オレは左腕につけている“変わった形の腕時計”に手を伸ばす

あと少しで触れようとした時…

ズガガガガガガッ！！

突然オレの後ろから“黄色い光弾”がズ・ザイン・ダたち目掛けて飛んでいき三体を後ろに吹き飛ばす

「（今のって…）」

オレはが後ろを振り向くと、そこには思った通りの助っ人がいた

「大丈夫ですか？直樹くん」

「私も戦っよ、直樹お兄ちゃん！」

パラダイスに行ってたはずのリニスとアリシアだった

さっきの光弾はリニスが手に持つてる“カイザフォン”の銃形態から撃ち出されたものだろう

「助かるよ、あっちの方でなのはたちが戦ってるんだ。今回の敵は嫌な予感がする…ここはすぐに片付けたいんだ！」

「任せてください。だって…」

『9 1 3 Standing by』

「私たちも、仮面ライダーだからね！」

リニスが“カイザフォン”にコードを入力するとリニスの腰に“カイザドライバー”が巻き付く

一方アリシアが右手に銃のグリップ型の“デルタフォン”を構えるとアリシアの腰に“デルタドライバー”が巻き付く

そして…

「変身っ！」

『Standing by』

『Complete』

“カイザフォン”をベルトに挿し込み、ベルトから黄色のフォトンブラッドがリニスの体を駆け巡り、リニスは“仮面ライダーカイザ”に変身した

アリシアの方は「変身っ！」の掛け声でコード入力をした“デルタフォン”を“デルタドライバー”の右側に装着されてる“デルタムーバー”に合体させる

するとベルトから青色のフォトンブラッドが全身を駆け巡り、黒色のスーツに白いラインを纏い『（デルタ）』を型どった仮面ライダー、“仮面ライダーデルタ”へと変身した

「よし、これで3対3。サクッと決めるぞ！」

「はい！」「おーっ！」

オレたちはそれぞれ武器を取り、三体と戦い始める

この戦い、すぐに終わらせる！

S I D E : 直 樹      O U T

第四十五話 災厄招来（後書き）

次回、何かが起こる！？

…はずです…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4016n/>

---

魔法少女リリカルなのは～転生者はバッドエンドを嫌う～

2011年11月28日06時50分発行